
赤ルア（テスト用）

あせこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤ルア（テスト用）

【Nコード】

N0102BA

【作者名】

あせこ

【あらすじ】

これは本編の投稿テストのものです。

テスト終わり次第どんどん消えていきます。

内容は本編レイアウトのテストなので、基本的に同じですので、期待して詠まないで下さい。

ガツカリ砲全開ですよ？

1 - 1 朗読者の少女（前書き）

ちよつと各話の区切りを細かくしてみようと、試みたんです。
そしたら、9話が56話に化けましたっ！（・・・・・）

1 - 1 朗読者の少女

青の魔道師

むかしむかし、

森には妖精が飛び回り、

山には龍が棲まい、

泉には精霊が宿っていたほどの昔のお話。

北の山には黒き魔王がいました。

魔王は、山に来る人々を襲い、麓の田畑を荒らし、
とうとう街を壊し始めました。

困った人々は森の奥に住むという、青い魔道師に助けを求めました。

人々を気の毒に思った青の魔道師はすぐに動き出しました。

白銀の巨人兵と千変の魔獣を従え、魔王との戦いを挑みました。

魔道師と魔王の戦いは激しいものでした。

山は砕かれ、沢山の穴が開きました。

森の大地は避け、でこぼこになりました。

街は破壊され、やはり、でこぼこになりました。

三日三晩の戦いの末、魔道師は魔王を退治しました。
めでたしめでたし。

* * * * *

バタフライなら。

ほんの小さな事象が、後々の事象に大きく影響する。
そんな内容だったと思う。

皆は経験ないだろうか？

毎日の生活の中で、ほんの少しだけ…

いつもと違うことをした為に失敗に繋がる。

そんな経験、今まさに現在進行形で展開中だ。

俺はエイン、一応は冒険者だ。

いつも通りに冒険者ギルドで仕事を探し。

いつも通りに探索・搜索の仕事を選び。

いつも通りに遠出の装備を整え旅立っただけだった。

慣れない海路での移動に疲れていたんだろうか。

もしくは、忍び寄る秋の気配と潮風の清涼感に狂わされたか。

俺の足は小さなイタズラをしでかした。

ギルドなどの公共施設のある区画ではなく、商店や民家が立ち並ぶ区画へと足を踏み入れてしまった。

いつもなら、まっすぐに冒険者ギルドに向かうはずだ。

ここから全てが間違った。

そう。

彼女達と出会ってしまったんだ。

「変わったお話だな」

「そう思います？」

半分上の空だったために、苦勞の末ひねり出したのがそんな感想だった。

古い街並みの小さなオープンカフェ

紅茶愉しむ俺と銀髪の少女。

向かいに座る少女は小首を傾げ、変わらず微笑んでいる。

読んで聞かせてくれた白い大きな本を抱きかかえるように持っている。

「うーん、俺はあまり多くの本を読んだわけでもないから、実際のところ判らないけど」

そこで言葉を切って、周囲を見渡す 時計台が目に入る か
なり時間話込んでいたようだ。

「それにしても、先ほど危ないところを…」

「いや、それはもういいよ」

「いいえ・・・もし

荷物を台無しにしていたら、兄にお叱りを受けてしまうところでした」

可愛らしく、ペロリと舌を出して笑う。

この少女 リウエンという名前らしい の言う「危ないところを」というのは、

階段の多いこの街路地を、中身一杯の紙袋を抱え込み、危なげに歩いていたところ、予想を裏切らず躓いてしまう。

あわや階段を転落寸前のところを、俺が抱きかかえて事なきを得た・・・という顛末だ。

「こちらも美味しいお茶をご馳走してもらったし、むしろこっちがお礼を言わないとね」

「そう言って頂けると嬉しいです」

結局、無下に断るわけにもいかず、お茶をご馳走になっているわけである。

そして、お茶菓子代わりに、と聞かせてくれたのが、先ほどのお伽話というわけだ。

「それで、変わったお話、とおっしゃってましたが、どうしてですか？」

「いやあ、

こういってお話して魔王とか魔女とか、悪者を倒すのは大抵、人間の勇者さまとかではないか？てね。」

「ふむふむ、なるほどなるほど」

随分と目を輝かせて相槌を打っておられる…いちいち可愛らしい。

「それでしたら

ちゃんと続きのお話があるんですが、そっちの方でちゃんと出てきますよお」

持った本のページ素早くめくり、お目当てのページが見つかったのであるう、満面の笑みをこちらを向けた。

リウエンの顔を見てみると、話に付き合っただけでやりたくなるが…いくらなんでも長話しすぎだ。

どう断りを切り出そうかと思案していると、彼女は表情を少し変え尋ねてきた。

「エインさんは、冒険者のようですか？」

「一応ね、まだまだ駆け出しだけだ。」

ここには、ギルドで仕事の求人を見て、遙々やって来たんだ」

ギルド 冒険者ギルドのことだ では、様々な仕事を斡旋してくれる。

定番の怪物退治や遺跡探索、果ては、迷子の猫の捜索までも…だ。

「この街にはどれくらい滞在される予定ですか？」

「うーん、まだ判らないけど、1〜2日はいると思っ」

まだ仕事の詳しい依頼内容を聞いてないが、すぐにこの街を出るといふことも無さそうなので、そう応えた。

もし、すぐに街を発たなければいけないときは　　すまん、
許してくれ。

「では、また明日にでも続きを　　」

「…え？」

「その時はまた美味しいお茶を用意させて頂きますから」

すごい罪悪感。

それに、どう見ても年下　　十代半ばくらいか？　　の女の子か

ら何度も奢ってもらうわけにはいかない。

「そう何度も悪いよ。」

「いえいえ、全く以って心配は間に合ってますよ？」

言葉おかしくないか？

「それに、ここのお茶も美味しいですが、わたしの姉の淹れるお茶も美味しいですから、是非！」

…リウエンを改めて見る。

綺麗なサラサラの長い銀髪。

幼さが残る、可憐な顔。

白い法衣にも修道服のようにも見える服を纏った清楚な佇まい。

リウエンの姉なら、きつと負けずに清楚な美人なんだろうなと勝
手に妄想していた。

結局、約束を交わされてしまった。

席を立つリウエン見て、ふと思い出した。

「家はどこだ？その荷物運んでやるよ」

「いえ、大丈夫ですよ？」

リウエンが持っていた紙袋をひょいと持ち上げる。

…うん、女の子にはちょっと重過ぎるだろう。

「これくらいさせてくれよ、遠慮するなって」

「いえいえ、全く以って心配は間に合つてま にゆ?!」

ずる…べたーん!!

この表現が一番あつてると思う。

今度は間に合わなかった…さすがに「なにもない所」で躓いて転ぶとは想定外過ぎた。

「うう…。」

「おーい、大丈夫かー?」

目にはじんわり涙が浮かんでいる、まあ荷物を持つ前だったのが不幸中の幸いか。

「ほれ、掴まって」

助け起こそうと手を伸ばした、その時。

「あたしの妹に手を出すなー!!!」

「ぐぬお…!!?」

気がつくと自分が地面に転がっていることが判った。

俺は気を失つたのか?

視線を上げると、黒い髪を短く整えた ボブカットというらし

い 赤い瞳の少女が仁王立ちしている。

えーっと、今この女なんて言った?

「姉さん…!!」

やれやれ聞き違いじゃないようだ。

1 - 2 姉は強襲者

「だってえ、リウエンがあんまり帰りが遅いからさあ……」

「姉さんは手が早すぎます」

バツが悪そうに言いよどむ姉と、厳しく諭す妹。

姉の名はリルドナというらしい。

姉、なのか？と思わず聞き返したくなるくらい似ていない。

真っ黒な髪。

真っ黒な法衣だか、修道服だか、二重回しだか、よくわからない服。

真っ赤な燃えるような瞳。

乱暴なもの言い。

そしてキツイ表情の ああ、表情の所為で違って見えただけで顔は同じ造りだな。

……。

勝手に完結・納得した。

「……てて、

まあ、妹想いの良いお姉さんだとは思っよ。」

買い物に出かけたリウエンが帰ってこない いくらなんでも遅すぎる。

捜しに行こう 見つけた！ 倒れてる？！ しかも不振な男が今まさに手を伸ばして……！

「という思考回路に至ったのは仕方ないことかな」

「エインさん……」

「うんうん、」

でしょ？でしょ？わかるでしょ？とか言いそうな、そんな顔をしている。

随分と忙しいお顔だな、全く。

「だが、意識が飛ぶくらい殴るのはどうなんだよっ」

「ちやーんと、手加減したわよ、アンタ冒険者なんでしょ？あれくらい避けなさい、この無能！」

「もっつ姉さん！」

・・・これぼっちも反省してないな。

避けると言われても絶対あれは一発じゃなかっただろう。

「何発だ？」

「…へ？」

「何発殴つてくれたんだ？」

そして俺は何発避けたら良かったんだ、教えてくれ」

リルドナは目を泳がせ、胸の前で左右の手の人差し指を付き合わせる。何か思案している。

「ろ、六発…かなあ？」

「いえ、十六発です」

ピシヤリとリウエンが真実の刃で切り捨てる。

「さらに、倒れたところに追い討ちの膝が一発です」

ひでえ…よく生きてたな俺。

この姉の凶暴さは良く判った、そしてそれを冷静にカウントしていた妹も相当だな。

腑に落ちないが、これ以上「寄り道」をするわけには行かないので、リウエンのことは、この凶暴な姉に任せよう。

「まあいい…これ以上言い合っても仕方ない」

「何よ」

口を尖らせて、こちらを睨んでいる。

「今度、俺に茶を淹れる、それで手を打ってやる」

「はぁ？」

リウエンが口を押さえて笑い声を押し殺している。

「得意なんだろう？リウエンが美味いと褒めてたぞ」

「え？あー、うん、そそそそ、そうよっ」

照れているのか、すっかり顔が赤い。

褒められるのに慣れてないらしい。

「ま、まあ、そこまで言うなら淹れてあげてもいいわよ、うん」

「じゃあ、この件はこれでエンドゲームだ。

ほらほら、リウエンのことは任せたからな」

持ち上げるだけ、持ち上げておいて

不意に話を切ったので、また不機嫌を顔に顕す凶暴姉。

表情をコロコロと変える凶暴姉を見るのも面白いが、いつまでも

構ってられない。

俺としては、^{エンドゲーム}終盤を迎えることなく、^{リサイン}投了なただけだな。

「はいはい、言われなくてもそうするわ。

アンタなんかネコ踏んで死んじゃえ！」

ベーと舌を見せる、子供かコイツは…。

「ほら、行くわよ、リウエン。」

「あ、姉さん、ちょっと…引つ張らないで。」

ひょいと左手で つまり片手一本で リウエンの紙袋を抱え、

右手でリウエンの手を引く。

…。

あいつ…本当に女か？

白と黒の背中を黙って見送る。

賑やかな声が次第に遠ざかり、静けさを呼び戻し始める。

昼下がりの街に溶け込む白い背中が、不意に立ち止まりこちらに
向き直った。

ぺこり。

俺は手を振って応えた。

「やれやれ……」

俺も行動を起こすべく、荷物を纏めた。

日も傾きかけている、道を行き交う人もまばらだ。

すっかり遅くなってしまったが、一旦この街の冒険者ギルドで依
頼主の確認を取らなければ。

「あの…すまんが、」

「…?」

いつの間にか、カフェの店長らしき中年が、メモ書きを手渡して
きて、こう述べた。

「一六〇セウムだ」

「…は？」

領収書にはしっかり「二人分」のお茶代が記されていた。

1 - 3 釣り合わない待遇

鉾山都市ファルクス

北部に広大な銀鉾脈、東に深い森林、南に海岸線を有し、数百年前より採掘が盛んな街である。

ここに訪れる者は、短期の鉾山夫か、鉾石の運搬を護衛する冒険者がほとんどだ。

しかし 近年、海路が確立され、山岳部に存在する陸路の利用は、不便なこともあり、護衛の冒険者の数と共に減少傾向を辿っている。

今日でもファルクスは良質な銀鉾脈として重要視されており、ここにも当然の様に、冒険者ギルドは存在する。

ここは、ファルクスの冒険者ギルド。

俺がギルドに足を踏み入れると、他に利用者が居なかったこともあり。

初老のギルドスタッフが、すぐに対応してくれた。

「それは災難でしたな」

「ええ、全くです」

手短に受付を済ませるつもりだったが・・・何せ、先ほどあれだけ殴られたんだ、

余程酷い顔をしていたのだろう、追求されるのは当然だった。

…極力、愚痴に聞こえないようにする為、言葉の選定に労力を要

した。

「初めての土地で、気を緩めた俺が不注意でした」

「船旅の疲れもあるでしょうに、お気の毒で仕方ありませんな」

大抵、その街の仕事は、その街のギルドにのみ依頼が行く。

しかし、より多く人員求める場合など、各都市のギルドへと求人
が回る。

各地で求人を見た冒険者は、依頼元のギルドへ赴き、そこで正式
に依頼を受けるのである。

俺は、手早く渡された書類に目を通す。

どうやらこれは、随分と羽振りのいい依頼主　オイゲンという
らしい　のようだ。

詳細は書かれていないが、遺跡探索に分類される仕事だが、集め
る人員があまりにも多すぎる。

俺は自分の得意分野の技術を発揮すればいいだけらしい。

「本当に、俺は開錠・畏解除だけでいいんですか？」

「ええ、そのようですな。」

募集を掛けると、どうしても前衛思考の高い戦闘要員しか集まり
せんぞな。

貴方のような、特殊技能を修得している人間はかなり貴重だった
ようです」

…どうも世の中には冒険者を「伝説の勇者・予備軍」みたいに考
えてる連中が多いらしい。

しかも、それが冒険者自身にいるから問題だ。

怪物を退治し、腕自慢をしたいなら、警備兵にでもなればいい。

冒険するに至って、様々な技能が必要になってくる。

本来そうだったものも含めて、研修・認可を受けた者がギルドに登録されるはずなのだ。

「元々、戦闘は得意じゃないんで、助かりますけどね。」

「フォツフォ、最低限の護身の準備はお忘れなきように。」

と言いかけたところで、ハッと彼は何かを思い出したようだった。

「これはいかん……」

「……どうかしました?」

表情を見る限り、良い情報では無さそうだ。

「当方には、先ほどお渡しした書類の内容程度にしか伝えられておりませんので、

オイゲン氏は、ご自宅に参加者全員を集めて、直々に依頼内容を説明されることになっております。

「……今晚っ」

「今なんて言った……?」

「……今晚?!」

「……間に合ってよかったですな」

初老の男は苦笑いを浮かべながら、そう答えた。

太陽は一日を勤めを終え、もう沈もうとしていた。

1-4 そこに居たのは

「指定された日程で交易船に乗ったのに・・・！」

思わず悪態を付きながら、ギリギリに仕組まれたスケジュールを呪う。

のんびり紅茶なんて飲んでる場合じゃなかった！

「うっわ、随分と高台まで走らされたな・・・」

手続きを手短に済ませた俺は、ギルドの親父から貰った地図を頼りに石畳を走る。

グルグルと思考が混乱する。

日没まで、もう僅かだが…決して夜じゃない。

だからといって、ギリギリに訪問するのは印象が悪すぎる。

少しでも事態をマシな物にするべく…走るしかなかった。

オイゲンの屋敷はすぐわかった　そう、屋敷だからだ。

ギルドから出て、すぐにその姿は確認できた。

が、道があまりにも入り組みすぎている、階段を上がったと思っただけ、また降りて回り道。

地図があつて本当に良かったと思う。

「バッカヤロー………！」

誰に向けていいか判らない不満を、夕日に投げつけた。

）　）　）　）　）　）　）　）　）　）

「随分と遅かったな。」

「……ハア、はい、面目の次第も…ハア」

辛うじて、日没までに到着することができた。

息を切らせながらも俺は、屋敷の門番に取次いでもらっていた。

「…なんだ、その顔は？」

鉱山の荒くれ共とケンカでもしたか」

「そんな連中より、もっと性質の悪いヤツですよ……」
適当に言葉を濁しておいた。

もう、俺の中では黒歴史に認定されたんだ、いいだろう？

待つこと、五分ほど。

俺は屋敷の中へと通された。

「やれやれ……」

思わずため息が出る。

心底、今日は疲れた…もうこれ以上何も起こらないでくれ。

俺は、信じてもない神様に、この時ばかりは激しく祈った。

「この部屋で待っている、他のもここいる、」

「わかりました」

「旦那様が来られるには、まだ一時間ほど掛かる」

そこは、応接間のような広い部屋だった。

俺が扉を開けると、中にいた人間が一斉にこちらを見るが、すぐに視線を戻す。

…依頼主じゃなくて悪かったな。

俺は、軽く形だけの会釈をし、知り合いが居る訳でもないので、部屋の隅へと避難しようとした。

？

視線を感じる。

そちらを向くと、どこかで見たような白い少女と黒い少女がこちらを指差している。

「あーーーーー！ さっきの無能！！」

「姉さん、失礼ですよ！」

この日、どうやら神様はお留守だったらしい。

2 - 1 早すぎた再会

青きギフトと赤の勇者

むかしむかし、この街はボロボロでした。

青の魔道師と魔王の激しい戦いのせいでした。

山は砕かれ、沢山の穴が開いていました。

森の大地は避け、でこぼこになっていました。

街は破壊され、やはり、でこぼこになっていました。

そして、魔王が倒されても、その手下たちは暴れまわっていました。

青の魔道師は戦おうとしましたが、魔王から受けた傷で動けませんでした。

街もボロボロで成す術もありません。

青の魔道師は最後の力を振り絞り、人々に力を授けました。

街には、強固な壁を授けました。

人々には、街を護る術を授けました。

そして領主の息子には、一本の赤い剣を授けました。

街の人々は、次々と魔王の手下を追い払いました。

赤い剣を授かった少年は、次々と魔王の手下を討ち払いました。

そして、今度こそ平和になり、少年は「赤の勇者」と呼ばれるようになった。

めでたしめでたし。

「つまり、その赤い剣ていうのが目的だと？」

「はい、そう伺っています」

オイゲンの屋敷の応接間(?)にて、俺は望んだわけでもなく、リウエン達と再会を果たした。

依頼主であるオイゲンが現れるまで一時間、何をするわけもないので、リウエンから話を聞いていた。

そこで判った事だが…どうやら俺は、この依頼の二次募集で引き受けたという事らしい。

一次募集組のリウエン達　つまりこの娘も冒険者…？　は、

二週間も前に、この街に滞在しているというのだ。

なるほど、それなら流石に依頼内容を聞いていてもおかしくない。

「それにしても、随分と絵空事みたいな話だな」

「確かに、お伽話に出てくる剣を…本当にあるかどうかとも判らないですしね」

小さく肩を竦める身振りを見せ、例の巨大な本を仕舞い込もうとする

いつも持ち歩いているのか？あのデカイ本は…。

「お嬢さん、それはグリモワールじゃないのかね？」

「グリ…モワ……？」

不意に、声が掛かった。

視線を向けた先には、いかにも魔道師といった風貌の男が居た。

「よく、ご存知ですね」

「魔法の道を志す者なら、名前くらいは知っているさ」
優雅に微笑むリウエンと、グリモワールと呼ばれた本を注視する男。

「おつと、お話に水を差したようだね。」

私は、アビスⅡストライゴだ、君は・・・増員募集の　ムノー君？」

「エイン、エインⅡエクレールです。」
リルドナの「無能」発言のせいで、嫌な仇名がつきそうだ…。

「それよりも、グリモワールというのは…？」
形だけの握手を交わし、説明を促す。

お互い、相手の自己紹介はどうでもいい、といった感じだ。

「うむ、所謂・・・魔導書の総称でな、その本に術式や呪文を書き込む事によって、

魔法詠唱の簡略化や、術者の力の消耗を抑えたり出来るという、それは有り難い代物らしい」

「でも使い方次第…ではありませんよ？」

魔導書についてやや興奮気味なアビスと、気にも留めないリウエン。
ン。

俺は、魔導書を、乗馬する際に使う馬具　　鎧のようなものと認識した。

グリモワールか・・・あれが有れば、俺でも高位の魔法を扱う事も夢ではないのか？

俺も最低限…と思い、ささやかながら簡単なヒール魔法程度は使える。

しかし、あの本が有るならば

「大丈夫か…？ ナンセンスだぞ」
「……！？」

不意に発せられた言葉で現実に引き戻される。

声の主は、リウエンの後方で、壁に背を着けこちらを見ている。

細身のやや長身の男で、その黒で統一された服装は、執事を連想させる。

「お兄様・・・初対面の方にそれは失礼では・・・」

誰だ？という俺の問いかけよりも早くリウエンが回答を用意してくれる。

いつの間に・・・そこに現れたのだろうか？ いや、最初から

そこに居たのか？

注意してなかったとはいえ、まるで気配がなかった。

それよりも、さっきの言葉の意味はなんだ？

（頭は）大丈夫か？ （その発想は）ナンセンスだぞ。

という意味だろうか。

リウエンが『失礼』と称するなら、おそらく良い意味ではな無いのは確かだ。

「こちら、兄のルーヴィックです」

「ルーヴィックだ」

打ち抜かれた板金のような飾り気の無い言葉で応える。

「聞く処によると、妹達が随分と迷惑を掛けたようだな？」

「ちよつと、お兄ちゃん！あれはソイツが」

ルーヴィックが無言で一瞥すると、リルドナはビクっと言葉失った。

あの凶暴女も兄には逆らえないようだ。

その威圧する態度に、俺も思わず毒が漏れた。

「…で、ナンセンスってどういうことだ？」

「大方、お前はグリモワール使って魔法を、とか考えてたのでは無

いか？」

凶星だ、考えてた。

視界の傍には、苦笑いを浮かべたアビスの顔があった。彼にとっても凶星であつたらしい。

「やめておけ、魔導書は正式な所有者にしか使えん」

そこで一旦言葉を切り、ため息をついてから続ける、

「尤も こいつは間違つた使い方に、間違つた設定を施しているが」

そこは納得した、

俺に聞かせてくれたお伽話は、そもそもその本に書かれているよ
うだった。

俺はともかく、そのアビスという男は聞いてさぞ嘆いているこ
とだろう。

「…来た様だ」

ルーヴィックの言葉で扉の方に視線を移す。

……。

……。

……。

ガチャリ

「皆さん、お待たせしました」

豪華な装いで、すぐにその男がオイゲンだと判つた。

オイゲンは、一同の顔を見渡し話を始めた。
事前にリウエンから、概要を補足されていたため、実に退屈な時間となった。

別に恨んでないからな、リウエンは許す。

「それでは工程について」

説明が終わり、組まれたスケジュール　日単位での最低報酬が存在するため　が示される。

ここからは知らない話だ、ちゃんと聞かねば。

オイゲンの声に、控えていた使用人が大きな地図を広げてみせる。

「まずは、西の森の入り口まで行って貰います。

ここまでは遠いので、こちらが馬車を用意させて頂きますので」

オイゲンが地図に指し示した点を見る。

ここファルクスから、ずっと東に「ルフエの森」と書かれた森があった。

森の入り口まで…？

「森の中は道が無い上に、激しい起伏があります。

先程の、お話に出てきた　でこぼこ　というわけです」

リウエンが小声で俺の疑問に答えてくれた。

「あと

大昔に戦争で、砦や前哨が築かれてましてな、

今は、その残骸と瓦礫で悪路の上無しなわけです」

アビスもさらに付け加える。

「ここには、昔の兵舎を改装した小屋がありますので、そこで一泊

して頂き、

翌朝より、誠にご足労ではありますが、徒歩で森を抜けて頂きま
す」

「どうやら、そこからが本当の仕事開始のようだ。

「おい、森を抜けるのは構わないが、どこに行けばいいんだ？」

「まさか森の中を探して回るとかじゃないだろうか？」

口々に疑問が投げつけられる、確かにそうだろう。

まだ、肝心の目的地がまるで判らない。

「そこで、コレの出番になります」

「…！」

「む？」

「…？」

オイゲンが「コレ」と示したのは、装飾の施された棒状の物…剣
の鞘か？

それが、なんなのか俺にはサツパリだったが、一部の人間には判
るらしく、各々の反応を示している。

「まさか、それが…?!」

「実在したとは……」

「はい、コレこそが、赤の勇者が使っていた剣の鞘でございます」
伝説の剣の鞘…？それがなんだと言うのだろう。

一人価値が判らない俺は、ただ呆然とするのみだった。

その後、意味も判らない単語や伝説に翻弄され続け、俺の思考は
リサイン
投了寸前だ。

このままでは不味い……重要な情報までも見落としてかねない。
視線を周囲の人間の顔へ巡回させる。

理解できていないのは、俺だけじゃないようだ。

話に追従できている者の表情は真剣そのものだ、その中にリウエ
ン、ルーヴィック、それと先程のアビスという男は含まれている。

…視界にリルドナの顔を収めると、ノンキに欠伸あくびしている。

アイツと同じサイドの人間になるのは嫌すぎる！

俺は最後の手段を取った。

聞いたこと丸写しのメモ

「文字書くの、早っ」

リルドナがちよっかいを出してくるが、華麗にスルーしてペンを走らせ続けた。

真面目にコツコツやることしか出来ないんだよ、俺は！

2 - 2 失敗は続けて起こるものなんです

「それでは、出発は明日ということですね。」
説明を終えたオイゲンは、そう付け加えて場の解散を下した。

「むう……………」

俺は街灯の下でメモと格闘していた。

さすがに屋敷に居座り続けるわけにもいかず、

すっかり日が落ちた街路に明かりを求めて、屋敷から少し離れた階段に俺は座を構えた。

落ち着いて見直しても、やはり理解は難しい。

「アンタ、なにやってんの？」

不意に声を掛けられたが、振り向かなくても誰だか判る。

「さっきのお話の補習授業、邪魔すんなよ」
遠慮なくリルドナを邪険にする。

「ほう、先刻は随分と熱心にメモを取っていたかと思えば、」

「お仕事に熱心なのですね」

ルーヴィックもリウエンもいるようだ、まあ当然か。

「いやあ……………全然理解できなくてね、ほんと困ってる」

「アンタ無能のくせに、真面目なのねえ」

「姉さんが、不真面目なだけです」

完全に煮詰まっていた頭は、思案の中断という防衛本能を紡ぎだ

した。
顔上げてメモを閉じる。

「お前達は理解できてたようだな、うらやましいよ」

「いや、あれは説明が悪いし、ムダに勿体ぶって余計にわかり難く
なっていた」

「そうなのか？」

「はい、そうですね。」

話を要約しますと、まず目的地は森の奥に存在する無人となった
屋敷です、

「そして、その屋敷には特殊な結界が掛けられていてな、普通には
辿り着けない、」

「あの森は妖精の森だからねー、そこに在る屋敷も普通じゃない
のよ、」

「その結界を打ち破れるのが、先程の剣の鞘 というわけだ」

三人が演劇の役者の様に、台詞を紡ぐ。

「…それだけ？」

「それだけです」

「話の骨はこんな物だろう、何故…剣の鞘が？という疑問はあるだ
ろうが」

ルーヴィックは懐から時計を取り出し一瞥する。

「この夜は冷えるぞ、そろそろ帰ったほうがいい」

「エインさんは、何処に御宿を？」

そこでカチリと危機感のピースが合わさった。

「しまった……」

呆れるルーヴィックに、目を丸くする姉妹。

参ったな…今日はほとほと失態続きだ。

2 - 3 姉妹はウエイトレス

羊飼いの憩亭

街の北部に宿を構え、出稼ぎの鉱山夫や冒険者にその寝床を提供している。

一階部分に大きな食堂があり、宿泊客以外の人間も多く出入りしている。

「この子たちの知り合いなら、全然構わないよ」

「ありがとうございます」

宿の女将に深く頭を下げ、お礼を述べた。

その日の宿の確保すら忘れていた俺を見かねて、リウエンがでしたら、私たちが泊まっている御宿でよければ。

と、ここに案内してくれた。

途中、リルドナが宿の確保の失態にヤジを飛ばしていたが、もちろん聞かなかったことにしている。

「それじゃ、部屋はこの二階だから、悪いけど荷物は自分で運んでおくれ」

「それくらい気にしませんよ、では失礼します」

「ああ、夕食はまだかい？まだならウチで食べていっておくれよ」

夕食どころか、昼食すら食べてないことに思い出した 紅茶しか飲んでないな…。

思い出したら、律儀に腹が空腹を抗議している。

俺は、手早く荷物を部屋に押し込み、食事にあるこうと食堂の席に着いた。

宿泊客以外も来ているんだろう、広い食堂は多くの人で賑わっている。

「ご注文は、どうなさいます？」

銀髪の可愛らしいウェイトレスが声をかけてきた。

…。

あのー、なんでキミはそんな格好しているのかな？

見渡すと、リルドナも同じく給仕で走り回っているようだ。

「ここで働いているのか？」

「姉が、やってみたいというので、手伝っていたらこうなりました」

そこまで言って、彼女は俺に渡すつもりだった冷水を持ったままな事を思い出し、コップを差し出す。

「あ、すみません…どうぞ」

「ほい、ありがとう」

バシヤ！

顔面が冷却される。

「あ、あ、すすすす、すみません！」

オロオロとリウエンが謝りながら、俺の顔を拭こうとハンカチを取り出した。

が、その刹那、テーブルに身体を引っ掛けた。

「にゅ…?!」

バランスを崩し、そのまま頭から床に倒れ

させなかった。

「せ、セーフ…」

「うう…」

リウエンは顔を真っ赤にし、涙を浮かべうな垂れている。

「と、とりあえず、この『羊飼いのオススメ定食』をお願いするよ。

「
…」

こくん、と頷いて答える

がつくりと肩を落とし、とぼとぼと歩く後姿が厨房へと消えた。

がんばれリウエン、俺はキミのことを応援してるぞっ。

「はい、おまたせっ」

「お、サンキュ」

料理はリルドナが持ってきた。

器用にトレーも使わず、いくつもの食器を運んでいる。

「熱いから、気をつけてねえ」

「なんで、お前は素手で持てるんだ…」

口を動かしながらも、料理を優雅に配膳していく。

「我慢すればいいだけよ、」

「トレー使えよ、我慢しなくてもいいじゃないか」

それを聞いて、素っ頓狂な声を上げた。

「そんなことしたら、料理が冷めちゃうじゃない」

おお、なんて優秀なウエイトレス。

それなら、冷めないうちに頂くのが礼儀だ、まずはスープから手を付ける。

じんわりと胃に染み渡る。

「美味い…!」

お世辞じゃなく、本当にそう思った。

「でしょ?」

俺の反応に満面の笑みを浮かべる。

「そのスープね、レシピはリウエンのオリジナルなのよお。」

「へえー、そうなのか。すごいなー才能あるんじゃないか?」

リウエンを褒めているんだが、リルドナは自分のことのように嬉しそうだ。

「あの…ね？」

「なんだよ」

不意に歯切れの悪い口調になった。

「リウエンのことなんだけど…あんまり悪く思わないでね」

「なにがだよ？」

「や、あの子ちょっとドジだから、アンタにも迷惑かけちゃってるし…」

ひよい、とデザートのリングを一切れ摘み、そのままパクリ…それ俺のぞ。

「悪気は、無いのよお？一生懸命が空回りしてるだけだからー」

「大丈夫だよ、気にすんな。それよりも厨房に戻ったらリウエンに『美味かった』と伝えてくれ」

「ありがとう、」

さらに、もう一切れリングを口に放り込む。

「そうそう お兄ちゃんがアンタのこと呼んでたから、

それ食べ終わったら部屋に行ってあげて、アンタの部屋の向かい側だから」

ひよい。

またリング盗った！

「なんの用だろっ…？」

「さあ〜ね、んじゃ、あたしは戻るわ〜」

去り際にさらにリングを摘んでいく、結局全部食われてしまった。

2 - 4 ナンセンスな羊飼

コン、コン…。

コン、コン。

「開いている、入ってくれ」

「邪魔するぞ」

部屋の中は、俺の部屋と同じく簡素な作りだった、ベッドと小さなテーブルと椅子だけ。

ルーヴィックは椅子に座り、テーブルに置かれた白黒チェック柄の台座を睨んでいる。

手には年季の入ったノート、過去の対局の棋譜か？

ふうーと、息を漏らし駒を片付け始めた。

「何の用だ？」

「少し、付き合って貰おうと思ってな」

「何がだよ」

「『この件はこれでエンドゲームだ』だったか？」

それは昼間リルドナに投げた言葉だ。

「出来るんだらう？ チェス」

「昔にハマってた程度だぞ？」

「それでも構わん」

ルーヴィックの向かいに座り、駒を並べ始める。

懐かしいな、長い間やってなかった筈なのに、自然に手が動く。

「先手はくれてやる」

「そりゃ、どうも」

盤面を見る、1・e4 e5 2・Bc4 Bc5 ……ま
さかなあ、と思いつつ指し手を換える。

ルーヴィックは満足そうに笑った。

「さすがに初心者じゃ無いようだ」

「お前、舐めてるだろ？」

スコラーズ・メイト

初心者が引つかかり易い手順の指し手、俺も昔はよくやられた。

「まさか旅先でチェスを差すことになるとは、思わなかったよ」

「そうか？俺は常備している」

淡々と次々と指し手を進めていく。

ふと、宿に来る前のことを思い出した。

「そういえば」

「どうした？」

「さっきの『何故…剣の鞘が？』の話。まだ途中だったよな？」

「ああ、そのことか」

答えながら、王と城兵^{キング ルーク}を入れ替える。

「伝承に出てくる赤き剣は魔を否定すると言われている」

「魔を否定？」

「平たく言えば、魔法を無力化するか…、

魔法である以上、ひとたび赤き剣に触れれば消失する」

「すごいな、そりゃ」

「そして、その力は鞘のほうにも宿っている、というわけだ」

「なら鞘だけでも充分価値があるな」

じりじりと前線を上げてくるルーヴィック。

遊ばず、堅実に攻めて来る指し手…手強いな。

「なら、切り崩してやる」

犠牲覚悟で駒を進め、お互いの駒を減らしていく…！

シンプリフィケーション

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

「うるせえ、」

シンプリフィケーション

「等価交換は、有利な局面で使うべきだ」

いつしか、俺は夢中に指していた。

コン、コン、コン。

「お兄様、リウエンです、よろしいでしょうか？」

「構わん、入れ」

ウエイトレス姿のままのリウエンが入ってきた。

俺の姿を捉えたリウエンは、苦笑いを零した。

「あらあら、やっぱり捕まってしまいましたか？」

「見事に、ね」

「どうした？」

「お茶の用意が整いましたが、こちらにお持ちしたほうが宜しいでしょうか？」

ルーヴィックは懐から時計を取り出し一瞥する。

「そうしてくれ、まだ終わりそうも無い」

イッヒフエアンシュテーエ
「畏まりました、」

スカートの裾を摘み、優雅にお辞儀をしリウエンは部屋を出て行った。

少し元気になったようだなあ、

俺は既に閉じられたドアを暫く見つめた。

「心配していたか？」

「な、何がだよ」

「凶星らしいな」

見透かすように笑っている。

ちっ、悪いかよ。

「そら、お前の手番だ。受け手を聞こう」

「く……」

次第に俺は長考せざる得なくなっていた。

コンコン。

ガチャ。

「お兄ちゃん入るわよー」

もう入ってるだろ、という言葉を食べ飲み込み、対局を中断する。

「ほーら、約束どおり淹れてあげたわよ」

「ちゃんと覚える神経があつたんだな」

無駄口を叩きながらも、テキパキと紅茶を注ぐ。

お、いい香りだ。

「な、美味い…!?!」

「何よ…疑問系なの?」

正直、リウエンは言っていたが、にわかには信じていなかった。

こんな凶暴な女にお茶を淹れるというイメージがとても繋がらなかったせいだ。

「気持ち判らんでも無いがな」

「お兄ちゃんも、酷っ」

リルドナは口を尖らせ抗議していた。

さて、紅茶で気分もリフレッシュだ、どう切り替えしてくれよう。

「コレ、どっちがアンタ?」

リルドナが盤面を覗き込みながら訊いてきた。

「…白だよ、」

「よく判んないけど、白の数が少ないわねえ」

「あらら…これは苦しそうですね」

リウエンも覗き込んでいる。

「まだだ、まだ終わりじゃない！そう簡単に投了リゼインすると思うなよ」

「良い心意気だ、ならばこれより詰めるぞ」

ゲームは終盤エンドゲーム、いつチエックメイトされてもおかしくない。

足掻くだけ足掻いてやる…！

「これで、どうだあ！」

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

起死回生の一手もアツサリ裏目にされる。

熱くなる俺を尻目に

「んじゃ、あたしはまだ洗い物の手伝いあるから戻るわ」

ひらひらと手を振ってリルドナは退出した。

2・5 実は純白じゃないんですよ

ジャコ、

ジャコ、

ザバァー。

「ふう…」

俺は宿の庭にある井戸（ちゃんとポンプ式だ）から水を汲み顔を洗った。

身に染みる冷たさだったが、すっかり熱くなった頭には丁度いい。

結局、ゲームは俺のチエックメイト負け。

負けはしたが、久々の対局に心地よい充実感を覚えた。

チエスは、勝敗を競う。しかし、勝つことが目的じゃない。

「楽しまなきゃな」

手早く顔をタオルで拭き、踵を返し視線を宿に向ける。

……リウエンが立っていた。

「ん？キミも顔洗う？」

「いえ、^{ネイン}ちよつとお礼を言いに」

心底済まなさそうな顔を浮かべた。

「なんだか、兄の我侂にまで付き合っ頂いてしまっ…」

「あゝ、構わないよ、こつちも楽しかったしね」

それを聞いて、リウエンは表情を安心という軟化材で緩めた。

「なんとも賑やかな兄妹だ、見てて羨ましくなるよ」

「そうですか？」

宿に歩を進めながら、話を続ける。

「俺は冒険者になってから、殆ど独りだったしね」

「あら、ご家族の元にはお帰りになつてないんですか？」
「全く。」

「ほぼ飛び出すように冒険者になつたし、今更会わせる顔もないよ。」

「親の反対を押し切つて冒険者になつたんだ、帰れるわけないだろう？」

「そんなことはないです、」

「きつと…立派になつたエインさんを迎えてくれますよ!」

「立派に？」

「いやいやいや…お世辞はよしてくれ」

「クルリと振り返り、そのまま後ろ向きで歩きながら、微笑みかけしてきた。」

「だつて、わたしを助けてくれたじゃないですか」

「その笑顔に心を吸い込まれそうになつたが、重大なことに気付いた。」

「後ろ向き…だと？」

「それは非常にマズイ、何がマズイかだと？」

「何も無い所で躓いてこける特技(?)を持つ人間が後ろ向きななかで歩いたら……」

「にゅ!?!」

「ずる、べたーん。」

「「じつなるよな」

「「じつ」

「例によつて目には涙を浮かべている。」

後ろ向きだった為か、派手に倒れ、白い下着が見えてしまっていた。

俺は極力見ない様に心がけ、反対側に回り込んでから助け起こす。
「す、すみませ〜ん。グスツ…」
「怪我とかしてないか？」

本当にこの娘は冒険者として生きていけるんだろうか…。

「いつまで抱いてんのよ？」

「え？！ あ、悪い」

「わ、わたしじゃないです」

視線を動かすと、そこには黒服に着替えたリルドナ。暗いので、黒一色の彼女は見つけにくい。

その顔はちよっぴり不機嫌の色を持ち合わせていた。

「出発は明日なんだから、いつまでもイチャついてないで寝なさいよ。」

「ね、姉さん、これはわたしがドジだから…。勝手なことエインさんに言わないでっ」

とりあえず、リウエンから手を離す。

ジ〜っと、

それはリルドナがジト目で俺を見つめる音。

「で見えたんでしょ？」

「何がだよ…」

赤いジト目が迫る。

「リウエンのぱんつ、」

「ぶっ」

「ね、姉さん……？」

リウエンの声は震えている。

リルドナは尚も詰め寄る。

「ほらほら、見ちゃったんでしょ？」

「ちよーっと、この子が背伸びして選んだ黒のレース。」

「いや、白だったぞ？」

あ、しまった。

見る見るリウエンの顔が真っ赤に染まっていく。

リルドナは、にやあくといやらしく顔を歪めた。

こ、この顔芸の魔女め。

「そこに直れ、この無能！」

理不尽だ……。

2・6 ツンのあとにはデレがあるんですよ

ポーン、

ポーン、

ポーン……。

時計が鐘を鳴らし時を告げる。

長針と短針の角度が最も鋭角になる時刻。

鐘が一回ではないので、十一時だ。

「……いつてえ、ててて……」

自室に戻った俺は悪態をついた。

例によって、リルドナに暴力の前になす術も無く、

運悪く吹き飛ばされた先に植え込みの木があり、そこに勢いよく突っ込んだものだから……。

「くっそ……破れてるじゃないか」

愛用のコートが見るも無残な姿へと変貌している。

木の枝があちこちを突き刺し、服だけでなく身体中傷だらけだ。

「明日出発だつてのに……」

とりあえず身体こゝちをなんとかするか……。

俺は目を閉じ、精神を集中し、詠唱する。

ボウ……

微かに発光し、傷口がほのかに温かくなる。

ヒールの魔法 覚えておいて損の無い魔法の第一候補だろう。

効果の方はさておきで、ちょっと頑張れば誰でも覚えられる手軽

さがウリだ。

「ちっ、やっぱこんなもんだよなあ……」

傷口の痛みは少し和らいたが、和らいただけで、それ以上の効果は得られない。

痛みが邪魔して、意識を集中しきれないのも原因だ。

魔法の効果は、術者の魔力と詠唱の質と長さ按比例する。

逆を言えば、高い効果を得たければ、魔力が詠唱のどちらかを要求されるわけだ。

俺はごく普通の人間だ、魔力の量には期待できない、詠唱で補うしかないんだ。

そして、良質の詠唱には長い呪文スベルと高い集中力を要する。

「絶対、戦闘中には使えないな……」

無いよりはマシ、俺は再度詠唱を始める。

「随分と長い詠唱ねえ？」

不意に声を掛けられ、詠唱が中断される。

そういえばドア開けっ放しだったな。

もう誰だか判っているので、振り向かずに返事をする。

「悪かったな、俺みたいなの平凡はこうでもしないと使えないんだよ」

「え……？そういう意味じゃないわよ？」

あたしには無理だなあ……って関心してんのよ、そんな長い呪文スベル覚えられないわ」

ふう…… とため息が零れる気配がした。

「自分で治せちゃうんだ……」

振り返りリルドナの表情を視界に捉える、

何か残念そうなの、少し寂しげな顔をしている。

後ろ手を組み、何かを隠しているように見て取れた。

「何を持ってるんだ？」

「え？や、これは……」

言い淀むリルドナを詰める様に身を乗り出したとき、彼女はぎよつとした表情を浮かべた。

そういえば、ボロボロになった服を脱いで自分で手当てしてる最中だったんだ。

つまり上半身裸だった。

「あ！ゴメンっ」

彼女は真つ赤な顔で謝り、その場で回り右して背中を向ける。

おかげで隠していた物の正体がわかった、

「救急箱か……？」

「あ、あははは……」

乾いた笑いを絞り出しながら……がつくり肩を落とした。

その姿がリウエンと重なる。

「貸してくれよ、それ、」

「え……？アンタ自分で治せるんじゃない……」

「実は痛くて集中できないんだ、こんなんじゃない大した効果も出せないよ」

本当にそうだった、今の状態じゃ鼻血も止まりやしない。

リルドナは満面の笑みで、俺の手当てを始めた……まるで玩具を買ってもらった子供のように。

ペコッ、

プシュー……

ヒンヤリと冷たい消毒液。

「……？」

何故か不思議と染みない、

あの独特の痛みが走らないのだ。

「コレ、リウエンの特注品だからねえ」

続いて、クルクルと丁寧に包帯が巻かれる。

薄々感じていたが、この女かなり手先が器用だ。

「ほい、次は右腕出して」

手際よく、だけど丁寧はその手を進める。

「しっかし、アンタ。」

魔法を曲がりなりににも使えるとはねえ」

「少しは見直したか？」

「そうねえ、もう無能じゃないわ」

「ほうほう、じゃあなんだ？」

「器用貧乏！これでいいんじゃない？」

それも酷いな。

「ああ、もう好きに呼んでくれ……」

「アンタのソレ」

目ざとく俺のコートを見つける。

お前のお陰で、殉職したんだぞ。

「なんていうか、ボロっ！」

「ボロいのはお前の功績だ、

胸を張って俺に謝るがいいぞ」

俺の皮肉に顔を曇らせる。

「代えは無いの？」

「コートはこれしかないからな、

テープ止めでもして急場は凌ぐさ、ボロと蔑まされようが俺は」

イツと運命を共にする」

「んな、大げさな……」

スツ…と、

リルドナが左手をこちらに差し出している

？

「なんだよ？」

「貸しなさい、」

視線が捉えているのは…このコートか？

どうする気だ？

「繕ってあげるわ、」

そんなボロじゃ見つとも無くて外歩けないでしょ？」

「直せるのかよ」

「任せなさい！」

最後の包帯を巻き終え、返す刀で俺のコートを引っ手繰る。

広げていた救急箱を回収し、足早に撤収しだす。

「アンタはもう今日は寝なさい、絶対明日には直しておくから。」

「ていうか、直ってなくても明日には返せ。」

「はいはい、かしこまり、」

そう告げ、リルドナは部屋から出て行った。

2・7 目覚めは違和感とともに

目覚めは、いつもと同じ違和感で始まった。

生家を飛び出し、冒険者となって三年。

ほぼ毎日が違う寝床だ。

本当の本当に最初の頃は、見慣れぬ部屋での目覚めに不安を覚えることもあった。

人間の慣れとは恐ろしいもので、そこに違和感は確かに在るはずなのに、

それ事自体に慣れてしまっている、言うなれば違和感が居るのに仕事をしない。

しかし、今朝だけはキツチリとその役目を果たしたようだ。

「なんだこれ…？」

身体中に巻かれた白い布 包帯だった…。

意識が、状況把握にフル稼働する。

昨日のアレか…。

身体中に出来た傷を思い出し、その存在を痛みという表現法で主張し

なかった。

「あれ？」

昨日あれほど、存在を主張していた痛みがまるでしない。

スルスルスル…。

不思議に思い、腕に巻かれた包帯を解いていく。

「嘘だろ…。」

腕には傷が無い。

見間違いの可能性を考え、他の包帯も解いていく。

まるで手品を見せられたかのような錯覚を覚えた。

傷は初めから何もなかったように、すっかりその姿を消失してしまっていた。

「ただの包帯じゃないな、これ…。」

ともかく顔を洗おう、一日はそこから始まる。

包帯を返すついでにリルドナには礼を言おう、きっとあいつのことだ、また顔を赤くするに違いない。

悪戯を思いついた子供の心境で部屋を出たとき、廊下の壁に見覚えのある姿を捉えた。

「リ…ルドナ…？」

返事はない、彼女は壁に寄りかかり、床に座り込んでいる。

その顔は目を閉じ、可愛いらしい寝息を立てていた、

「おいおい、こんな所で居眠りしたら、風邪ひくぞ？」

起こしてやるうと近づいた時、垂れ下がった彼女手が何かを抱えている事に気付いた。

それは綺麗に折りたたまれた大きめの布の塊。

その布地に見覚えがある俺はそっとリルドナから取り上げた。

「おいおい…これ俺のコートか？」

コートは完全に綺麗に修繕されていた、破れる以前よりも綺麗に…。

3 - 1 やっぱり似ていますか？

妖精の森と泉の貴婦人

むかしむかし、

森には妖精が飛び回り、

泉には精霊が宿っていたほどの昔のお話。

妖精の森の中には、それは綺麗な泉がありました。

そこには、泉に負けないくらい綺麗な貴婦人が居ました。

貴婦人はとても恥ずかしがり屋さん。

人々の前には滅多に姿を見せません。

泉に無理やり来ようとする人間を森の入り口へ戻してしまいます。

だけど、とても心優しい貴婦人。

森に迷い込んだ子供には、お菓子をを持たせて、親の元へ帰してあげます。

森で怪我をした狩人には、傷の手当てをして、森の外へ帰してあげます。

森の奥には危険な魔獣が居ます。

人々が間違っただけで出会わないように、決して奥には行かせません。

貴婦人の閉ざした門のお陰で、人も魔獣も平和です。

ありがたやありがたや。

* * * * *

ファルクス北部・旧街道

二百年に舗装された比較的道幅の広い街道。

当時は、西の森に様々な砦や前哨があり、兵員輸送に高く貢献し

た。

今となつては、殆ど利用される事は無い。

ガラガラガラ……。

人気の無い街道を馬車の一団が闊歩する。
目指すは、ルフェの森。

「い、以上です……」

「だ、大丈夫か？」

お伽話を紡ぎ、エサを運び終えたツバメのようにため息を零す。
その顔はすっかり血の気が引いて真っ青だ、そして絆創膏満載の指。

そりゃ馬車の中で本なんて読んだら……酔うな。

「それでは、お兄様、エインさん……私はこれを以ちまして、失礼
しまし

「お、おい？」

「すー、すー」。

まるで糸の切れた操り人形のように眠ってしまった、
ていうか、早過ぎるっ！

「元々、こいつは乗り物に弱い」

棋譜の記したノートから目を離さず、リウエンの弱点を告げる。
違和感を一欠けらも含まない、実に納得の弱点だ。
……こいつは酔わないのか。

ちなみに座っているのは俺の隣、馬車の進行方向と逆向きの座席
だ。

「急に静かになった気がするよ」

「静かなのもいいだろう？」

そう、今や車内で起きているのは俺とコイツのみ。

リルドナはどうしたか？だつて？

俺の目の前だ、ただし彼女も寝ている。

俺の向かい側の席でリウエンとリルドナは寄り添うように可愛らしい寝息を立てている。

「なあ、聞いていいか？」

「どうした？」

「なんで、伝説の剣の鞘だけが、オイゲンのおっさんが持ってたんだ？」

普通に考えておかしい話だと思う。

キツチリ剣と鞘が揃って持っても不思議だけどな。

「そのことが…」

パタンとノートを閉じ、

侵入者を睨むガーゴイルのように車窓から景色を眺めだした。

「オイゲン家は勇者の末裔の一族だ」

「なーんか、眉唾もんだな」

「だろうな、街の年寄りはともかく、若い連中は誰も信じていないだろうしな」

ため息をつき、またノートを広げた。

だから酔わないのか、こいつは。

「剣の不在は教えんぞ？お伽話の内容に抵触ネタバレしてしまう」

「んじゃ、あとでリウエンに読んでもらうさ」

勿論、到着して気分が良くなつてからだ。

あんなに真つ青な顔して気の毒で仕方ない。

…ふむ。

「リルドナも酔うのか？」

「そいつの頭にそんな高等な機能は付いて無い、
おそらくこの馬車の車輪に括り付けて編み物をさせても平気だ」
「それ、なんて罰ゲームだよ……」
真新しく生まれ変わった自分のコートに目を向ける。
やっぱり原因はこれか？

「夜更かししすぎか…」。

「一晩で直すなんてやっぱりキツかったんだな」
「む、どういうことだ？」

「昨晚の事を手短かに告げると、怪訝な顔を浮かべた。」

「それは妙だな。」

「やっぱり異常な作業速度だよなあ」

「この程度の物、リルなら三十分と掛からんな」

「そつちなのかよ！」

いくらなんでもハイスペック過ぎないか。

俺と一緒に頭を捻っていたヤツは何かを閃いたようだ。

何かを確認するように俺のコートに目を配る。

「昨日より新しくなっているように見えるが、間違いではないな？」

「俺も、にわかには信じ難いが、確かにこれは俺のコートだ」

確認から確証を得、結論に辿り着いたようだ。

「リウエか…」

「リウエンがどうかしたか？」

「ヤツは妹二人の名前をいつも省略して呼んでいる、殆ど省く意味がないと思うんだが…」。

「リウエンが何の関係があるんだろう？」

「こいつが手伝ったのなら、致命的な大悪手だ」
フレンダー

「お前酷いな…」。

「それで？リウエンが手伝ったら三十分が何時間に化けるんだよ？」

「そうだな…これは一旦コートを繊維まで分解してからの作業をし

ている……」

「どういう状況だったんだよ……。」

顎に手を当て、長くない時間思考する。

「九時間…いや、十時間だな」

と言い切つてから、すぐにハツと言い直す。

「いや待てよ…昨晚リルに最後に会ったのは何時だ？」

「俺は時計持つてねーよ、でもまあ十一時くらいだったと思うぞ」

「今朝、部屋の前でリルを見つけたのは？」

「七時前くらいだったと思う あ…」

そこまで言い掛けて、さすがに俺でも気付いた。

「計算が…」

「合わないな」

車内が車輪の転がる音で満たされる。

しばしの沈黙の後、ヤツは鼻で笑った。

「なるほどな、そういうことか。」

お前は随分とうちの妹達に気に入られたようだな」

「はあ？」

「素直に喜ぶといい、そして俺もお前のことを気に入った」

「そりゃどうも」

俺はもう一度二人の姉妹の寝顔を見つめた。

ありがとうな、

よくわからないけど、とにかく俺のために頑張ってくれたことは違う。

「それにしても、こうやって並べて観察すると似てるなあ」

「ほっ？そういう感想は珍しいな」

「髪の色の違いはあるけど、顔の造りは似ていると思う」

似ているじゃない、同じなんだ。

寝顔を二つ並べて観察できる人間がどれだけ居たかわからないけ

どな。

「よく見てみる、区別する明確なポイントはある」

「瞳の色だろ？」

「ふむ、目は閉じられているが？」

「寝ているから、当然目は閉じられている。

他にもあるっていうのか？」

もう一度間近でリルドナの顔を観察する。

すー、すー、可愛い寝息を立てている。

隣にいるリウエンも同じ、これも一緒だよな。

「あと五秒だ」

懐から時計を取り出し一瞥したようだ。

「時間制限付きかよ。」

さらに食い入るように観察する。

どこだ？

不意に宣言が飛んできた。

「スコライズ・メイト羊飼いの詰。」

「「え？」」

二人同時に声を漏らす、意味は双方違う色を含んでいるが…。

俺の眼前には、見開かれた二つの赤い瞳があった。

その赤さはみるみる顔全体へと広がっていく…。

「きゃあああああああああ……！！」

大音量の悲鳴をモロに被弾した。

この状況はヤバイ。

隣ではルーヴィックが獲物捕らえたベアトラップのように笑いを堪えている。

ヤロウ…嵌めやがったな。

大体、これは初心者狩りじゃなく、スインドル詐欺と言っんじゃないか…。

「アンタアアアア……！！」

狂気の赤眼が迫る。
逃げ場は当然無い。
ヤバイ死んだかも…。

3 - 2 ブラインドチェスは猫も食わず

残念(？)なことに俺は死ななかった。

ヤツお得意の

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」
で救われた。

走行中の馬車の中だ、暴れて万が一事故でも起こしたら大変だ。
バシリスクのように身のこなしが軽いこいつら二人は大丈夫かも
しれないが…。

俺は絶対アウトだ。

それ以上にリウエンはマズイ、しかも今は寝ている。
というわけで、この場は何とか凌いだ。

でも、まああれだな？

「お前のせいだろうがああああならああああ！」

「暇だったんでな」

「うっさいわね、リウエン起きちゃうでしょ！」

とかやってたが、リウエンは全く目を覚まさなかった。
パタンとルーヴィックはノートを閉じる。

そして、こっほざいた。

「仕方ない、一局指すか」

「は？」

「お前も退屈だろう？」

「じゃなくて、ここですか？」

「そうだ。」

「チェス盤も置けないだろう？」

置けても揺れて駒落ちるだろう？」

あと、ついでに酔うだろお！？」

一気にまくし立てた。

つつこむところは、まだまだあるが。

「問題ない、」

「アンタ達、面白いわぁ」

正面ではリルドナがゲラゲラ笑っている。

その膝にはリウエンの頭があった、膝枕ってやつだな。

フラインド・チェス

「目隠し対局なら出来るだろう？」

「俺、やったことないんだが……」

「問題ない、」

「俺の方に問題あるわ！」

「まあ、やってみなけりゃわからんさ」

何を根拠に……。

錆びついた鉄扉のように無責任なことを言ってくれる。

「で、どうする？返事は『はい』か『イエス』で応えろ」

「…拒否権なしかよ！」

というわけで、生涯初の^{フラインド・チェス}目隠し対局が始まった。

俺の行動は

チェスを指すか、

紅茶を飲むか、

凶暴姉に殴られるか、

の三つくらいしか無い気がするんだ…。

「そら、Q g 4 だぞ？」

「むう、N a 3 でいく」

二人して腕組みポーズで指し手を宣言し合う。

ちなみに、リルドナは目の前で棋譜を記入している。

「ふむ、R a 4 だ。」

「目は閉じたほうがいい、余計な情報が入らなくて済むからな。」

なるほど。

俺もそれに習う。

「えーっと、N c 6」

「イリーガル・ムーブそんなのあり得ない、そこにはお前の騎士側ナイト・ポーンの歩兵がいるぞ」

「ファイル ナイト・ポーンなんで、その行に騎士側の歩兵いるんだよ？」

「八手前にアンパッサンしただろっ？」

「そうだったけ？」

棋譜をノートに記していたリルドナに問う。

彼女は無言でノートを突き出す。

意外にも綺麗な字、『18・b c 6 (e ・ p ・) Q a 4』と書か
れている。

「く……言う通りだ」

「そら、やり直せ、受け手を聞こうか」

正直、キツイ…局面が全く把握できない。

ヤツは両目を閉じ余裕の表情だ。

呆れ顔で記入を続けるリルドナ、心底ヒマそうだ。

「なら、K f 2 だ、一旦離脱する！」

「本当にそれでいいのか？」

「な、なんだよ、」

「デュービマス・ムーブ本当にそれでいいのか？だ、」

「くう……わかんねえけど、これでいい」

もう頭の中はグチャグチャだ。

良いか悪いかすら判らねえ…。

「N f 2 # ……チェックメイトだ」

「な……？！」

「だから確認したんだぞ？」

「バッド・ムーブそれなら、素直に悪手と言え、」

「まさか、全然気付かんとはな……」

無茶言っな。

これは脳によくないゲームだ。

つまりどういう状況かというと、目の前に僧正ヒショウや女王クイーンチラつかさ
れて、かなり前の手番で配置されていた騎士ナイトに気付かず、俺はその
射程圏に王をむざむざ動かしてしまったというわけだ。

記憶の中でしか局面が視えない状況ならではの伏兵だったわけだ。

「では、もう一局行くか」

「え〜?!」

二人同時に不満を漏らす。

もう、ご勘弁頂きたい、いやマジで。

俺達を乗せた馬車は突き進む。

朝日はすっかり昇り、秋の晴間を演出し続けていた。

3 - 3 芽生えた疑念

ルフエの森。

フォレスト・ルフエ 妖精の森。

ファルクスに東方に位置する広大な森。

森林信仰する者には、神々が住まう神聖の森
詩を奏でる詩人には、妖精の住まう幻想の森
狩りをする狩人には、獲物が住まう狩猟の森。

一時は戦火に巻き込まれ、多くの木が焼けてしまったが、
時が傷を癒し、力強くまたその姿を顕してくれようとしていた。
戦争の残骸というトゲをその身に宿したまま…。

森の入り口にある、いくつもの小屋。

その前には六台ほどの馬車が停まっている。

「んじゃ、アンタは悪いけどあたしの荷物もよろしくね」

「あいよっ」

ズシリ。

かなり重い、何入れてるんだ？

素直に何往復かしよう…。

「すまん、あいつの荷物は重いだろう？」

「かなり なあ……」

リルドナはズンズンと先に小屋へと姿を消す リウエンを背に

おぶって。

あの後、リウエンは一度も目を覚まさなかった、

リルドナがあれほど大声を出したのにも関わらずだ。

「よく寝てるなあ」

「途中で何度も起きないように、相当深い眠りにしたんだろう」
「リウエンの荷物を運びながら、少しおかしな表現をした。

深い眠りにした、深く眠っているではなく。

聞いてやるうと思っただが、スタスタと先に行っただけだったので、慌てて追いかける。

応える気は無いらしい。

ならば俺は話題を変える。

「なあ、周りの連中は随分と物々しい装備だよなあ」

「うむ、彼らはお前と違って戦闘要員だ、頼もしい限りだろう？」

長大な槍に、刃幅のゴツイ大剣……おいおい、マスケット銃まで持ってきてる奴がいる。

コイツら戦争でもする気なのか？

「おそらく、彼らは冒険者ではなく傭兵だろう」

「戦闘のプロ集団ってわけか」

武器博覧会と貸した停車場を横切り小屋に荷物を次々と押し込む。

俺の武器？

腰の後ろに帯びたショートソード一本、

あとはリュックの中に山羊脚式のクロスボウ一丁だ、これだけあれば充分だろ？

おそらく、荷物を降ろし終えたのであろう魔道師の男 アビス
とばったり会った。

「おや、あのお嬢さんはお疲れなのですか？」

「乗り物に弱いらしいです、かなり調子悪いようでした」

「おやおや……」

不意に鋭い声やりとりに割って入る、

「おいおい、遊びに来てんじゃねーんだぞ？」

声の方に目を向けると、槍を手にした男が居た。

体格はかなり良いほうだ、逆立てた髪に日に焼けた顔、いかにも

傭兵といった風貌だ。

「まだ、森に入ってもねーんだぞ？」

そんなんで明日から大丈夫なのかよ、こっちは命懸けで仕事してるんだ、勘弁してくれよ！」

勢い良くまくし立てる男の前に、さらに別の男が割って入る。

こちらと同じくかなり体格の良い男だ、金髪でどこか人懐っこい顔をしている。

「ゼル、そんな言い方しなくてもいいだろ？」

「だがよお……」

「ボク達と違って戦場走り回ったりしてないんだ、一緒の考えを押し付けるのは良くないぞ」

「ちっ、ロイは甘えなあ……」

舌打ちし悪態を着くのがゼル、金髪の方がロイというらしい。

ロイと呼ばれた男は右手を差し出す。

「ボクはロイだ、よろしく、」

えーっとキミはムノー君……だったよね？」

「……エインです、」

握手しながら、握りつぶしたくなる衝動に待機命令を下し、自己紹介を交換する。

この男はさつきマスケツト銃を手入れしてた奴だな。

片方の男も渋々と口を開く。

「ゼルだ、いいか？足引つ張るんじゃないぞ？」

「やめろって」

気を悪くしないでくれよ、コイツは口が悪いだけだからさ」

尚も罵声を浴びせようとするゼルを、呆れ顔のロイが小屋のほうへと引つ張っていった。

その間も、延々と何かを喚こうとしているように見て取れた。

二人の姿が小屋へと消える。

周囲が静けさを少し取り戻し、俺は思考を張り巡らせる。

ゼルの言う事は間違っていないと思う。

そして、それは他の人間も思っていることだろう。
周囲から向けられる視線は決して好意的なものとは思えなかった。

「 エイン、」

「ん？あ、ああ何だよ？」

急に意識をルーヴィックが引き戻す。

コイツも作業の手が止まっていたようだ。

「悪いが、あと頼んでいいか？」

「いいけど、どうした？」

質問への質問となる問い掛けには応えず、そのままロイ達が向かった小屋へと歩いていく、

その背中には、「ついてくるな」と言わんばかりの無言の圧力が
気取れた。

「まあ、無理に首を突っ込まないさ」

もう一度、周囲を見る。

今回の仕事クエストのメンバーは十四人。

まず俺。

例の兄妹、ルーヴィック、リルドナ、リウエン。

先程の魔道師のアビス。

それと、さっきの傭兵二人組ロイとゼル。

刃広の大剣を手入れしてたゴツイ男 ガディ

その姿は冒険者っぽいが、一曲ひとくせありそうなアーカス。

見るからにガラの悪そうな風貌のゴダール、ボルコフ。

どこか軽薄そうな細身で眼鏡を掛けたスルーフ。

そして、オイゲン の代理という、執事のブルーノ。

あれ？

十三人しか居ない…一人足りない。

昨日、集合した時は居た筈なんだが…。

確認しようとして、もう一度視線と思考を走らせる。

！

アビスと目が合ってしまった。

「おや、誰かお探しですか？」

「あ、いえ…。」

昨日、屋敷で集合した時より、一人減ってる様な気がしたので

「ああ、ザスコ氏のことかな？」

「ご存知で？」

「うむ、なんでも急遽戻らなくいけなくなったらしく、昨晚に契約解除の連絡があったようですな」

急遽戻る？

そいつ傭兵だったか…ダメだ、全然記憶に無い。

とりあえず、アビスに礼を述べ、俺は作業に戻ることにした。

といっても、大した荷物は残ってなかったので、すぐ運び終えることが出来た。

日はまだ傾いていない。

空は晴れている。

何故か俺の心は晴れなかった。

3・4 リウエンのないしょ!!

「ほら、これで全部だ」

「ありがとう」

部屋の隅に荷物を固め、適当に開いている椅子に腰掛け、一息ついた。

小屋　といつても、そこはしっかり改装され、ちょっとした宿舎として機能していた。

部屋もいくつかあるし、最低限の生活設備もある。

これを自由に使って良いというのだから、金持ちというのは実に羽振りがいい。

「まだ寝てるのか？」

「うん、もうぐっすりよ」

部屋に置かれた簡素なベッドでリウエンは寝息を立てている。

その表情は穏やかで、顔色も良くなっていた。

ベッドの傍らの椅子に腰掛け、リルドナは複雑な表情を浮かべている。

「また：無理しちゃったのかなあ、この子」

「こんなんで明日から大丈夫か？」

俺の問いに顔を曇らせた。

聞いちゃ不味かったかもしれない。

「そのために、あたしが居るからね〜大丈夫よ」

「実はな、さつき」

言わなくていいかもしれない事を思わずリルドナに話してしまっ
た。

先程から拭えない不安が判断をおかしくしているようだった。

「あゝ、あのヤンキー顔かあ、
あたしもアイツ嫌いよ、なんていうか、乱暴なもの言いか何様
？って感じ」

それは目の前の女も該当すると思うのは俺の気のせいかな？

「この子、身体は弱いけど、魔法使わせたら天才よ？」

「だろうなあ、イメージピッタリだ」

「あれ、驚かないのね？」

「お陰様で耐性が付いたんだよ……」

消去法で行けば、魔法使いというポジションしか思いつかない、

絶対に戦士・盗賊とか定番職がこなせるとは思えない、というか
思いたくない。

「神聖魔法が得意だから、回復の要になれるわ」

「そりゃ、ありがたい、」

どこぞの凶暴女に殴られた時は是非お願いしよう

「言ってくれるわねえ」

憎まれ口を叩き合いながら、リウエンの寝顔を見守る。

どうやらリルドナを元氣付けることに成功しつつあるようだった。

「それなら、ちゃんと説明してやった方が誤解がなくていいな」

「なんて言つつもり？」

さて、どうしようか？

この子は魔法が使えるから足手まといじゃないです！キリッ
イマイチだ……。

そこにヤツの声が飛来した。

「その必要は無い」

振り返り、何処へ行っていったかと詰めるつもりだった、

しかし、俺の意に反し開いた口からは別の言葉が漏れてしまった。

「お前：その格好どうしたんだ？！」

現れたルーヴィックは、左手で逆手に抜き身の刃を握っていた。

独特な形状のやや長めの短刀だ。

そしてヤツの表情は相変わらず鉄仮面のような無表情だが

まるで手にした刃のように殺気を帯びていた。

「ああ？すまん、抜き身のままだったな」

さらに、一見真つ黒な服装の為気付け無いが、注視すると所々裂けてしまっているのが判る。

勿論 馬車から降りた時には無かったものだ。

視線をリルドナへ移す さすがのコイツも言葉を失い、怪訝な顔を浮かべている。

「少々、手荒な真似だったが…、ご理解頂いて来た」

ガキン…と、

俺の心配を他所に、耳障りな金属音を立てて後腰の鞘に刃を収める。

「何してきたんだよ。」

「なに、ほんの『少しだけ』お手合わせ願って来ただけだ」

誰に？ いや、わかつてるさ。

「さっきのゼルって男か？」

「実にいい腕の持ち主だった」

満足そうにそう語り、また例の棋譜ノートを眺め始めた。

「で、お手合わせの結果はどうした？」

「ステイルメイト いや、引き分けだな」

「へえ〜お兄ちゃんと引き分けだなんて、あのヤンキー顔もやるわね」

リルドナよ、お前はきつと勘違いしている…。

ヤツは今、ステイルメイトと言ってから、引き分けと言い直したんだ。

ステイルメイト

自分の手番だが、駒を動かすと自殺になっちゃうヨ！という状態、もちろん動けない。

打つ手無しの状態の筈だが、面白い事に、これは膠着状態とみなされ引き分けになる。

追い詰められた時の苦肉の策ともいえる。

それを踏まえて考えると、意味は二つ思いつく。

追い詰められて負けそうだったが、なんとか引き分けに持ち込んだ。

追い詰めていたが、敢えて引き分けにしておいたのどちらか。

「お前の性格だとなあ……」

きつと後者に違いない、

前者なら最初から、引き分けドロという筈だ。

「何か言ったか？」

「いや、何も」

改めてルーヴィックの得物を見る。

やや長めだが、ショートソードよりかは短い短刀。

ゼルの得物は確か、槍。

どう考えても、ルーヴィックの方が不利だ。

「お前、ついでにプライドを打ち砕いて来ただろ？」

「さあな、こちらが戦力として通用すると示したただけだ」

トコトン性格悪いなコイツ。

その分、頼もしいヤツということはハッキリした。

「んじゃ、もうケチ付けられることも無いんだな？」

「ああ、問題ない。」

「が、リウエは置いて行く」

「どーしてよ!？」

俺よりも先にリルドナが抗議を飛ばす。

よし、俺も参加しよう。

「そうだ、リウエンを置いて行ったら、誰がこの女の暴力から救うんだ？」

「コラ、調子に乗るな」

ペシッと叩かれる。

なんかいい感じに漫才ができる仲間になってきた、あまり嬉しくも

ないが。

「冗談はさておきで、置いていくとしても、ちゃんと本人と相談してやれよ」

「そうよね、決定はせめて起きてくるまで、待つてあげてよ」
リルドナと共に抗議に参加する。

ヤツは懐から時計を取り出し思案する素振りを見せた。

「なら、あと十二秒待て」

「はぁ・・・？」

十二秒？

俺とリルドナは眠れるお姫様をじっと見つめた。

……………。

……………。

……………。

……………。

パチリ

「あ……」

リルドナが思わず声を漏らす。

…本当にキツカリ十二秒だった。

リウエンは、ぼんやりした表情のまま、

視界にリルドナの姿を認め、顔だけを向ける。

「あ、お姉ちゃん、オハヨー」

「おはよう…あ、あはははは……」

クリクリと目を泳がせながら、指で向こう見てみるジェスチャーをする。

つまり、俺とルーヴィックの居る位置だな。

「なぁに〜？」

違和感が そろそろ、俺の出番だな と呟いた気がした。

おねえちゃん・・・？そんな呼び方だったか？

リウエンがむくり身を起こし、俺と目が合った。

「よ、おはよう、よく眠れたか？」

「……………」
金魚の様に口をパクパクさせ震えている。
何かを言おうとしているが、うまく言えないようだ。

プツン。

何か切れたようだ。

「あああああああああ…！」

ガバッと布団を頭まで被って隠れてしまう。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………」

「おーい……………」

「忘れて下さい、忘れて下さい、忘れて下さい……………」

「えーっと……………」

「お願いします、お願いします、お願いします、忘れて下さい、お願いします、お願いします、お願いします、お願いします、お願いします、お願いします、お願いします……………」

巣穴を塞がれたシマリスのように完全混乱しているようだ、
もう何がなんだか…こっちもパニックだ。

「ちょーっと、二人とも席外してもらっていいかしら？」

「お、おう……………」

二人揃って部屋を追い出され、廊下に立ち尽くす。

まだ中からは「忘れて下さい」が連呼されている。

「ど、どうしたんだ、一体……………」

「うーーむ……………」

ため息を漏らしながら何かを思索している。

何か知っているのか？

「仕方ない……………」

「なんだ？……………」

「一局指すぞ……………」

「また、それかよ……………」

元々、違和感があったんだ。

ルーヴィックを『お兄様』と呼び、
リルドナを『姉さん』と呼んでいた、不自然だったんだ。
家庭の事情だろうし、聞いてはいけないことと思ってた。

不安がまた俺に堆積していく気配がした。
さつきからおかしい…。

3 - 5 彼女は一六歳？

西側に面した部屋に移動する。

リルドナが居た部屋と反対側の部屋だ。

日は傾き西日が差し込んでいる。

カーテンなんて気の利いた物は無いので、やけに眩しい。射光と横向きにヤツは腰掛けていた。

「一体何だったんだ？」

「あれが素のリウエさ」

「あの子供っぽい喋り方が本来のリウエンってことか？」

「もう、俺の前でも見せなくなっていたが」

応えながらも、手早くテーブルにチェス盤を広げていく。

俺も向かい座り、準備に取り掛かる。

結局のところ俺もチェスが好きなようだ。

「お前、リウエいくつに見える？」

「何？」

唐突な質問に駒を並べる手が止まる。

ヤツの表情は読み取れない。

「十五、六歳くらいかな、十代半ばって感じだった、」

「うむ、肉体年齢はそんなところだ」

「ついでに言うと、お前は二十代半ばだ」

「そっちはどうでもいいさ」

おかしな受け答えだった。

いくつだ？

肉体年齢だ？

おかしくないか？

「頭の中は十…いや十二歳くらいか」

「十歳ってことはないだろう?」

リウエンを思い浮かべる。

丁寧な言葉遣い、

優雅な立ち振る舞い、

上品な仕種。

とてもじゃないが、子供に出来るようなものじゃない。

十六歳と見積もってもやはりお釣りが来る。

「あいつは頭がいいからな、

そう見える様に色々学んだし、そう演じるように努力したんだ」

「勉強や努力で出来るもんなのか?」

西日を浴びる顔に苦笑いを浮かべながら応えてきた。

「お前にそう見えたんなら、見事成功しているということだろう?」

「うーん、そうだな」

「つまりそう言う事だ、

本人の希望だ、そこは触れないでやってくれるか」

「俺はどうしたらいいんだ?」

「先程のは見なかった事してやってくれ」

「構わないさ、そもそもなんでそんなコトする必要あるかは気にな

るけどな」

「仮にあいつが、五百と十六歳だったとしたらどうする?」

「はあ?」

「冗談だ、これ以上の追求を止めてくれると嬉しい限りだ」

絶対、まだ何か隠してるな。

「ちなみにだ。」

ヤツの陣地には黒の駒、

俺の陣地には白の駒が並び終える。

「俺も、素のリウエを見るのは久しぶりだ」

そういうヤツの顔はどこか嬉しそうだった。

「とりあえず、始めるぞ。」

まずは昼間の目隠し対局のおさらいだ
フラインド・チェス

なんだ結局やるのかよ。

お陰で不安を塗り潰せそうだった。

3 - 6 妖精の森の休日

夕日に染まる森。

俺は日没との競争を演じながら、森徘徊していた。程なくして、目当ての『ソイツ』を見つける。

見つけた…どうか動かないでくれよ…。

弦を軋ませながら、ガゴンと山羊脚レバーゴイツフットを倒しクロスボウを構える。

深呼吸をし、一拍置いてからレバーに添える手に力を込める。

「！」

放たれたボルトは突き出した木の根に刺さり、その運動を終えた。

しまった、外した！

「クソツ…」

当然の事だが、襲撃に気付き『ソイツ』は逃走を試みる。

逃がすか！

俺は次弾の発射体制をとりつつ、追跡を開始する。

見失いそうになりながらも、地を駆ける。

当たってくれ！

もう一発だ！

次々と射撃する！

「！」

ダメだ、追跡しながらの　こんな遮蔽物が多い場所ではそうそ
う当たらない。

ボルトの残数を見る、六発。

二十発あったボルトはみるみる減っていく。

甘かった、やはり初弾を外したのは痛かった…。

どうする？

腰にはショートソードがある。

接近さえ出来れば充分に仕留める事も可能だ。

一応、剣に関しては初段の資格を持っている　冒険者ギルドに登録するときには最低限必要だからな。

物騒な話だが、民家に押し入って皆殺しというマネも素人相手なら出来る　勿論やらないが。

だが、そもそも剣は対人武器だ。

人為らざる者である『ソイツ』を捉えられるのか？

無理に決まってる。

俺ごときの身のこなしでは、接近を許してくれるほど甘い相手じゃない。

落ち着け。

焦る気持ちを抑え、必死に機会を伺う。

確かに『ソイツ』の身体能力は人間より上かもしれない。

その分、こちらには知恵がある。

考えるんだ。

どうすればいい？

「…！」

使えるかもしれない。

俺は足元の小枝を拾い、『ソイツ』の前方に投擲する。

！

急な前方からの異変に『ソイツ』はビクッと動きを一瞬止める。

「捉えた…！」

俺はレバーを握り込んだ。

ボルトが発射される…！

「ッ！」

小さな呻き声と共に、『ソイツ』は絶命した。

「やった！」

既に光を失ったその眼に謝罪を込める。

どうか恨まないでくれよ…これも生きていく為だ。

…。

…。
…。
「アンタ、何一人で盛り上がってるの？」

…。
…。
後方から刺さる声で、俺の幻想はブチ壊された。

まあ、そろそろ現実に戻らないとな。

俺の脳内の壮大なストーリーは誰にも気付かれない。
声には出してないし、大丈夫だ。

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

「…」
「コ、コイツ、なんでそんなにニヤニヤと俺を見るんだ。
そして何故、俺の肩をポンポンと叩く。」

「そうだな、生きて行く為には仕方ないよな？」

「うがああああああ」

「はあ？何やってんのよ」

呆れ顔のリルドナがつかつかと来る。

「なんだよ、ちゃんと仕留めたぞ？」

必死に平静を装う。

ヤバイ、姉妹の方には知られたくない。

「随分と手間取ったわねえ。」

つかつかと『ソイツ』を拾い上げボルトを抜き去り、リルドナに
示す。

本日の俺の一番の獲物だ。

「とりあえず一羽だ、」

「はいはい、お疲れ様」

「何が獲れました？」

ヒョッコリとリウエンも顔出す。

まあ、『ソイツ』とは野兎だ。

今晚の夕食になる予定。

どうだ、俺だって狩りくらいできるんだ。

「…可哀相に……」

「……はい？」

絶命した野兎を見るリウエンの顔は非難の色を含んでいた。

え？俺が悪いのか？？

「貸してください」

「おい、ちよつと」

野兎を俺の手から奪い取る。

リウエンの手が野兎にかざされたかと思うと。

ポウ…と光が燈る。

「な、なんだ？」

「もう大丈夫ですよ」

満面の笑みで野兎を抱くりウエン。

そして、その野兎は元気にリウエンの腕の中でもがいている。

ちよつと待て、それは今日の夕食だぞ。

「あ」

「あああ…！」

リウエンの腕を振り解き、野兎が文字通り脱兎の如く逃げ出した。

俺の苦勞は…。

お手上げジエスチャーのリルドナが嬉々として言う。

「あちゃー、やっっちゃったわねえ」

「なんで、お前はそんなに嬉しそうなんだ…」

何で狩りをしているかって？

コトの始まりは、少し前に遡る。

ヤツと結局チェスを開始し、少し経ったくらい。

コンコン。

ガチャ。

「お兄ちゃん、無能、入るわよお」

だから、もう入ってるだろ。

なんの用だ。

「ねえ、アンタって豆好き？」

「はあ？」

この女の質問はいつも唐突だ。

「だから、好き？嫌い？」

「好きって程じゃないけど、嫌いじゃないな、一応食べる」

「んじゃ、豆はOKと、」

何やらメモを取っている。

どうするつもりだ？

「あの、エインさんはお肉とか、食事の方で何か戒律ありませんか？」

今度はリウエンからの砲撃。

良かった、無事にリルドナはリウエンの修理に成功したらしい。

「いや、俺は無宗教だけど？」

「そうなんですか？」

姉から回復魔法を使っていたと伺っておりましたので、てっきり

「あれは、魔法屋でサクリ覚えられる信仰心とか無縁やつだよ」

その分、効果は格段に低いんだけどな。

ちなみに、この前食べた『羊飼いのオススメ定食』には肉は入っていないかった。

「では、お肉を召し上がっても大丈夫なんですね」

「大丈夫、なんでもいけるよ」

「んじゃ、牛でも豚でも猫でもいいのね、」

「猫は食わんと思うぞ……」

おい、猫もOKとかメモに書くなよ。

なんでこんなこと聞くんדרろう？

「アンタ、夕食はどうするつもりなの？」

「あゝ、適当に携帯食料あるから、それでいいよ」

「ふむ、俺はチエスが指せればそれでいい、」

上が俺、下がヤツ。

「そんなのばかりじゃ、二人とも大きくなれないわよ？」

俺の身長は一七五センチ、ルーヴィックの推定身長は一八五センチ。

もう間に合ってると思う。

「作ってあげるから、」

「そりゃ、ありがたい」

「獲ってきなさい」

ピシッと俺を指差す。

俺が、か？

視線をルーヴィックに移す。

「 気にするな、行って来い、ゲームは中断でいい」

「 いや、お前も来い」

嚴重に施錠された金庫のように深く座したヤツを立たせる、
一人だけサボらせたりはしないぞ。

「なあ、別に肉無しでもいいんだぞ？」

「何弱気なコト言ってるのよ」

俺、クロスボウ：残ポルト五発

ルーヴィック、投げナイフ：残数不明

リルドナ、長弓：残矢五十四本。

リウエン、素手：三葉採りの籠

獲物：無し。

といった感じ。

「あんまり遅くなると、調理する時間無くなるぞ?」

「だから、頑張りなさい」

「なんで、そんなに執着するんだよ」

「あたしが食べたいからに決まってるでしょ」

サラリと言つてのけるリルドナを見る。

いつもと同じ黒服だが、今はその上から革製の胸当てと手甲をしている。

そして長い弓、『大きい』ではなく、『長い』。

独特の形の弓だ、細くしなやかで、優雅な貴婦人を彷彿させる。

リルドナの推定身長、一五五センチ。

その身の丈よりも遥かに長い弓、推定二百二十センチ。

どうみても扱えそうに無い様に見える。

「随分と長い弓だな」

「極東の島国のモノだからね」

「ていうか、お前なら素手で熊を仕留めそうだぞ」

「あらあ?こんなところに哀れな無能こもつじがあ?」

ピタリと、俺に照準を合わせる。

「ええい、やめんか!」

言い合いしても仕方ないので、再び獲物を求めて搜索開始だ。

あと五発しかないけどな。

俺とリルドナは森の奥へと突き進んだ。

「…ストップ、」

「いたのか?」

「うん」

「ウサギか?」

「ううん、猪よ」

俺からは視えない。

リルドナは目を細めて、遙か先の茂みを凝視している。

右手で弓を持ち、左手で矢を番える。

皆、もう気付いていると思うが、コイツは左利きだ。

相当、長い弓なので、小柄な身体を大きく開いて弦を引き絞る。

「凄い引き絞るんだな」

「この大陸での一般の弓とはちょっと違うわよね」

「そうだよなあ、俺の記憶だと引き絞った弦は顔の前にあっつたしな」

「うん、この弓だと頭よりずっと後ろにくるからね」

「弦が耳とか腕に当たりそうだな」

「当たったら死ぬほど痛いわよお？」

なんでそんなに嬉しそうに応えるんだ…。

よく見ると、弓を掴んでいる位置が、微妙にズレている。

弓の上下真ん中ではなく、下方より三分の一。

「なんで、そんなとこ持つんだ？」

「引いて見たら判るわ。」

「ここが一番反動が少ないのよ…ちよくと黙っててねえ」

遙か前方の茂みを睨む赤い瞳。

しばしの静寂。

赤い瞳がカツと見開かれる。

「！」

風を切る音と共に、放たれた矢が放物線を描いて飛んでいく…！

一拍置いて、遠方より獣の断末魔。

「すげえ…なんて飛距離だ」

「アンタのクロスボウじゃ、ちよつと無理よねえ」

？

弓を構えたまま動かない。

彼女の真っ黒なケープとスカートの裾が風に揺られる。

ふうー、と息を吐く音が聞こえた気がした。

「ねえ、アンタ、」

「どうしたんだ？」

重い口を開く、視線は茂みを向いたままだ。

「さっきのリウエンの口だけど…お願いだから忘れてあげてね？」
「そのことか…判ってるよ、お前の兄貴にも言われてる」
構えを解き、俺に向き直る。

「ホント頼むわよ、あの子にとっては裸見られるより恥ずかしいことみたいだから」

「そ、そんなにか…こりゃ迂闊に話題が向かないようにしないとな」
「そうよ、もしへたなこと喋ったら…許さないわよ？」

「おっかねえ親衛隊長さんだな」
おどけて見せるが、まだ表情は硬い。

これは話題を変えるべきだろう。

「とりあえず、その隊長さんの戦果を拝みに行かないか？」

「調子いいわね、」

二人揃って仕留めた獲物に駆け寄る。

かなりの距離だ、コイツよく見えるな…。

獅子の王国のロングボウ部隊も真っ青だ。

「うっわ…即死だな、これ」

「まあ、達人になると兜ごと頭を射抜くそうだし、相当な威力のはずよ」

「多分、お前ならソレもやってのけそうな気がするよ」

頼むから俺を撃たないでくれよ。

しかし、デカイ猪だ。

猪の肉って独特な臭みがあった気がするけど大丈夫か？

「ねえ、アンタ」

「なんだよ、」

「何、ボサっとしてんの？」

「は？」

おなじみのジト目。

そんな目で俺を見るな…。

「アンタが運ぶのよ」

「俺が？」

「うん、」

「これを…?」

「うん、」

「一人で…?!」

「勿論よ」

「これだけデカイと何キロあるんだろう…。」

「お前は どうするんだよ」

「やーよ、ノミとか一杯付いてそうじゃない?」

「聞いただけで身体が痒くなってきた。」

「野生動物だし仕方ないだろうけど。」

「それを聞いて余計に持ちたく無くなったぞ!」

「か弱い女の子に運ばせる気なの? ほれほれ」

「また弓をこちらに向け、照準を俺に合わせる。」

「か弱い女の子はそんなコトしないし、そんな長い弓使わないと思
うぞ…。」

「俺はまた夕日に八つ当たりをしながら、猪を引き摺った。」

「まあ、本気でリルドナに運ばせる気は無かったんだ。」

「獲物は結局、猪一頭だけ。」

「ルーヴィックも野兎を何羽か仕留めたが、全部リウエンに治され
てしまった。」

「冷静に考えるとやってる事はかなり凄い筈なんだけどなあ。」

「出発は明日、こんなノンビリとしたスケジュールで大丈夫なのか
と不安になった。」

「夕日は一日の勤めを終えて眠りに就こうとしていた。」

4 - 1 補助輪な姉に感謝です

赤き少年と呪われた騎士

むかしむかし。

この街には代々続く領主の家がありました。

しかし、真つ先にその家は黒き魔王の餌食となりました。

生き残った少年は、呪われた自分の人生を嘆きました。

青の魔道師は、不憫に思い、彼を自らの屋敷に招き入れました。

少年は青の魔道師より知恵を受けました。

少年は白銀の姫より剣を授かりました。

少年は戦場を駆け、

横切る敵兵を倒し、

迫り来る戦車を避け、

敵陣に深く切り込み、

ついには呪われた騎士を打ち破りました。

その功績から栄誉得ました。

後に少年は赤の騎士とも赤の勇者とも呼ばれるようになりました。

勇者は魔王の手下を次々と討ち取りました。

あまりにも多くの敵を討ち取った為、

いつしか呪いにその身を侵されました。

呪われてしまった勇者は、

赤き魔王の前に倒れ、

親友を失い。

授かった剣を失い。

そして白銀の姫とも引き裂かれてしまいました。

おいたわしやおいたわしや。

* * * * *

夕焼けに染まる森。

その中を歩く四つの長い影。

その内のひとつはとても歩みが重かった。

「ず、随分と転落人生なんだ…な」

「はい…悲しいお話です」

律儀に感想を述べながら、背中に掛かる荷重に息を切らせる。

涼しげな秋の夕焼けの中にも関わらず、すっかり汗だくだ。

俺が背負っているのは、先程の獲物である大猪だ。

「ほら、危ないからもう本閉じて、ちゃんと前見なさいよ？」

「もうっ姉さん、わたしはそんなにドジじゃありませんにゅ?!」

ガシッと咄嗟にリルドナが手で止める。

さすがはミス・ハイスペックだ。

リウエンがバランスを崩した、その瞬間には手が出ている。

そして、もう片方の手には折りたたまれた布の塊。

俺のコートだ、さすがに上だけは脱いだ。

ちなみに、お話を読み聞かせる最中に何度も転びそうだったの

は言っまでも無いよな？

「アンタが話題振るからいけないのよ？」

「この期に及んで…俺のせいだよ……」

背中に押し掛かる重量のせいで、うまく毒を吐き返せない。

事の始まりは、俺がお伽話の質問をしたからだっただ。

実は話題はなんでも良かった、リルドナが「ノミノミ」「痒イ

痒イ^{カユ}」と連呼するから、とにかく話題を変えたかった。

ルーヴィックが「剣の不在は教えん」と言ったのも、少し気にな

つてたこともある。

「お前が運んでくれてもいいんだぞ。」

「やーよ、アンタ何も獲ってないんだから、それくらいしなさい」
獲ったけど、リウエンが逃がしたんだ！と言いそうになるが、踏
みとどまる。

言えば、彼女を責めることになるしな、同様にルーヴィックも獲
物ゼロのはそういう理由。

ヤツは籠を手を森に自生していた山菜を運んでいる、意外にもリ
ウエンが採ったモノだ。

もう片方の手で、先程のリルドナの長い弓を持っている。

「リウエンも頑張ったんだな」

「はい、こういうの見つけるの得意なんですよ」
向けられた賞賛に顔に笑みを浮かべる。

日頃の失態を希薄させる、プラス評価だった。

「それはそれで、大したモンだな」

「そりゃそうよ、この子には『サボリなし』と『高速採取』付いて
るからね」

「姉さん、わたしはネコじゃありません」

代わって貰える気配はまるで感じられず、諦めて脚にもう一度力
を込め直す。

早く戻って汗を拭かないと風邪を引きそうだ。

真っ赤に染まる森に一陣の風が吹きぬける。

日はもうその役目を終えようとしていた。

4 - 2 死を運ぶ刃

「そら、昇格・女王だ」
フロモ・シヨザイン

「く…やつぱりか」

「まずは一個だぞ？」

「ヤツの歩兵が俺の本陣に深く切り込み、栄誉を授かった。だが、すぐに殉職をしてもらうことにする。」

「ちっ…暴れる前に刈り取るぜ」

「ただちに城兵で侵入者を排除する。」
ルーク

「本当にそれでいいのか？」

「うるせえな」

「相変わらずの対局の時間。」

「ヒマさえあればチェスしている気がする。」

「しかし、今回は少し勝手が違う。」

「ヤツは騎士を切り込ませてきた。」
ナイト

「ハンデはくれてやったんだ、頑張れよ？」

「全然、ハンデと思ってないだろ…お前」

「ハンデと称して、ヤツが自らに課したのは、歩兵の昇格。」
ポーン フロモ・シヨン

「それも、両端の歩兵、城兵側の歩兵だな。」
ポーン ルーク・ポーン

「これらは、『呪われた歩兵』と言われ、昇格が困難とされる。」
ポーン フロモ・シヨン

「盤面をじっくり見てくれたら、なんとなく判ると思う。」

「ヤツはそれらを二つとも昇格させた上で勝利するという。」
フロモ・シヨン

「結局、お前に絡め取られてる気がして仕方ない！」

「人聞きの悪いこと言うな。そら、お前の手番だ受け手を聞こう」

「ヤツはハンデそのものを囿にし、次々と陽動を仕掛ける。」
フロモ・シヨン

「実際問題、何手までに昇格しろいう制限がないので、非常に厄介」

だ。

「なら、その歩兵^{ポーン}を刈り取るまでだ」

「良い心意気だ、だが手損^{ロス・オブ・テンポ}にならんようにな？」

ヤツの挑発を無視し、もう一度盤面を見据える。

さっきの騎士^{ナイト}はどういう意味がある？

…。

ガチャ。

「ちょっと！お兄ちゃん、ごめーん あ、」

コンコン。

いや、遅いぞ、入ってからノックするな。

この女、とうとうパターンを変えてきやがったな。

「どうした？」

「ちよつと猪解体^{バラ}してほしいのよ」

「なんだ、まだ切つて無かったのか？」

先程、仕留めた猪をまだ捌いて無かったようだ。

というか、どういう料理になるんだらうか…。

猪って豚みたいいな肉なんだらうか？

「十六分割くらいでいいか？」

「先に毛皮剥いでよ」

「ふむ、とりあえずそちらに行く」

ガタンと席を立ちつつ、左手を腰に回す。

やっぱり、あの短刀でやるつもりか？

「すまんが、ゲームを中断する」

「ああ、長考させてもらうな」

さて、このf4の騎士^{ナイト}、それとh4の城兵^{ルーク}、並んで何を狙っている？

うーん…。

むう…。

…。

部屋を出て、小屋からかも出る。

炊事場は勿論外にあるからだ。

「あれ、アンタもきたの？」

「悪いが、気になって仕方無いだよ」

俺の顔を見て、にやあくど笑う。

本当に、表情豊かな女だ。

「ここの野次馬あ、やらしいわねえ」

「なんでそうなるんだよ……」

「まあ、アンタだけじゃないけどねえ」

リルドナの視線の先に視界をスライドする。

固唾を飲んで見つめる金髪の男と、

その横に槍を手に何かしている途中の男。

槍の穂先を交換しているように見える。

先程の傭兵二人組、ゼルとロイだった。

その表情は険しい。

「どうしたんですか？」

適切な言葉など見つかる筈もなく、俺は間の抜けた質問をする。

先に反応示してくれたのは、やはりロイの方だった。

「ボク達はちよつと通り掛かっただけなんだけど　なあ、ゼル？」

「チツ…なんなんだよ、ありゃあ」

苦しげにその重い口を動かしている。

ルーヴィックに視線を移す。

何やら猪『だった』物を前に吟味している様だ。

もう毛皮の無い肉の塊だ。

「猪の肉としか言えません」

「んなコトはあ判つてる……」

会話が噛み合わない俺達。

それもそうだ、俺は途中から顔を出した。

戦況の膠着を打破すべく、リルドナがヒョッコリ間に割って入る。

「ヤンキー顔も金髪も、お兄ちゃんの刃捌きに絶句してるだけよ」

「誰がヤンキーだ、コラ！」

「金髪…は勿論ボクのコトなんだろうね」

「明らかな反感を示すゼルと、苦笑いだけで済ませ大人の対応を見せるロイ。」

つくづく、この女の命名センスは容赦が無い。

まあ、金髪つてのはそのまんま過ぎる気がするが。

「不思議だな、金髪つて言い方がお前にしては上出来に思える……」

「なによ、アンタもこういうのがいいの？」

「無能よりはマシのはずだ！」

「んじゃ、栗毛」

「俺は馬かよっ！」

ちなみに俺の髪は茶、他人が言うには少し赤みが掛かってるらしい。

「じゃあ、チャバネ？」

「もう哺乳類ですらないぞ……」

「火薬の少なすぎた銃声みたいに可愛らしく「チャバネ？」と言ったが却下だ。」

「キ、キミたち仲いいねあ……」

乾いた笑い声でロイが感想を告げる。

「不毛な言い合いは、ルーヴィックの投石のような一声で打ち切られる。」

「骨はどうする？」

「あ、ブツ切りでいいわ、骨ごと行った方が味がでるしねえ〜」

「ふむ、心得た」

キン…。

と短く金属音が鳴ったかと思うと、凄まじい速さで刃を振るつ。

次々と切り裂かれる肉塊、目の錯覚か刃が宙を舞い切り裂いていく様に見える。

それは、斬撃の弾幕、近づく者の命を容赦なく奪い去る死神の様

だった。

「すげえ…」

「でしょ？」

腕を組み得意げにするリルドナ。

別にお前を賞賛している訳じゃないだぞ。

その横に視線を移す。

戦闘のプロである傭兵の彼らも言葉を失っている。

あれが人間相手でなくて良かったと正直思った、

あんな光景が繰り広げられたら…しばらく肉なんて食べなくなるはずだ…。

「こんなものでいいか？」

「うん、バッチリ！ありがと、お兄ちゃん」

笑顔で礼を述べる妹、事も無げに応える兄。

こいつら一体何なんだ？

余りにも飛び抜けた性能。

実力に不釣り合い外見。

「しっかし、マジでデカイ猪だな」

「こんなのよく仕留めたね」

見れば見るほど大きな肉塊。

ちよつと夕食にするには多すぎる食材に思えてきた。

その思考を汲み取ったのか、エサに群がるノラネコのようにリルドナが動いた。

「ねえ、アンタ達って豆好き？」

「はあ？」

「はあ？」

何処かで聞いたことのあるフレーズだった。

4 - 3 口直しは将棋のようです

「チェックメイト」

「あ」

「どうした？再開してから指し手がおかしいぞ？」

「ああ……」

先程のルーヴィックの斬撃が頭から離れない。

全く集中出来ないんだ。

「アンタさつきから元気ないわよ？」

紅茶を注ぎながらリルドナが囁る。

コイツにも、そう見えているようだ。

意識しているつもりは無いが、端々の行動に出ってしまったようだ。

視界の傍には、ゼルとロイ。

物珍しそうに対局を観察している。

結局、あのままリルドナのペースで「そんなのばかりじゃ、二人とも大きくなれないわよ？」という聞き覚えのあるフレーズで纏められてしまった。

既視感デジャヴというヤツなのか、いや違う。

この女の狼藉を忘れるわけも無いので違う、

二人を哀れみながらも流れ行く運命をスルーした。

どうせコイツには逆らえない、こんな想いは既視感カプセルに詰めて読者プレゼント行きだ。

「ふむ……」

何やら思索している。

一拍ほど空けてから、口が開いた。

「少し口直しと行こう」

「口直し？」

全員の頭に『？』が浮かぶ。

「リル、悪いが淹れ直してくれ」

「えー、まだ料理の途中なんだから、あとにしてよ」

料理の途中ということもあり、サービスは最初一杯だけ。

あとは自分で……セルフサービスになる。

彼女達に調理を任せ切り、拳句にチェスに耽る俺達だ。

あまり驚沢なことも言えない。

「茶もゲームも口直しと思っただが、ゲームの方だけで我慢する
としよう」

少し待っていると俺に告げ、何やら荷物を漁り出した。

一体何を持ってくるんだ？

「待たせたな」

「なんだ、それ？」

チェス盤とはまた違ったマス目のゲーム盤と四角い箱。

それはゼルとロイも未知の物であるらしく、顔を覗かせてくる。

そのまま、箱の中身を取り出し俺に示す。

「木片？印章か？」

それは、五角形にカットされた木の小片。

面には見たこともない象形文字が刻まれている。

「駒だな、極東の島国のゲームで『将棋』と言っらしい」

「あゝ、倭の国行つた時の？結局買ったんだ」

すかさず、嬉々とした顔でリルドナが口を挟む。

料理の途中じゃなかったのか？と言いつうになるのは抑えた。

「うむ、少し興味があつたんでな」

「また、行きたいわね」

「お前は茶葉が欲しいだけだろう？」

「失礼ね、信州味噌も日田醤油も、あと九条ネギも欲しいわ」

聞きなれない単語が並ぶが、ある確信があつた。

それは必殺の一手になるに違いない。

「よくわからんが、断言するぞ？」

「なによ？」

「ソレ全部…食材だろう？」

うっ、と言葉を詰まらせ、リルドナは退室していった。

やっぱりそうなんだな…。

「どうだ、やってみないか？」

「全くわからないぞ…」

「俺も大して知らん、とりあえず並べてから説明してやる」

大して知らんという割りに、手馴れた手つきで並べていく。

お前の言葉はどこまで信用していいかわからないぞ。

盤面を見る、マス目は9×9の81マス、布陣は手前より3マス。

最前線に立たされる小さな駒が九つ。

「もしかして、これが歩兵か？」

「うむ、ほぼ同等な役割だ、ただし最初の移動でも一歩だけだ、当

然アンパツサンは無い」

「なんか劣化品みたいだな、で、最深奥まで突き進めば昇格出来る

のか？」

「いや、敵陣に入れば　ということらしいので、奥より三マスで

いい」

「近くていいな、女王クイーンだらけになりそうだ」

「このゲームに女王クイーンは存在しない」

「オイオイ、そりやまた寂しい王様だな、独身かよ」

「ゼル、女王を戦場に連れて行くのもおかしな話だと思っよ」

盤面を見る、本陣の一番奥のと真ん中の一際大きな駒、おそらく

これが王キングだろう。

二列目のスカスカの陣、そこにポツンと並ぶ二つの駒、これは何

らかのメジャーピースか？

湧き上がった仮説を投げかける。

「この二列目の大きな駒は、城兵ルークあたりか？」

「うむ、右が城兵ルークで、左が僧正ビショップだ」

左の『角』と彫られた駒を見つめる。

随分と僧正ベシヨツブも出世したもんだ。

ちなみに城兵ルークにはキャスリングが無いらしい、つくづく劣化版だ。

「じゃあ、王キングの両側にいる護衛はなんだ？」

「名前はゴールドという意味らしい、斜め後ろに移動できない王キングと思えばいい」

「随分としょぼい護衛だな……」

「じゃあ、隣にいるやつもあまり期待できそうにないな……」

「そいつはシルバーらしい、後ろと左右に動けない王キングだ」

変なところで対になってるな…なんだかとても扱いが難しそうだ。

ここまで来ると、ある程度予想はついてくる。

「そうなってくると、その外が劣化騎士ナイトで、両端が劣化城兵ルークか？」

「正解だ、前方二方向しか飛べない騎士ナイトと前方にしか走れない城兵ルークだ」

思わずため息が出る。

なんだよこれ、マイナーピースだらけじゃないか。

頭の中で様々な局面を想定するが、どれも浮かんでは破綻していき。

「こんなんで攻めれるのかよ」

「厳しいな、布陣が三列になってるせいで、騎士ナイトも僧正ベシヨツブ最初から動けないな。」

なるほど…何かなんでも歩兵ポーンを動かせということか。

まあ、一手我慢で僧正ベシヨツブは大きく進軍 あれ？

「おい、これ僧正ベシヨツブ同士ぶつからないか？」

「そうだな、見事に同じ斜線ダイアゴナルに配置されている」

ため息しか出ない、キツイぞこれ…。

ふと駒を手取る、裏面にも何か彫られている。

「なんだこれ？」

「ああ、王キングと劣化王キング以外は全て昇格可能らしい」

「またややこしいな」

キング
王と劣化王の裏面は白紙、なるほどね。

ルック
「城兵は斜めに、僧正は上下左右にそれぞれ一歩だけ動けるようになる」

「…。」

キング
「他のマイナーピースは、全て劣化王…ゴールドになるようだな」

「しよぼすぎだろ……」

聞けば聞くほどため息が出る。

似たような物と思ってやったら痛い目みるな。

「まあ、このゲーム最大のウリだが」

「まだ何かあるのか？」

「取った駒を、手駒として好きなところに置けるらしい」

その言葉に、黙して説明を聞いていたロイが口を開く。

「敵兵を討ち取るのではなく、捕虜にしたという認識なのかな？」

「捕虜がすぐに言うこと聞くかあ？」

「ふむ…俺は軍人では無いので、その辺りの心理はわからん」

「無理従わせようとしたら、死んじまうぜ？」

「うーん、そうなる…死者が好き勝手に起き上がってくるみたい

だね」

ゼルの意見に、ロイのオカルト的感想。

見方を変えれば、『死者が蘇る』か…とんでもないルールだ。

好きなところに置けるとか、奇襲し放題じゃないか。

「これ、とてもじゃないが出来る気がしないぞ……」

「やってみなけりゃわからんさ」

「またそれかよ…。どうせ『はい』か『イエス』しか選択肢は無いんだろっ？」

俺の言葉に、満足そうに笑い、

「とりあえず、まだ駒の種別も覚えられんだろっから」

手早く、何かを書き始める。

左手が紙面に襲い掛かり、次々と文字という傷を刻む。

それを覗き込む俺達三人。

纏まりがあるが、まるでタイプライターで印字された様の無機質な文字。

「これを見ながら指すといい、無論聞いてくれても構わないぞ」

「じゃあ、いつもので行くぞ」

俺の言葉に鼻で笑い、こう答える。

「先手はくれてやる」

「そりやどうも」

歩兵を進め、騎士ナイト（もどき）の進路を確保する。

同様にヤツの歩兵歩兵も動き出した。

パチンツと小気味のいい音が響く。

このゲームにもチェスの様に序盤のお決まりの指し手があるのだろっが、

なにせ勝手が判らない、俺は探るように進軍を開始する。

「心配しなくても、俺も勝手がわからん」

「どうせ、セオリーも何も判らないんだ、サクサクいくぞ！」

「良い心意気だ」

「けっ、すぐに前線がぶち当たって泥仕合になるけどな」

パチン、

パチン、

駒を指す音が心地よく響く。

澁みなく繰り返される音が不意に途切れる。

見れば、ルーヴィックは王キングに手を掛け、油の切れた滑車のように

硬直している。

その顔には影が差しており、弁解を搜しているようであった。

「お前、今キャスリングしようとしただろ？」

「ク……悔しいが、肯定だ」

「触つたら動かさせなんて言わないから、別の手を指せよ」

「本当にそれでいいのか？」

お互い減らず口の絶えない攻防が続く。

ゼルもロイをそれを呆れ顔で見守っているようだった。

窓から差し込んでいた西日はすっかり消え去り、
辺りに闇を染み込ませていた。

4 - 4 その知識は間違ってますっ！

「ほーい、おまたせっ！」

「お、待ちかねたぞ」

「ボ、ボク達も一緒によかったのかな…」

「問題無い、」

相変わらずトレーを使わず素手で料理を運ぶリルドナ。

さすがに人数が多いので、持ちきれない分はリウエンが台車に載せて運んでいる。

本人が転んでも、台車は倒れないので安心だ。

無駄の無い優雅な動きで、次々と料理が配膳されていく。

「ほお、こりゃたいしたもんだ」

称えられる賞賛は、配膳された料理にか、配膳する仕草へか、ゼルは率直な意見を述べる。

「猪の肉は少し臭みが強いので、少し香辛料が多めに配分してます。それと

冷めない内にお召し上がる事をお勧めします。今なら臭みもほぼ気にならない筈ですよ」

次々と配膳される料理について、リウエンが説明を加える。

居並ぶ料理は、まさに猪尽くしという感じだ。

小柄な料理長と横柄な副料理長の仕事は踊る。

「リル、」

「え？お兄ちゃん何？」

「弦が付いたままだ」

リルドナの目が部屋の入り口へ流れる。

俺たちも釣られて、視線を移す。

そこには壁に立てかけられた、長い弓。

リウエンの歩行サポート（？）のために両手を空けたかった
リルドナが、

自分の兄に持たせた物だった、あえてルーヴィックは片付けなかつたのだろうか。

「あーいつけな〜い」

「特注で作って頂いた職人に対し、失礼に値する」

リルドナは弓に歩み寄り、弓の上部に手を掛け、その逆を壁に立て掛ける。

「よっ…と、」

弓に体重を掛け、ゆっくりと弓の湾曲を大きくしていく。

実にしなやかに曲がる弓だ。

「あれは特注品なのか？」

「わざわざ弦の張りをレフティモデルにしてある」

「そっぴや、左利きだったな。」

ゼルもロイもその珍しい形状に目を見張る。

特にロイの見る目は強い好奇心の色があった。

砲術士としての知識欲だろうか。

大きく湾曲した弓から弦が外される。

今度は、掛けていた加重を少しづつ緩めていく、弓は少しづつその姿を元に戻し

「あれ？」

「へ〜そんなになんだ」

戻る弓はそのまま逆方向に反り返ってしまった。

元はこういう形状だったんだな。

「これ、倭国の物じゃないの？」

「そっぴや〜金髪もよく知ってるわね」

応えながらも弓を細長い布の袋に収納していく。

相変わらずテキパキとした、器用な手つき。

「んじゃ、コレ片付けて、手を洗い直してくるわ〜」

アンタ達、先食べていいわよ、ま、臭みが好きならゆっくり

でもいいわよお？」

だから、どうしてそんなに嬉しそうに言うんだ…。
投げ掛ける相手はすでに扉の向こうだった。

しかし、

なんでこのタイミングで言うのだろう。

「なあ、別に食事済んでからでも良くなかったか？」

「いや、今でいい、あの手は冷やしたほうがいいしな」

「ん、冷やす？」

「どういうこと？」

ゼルとロイも意味がわからず問い返す。

俺にはなんとなく、わかった。

リルドナは素手で料理を運ぶ、それも冷めないように食器を熱して、だ。

平然と持っている様に見えるが『熱いのが平気』ではなく『熱いけど我慢できる』なのだ。

あいつの性格だ、へ々に指摘すると余計意地になるに違いない。

「意外にも気の利くヤツだったんだな」

「俺はいつでも空気を読んでいるぞ？」

「良くも悪くも読んでくれますよね」

リウエンはクスクスと笑っている。

きつと今までもロクな心理戦を繰り広げなかったんだらう…。

「では皆様方、姉もああ言っておりますので、どうぞ遠慮なさらず
お先に召し上がって下さい」

「悪いけど、そうさせてもらうね」

「冷めると臭みが気になるらしいしな」

ゼルとロイは料理に手を付け始めた、俺もそれに習う。

料理に視線を巡らせると、様々な肉料理が自己主張してきた。
しかし、俺の視線を受け止めたのは、肉料理ではなくスープだった。

「リウエン、もしかしてこれって」

「正解です」

俺の問い掛けに満面の笑みを見せる。

「昨日、お召し上がりになられたスープと同じです、ただ、今日はブルーピースふんだんに使用していますので、また違った味が楽しめますよ」

「そりゃ、楽しみだ」

早速スープから頂くことにする。

じんわりと染み渡るあの味だったが、リウエンの言う通り微妙にアクセントが違う。

「たしかに、うめえな」

「うん、これはいけるよ」

ゼルとロイも賞賛の言葉を発する。

どうせならリルドナが戻った時にも言っておいて欲しい。きつと真つ赤になって照れるはずだ。

「ただいま〜って、ホントに先に食べてるし、冷たいわねえ」

「お前が先に食べと言ったんだぞ」

噂をすればなんとやら、リルドナは帰ってきた。

「ホントは牡丹鍋もしたかったんだけど、お味噌がなくてねえ」

「ボタンナベ？ミソ？それも倭国の物か？」

「そうよ」

「ホント、お前は倭国好きなんだなあ…」

「そういえばさ、お前のソレって」

視線をリルドナの下半身に向ける。

コイツはスカートを穿いていない

おっと、別にパンツ丸出してわけじゃないからな？

変な期待しちゃダメだぜ？

スカートとは違う物を穿いているという意味だ。

俺も最初はスカートと思ってたいたが、どうもスカートとは違うものに見える。

途中で二股に分かれ、まるでズボンのようなのだが、裾が大きく

開いている。

ズボンのようなスカート。

「ソレも倭国の物か？」

「そうよ、袴っていうのよ」

「へえ、通気性良さそうだね」

「あれだろ？あの国って蒸し暑いからだろ？」

ゼルの言葉で昔読んだ本でそういう記述があったことを思い出した。

なんでも、湿度が高い為に家屋にも様々な工夫がされているとか。

「夏はそうねえ、でも年がら年中つてわけじゃないわよ？」

「四季がハッキリとした土地なんですよ、あと地域によって天候も様々です」

「そうそう、山を挟んで片や滅多に雪の降らない地域、片や豪雪地帯とか普通にあるもんね」

もう一度、昔読んだ本を思い返す。

その中で見た倭国の地図はとて狭い土地だったはずだ。

そんな狭い空間でなんとも神秘的な土地だ。

「それでも、蒸し暑いのが苦手なら、北方の島へ行くといいわ」

「ああ、あの菱形の大きな島か」

「たしか、『えぞ』とかいうんだっただかしたら、あつちは夏でも涼しいわよ」

オチは見えたが、あえて聞く。

「冬はどうなるんだ？やつぱり寒いだろ？」

「そりゃ、死ぬほど寒いわよお」

どうしてコイツはこういう話題を嬉しそうに話すんだ。

「真冬にはマイナス二七三度にまで下がるらしいわ」

「この国より寒いじゃねえか」

「そうね、倭の国で唯一オーロラが見れる土地みたいだし」

「そんな過酷な環境じゃ、誰も生活できないんじゃないのかな？」

「うーん、その環境下でも従軍し、任務を遂行する特殊部隊を『ト

ンデンハイ』というらしいわ」

「すつげえな、そりゃ」

さすがの傭兵の二人も想像を絶するモノなのだろう。

過酷な大自然の驚異に晒されながらも、逞しく生きる倭国の民。

そんな彼らの生活に様々な知恵での工夫を思い浮かべる。

俺は倭国へ想いを馳せるのであった。

「ね、姉さん、とりあえずお掛けになってください」

「あ、そうね」

姉に着席を促すリウエン。

その顔には何故か、カラスに追われる仔ネコのような苦悩の表情があった。

「冷めるない内に、が基本だしね」

姉は妹の横に着席する。

？

なんだおかしいぞ？

この二人は確か同じ背丈だったはず。

しかし、眼前には姉が一段高く見える。

横からテーブル下の様子を伺う。

すぐに答えは出た。

「おい、」

「何よ？」

「なんでそんな座り方なんだよ」

そんな座り方とは、椅子の上に膝を揃えて畳んだ状態だった。

椅子の下には、履いていた黒の平底パンプスが並べてある。

「正座よ、食事する時は基本なのよ？」

「それは椅子の上でするモノなのか……」

「当たり前よ？和の心なんだから」

「なんだよ、和の心って……」

「侘^わび、寂^さび、萌^もえよ」

これも聞きなれない言葉だった。
視線をリウエンにスライドする。
目が合った　　がすぐに視線を逸らしクリクリと目を泳がせてい
る。

きつと先程の会話には何か間違いがあるようだった。

「イタダキマス、」

キツチリと両手を揃え、食べる挨拶をする。

この辺は律儀なやつだ。

？

今日はどうも違和感が仕事熱心だ。

リルドナの右手に握られた一五センチほどのペンのような細い棒。
それは二本あり、起用に動かしていた。

「お前の持ってるソレって　　」

「あゝ、コレ？　お箸よ」

「じゃなくて、お前左利きじゃなかったのか？」

今までに、何にするにしても左手だった。

さっきの弓だって左持ち用の特注品だった筈だ。

「テーブルマナーだからね、倭の国じゃ左利きでも子供の頃から矯
正されるらしいわ」

「お前にしては、聞き分けがいいんだな…」
変なところで律儀だ。

「それに右で扱うほうが便利なときもあるのよお？」

「ほう？」

「こうやって、お行儀の悪いコには　　」
ガキッ

「何しやがる！」

「コラ、ガードしないのっ！」

一瞬の出来事だった。

リルドナは右手に持つ『箸』の反対側を左手で掴み、
そのまま持ち替えたままゼルの頭を殴打しようとしていたのだ。

流れるような一瞬の動きだった。

それを食事用のナイフでガードしたゼルもさすが戦闘のプロといえる。

「だってヤンキーじゃない？」

「それは勝手にお前が呼んでるんだろが！」

「ゼル、確かに行儀は悪かったと思うよ」

確かに、テーブルに肘を着いて行儀は悪いと思う。

だが、いきなり殴りかかるのはどうかと…。

俺よりも反撃性能の高いゼルは尚も抗議していた。

リルドナも負けては居ない。

食事中だぞ、お前ら。

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

「なんだよ、いきなり」

不意に錆びついた鎧戸ように閉ざされた口を開いた。

すっかり存在を忘れていたが、ヤツも同席していた。

ヤツは顔色一つ変えずにサラリとこう言った。

「冷めるぞ？」

それはとてもご最もな意見だった…。

誰も聞いてなさげだけどな。

外には暗闇の支配。

虫の鳴き声。

完全に一日の終わりを告げようとしていた。

4 - 5 お砂糖足りていますか？

夜、時計が無いので正確な時間は判らない。

そこにはある者が支配を進めていた。

静寂と暗闇。

街灯も何も無い森の傍らの小屋だ、当然誰かが灯りを点さなければ、月明かりしかない。

動物も草木も皆眠りに落ちる時間。

だが俺は眠って居なかった。

「……」

いつ目が覚めたのかは判らない、別に起きるつもりも用事もない。気付いたらまだ夜だった、ただそれだけ。

この地に来て、僅か二日。

まだ、本格的に仕事が始めた訳でもないのに、長く時間を過ごした気がする。

理由？

それは判りきっている、あの兄妹のせいだ。

出会ってから、ずっと行動を共にしている。

冒険者になって三年になるが、今までこれほど同行をした人間は居なかった。

常に俺の傍らで何かをしでかす。

良く言えば俺を退屈させない。

今日一日だけ振り返っても、

馬車で騒ぎ、

目隠し対局をし、

到着するなりチェスを指し、

夕食の食材を狩りに行き、

そしてその夕食には、あの二人の傭兵まで巻き込んで騒ぐ。実に目まぐるしい。

出会ってまだ二日だと言うのに、まるで家族が出来たようだ。

「ちっ……」

考え出すと止まらない。

水でも飲みに行こうかと思った、その時

カチャ。

「！」

不意に扉の開く音が耳に入る。

この部屋じゃない、向かいのリウエン達の部屋か？

思わず息を殺しながら、静かに廊下の様子を伺う。

薄暗い廊下に視線を走らせる、

しばらく考え事していたお陰か、闇に目が慣れている。

廊下をユラユラと歩く白い後ろ姿　リウエンだった。

こんな夜中にどこへ？

リウエンはそのまま外へ出て行ってしまふ。

こっそりと後を尾行^{ツッパ}する罪悪感があったが、好奇心の方が勝ってしまつた。

月明かりを頼りに静かに追う。

そこは静寂が支配する世界、虫の鳴き声が妙に大きく聞こえる。

視線を巡らせると、森に歩を進める白い影。

おいおい、森に入っちゃうのかよ。

リウエンに習い、俺も森へ足を進める。

しばらく進むと、少し開けた場所にでた。

周囲は木々に囲まれているが、頭上を遮る木は無く、星空を眺めるには持つて来いだ。

居た。

その中にリウエンの姿を認める。

一際大きな切り株に腰掛け、空を見つめている。

月明かりが彼女の顔を照らす、その表情は暗い。
次第に明かりは増していくが、やはり照らし出された彼女の顔は
暗い。

！
月明かりが増す…だと？

注視すると、そこには青白い光の球がフワフワと舞っている。

その数は次第に増えているようだ。

パキツ…

「…！」

しまった！

木の枝か何かを踏みつけてしまったようだ、微かな音だったかも
しれない、

しかし静寂の支配するこの場ではあまりにも盛大だ。

「いつ…！」

いつの間にか、光の球に包囲されている。

俺の周りを緊迫した空気が迫る。

青白い光の球　ウィル・オ・ウィスプというヤツか？

腰に手を回す…武器は無い。

当たり前の話だ、先程まで寝ていたんだ。

そもそも、コイツらに物理的な攻撃が通るのか？！

光球は尚も迫る。

迎撃も逃走も出来ない　！

「お止めなさい」

透き通るような声突き抜け、緊迫した空気が溶ける。

包囲が解かれ、光球は去っていく。

そこに残されたのは、俺とリウエンのみ。

彼女は俺に微笑み掛けていた。

もうその顔には先程の暗い影は無い。

「フェアリーリングを目撃したら、そのまま見なかったことにし、
立ち去るべきですよ？」

「フェアリ…？」

聞きなれない単語だった、妖精の輪？

俺の疑問を置き去りにし話は続く。

「森の夜は、皆寝静まる時間、そして妖精達の宴の時間でもありません。」

彼女達はただ楽しく踊っているだけ、もし見かけても、そっとしておいて上げてください」

「今のは、妖精だったのか？」

規律を失くした思考の濁流を抜け出して、ようやく絞り出たのがその程度の言葉だった。

「そっと抜け出てきたつもりだったんですが…起こしちゃいましたか？」

「ご、ごめん、盗み見するつもりはなかったんですけど……」

どう言い繕っても、弁解に値する言葉は見つからない。

そんな俺を見透かしてか、彼女はクスリと笑う。

「こっの野次馬あ、やらしいわねえ」

「ええっ!?!？」

「どうです？似てましたか？」

悪戯っぽく舌をペロリと出して笑う。

恐ろしいまでに似ている、さすが姉妹というところか。

が声は似ていたが、表情までは似ていない。

「百点満点だ…勘弁してくれ」

「はい、畏まりました」

あまり心臓に良くない真似だ。

相変わらず優雅に微笑み続けている。

次々と湧き上がる疑問に整理券を配り、口を開く。

「今の妖精なんだよな？」

「はい、性質的にそうですね、妖精の霊格が少し上がった者で、『ブラオ・アウゲン』と言われています。」

「ブラオ…確かに青いな」

先程の光景を思い浮かべる。
非現実な幻想的な絵だった。

「いろいろ呼び名はあるんですが、ブルー・アイだったり、ブラオ・スフィアだったり、意味はさほど変わりませんね」

「てつきり、ウィル・オ・ウイスプかと思ったよ」

その言葉にリウエンの顔に影が差す。

「その表現も間違ったものではないでしょうね」

「その表現『も』？」

「結局のところ、人間が勝手に付けた名前ですしね、光る球ならウィル・オ・ウイスプで括ってしまうのも仕方ありません」

確か読んだ本では、

妖精が変異したものとも、浮かべれない幼い子供の魂とも書いてあった。

では、そういうモノに囲まれていたリウエンは一体？

そして、何故俺を包围した光球はリウエンの声で去ったのだろう。今すぐ聞きたかったが、夜の森は予想以上に冷える。

明日の朝には出発しなくてはいけない。

いつまでも夜更かししているわけにもいかないんだ。

「それはともかく、早く戻らないと、明日出発だろう？」

「いえいえ、全く以って心配は間に合ってますよ？」

右手の人差し指を立て、得意げにポーズを決める。

これはこの子のアイデンティティなのだろうか。

「わたしは行きません…ここでエインさん達の帰りを待とうと思いません」

「えっ？」

「夕方、森で兄と二人になった時に、相談して決めました」

「そ、それでいいの…？」

「はい？」

「それでいいのかよ、なんで一人で留守番なんだよ」

「悲しいですが、私は足手まといになっちゃいますので」

なんだか投げやりに聞こえる言葉。

リウエンを足手まといだなんて認めたく無かった。
俺も負けずに食らい付く。

「そんなことないだろう?」

「わたしはすぐにポテポテ転ぶ女ですよ?

エインさんだって判ってらっしゃるでしょう?」

気のせいか、言葉の端々にトゲがある。

リウエンらしからぬ口調だった。

「転ぶ姿だつて考え方を変えれば、可愛らしいじゃないか、ちょっとお茶目な個性とも言えるじゃないか?」

「それ…本気でおっしゃっているんですか?」

気のせいか、リウエンの声が震えている。

踏み込みすぎたかも知れないが、止まらない。

「お世辞でもないよ、そういう面も含めて充分魅力的な女の子だと思つよ」

「……」

俺の言葉にリウエンは顔を伏せてしまった。

勢い余つてとんでもなく、恥ずかしい事を言ってしまった気がする…。

魅力的ってなんだよ、愛の語らいをしてるんじゃないんだぞ。

しかし、俺の心配を他所に、リウエンの反応は予想に反していた。
俺の恥ずかしい台詞に照れる訳でもなく

「…あなたに」

「え…?」

彼女は身体を震わせ何かを呟いているようだった。

吹き抜ける風の音で上手く聞き取れない。

「リウエ」

声を掛けようとした、その時。

伏せていた顔を上げ、言葉を発する。

大きな青い瞳が俺を射抜く。

「あなたに何がわかると云うのですか?!」

それは今まで聞いたこともない、初めて聞く怒気を孕んだ声だった。

彼女は、身体を震わせながら、俺を睨みつけている。

その目に涙が浮かんでいた。

どの場面だった？

彼女が涙を浮かばせているのは、どういう場面だった？

それは…ああ、そうだった。

転んだ時だ。

「わたしだって、好き好んで…こんな身体」

言葉を詰まらせ、大きく肩で息をしている。

転んだ時に浮かべる涙の理由を考える。

痛いから？

おそらく違う、外的なモノじゃないと思う。

それはきつと、「悔しさ」

リウエン自身、自分の不器用さは自覚しているはずだ。

十代半ばの女性が、幼児のようにポテポテ転ぶ醜態。

自分一人の時はいいだろう、だがそれを他人に目撃されたら？

悔しいとも情け無いとも取れる感情を抱くのでは無いだろうか。

リウエンは只々、どうにもならない不器用な身体が悔しかっ

たんだ。

「……」

「……」

重い沈黙が流れる。

彼女はまた顔を伏せ、その場に立ち尽くす。

秋の夜の冷たい風に煽られ、リウエンの服が揺らいでいた。

俺は一つの仮説を紡ぎだす。

不器用な身体。

合わない精神年齢。

それを不本意とし、恥じる行動。

そして今聞いた「こんな身体」という発言。

不器用なのは生来のモノではないのでは？

リウエンは幼くして、大きな病気が事故で…

それこそ長い時間意識不明の重症だったのでは？

身体も完全に回復していなくて、日常生活に支障をきたすほどに。

精神年齢が合わないだけなら、世の中普通に居る。

それを自覚し、恥とし、なんとかしようかと奮闘する。

それがこの理由なのではないだろうか？

わからない。

確認できない、確認してはいけない…。

そんな気がする。

俺に何がわかると言っただろう。

俺に何が出来ると言っただろう。

とんだ思い上がりだった。

彼女の顔がこちらに向き直る。

どうしようも無い欠点を、無責任にも俺は個性として称してしま
った。

軽率な自分の発言を悔やんだ。

だが俺の後悔と自責の自問自答は、突如打ち破られた。

「エインさんは、お砂糖どれくらい入れますか？」

「え？」

咄嗟に判断しかねる質問だった。

「紅茶に　ですが、

わたしも勿論入れますよ？　さすがにそのまま飲まないです、お
子様ですから」

「お、お子様だなんて…」

「不思議ですよ、お茶の味にうるさい癖に、甘味が無いと飲めないんですから」

「い、いや、俺も砂糖入れないと飲めないな」

「わたしも姉も、甘い物が大好きですから、ついつい入れちゃうんですよ」

クスクスと笑い、そこで一旦言葉を切る。

短くない時間、目を眺め深く息を吐き、ようやく口を開いた。

いつのまにか、よく見慣れた優雅な笑顔に戻っている。

「でも、入れるのは角砂糖一個、二個入れたくなくなりますけど我慢です。」

甘い物は好きですが、入れすぎてお茶の味すら判らなくなるのはダメです。」

何の喩えをしようとしているか判らない。

下手に横槍を入れるわけにも行かない。

何よりも思考が着いていけない。

必然的に俺は完全に聞き手に回る。

「幸せもそんな物なんだと思います。」

「え？」

「エインさん、わたしは不幸に見えますか？」

「それは」

嫌な質問だった、

どちらの答えだしても不正解になる気配がする。

「こんな身体、不幸以外なんでもないでしょう。」

リウエンの顔が毒気に染まる。

俺は見たくないモノだった。

「こんな身体になってしまったことを呪いました、元気に走り回れる姉を妬みました」

なんでそんな事言うんだ。

聞きたくない。

「そして、何よりもそんな自分の醜い心を恨みました」

「もうやめてくれ！」

耐え切れず大声が漏れる。

「苦いでしょう？とても飲めたものではないでしょう？」

尚もリウエンは詰めて来る。

息が…できない。

威圧される…まるでへびだ。

「だからお砂糖入れちゃえばイインですよ」

「へ？」

今まで押し掛かっていた重圧プレッシャーが霧散する。

それほどまでに、呆気らかんとした声色。

「だからお砂糖です」

「俺にわかるように話してくれ…」

「うーん、そうですね…わたしの場合ですと、

確かに身体のせいで不幸だったかもしれませんが、姉が居てくれました」

事あるごとに、妹を心配するリルドナを思い返した。

そうだな、あいつはいつも心配してたな。

「姉は…いつもわたしの事を優先してくれました、身に余るお砂糖しあわせです」

「やっぱり難しいぞ…」

「本当に幸せなら、その事にすら気付かないんでしょうけどねえ」

「それも…そうか」

「こんな身体だったからこそ、姉の心遣いに感謝できているのかも
しれません」

これは間違いなく本当のことだろう。

リルドナがりウエンの支えになって今まで生きて来たのだろう。

「エインさんは、お砂糖足りていますか？」

俺が幸せか、ということか…。

考えたことも無かった。

「答えられないってことは、足りているということですよ」

すっかり煙にまかれてしまった感がある。

何が言いたかったはわからないでも無いが。

「コレ、私を覗いてた罰ということだ」

「勘弁してくれよ……」

また悪戯っぽくペロリと舌を出して笑う。

何処まで本気で何処まで辛かっているのか、

間違いなく、この子はあの兄妹の妹だ……。

すっかり冷え切ってしまった身体を小屋へと向ける。

リウエンを連れて戻るとしよう。

いくらなんでも夜更かしし過ぎだ。

もう休もう、考えるのも辞めよう。

空には青い月、

俺には何故か、不気味に見えた。

塗り潰していた不安が再燃する感覚を覚える。

また心が晴れなくなっていた。

5 - 1 お砂糖足りていますか？解

白銀の姫

むかしむかし、

森には妖精が飛び回り、

泉には精霊が宿っていたほどの昔のお話。

森の中の泉の畔には集落があり、白の民が住んでいました。

その中には、銀色の美しい髪を持つ少女がいました。

少女は白の民と妖精たちと静かに暮らしていました。

しかし、静かで平和な日々は突然壊されました。

白の民の集落は黒き魔王に襲われてしまいました。

泉で遊んでいた少女は助かりましたが、一人ぼっちになってしまいました。

青の魔道師は、不憫に思い、彼女を自らの屋敷に招き入れました。

少女は青の魔道師より、白銀の従者を与えられました。

少女はさらに、白と黒の侍女を与えられました。

年月が過ぎ、美しく成長した少女は白銀の姫と呼ばれるようになりました。

白銀の姫は心優しい女性。

彼女は若き剣士に剣を授けました。

彼女は未熟な魔道師に宝具を貸し与えました。

白銀の姫は弱き人々の味方なのです。

ありがたやありがたや。

* * * * *

朝、静けさを保っていた森に鳥の囀りが漏れ始める。すっきり冷え込みの厳しい季節となり、吐き出す息は白い。

窓から差し込む朝日を背に、少女は話を紡ぐ。

俺はテーブルを挟んで静かに座し、耳を傾ける。

背後には部屋の出入り口、

その傍らには風化した彫刻のように待すルーヴィックがいる。

ちなみにリルドナだけいない。

彼女は話の途中で「準備があるから」と出て行った。

なので向かいの部屋にも気配は無い。

「以上となります」

「悪いな、こんな朝早くから」

「いえ、私が好きでやっている事ですから」

淡々と受け答える。

その姿はどこか冷めて見えた。

俺は昨晚のことをまだ引き摺っていた。

なので、言わずにはいられなかった…。

「リウエン、昨晚の話だけど」

「はい？」

表情こそ変えないが、空気が張り詰めたのがわかる。

あえて蒸し返す事も無かったかもしれない。

だが、どうしても俺は決着をつけたかった。

あれからずっと考えて至った仮説だ。

「…。」

青い瞳は俺を刺し続けている、明らかに警戒しているな。

…しかたない。

俺は視線をそらさずに、間合いを詰める

「こつでもしないと、屁理屈こねてノラリクラリとかわすだろっ?」
「うう……」

彼女は身体を震わせ、目には光る物が浮かんでいた。
ちよつといじめ過ぎたかもしれない。

フォローをいれようとした瞬間、

「エイン、もういくぞ」

「あ? ああ」

ルーヴィックはそのまま外へ出て行くこうとする。

慌ててそれを追った。

俺が部屋を出るのとリウエンがポロポロと泣き出すのはきつと同
時だったと思う。

5 - 2 その笑顔が曲者なんです

廊下　　といつても部屋と小屋の外をつなぐためだけの狭い空間。壁も簡素な造りの物だ、

扉を閉じてあるにも関わらず、リウエンのすすり泣く声が漏れてくる。

「あまり妹を泣かさないうで欲しいものだがな？」

「手が過ぎたのは謝る　　が、フォローは入れようとしたんだぞ」

「ほう、また鼻でも摘むのか？　あいつの粘膜は弱いからあまり摘むな」

「うー、鼻血顔はみたくねえな……」

ルーヴィックは小屋の外へ出ようとしないう。

そのまま動かない、俺も動かない。

お互い話があるということだ。

先に口を開いたのはヤツだった。

「何か結論が出たようだが？」

「あくまで仮説だけど、リウエンが俺に解けるように喻えているならの話だ」

不幸をお茶の苦味、姉の気遣いを砂糖の甘味とするなら。

苦味自体を否定　　もしくは排除してしまえば、甘味は意味を成さなくなるからだろう。

姉の気遣いさえも否定し兼ねないからだ。

そして角砂糖一個まで、二個目は我慢と言った、ヘタな同情は要らないという拒絶だ。

さらに『身に余る』とも付け加えた、つまりその一個ですら、過剰な部分がある。

それらを踏まえた上で俺は答えた。

「リウエン本人はさ、自分の不器用な身体がイヤでイヤで仕方ない

んじゃないかな」

「ふむ…」

「でも、その嫌悪していること自体を他人には見せたくない」

「なぜだ？」

「事故だが病気だが、原因はわからない　けど原因はお前ら兄妹にあるんじゃないのか？」

「なに…」

「仮にリルドナが原因しよう、

リウエンが落ち込めば原因を作ったリルドナも罪悪感で押しつぶされる」

相変わらずヤツの表情は読めない。

そして返し手もこない。

かまわず立て続けに手を指す。

「だから、いつまでも悲しんでいる姿を見せられないし、罪悪感からくる姉の心遣いも無下にできない、そして、姉のそういった行為を受け続ける以上、根本の不幸を否定できずに引き摺ったままになるんだ。でも、一番不幸と蔑んでいるのはリウエン自身なんだろうな」

そう、本人にとっては触れられたくない部分、俺が無責任にもそのことを言ってしまったので、思わず感情的に対応してしまったんだ、あのときの言葉はまさしく本心だったはずだ。

そして咄嗟にお茶に喩えて文字通り、お茶を濁そうとしたんだ、

あんな似合わないキャラを演じて。

「だから言ったんだよ、苦くても飲めって」

甘味…：姉がいなくても、いつかは生きていける、苦味をも飲めるくらい強くなれるかもしれない。

いや、苦味　不幸から正面から向きあうべきなんだ、姉も妹も。

「それとお前に言いたいことがある」

「なんだ？」

「たしか、部屋で目覚めたりウエンを『素』と言ったが

あれ、嘘だろ？」

ルーヴィックはピクリと反応するが、無言のままだ。

「さつき鼻摘んだとき、咄嗟に敬語がでた、その身に言葉遣いが備わってる証拠だ」

それがなくても、昨晚俺に激昂したときでさえ、敬語だった。

「そしてお前は、『見るのは久しぶり』と嬉しそうにしてたが

お前が笑うときは口クなことをしでかさない、悪さしている顔だ
と思ったよ」

「酷い言われようだな」

実際にコイツは鉄仮面のような無表情と、作ったような笑顔しかない。

顔曇らせたりとか、微妙な変化はあるだろうが。

「お前ら兄妹、全員ヒント出しすぎだ」

尚も変わらず無表情の鉄仮面。

構わず俺は続ける。

「子供っぽいのが背伸びしてるんじゃない、

丁寧な言葉使いを備えた娘が、わざと子供っぽい口調をしている
だけだ」

「逆だと言いたいのか？」

「その方が筋が通る、姉の前でドジな妹を過剰に演出してるところ
があるんじゃないのか？」

そもそも人は相手によって言葉使いや態度を変える、俺だって変
えてる。

全く変えないしブレない、この兄と姉がおかしいんだ。

「どうしてそう思う？」

「馬車の中で寝てるリウエンの指、絆創膏だらけだっただろう？」

「そうだな、リルと一緒にお前のコートを修繕したからだろう」
それだけなら、その時点なら、俺も不自然と思わなかった。

しかし、あの娘は俺の目の前でウサギを蘇生して見せた。

「じゃあ、なんで自分の指を治療しない？あれだけの回復魔法を使えるのに……だ」

続けて手を指す。

「いい歳の娘が子供っぽく振舞うんだ、そりゃ恥ずかしいだろうな」

小さくヤツが切り返してきた、

「なぜそんなことをする必要がある？」

「望んだのはリルドナだろ、『お兄様』と『姉さん』がヒントだったぜ、

最初は『お姉様』と呼んでたんじゃないのか？ でもリルドナが嫌がった、

過剰すぎる姉の心遣いが、妹に世話の掛かるお人形を無意識に強要してたんだ」

たぶん、リルドナは常時『お姉ちゃん』と呼ばせたいに違いない。なので間を取って『姉さん』だな。

「以上が俺の仮説だ。」

「ふむ……」

しばしの沈黙、

ルーヴィックは目を閉じて思索しているようだ。

そして、降伏した城が城門を放つように口を開いた。
「^{リサイン}投了だ。」

しかし、なぜこのタイミングで意見を提示した？」

「仕事に集中したいからだ、リウエンとはしばらく会えなくなるしな

お前、俺の役割忘れてねーか？」

俺の仕事は、畏の発見・解除、鍵の開錠、あとは遺跡などの場合は仕掛けの謎解きもか。

「真面目だな、発想は柔軟だが頭は硬いと見える」

「生憎だが、真面目にやるしか能が無いんだよ」

「それで女を泣かしていいものか？」

「な、なんだよ」

「心を丸裸にしすぎるのも考え物だ」

「そこは反省してる…なのであわせる顔が無いな……」

突かれると痛いトコだった、

しかし、内心をお茶に喩えている以上、かならず本心にブチ当たるのは仕方ない。

なので、反撃をする。

「ていうかお前、俺を試してただろ？」

「なんのことやら」

そう言い、ヤツは肩を竦めておどけてみせる、

その顔には笑顔があった　　やっぱり信用できないな。

それでもいい、一つ心の引っ掛りは取れた。

5 - 3 今日も早速失敗連発の予感

注がれた朝日に一瞬目をくらまされ、ヒンヤリとした風に頬を撫でられた。

その清涼感を堪能するのも束の間、不意に頭上から声が刺さる。「アンタ、リウエン泣かしたでしょ」

その声に反応し視線を向けると

視界一面の闇。

一瞬にして夜になってしまった、

のではなく、『黒いモノ』に視界を塞がれた。

それはリルドナの黒い平底パンプス×二足（の靴底）

「ぶっつ！？」

俺は倒れるまでのその刹那、点滅する視界の中で、大きくせり出した木の枝と 夕食の魚を盗んで逃げ去るノラネコのように華麗な宙返りして着地するリルドナを見た気がした。

ていうか出発前から俺のライフを削るな。

この間、僅かコンマ五秒なのだから、驚かされるばかりだ。

「いつてえー、何しやがる！」

「それはこっちのセリフよ！ リウエンに何したのよ？」

思わず言葉に詰まる、なんと答えたら無難か頭が回らない。

そのまま隠蔽率ゼロで言えば間違いなく殴られる。

下手に信憑性ゼロの嘘を言っても殴られる。

だからといって、発言性ゼロで黙っていてもやはり殴られる。

ゼロはイロイロとダメなのだ。

どうしたものかと、思索していると思わぬ助け舟が来た。

「リル、心配するな、大したことじゃない」

「え？ そうなの？」

ヤツは笑顔でリルドナを諭す、

絶対イヤな予感しかしない、予感じゃなく確信と言ってもいい！

「ただ単に丸裸にされたただけだ」

「へー そうなの？」

「……………ぬあああああああ？！」

ちよつと待て！

『心を』が抜けてるぞ！？

二つの赤い光が鋭く閃いた気がした。

薄暗い夜道でノラネコ見つけたときってこんな感じだよなあ。

などと暢気なこと思考してる場合じゃなかった。

「がっ …？！」

すくい上げるような強烈なアッパーで、

なぜかダウン状態から無理やり立たされる。

咄嗟に視線を走らせるが、ノラネコ…もとい彼女の姿は無い。

直後、上方からの衝撃…また跳んでの一撃らしい。

衝撃はそのまま後方にえぐられるように抜ける、

そして、今度は後方からの被弾の感触。

俺からは当然見えないが、後ろに回りこんだ彼女が連続技を叩き

込んでいるようだ。

背後からの危険な打撃に俺はなす術もない …！

やめてくれ、俺のライフはもうゼロだ…。

「 …… というのは冗談だ」

「は？ 冗談？」

ピタリ。

ヤツの言葉で打撃の弾薬供給が急停止、

急な慣性遮断で、俺はまたダウンする。

「なんてことはない、

少し会えなくなるんでな、話しこんでいたら感極まった、ということろだ」

「あゝそっか、そうよねえ、あたしも寂しいわあ」

俺を殴るアクティブポイントを失った彼女はそのまま何事もなかったように振舞う。

そしてヤツは錆びついた鉄柵門のように口を開く。

「なに、礼はいらんぞ」

「心配するな、絶対言わん」

悪態をつきつつ、なんとか身を起こす、

くっそ、朝一番からすでにドロドロじゃないか。

そんな俺の姿を見てか、リルドナは言葉を発する。

「あゝアンタの顔

なんか汚れてるし洗ってきたら？ ネコでも顔洗うわよ？」

それはお前が蹴ったからだろう、という言葉に隠居を命じ、

俺は素直に顔を洗うことにした。

ザパァー…

冷たい朝の空気に、冷たい水はやはり身にしみる。

「ふう……」

相変わらずの扱いの酷さにため息が漏れた。

不思議なモノだ、出会って今日でまだ三日目なのに、

兄が俺を嵌め、妹が俺を殴る、これが自然なコトになりつつある。

俺はルーヴィックに『俺を試してただろ』と指摘した、

別にそのことに偽りはない。

しかし、その必要性が見つからない、

俺には特殊な戦闘技能があるわけでも、高位の魔法が扱えるわけ

でもない。

ちよつと鍵開けが人より得意な程度としか自覚していない。
もし、ヤツが何かを企んでいて、他人を利用しようというなら、
他にもつといい人材がいそうなものだ…。
ただ単に気に入られただけ？

……。

答えは出なかった。

顔を洗い、先程の場所に戻ると。

例の兄妹は、軒先の段差に腰掛け何やら準備をしている。

「おう、何してるんだ？」

「ちよつとした、武具の手入れだ」

ルーヴィックの手には、細身の短剣。

短剣と言うより、柄の付いた針？

それらは大量にあり、ひとつひとつ入念にチェックしている。

「そんなもん昨日の内にやれよ」

「勿論したさ、これは念のためだ」

そう言いながら、確認を終えたそれを次々と懐に仕舞い込む。
ていうか何本入るんだ…？

視線をリルドナにスライドする。

彼女は何か棒状の物を背負っているようだった。

細長くゆるくカーブを持った剣のようなもの。

「おい、何を背負っているんだ？」

「あゝコレ？ 太刀よ」

「じゃなくて、あの弓はどうしたんだ」

「今日は弓って気分じゃないのよ」

「お前はその日の気分だけで、いろいろ武器使いこなすのかよっ！」

「あゝうっさいうっさい、剣聖取るのに必要だったのよ」

気だるそうに答えるリルドナ。

そんな彼女の耳でピアスがキラリと光った気がした。

「ねえ、アンタ」

「なんだよ」

「荷物は？」

「あ」

呆れるルーヴィックに、目を丸くする姉。

参ったな…これと同じこと前もあったよなあ。

今戻ったら、泣いてるリウエンに鉢合わせするな…。

リウエンにあわせる顔が思いつかない俺は軒先の段差に座り込み、ため息を漏らしながら重装騎兵のようにドシリと荷物を降ろすルーヴィックの「とつてきてやろうか？」の言葉に「すまん頼む」と答え、眼前でエサにありついたネコのようにニヤニヤと笑うリルドナいじられつつ、もう女は泣かすまいと誓うのだった。

くどくて、すまん。

要するに

荷物を取りにいくと……

リウエンに鉢合わせするかも知れないので、

……ルーヴィックに甘えたわけだ。

5 - 4 やっぱり弓が気になるんです

時間にして、体感で数分ほど。

俺はルーヴィックから自分のリュックを受け取り、

あの兄妹とともに集合馬車である森の入り口　　昨日馬車を停めた場所　　に歩を進めた。

集合時間にはまだ時間がある所為か、まだ人はまばらだ。

その中に見知った顔を見つける、体格のいい金髪の男　　ロイだ。

「おはよう、昨日はごちそうさま」

「おはようございます、早いですね」

「おはよ金髪、なかなか美味しかったでしょ？」

「おはようだ」

四人四様の挨拶を交わす。

どれが誰の言葉かは…まあわかるよな？

「うん、美味しかったよ、えーっと、リルちゃんだったっけ？

キミいいお嫁さんになると思うよ」

「そ、そそそそそう？」

リルドナの赤面モードのスイッチが入り、可愛さ二割アップを果たした。

さすが大人のロイ、今度その対応術を是非ご教授願おう。

今日のロイは完全装備だ、アームガードやグリーヴ、

中でも目を引いたのは裾の長い鎖帷子　　ホーバークというやつだろうか。

「さすがにガッチリ固めてますね」

「まあね、コレで食べている以上は、装備にもお金掛けないとね」
チラりと兄妹をみる。

どうみても防具の類は無い。

「お前らはそんな軽装で大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「はあ？アンタも軽装じゃない」

「俺はそもそも戦闘要員じゃないし、コートの下にレザーアーマーも着込んでいる！」

ついでにいうと、足に簡易の脛当も着けている。

「大体、昨日は弓使うときに手甲やら胸当てしてなかったか？」

「あれは弓具の一部よ、

素手で弦は引かないし、矢を射るときに弦が引つ掛る危険もあるしね」

弦が引つ掛る？なるほど確かに腕とかに引つ掛けそうだ。

じゃあ胸当ては要るのか？胸に引つ掛るか？

気付かれないように（ここ重要）視線をリルドナの胸元へ回す
今まで服装でわかりにくかったが、小柄な身体に反して大容量。
これなら引つ掛るかもしれない、うん。

「別に軽装で大丈夫よ、倭の国の諺にもあるわ」

「ほう？」

「曰く、『当たらなければ、どうということはないっ！』よ」

「それは本当に諺なのか？」

「あゝうっさいわね、ネコ踏んで死ねば？」

相変わらずの俺たちの不毛な言い合いにロイが口を挟む。

「ねえ、弓といえはさ、今日は持ってきてないように見えるけど？」

「金髪もそういうこと言うの？今日は太刀でいくのっ」

彼女の言葉に、ロイは視線を背負われたモノに移し、興味深そうに眺める。

「へへ、これがカタナってやつなのかな？」

「そうよ、これは両手持ちの、それも大きいやつだから、大太刀ね」

今更ながら思うが、この太刀も、あの時の弓も、
どう考えても俺が代わりに運んでやったリュックに入るサイズじ
やないと思うんだ…。

「ねえ、そういえばヤンキー顔は？」

「もうちよつとしたら来ると思う、アイツ寝坊助なんだよ」
「なんとというか、イメージ通りな。」

「ふ〜ん、朝弱いなら早く寝ればいいのに」

「アイツは言うこと聞かないからなあ」

「ついでに、その女も言うこと聞きそうにないんだ。」

などと心の愚痴を零していると、噂をすればなんとやら、ゼルが
姿を見せた。

「よっ！」

「ゼル遅いぞ、起こすボクの身になってくれ」

「悪びれた様子もないゼル、小言をぶつけるロイ。」

「これはこれで、いいコンビなんだろうな。」

「そしてリルドナの背中を見て、ゼルはこう言った。」

「お？なんだねーちゃん、弓は使わねえのか？」

「…。」

「おいおい、アンタらお約束過ぎるだろ…。」

5・5 その知識も間違ってますっ！

先程の喧騒から十数分。

次々と人が集まってくる。

その中に一際目立つ人物が居た。

威厳あるフルプレート鎧を身に纏い、格式のありそうなカイトシールド、

そして腰に帯びた由緒正しそうなロングソードの人物。

「あの人って？」

「あれって、ヒゲ様じゃない？ 随分と立派な装備ねえ」

この女の呼び名じゃイマイチわからん。

えーっと誰だっけ。

その問いにはルーヴィックが答えてくれた。

「執事のブルーノ卿だな」

「うええー?!」

おいおい、ちょっと待て、なんで執事があんな豪華な装備してるんだ。

へたすると、この中で一番「ソレっばい」格好じゃないか。

あと、執事に卿をつけるな。

他の人間もそう思っているのだろう、驚きを隠せないといった感じだ。

見れば、ゼルとロイがブルーノに丁寧な挨拶を交わしている。

もう労使関係というより、軍隊の上下関係にすら見えてしまう。

「あれはタダの執事じゃないだろう」

俺は誰となしに口にしたが、ルーヴィックがそれを汲み取る。

「執事として雇われる前は、何かそういう職に携わっていたんだろ
うな」

「執事というより、用心棒か？」

「大切な剣の鞘を預けるんだ、タダの執事では無いだろうな」
それは納得のいく話だ、野良で集めた素性の知れない人間に全て
任せるよりも、

自分の息の掛かった人員を派遣するほうが安全だろう。

探索の対象物を横領される危険もある、口裏合わせれば「剣は見
つからなかった」とか適当に報告、もしくは、「魔物と交戦してて
鞘を紛失」とか、最悪なシナリオを用意することも出来る。

要するに、いくらギルドから派遣された人間といえど、俺たちは
信用されてないわけだ。

「まあ、その方が面倒なくていいか」

万が一、成果ゼロで終わっても、変な疑いを掛けられずに済む。

そんな俺の思惑を他所に、ブルーノは一同を見渡し口を開き始め
た。

「皆、揃ったようだな」

途端、僅かにざわめいていた空気が静まる。

「これより森に入る、

結界を越えぬ限り魔獣は現れないらしいが、気を抜かぬようにな

そう言い放つ彼の手には、古びた大き目の手帳。

あれに森のことが記されているのだろうか？

勇者の末裔つてのが本当なら、あれは勇者の手記？

確認できることもなく、そのまま手帳は仕舞い込まれ、

俺たちは出発を言い渡された。

足元には落ち葉が堆積し土と入り混じって、
踏みしめると独特の感触を与えてくれる。

不意にその感触の表情を固くすることもあった、

どうやら、今も部分的に舗装された部分が残っているようだ。

ちなみに『結界を越えぬ限り魔獣は現れない』と行ってたが、何
もこの森だけの話じゃない。

今の時代は、もうほとんど魔物に出くわすことはない。

冒険者ギルドの設立、照明などの文明の利器の発達、主要の都市・街道の安全確保の徹底

様々な取り組みが行われた結果、普段人が立ち入る場所には魔物は存在しない。

未開拓の地に冒険に行くか、辺境の地で警備兵でもすれば拜めそうだが。

周囲は静けさを称えている。

小鳥の囀る声や俺たちの足音が盛大に聞こえるほどだ。

俺たちはハイキングに来たわけじゃない、仕事である以上、誰も無駄口は叩かない

はずでした…いや、もうねえ。

静寂をブチ壊すのはやっぱりこの女だった。

「ねえ、ヤンキー顔も金髪もそんなに弓見たかったの？」

「そうだねえ、あんな大きな弓は珍しいよ、ボクとしてはかなり興味あるよ」

「まあ、俺はロイほど見たいわけじゃないけどな」

二人は邪険にせず、ちゃんと面倒見てくれる　いい大人だと思う。

というか、いい加減その呼び名はやめろ、「ヤンキー顔」とか逆に言いくいだろお?!

「うーん、倭の国に招待できたら一杯観れるのにね」

「まあ、なかなかそうもいかないね」

「うーん、あたしが射ってるのを見せてもいいけど、

どうせ観るならまきわらけいこ巻藁稽古とかよりもやんまの流鏑馬の方がヤンキー顔も喜びそうね」

「ヤブサメ?」

また聞いたことの無い単語だった、

この女の武勇伝は底が知れない、またトンデモ性能に違いない…。

「馬を走らせて、その馬上での的を射るのよ」

「はあ？そんなこと出来んのかよ、落馬しねえか？」

俺は馬に乗れないので、詳しくはわからなかったが、

さすがの俺にも弓で両手が塞がる危険な状況はすぐに想像がついた。

「そうね、だから最初は騎射体勢をとる練習から始めるわ」

「うひー、それだけでも一苦労じゃねーか」

想像すればするほど、高度な技術に思える。

だが、俺には確信があった、この女なら…俺は口を挟む。

「でも、お前はそれすらマスターしてるんだろ？」

「よしてよ、いくらあたしの辞書でも『不可能』の文字くらい載ってるわ」

その代わり『容赦』とか『慈悲』が欠落しているんだろう、という意見には即退場願った。

すかさずロイが先を促す。

「でも、やったことあるんでしょ」

「そうねえ、一回挑戦させて貰ったけど、

皆中なんて到底無理、せいぜい羽分けにするのがやっとだったわあ〜」

全く聞いたことも無い単語だったが、この女のことだ…

おそらく『やっとだった』ということも達人レベルなことじゃないのだろうか。

「じゃあ、模擬線みたいなヤツはねーのか？」

肉食系のゼルらしい質問だった。

あの弓で射合ったら、死人でるぞ、多分。

「模擬戦ねえ、うーうーん」

「別に弓限定じゃなくていいぜ」

この二人が倭国に行ったら、観光内容はもう確定しそうだな。

「じゃあ、『スムオウ』…だったかしら一対一で戦うやつなんだけど」

「一対一か、騎士の一騎打ちジョストみたいなモンか？」

騎士の模擬戦、一騎打ちジョストと団体戦トゥルネイ、

俺はどちらも観たことが無いので、一度観てみたいものだ。

「武器は使わないわ、身体一つでぶつかり合うのよ」

「そうなるレスリング：いや東の草原の民の『クフ』みたいなモンか」

「そうね、似てるかもしれないわね」

「でも、あれって結構地味じゃねーか？」

そういったゼルの批判の言葉にリルドナが噛み付く。

「そんなことないわ、『バンツケ』というランキング制があるんだけど、

その下位、『マクシタ』呼ばれる選手はまだまだそうかもしくないけど……」

「ランキング：リーグ戦なのか」

「そうよ、それでランキングは大きく分けて『マクシタ』『マクウチ』に分類されてて、

これは騎士と従士くらいの実力と待遇に差があるんじゃないかしら？」

「そりゃ、随分と落差があるな。」

「その中でも頂点に立つ『ヨコヅナ』の試合ともなると凄いわよ？

闘気と闘気の激しいぶつかり合いはまるで雷鳴、山一つ消し飛ばすくらいよ、

守護障壁無しじゃ観てるのも危険だったけど、あの華麗な空中戦は忘れられないわ」

「すげえな……やっぱり倭国は底が知れねえ……」

「こ、これは倭国に行ったら一度は観ておかないとね」

さすがの傭兵の二人も想像を絶するモノなのだろう。

極限にまで己の肉体を鍛え上げ、逞しく日々精進し続ける武人。

そんな武人たちの修行から生みだされるに様々の多彩な技を思い浮かべる。

俺は倭国へ想いを馳せるのであった。

5 - 6 最初の襲撃

俺たちが無駄話に花を咲かせ、突き進み続けて数十分。

元々、段差が多い森だったが、その区画は一際それが顕著だった。そこは森の中であってあたかも断崖地帯。

そんな中、ルーヴィックは突然声を漏らした。

「止まってくれ、ブルーノ卿」

「私はただの執事だ、卿は要らん、どうしたんだ？」

突然の行軍停止に一同はざわめく。

ルーヴィックの視線の先は切り立った崖。

そこに何があるというのだろうか？

「ここだ、ここでいい、」

「はあ？この岩の壁がなんだったっていうんだ？」

ゼルがそういい、崖に手を掛けようとした。

「触るな！」

ルーヴィックの鋭い声に手が止まる。

滅多に聞けそうに無い貴重な声だった。

「また振り出しに戻ることになる」

「！　ということがコレが？」

そこでカチリと思考が繋がった。

確か、お伽話にもあった、『貴婦人の閉ざした門』というやつか？

「ブルーノ卿、ここを『ソレ』で切り裂いてくれ」

「うむ、わかった…」

ブルーノは例の剣の鞘を取り出し、ルーヴィックの示す岩壁に歩み寄る。

そして、鞘を剣のように構え振り下ろそうとした、その時…

< 人の子よ、此処はそなた達が踏み入って良い場所ではありません >

「 ?! 」

不思議に響く声だった、人の言葉を発しているが、人のソレとは思えない。

この声が『泉の貴婦人』なのか？

臆すことなく、ブルーノは言葉を返す、

「泉の貴婦人よ、ご無礼承知でここを通ることをお許し下さい」

< なりません…ここより先は ちょっアンタ >

話途中に鞘は振り下ろされていた。

そして、岩壁の絵が描かれたガラス壁面が、ヒビわれて砕け散る

ように、

目の前で偽りの空間が割れて、真の空間が姿が顕す。

にわかに信じがたい光景だった。

他の人間もそうであったのだろう、皆言葉を失っている。

何故かリルドナが笑いを堪えつつ「化けの皮剥がれてるわよ」とか漏らしているが、今は無視。

この女の笑いのツボがイマイチ理解できない。

「では、行くぞ」

ブルーノの声にぞろぞろと皆付き従う。

幻の壁面の向こうには、薄暗い道が続いていた。

別に狭いわけじゃなかった、一列になって進むとか、腰を屈めたりすることもない。

だが空気が明らかに違う、得体の知れない何かが押し掛かるような感覚。

「ここからが、魔獣とやらの領域か」

「そうだな、そろそろ無駄口はつくんだ方がいい」

俺の呟きに、律儀にルーヴィックが答えた。

「無駄口ついでに聞くぞ？どうして、ここだとわかった？」

「そうだな、音だな」

「音？」

「この岩壁だけ音を反射しなかったんでな」

なるほど、と言いたかったが、そう簡単に判別できるのか。

コイツならやりかねないが…。

「さすがだな、そのまま最強の駒は俺を守ってくれると思えばいいな」

「ほう、調子がいいな？」

「差し詰め、盤上の女王だな」

「俺は男だ女王にはなれんし、そもそも買いかぶりすぎだ」

「じゃあ、何だ？」

「城兵だな」

充分強い駒だろうが…という気持ちはサクリ切り捨てる。

俺は気を引き締め直して足を進めた。

日はまだまだ低く、朝の空気は冷たい、

ここは一段と冷えるように思えた。

深い森を招かざる俺たちは進む。

相変わらず足元は起伏が多く歩き辛いが、

もう人工の建造物の残骸は見当たらなくなっている。

やはり本当に人の立ち入らない場所のようだ。

誰も言葉を発しない、ピリピリとした緊張の空気がだけが聞こえるようだ。

これだけの人数がいて、無言。

発せられる警戒の緊張感は音が無くても騒がしく感じる不思議な感覚だ。

音は無いことは無い、柔らかい大地を踏みしめる音。

あとは、各々の荷物が固有の声を奏でるくらいだ。

静寂と沈黙は違う、長時間の沈黙は人間には耐えがたいものだ。

そして耐え切れなくなつた者は口を開く…それは勿論

「ねえ…なんていうか、こうヒマよねえ？」

このノラネコのような女だ。

ていうか、空気を読め、

ログと空気を読めないヤツは冒険者失格だぞ？

「ヒマとか言うな、これは仕事だ」

「うーん、まあそうなんだけどね」

つい返事をしてしまい、リルドナは魚を得たネコサカナのように活気付く。

正直、俺も沈黙はきつかったということだろう。

「仕事なんだから、周囲に警戒配つておけよ」

「んー、でも、」

そう答えながら、彼女はキョロキョロする。

「もう困まれてるんじゃないかしら？」

「え？」

今、とんでもないことを言わなかったか？

言葉の意味を理解し直そうとした、その時

ガサツ！

不意に視界の端の茂みから何かが飛び出した。

「…いつ?!」

それは大型の獣、

一見して猫のように見えるが、サイズが違いすぎる。

リンクスというヤツだろうか？

俺は咄嗟に腰の剣を抜く。

「気付いてるなら、早く言え！」

「だってえ…喋っちゃダメみたいだったんだもん……」

そんな可愛らしくシユンとしてもダメだ。

先に「ヒマよねえ」とか言う前に教えろ…。

獣は次々と姿を顕す、その数は数十匹。

「いかな…散開しろ！」

ブルーノの声に、一同は動き出す。

正規のパーティを組んでいるわけでもないんだ、各個人で立ち回るほうが都合がいいわけだ。

「くっ！」

俺は迫り来る獣の鋭い爪の一撃を凌ぐ、

さすがに動きが速い、反撃する前に間合いが開く、足場が悪く、下手に走れば転倒するかもしれない。

一方相手は庭同然の森だろう、遠慮なく走り回っている。

「このっ！」

そこに続けて、また爪の一撃が放たれるが、これも凌ぐ、

ガサツガサツ…

不意に背後からの物音、

そして耳に流れ込む荒い息遣い。

「！」

振り返ると、そこに別の獣が姿を顕し、

今まさに俺の首に飛びかかるうとしていた。

「がっ　?!」

俺は側面からの衝撃を受け吹っ飛んだ。

辛うじて、受身を取るが…おい、痛いぞ？

「なに、礼はいらんぞ」

視線を向けると、首の無い先程の獣と、刃を抜いたルーヴィック。

あの一瞬で獣の首を刎ねたらしい。

俺は身を起こし、ヤツに言葉を掛ける、

礼を? いや違う。

「だからって蹴り飛ばすんじゃねええ！」

「コラー!ちゃんとお兄ちゃんにお礼を言いなさい!

ネコでもお礼を言うわよ？」

俺の悪態にリルドナが激を飛ばす。

なんでイチイチ俺はネコと比較されるんだ。

「リル、荷物を頼む」

「はいはい、かしこまりっ！」

荷物をリルドナに任せたルーヴィックは大きなリユックに姿を変えていた、

のではなく、荷物を置き去りにして動き出した。

俺も荷を降ろし、身軽になる。

それは当然、命のほうが大切だから。

ズウ…ン

不意な振動、地震か？

「おい、邪魔だ…」

「な…！」

不意に目の前を巨大な鉄の塊が倒れこむ。

その正体は、巨大な幅広の剣。

打ち下ろされると同時にズウ…ンと小さな振動が起きる。

剣の下には…見たくも無い肉塊が、なんとも哀れな姿だ。

「もう少し離れる、巻き込みそうだ」

「す、すみません」

巨漢の剣士　ガデイだった。

その体格に負けず劣らぬ巨大な剣を振り回している。

時折、周囲の樹木を巻き込むが、哀れ罪の無い木は薙ぎ倒されていく。

俺はそんな木の仲間入りしないように、離れる。

立ち居地も空気も読めない人物に思えた。

ドオ…ン

今度は爆発音、雷鳴か？

ではなく、これはロイのマスケット銃の音だろう。

彼は的確に狙いを付け、確実に仕留めていく。

だが、銃は再装填に大きな隙が出来る、その瞬間を巨大な獣が槍で薙ぎ払われた。

「オラオラッ、堂々と背中向けて隙作ってんじゃねえ！」

「それがゼルの仕事でしょ、文句言わないでしっかり護衛頼むよ？」

銃兵を護衛する槍兵、なるほど本当にいいコンビのようだ。

お互い罵り合いながら、次々と獣の群れの数を減らしていく。

ゴオオオ…！

今度は燃えるような熱感、火炎か？

それはそのまま炎だった、あのアビスという魔道師が炎を発している。

業火は次々と獣を飲み込み、ただの焦げた肉塊へと変えていく。不思議なことに、森の中であれほどの炎を放っているのに、燃えるのは獣だけ。

何かしらの対象制限をかけているのだろうか、到底俺には真似の出来ない技術だ。

しかし、魔法の詠唱は銃の再装填と同じく、大きな隙を作る。

俺の心配に応えるかのように、ターバンにマントを羽織った男

アーカスが割って入る。

彼は独特の形状の刀剣　カトラスを振りかざし、群がる獣を追い払う。

この二人、仲間だったのか？

「アンタには触れさせねえカラ、しっかり駄賃は頼むぜ？」

「わかつている、全く食えない男だ……」

同じ仕事を請け負っている人間から報酬を取るのか…なんとも曲者だ。

だが、腕は確かなようだった、口にした通りことごとく獣の攻撃

を阻んでいる。

「さすがだな…」

こと戦闘に関してはまるで俺の出番は無い。

むしろ近づくと邪魔になってしまっ、

自分が標的にされない限り手出し無用だろう。

そう割り切り、高みの見物に興じようと視線を巡らせた。

「あ？」

何やら木陰に置かれた物を漁る小さな人影。

置かれた物は…俺の荷物だ。

小さな影は、子供のように見えるが、なぜこんなところに？

思考を走らせてる間に、人影も走り出す。

「おい、待て！」

俺は慌てて追いかけた、少し迂闊だったかもしれない。

5 - 7 どう考えても罠でした

俺は逃げる小さな影を懸命に追う。

足を働かせながらも思考を巡らせる。

こんな場所に人間の子供がいるわけではない。

何かの亜人か何か？

早く捕まえなければ…あまり単独で遠くに離れるのは危険だ。

足はあまり速くないようで、なんとかその小さな肩を捕らえる。

「おい、それは俺の」

言いかけた言葉が凍りつく、ある程度覚悟はしていた。

振り向かせたその顔は、犬の頭のようにだった。

子供が犬の被り物しているように思ったが、

そんなのあり得ない

コボルトというヤツではないだろうか？

たしか、邪悪な妖精だか精霊だとか本で見たことがあった。

記述では坑道や地下に住むとあったが、その真偽を確かめる術は無い。

「くそ、いいから返せっ！」

疑問の靄を振り払い、荷を取り返そうと力を込める。

しかし、再び凍りつく。

ガサガサッと次々とコボルトたちがぞろぞろと姿を見せる。

数は十数匹、その手には木製らしい棍棒が握られている。

やられた、まんまと誘き寄せられたか。

俺は一旦手を離し、間合いを空ける 包囲されない為だ。

腰からショートソード抜き構える。

本の記述通りなら、さほど手強くないヤツらの筈だ。

コボルトが飛び掛り、棍棒を振るう

俺は難無く避ける、やはり大したことは無い。

再びコボルトの一撃、今度は受け流し、俺はそのまま頭部へと剣を振り下ろす。

フェアリーリングを目撃したら、立ち去るべきです

「くっ…」

しかし剣は空を切る。

俺は慌てて間合いを取り直す。

別のコボルトが飛び掛ってくる、

俺は咄嗟に剣で切り払おうとする。

ただ楽しく踊っているだけ、そっとおいて上げてください

「クソッ…!」

再び剣は空を切った。

直後、肩に鈍い衝撃、続いて腰、背中と次々と被弾する。

なんだよ、どうして？

どうしてリウエンが邪魔するんだよ…。

俺は頭部へと打撃だけは免れつつ、防戦一方を強いられる。

致命傷は来ない、しかしこのままではマズイ。

「アンタ何やってんの？」

いい加減聞きなれた声だったが、この時ばかりはミルクのように甘く感じた。

彼女は喋りながらも、次々とコボルトを殴り飛ばしていく。

「なに、一方的に殴られてんのよ、このワン公どもアンタの知り合いなのか？」

呆れ顔で面倒臭そうに、そう言い放つ。

手には鞘の付いたままの太刀、つまり鞘ごと打ちつけていたらしい。

片手で太刀を持ち、そのまま自分の肩にポンポンと弄んでいる。さて、どう返事してやろう、正直にリウエンの所為には出来ない。

真面目に考えることでもないか。

「実はそうなんだ、あれは俺の先生の兄弟の息子の借金相手の飼犬の友人なんだ」

「え？あ？ん？？」

目を点にして、なにやら片手の指を折って確認している。

「ヤバイ…コイツ、頭は不器用なようだ。」

「とにかく、殺さない程度にやってくれ」

「あ…はいはい、かしこまったわ」

弾かれたように動き出し、次々とコボルトを打ち付ける。

コボルトの棍棒を潜り抜け、流れるように太刀の柄を打ち据える。不意に後方からコボルトが飛び掛る。彼女は身体を捻り、そのまま遠心力で太刀を払う。

強烈な打撃に小さなコボルトの身体は木に激しく打ち着けられる。彼女はそのままそのコボルトに歩み寄り、太刀を突きつける。

「もう観念なさい、いくら無能の知り合いでも」

ガシッとコボルトはその鞘を掴んだ。

その行動に彼女は赤い瞳を見開き、一気に太刀を引き抜く。

当然、刃は鞘から抜き去られ、キラリとその刀身を晒す。

ザシユ…

鈍い斬撃音と共に、切断面よりずり落ちる…背後の木が。

リルドナは、コボルトの頭よりやや上に刃を走らせ、背後の木を切り捨てて見せた。

「次は本当に斬るわよ？」

「いくら慈悲深いあたしでも、いい加減にしないと容赦しないわ」

その慈悲と容赦を俺にも向けて欲しいものだ。

彼女の圧倒的な暴力の前に、コボルトたちは散り散りとなって逃げていく。

「おっと、それは置いていけっ」

一番最初のコボルトを蹴り飛ばし、倒れたところから荷物を取り返す。

大した物は入っていないが、近くで一緒に置いてあった兄妹の荷物はデカすぎたんだろう。

「すまん、助かった」

声を掛けるが、返ってくる彼女の返事は歯切れが悪い。

「ね、ねえ？」

「なんだよ？」

「アンタの飼い犬の先生の兄弟の息子の借金相手の友人だったら、また指を折って確認している、今度は両手だ。」

「ぜんぜん、知り合いでもなんでもないんじゃないの？」

「まだ考えていたのか…すまん」

しかも微妙に順番違って伝わってる…。

手先は器用だけど、頭は不器用、覚えておこう。

「とりあえず戻るぞ、あまり離れすぎは危険だ」

「あゝはいはい、」

その時、踵を返し、目に飛び込んできたのは、

巨大な身体に巨大な斧を手に、まるで牛のような頭を生やした人物。

あのー

なんで貴方のような方がこんなところにいらっしやるんでしょうか…

あまりにも有名な彼は、普通ダンジョンの奥で財宝か何かを護つてないか？

皆もよく知ってる、この正体は

「みのたろつ?!」

「なんか違うと思うぞ…」

「みのもん? ものみん…? もーもーかしら?」

頼む、わからないなら、素直にわからないと言ってくれ。

正直な表情の持ち主だ、今もそれは発揮されている。

あたかも『あたしバカです』というような顔をしている。

「無理に考えるな…」

「じゃあ、ももたろす!」

この間、空気を読んで待っていてくれる彼に敬意を表する。

その気持ちも込めて、訂正した。

「ミノタウロスだ!」

「惜しかったわねっ」

惜しくねえ…という気持ちに左遷を言い渡し、俺は再び戦闘態勢をとる。

見るからに手強そうだ、俺の剣が通じるのか?

「先に聞いとくわ」

「なんだよ?」

「コイツもアంతの知り合い?」

「心配するな、答えはノーだ」

「ハイハイ、かしこまりっ!」

返事と共にリルドナは地を爆ぜさせ、エサを見つけたノラネコの
ように飛び掛る。

俺も一拍遅れて、斬りかかる。

「おっとお、甘いわ!」

彼女は丸太のような腕から振り下ろされる巨大な斧の一撃を身軽
に避ける、

そして、そのままの勢いでミノタウロスの脚を斬り抜く。

俺もそれに倣ならって続けて脚を斬りつける。

「ぐっ?!」

硬い、それが第一印象、

装甲の類は身につけていないのに、まるで岩でも斬りつけたよう
だ。

俺の一撃はその強靱な肉体に打ち勝てず、弾き返された。
そこに容赦なく、ミノタウロスの斧が飛来する。

ガキイツ

咄嗟に手にした剣で受け止める　　が、凄まじい衝撃を受け、そ
のまま後方に飛ばされる。

「　　がっ！」

そして背中から前方へ駆け抜ける衝撃と痛覚、
その強烈な衝撃に一瞬呼吸が止まる。

どうやら木にぶつけられたようだ。

「無能！大丈夫なの?!」

「いてえけど、大丈夫だ」

リルドナは俺の言葉に安堵した表情を浮かべ、再び斬りかかる。
彼女は俺のような愚行は踏まない、振りかかる一撃は全て避け、
隙を縫うように斬り付ける。

「速い…」

そうとしか形容できなかった、ミノタウロスの振るう斧はことごとく
空を切り。

ミノタウロス自身がわざと外しているような錯覚さえおぼえる。

カッン…

「あっ」

不意にリルドナの太刀の切先がせり出した木の根に引っ掛る、
それは中途半端に食い込んでしまい、彼女の動きを止める。

マズイ！

「おい、こっちだ！」

気付けば弾かれたように斬りかかっていた。

突然の声に、ミノタウロスは斧の標的をリルドナから俺に変える。

それはすくい上げるような軌道で俺に襲い掛かった。

ガキイイッ

剣で受け止めたものの、激しい衝撃とそのあとの浮遊感。

直後、バキバキという感触と共に身体に硬い衝撃。

飛び掛った意識を呼び戻し、視線を周囲に走らせる。

沢山の木の葉や木の枝が目飛び込んでくる。

打ち上げられて、木の上にも乗ったか？

「ちよつと！無能、大丈夫なお？！」

「やはり、痛いが生きてるぞ……。」

下からの声に返事をする、やはりここは木の上のようだ。

すぐに降りたかったが、どうも服のどこかが引っ掛っているらしい。

中途半端な体勢で縫い付けられたような感じかもしれない。

「悪い、しばらく牛の相手は頼む！」

「……?! どこか怪我したの？」

「すまん、どこか引っ掛けて降りられないだけだ……。」

俺の言葉にまた安堵した気配を見せ、

「もう、あんまり無茶しないでよお」

そう言い放つ顔は見えなかったが、耳が赤くなっているようだった。

ああ、そうか、一応俺が助けに入った形になったんだよな。

対峙する双方の身長差は実に倍、小柄なりルドナがさらに小さく

見える。

お前こそ無茶するんじゃないぞ。

再び彼女はミノタウロスに斬りかかる。

今度は攻撃をギリギリまで引き付けて、カウンター気味に攻撃を当てる。

斧が彼女の髪を掠め、バラバラと何本か宙に舞う。

構わず彼女は刃を突き出す。

「ググウツ…！」

さすがに効いたのか、初めてミノタウロスは声を漏らす。素早く刃を引き、両手で持ち直し上段斬りを見舞う、それに対し咄嗟にミノタウロスは腕で刃を受ける、

さすがに鍛え抜かれた腕は強靱でそのまま切り落したりは出来ない、

リルドナはそれを見極めたのか、無理に押し込まず、刃を滑らせ振りぬく、

振りぬいた慣性を利用して身体を回転、遠心力を乗せてそのまま脚を斬り払う。

そして回転を急停止させ

今度は慣性の停止反動を利用して斬り上げ、再度脚に傷をつける。

「グガツア…！」

最後に、殴りつけるような横薙ぎの斬撃で攻撃をわざと弾かれ、その反動をも利用して間合いを空けた。

「結構、しぶといわねえ」

「お前、すげえな、その太刀捌きなかなかカツコいいぜ」

「え?! そ、そそそう?」

律儀にリアクションをしてくれる、背けてしまった顔は見えないがきつと真つ赤だろう。

照れんでいい、集中してくれ…迂闊に褒めれないな、こりゃ。

「もう、集中できないわ、ちよつと黙っててね?」

俺は言われた通りに押し黙る、

不思議とリルドナが負けるとは思えなかった。

フツ…

彼女は目を細め身を低く構える。

猪を仕留めた時のあの目だった、

長くないの静寂の後、赤い二つの光が閃いた。

「アアアアア…！」

咆哮に近い掛け声と共に彼女は低い姿勢で突進する。

ミノタウロスも迎撃しようと試みるが、

あまりの速度に斧は虚しく大地に突き刺さる。

その小さくない硬直をリルドナは決して見逃さない。

体重の乗せた縦斬り、平突き、身体を捻つての横薙ぎの払い、

そしてまた縦斬りへとループする連続技で、容赦なく斬り刻む。

ミノタウロスに斧を引き抜かせる隙は一切与えない！

「ググウツ…グア…！」

耐え切れずに低い呻き声が次々と零れる。

とうとう痺れを切らし、斧のことを諦め、

そのまま掴みかかろうと彼女に手を伸ばす、

この体格差だ、掴まれればリルドナもひとたまりも無い。

「グガア…！？」

ミノタウロスの手の甲から刃が生える。

「アンタ、牛の癖に欲張りすぎよ。」

そして素早く抜き去り、刃を返した。

痛みで硬直した相手の腕目掛けて渾身のフルスイング。

「！？」

さすがに声にならないだろう、鈍い音と共に太刀の峰が腕にめり込む

あれは尺骨が折れたかも知れない。

あまりの痛みに悶えるミノタウロス。

もう戦意は失われているはずだ。

「観念なさい、命を散らすか、それともココで死ぬか選ぶ？」

「それ、どっちも死亡だぞ」

「あ…あれ？」

とか言い合ってる隙に…

ドシドシと大きな身体を震わせながら森の奥へと走り去った。

「ありゃ、逃げちゃったわね」

「おいおい、良かったのか？」

「別にいいわ、人の形してるモノを甚振るのは心痛むしねえ」

人の形よりも人自体にその慈悲を分けてくれないモノだろうか？

しかし、今の俺は吊るされた哀れな子羊だ、へたなことを言えない。

とりあえず、いかにして説得し、下へ降りしてもらえるかの算段しなければ。

俺の交渉人としての真価が問われそうな気がした。

「で、」

「……」

「いつまでソコにいるわけ？」

「すみません、タスケテクダサイ」

「やっぱり直球勝負でいこう。」

「へたな小細工は余計に状態を悪くする。」

「へたに捻ると、コイツが理解出来なくなるかもしれない。」

「素直でよろしい」

「そう告げる彼女の顔はネズミを追い詰める三毛ネコのようだった。」

「絶対、何かする気だ！」

「頼むから、普通に降ろしてくれよ……」

「あたしってバカだからあ普通の意味わからないよねえ」

「と言い放つとゲシゲシと木を蹴りだした。」

「コラ木を揺らすんじゃない。」

「ん、コレって」

「何かを見つけたらしい。」

「アンタの剣じゃないの？」

「まったく、こんな所に落としてあぶな」

「バキツ……！」

「俺が身体を預けている枝が折れ　　?!」

「直後に一瞬の浮遊感。」

「　　がっ！」

「　　むぐう?!」

「そして全身を駆ける衝撃と痛覚、」

背中から落ちて一瞬呼吸が止まった。

？

の割りに、痛みは想定外のユルさ、
なにやら背中であらかいものが動いている、

「ちよつとお！どきなさいよ！」

どうやらリルドナの上に落ちたらしい。

背中であら聞きなれた声があも発せられている、
ただしいつものソレよりも二割ほど弱々しい。

通りであまり痛くないわけだ。

こちらからは見えないが

きつとカエルのように押し潰されているに違いない。

「とにかく、早く…どけえ！」

背中越しなのでよく判らないが、

彼女は必死にジタバタもがいているようだ。

これが逆向きだったら、かなり不味かったと思う。

いくら力が強くても、悲しいかな小柄故に軽量。

こうやって完全に押さえ込まれると、どうにもならないらしい。
意図して押さえてるわけじゃないけどな。

「わるいわるい、」

身体を起こし、リルドナを開放する。

そもそもお前が木を揺らすからいけないんだぞ？

彼女は悪態を付きながらも身を返し、身体と声を勢い良く立てる。

「まったく、チャツチャどきなさいよ あ？

むぐう?!」

ベシヤッ

と彼女は前のめりに吹っ飛んでいた。

あれは顔から行ったかもしれない…。

「あ…:」

どうやら、俺が袴の裾を踏付けていたようだ。

彼女は勢い良く立ち上がろうとしたので、

思い切りつんのめり、激しく吹っ飛んだようだ。

「悪い悪い、踏んじまって」

その刹那、空気が凍りついた。

リルドナは前のめりで遙か前方に吹っ飛んだ。

袴は俺の足の下にある。

…。

そうそう、皆エビは好きか？

俺は好きだぞ。

殻を剥くのが面倒？

いやいや、あれは殻ごと焼いた方が美味しい。

基本的に食材は骨とか殻と一緒に調理した方が味が出るよな。

むしろ殻と骨にこそ感謝すべきだと思う。

それで、殻ごと塩焼きにするんだ、

焼けたら火傷しないようにパリパリっと殻を剥くんだよ。

で、尻尾のトコもちよっと難しいけど爪で亀裂入れて割りながら

引っこ抜くんだ。

上手いコト、尻尾が千切れずにスポンッと抜けると、なんか気分

いいよな？

…まあ、長くなったがつまりそういう状態。

どう力が掛かれば、あそこまで綺麗にスッポ抜けるかは判らない。

視線の先には、殻を綺麗に剥かれたエビが前のめりに突っ伏して

いる。

…とりあえずピンクだった、意外にも中に穿いてる物は黒じゃな

かった。

黒のハイソックスとのコントラストが眩しいとか、ここで書くと

マズイので割愛する。

今は重大な選択肢の前に直面しているんだ。

「コ、コレ…返す」

袴を手渡すが、受け取るその手はわなわなと震えている。

「　　おい、」

「む、どうした？」

見つけた、俺の神々の^{アースガルス}皆。

「恥を承知で頼む、俺を助ける」

「いきなり、なんだ？」

そういうルーヴィックの足元には先ほどの獣の首の無い死骸が転がっている。

あれだけの数を一人で仕留めたというのか、転がる死骸の数は計り知れない。

「凶悪なアークデーモンに追われている、俺では手に負えん。」

「デーモン族？この森には居ないはずだが…」

そう呟くルーヴィックを説得し

ドドドドドドドドドド…！！

悪魔の雷鳴のような足音が轟く、頼むぞ^{ルーヴィック}最終防衛ライン！

「来た…！頼むぞ」

「心得た」

ヤツは応え、迎撃の体勢をとる。

ドドドドドドッ！

ズザッ

悪魔がたどり着き急停止、

そして迎撃の構えは弛緩する。

「お兄ちゃんどいて！ソイツ殺せない！！」

殺すとか言っつてやがる、即見極めてエスケープして正解だった。

おいおい、手に持つ刀身が赤く光ってるように見えるのは気のせい
いか？！

「おい…対象はコレか」

「どうだ、恐ろしいアークデーモンだろう？」

封印された伝説の武器のようにルーヴィックは押し黙る。

そして短くない時間思索し、鎧戸のように重くなった口を開く。

「…殺されるのは困るな」

「お兄ちゃんはソイツの味方なのっ?!」

「今晚の対局相手が死ぬのは困る」

「心配はそこかよっ」

いや、この際助かるなら贅沢は言えん。

「…リル、そんな長い刃では、俺の斬撃は凌げないぞ?」

「うー……」

「悪いことは言わん、刃を収める」

ヤツの言葉にアークデーモンは渋々と刀を鞘にしまう。

さすがは最終防衛ライン。

「俺は盤上での城兵だ」

うん、実に頼もしい限りだ　と口にしようとした瞬間、

俺は、ヤツに手繰り寄せられ、

グルリと、その身を入れ替えられた。

「キヤスリングも可能だ」

「デュピラス・アップ本当にそれでいいのか?」

「大丈夫だ、問題ない」

だから、問題があるのは俺の方だ。

そして追い討ちを掛けるように俺に告げた。

「苦くても飲め、それも今すぐにだ」

おい、それは俺の名言だぞ、パクるな。

見せる表情はやはりあの笑顔。

「やっぱりお前は信用できねえ……」

「殺すなよ」

「善処…するわあ……」

じりじりと迫る最強の悪魔。

俺は地獄のカルドロンに放り込まれた。

「ネコ踏んで死ね、オルアアアア……!」

「おい！何遊んでんだオメーら！！」
薄れ行く意識の中、そんなゼルの声が聞こえた気がした。

俺たちは最初の魔物の襲撃を無事に凌いだ。

死者は無し、軽傷者一名（俺）。

俺たちの仕事はまだ始まったばかり

6 - 1 今日の回復は調子がいいですよ？

```
a : ¥ < c :  
c : ¥ < c d   B l a u e A u g e n  
c : ¥ B l a u e A u g e n < Y g g d r a s i l l . b a t  
r e a d | t i t l e s . c o m / f  
ゆつくり読んでね . c o m / f / h  
Y g g d r a c a s t . e x e  
u s e r n a m e : R e w h e n  
p a s s w o r d : * * * * *  
c a s t m o d e : V o r l e s e r   v o n   Y g g d r a s i  
l l  
n o w   l o a d i n g . . .  
o k  
— s e l e c t   a n y   t i t l e s ?  
* * * * *  
* * * * *
```

時とともに、日はやや昇り、

秋の早朝の肌に刺さる厳しい空気も和らいできている。

だが、ここは依然として薄暗く肌寒い。

妖精の森の奥：本来、人が踏み入れるべきでない場所。

招かざる一行はただただ歩を進める。

俺は意識を集中し静かに詠唱を始める、
ボウ…と微かに発光し、傷口がほのかに温くなる。

ヒールの魔法 覚えておいて損の無い魔法の第一候補だろう、
効果の方はさておきで、ちょっと頑張れば誰でも覚えられる手軽
さがウリだ。

「……お？」

自らで施したことなのに、驚いてしまった、
何か失敗したから？

いや、その逆で大成功したからだった、
あれほど痛んでいた身体がすっかり治っている。

……何？

何で傷を負ってるか？だと？

つい先程の『ピンクの剥きエビ事件』で名誉の軽傷を負ったから
だ。

あれは不幸な事故だった、うん。

「へー、キミは回復魔法を使えるんだ？」

一連の動作を観ていたのだろうか、ロイから声が掛かる、
そちらに目を向ければ、並んでゼルも興味深そうにこちらを伺っ
ている。

「いつもは もっとシヨボーイ回復しか出来ないんですけど、今日
は……うーん」

「なんだそりゃ？ てめえのことなのにわかんねえのかよっ」
ゼルにも突付かれるが、そうは言われても困る、
なんせ本当に心当たりが無いのだ。

さらに思考を深みへと潜らせようとしたが、

「ともかく、傷が癒えたなら、そろそろボク達も移動しよう」

「あ、そうですね、早く追いつかないと」

冒頭にも述べはしたが、本隊は今も行進中だ、俺だけ治療のために歩を止めていたのだ。

一人では危険だろうと、この二人が残っていてくれたのだ、…ありがたい限りだ。

歩きながらも話は続く、ロイはやや俺の前方を進みつつ口を開く、「無理せずに待って貰っても良かったんじゃない？」

「いえ、自分の所為で全体を止めるわけにはいきませんから…」
傷を負ったのも、魔獣によるものではなくリルドナに殴られたから、

他人から目には、ふざけてて事故った程度にしか映らないはずだ。そして問題の彼女は、俺を殴るだけ殴って「バカ！」と声を上げて、

ズカズカと先に行ってしまった…目が潤んで見えたのは気のせいだろうか。

「でも、なんでまだケンカなんてしたんだい？」

「いえ、俺は一度も殴り返したことはありません…」

「そういうコト言ってるんじゃないかねえ、どうして怒らしたんだ？」

いつの間にかゼルまで俺の詰問に参加している、
護衛と思っていた人間が尋問官に変貌したようだ。

「それは」

森を吹き抜ける冷たい秋風が、俺の鼻に草の匂いを運んでくる、
すぐ前を歩いているロイが妙に遠くに感じた。

「うーん、それはちゃんと謝ったほうがいいね、」

「そうなんでしょうか」

俺にも過失がありはしたが、そもそもあの女が木を揺らすからいけないんだ、

謝罪しようにも耳を貸すことも知らないし、

そしてその後も好き放題に殴りやがって、一方的にこっちが痛いじゃないか。

俺の想いに対し、ロイから投げかけられた言葉は

「なんで殴られたか考えてみなよ、」

「殴られた理由なんて、いつもと同じ
理由は同じ？」

俺が最初に殴られたときは、確かリウエンが転んだのを助け起こそうとしたのを勘違いして、その次がリウエンの下着を過失とはいえ、覗いてしまったから？そして、今朝のはリウエンを泣かしてしまっただけか……

あれ？

全部……リウエン絡みじゃないか。

でも、今回ののは……

「どんなに、粗野で乱暴に振舞ってても、女の子なんだよ」

「……」

「ま、大切にしてくれよ、てめえの女なんだろ？」

「……………へ？」

何を言っているんだ、この男は……何度言葉を思い返しても意味がわからない、

俺の理解力が足りないのか、それとも何かの暗号なのか？

そして考えが至らずに俺は啞然としてしまっていたようだ、

「ありや、違うのか？」

「すみません、まだ出会って三日目なんですけど……」

あの兄妹とはすっかり馴染んで常に一緒に行動しているが、

……この仕事で知り合った仲なのだ、

いきなりそういう見解を押し付けられても困る。

「随分と手の早いアンチャンと思ったが、それでもねーのか」

「ゼル、あんまり茶化すのはよくないよ」

まあ、ボクもすごく仲いいな、とは思っただけだね」

二名の尋問官は俺を解放する気がないらしい……その視線は俺の顔を捉えて離さない、まるで身に覚えが無い、どうみたら仲良く見えるのだろうか？

「まあ、なんだ……」

納得いかねーかも知れねーが…謝っとけ、そういう誠意が大切なんだぜ？」

「ゼルこそ、日頃から誠意を感じられないけどね？」

「な、なんだよ」

ロイは急に矛先をゼルに変更したらしく、その表情をゼルに向けている、

まるで悪戯を思いついた少年のようだ……

歳いくつなんだろう？　ちなみに俺は十九歳、今更だけど。

「あんまり誠意を欠いていると…『レッドアイズ』に連れ去られる

よ、

「なんで今頃、そんな怪談出してくるんだよっ！」

意地悪くゼルに迫るロイ、どうやらゼルはこの手の話が苦手なようだ、

その顔は明らかに「聞きたくない！」という顔だった。

とりあえず話に着いていけそうに無かったので、俺は口を挟む、

「レッドアイズってなんですか？」

「えーっとね…」

この地域で伝わってるお話なんだけど、新月の夜に顕れる魔物なんだ」

「あれは精霊じゃなかったのか？」

二人の間で認識が食い違っていたらしく、すかさずゼルが口を挟んだ、

だが、その言葉にロイはさらに意地悪い笑顔を見せる。

「子供の頃のゼルが怖がってくれたから、どっちでもいいんだけど

」

「うおーい！」

なるほど、この二人は幼馴染の腐れ縁なんだろうな、

とりあえず脱線しそうだったので、ロイに先を促す。

「どういいう魔物なんです…：やっぱり赤い目玉の怪物ですか？」

「いや、その姿は、闇そのもので殆ど見えないんだけど、その中にポツンと赤い光がおぼろげに見えるらしいんだ。」

「暗闇に赤い点ですか……？」

「なんとも想像の着かない姿だ、暗闇で赤い点だけ？」

「うん、それがあたかも大きな黒い身体を持つ」

赤い瞳の魔物に見えたところからその名がついたみたいなんだ」

「闇そのものを魔物と捉えた……という介錯ですか」

昔の人間はなんと想像力が豊かだったのだろうか、

赤い点だけなら、小さな赤い球の魔物で済むのに、

闇自体を身体と見立てるとは……。

感想はともかく、そもそのツツコミを入れよう、

「でも、昨晩は満月でしたし、新月にはまだ遠いと思いますよ」

「ありゃ、バレちゃったか」

俺の指摘に肩を竦めて見せるロイ、意外と悪戯好きなのかも知れない、

そんなやりとりに、ゼルは舌打ちをし、そっぽを向くのだった。

「とりあえず、俺はそんな新月限定の魔物よりも、

小柄で気まぐれな赤瞳レッドアイズに謝るほうが問題ですよ……」

「うんうん、頑張れ頑張れ」

そんな俺のぼやきに満足そうに答えるロイだった……絶対楽しめるな。

俺は決心を固め、森の悪路を踏みしめる足に力を込め直す、

さて、なんて切り出すか……やっぱり直球勝負かな？

その瞳に負けなくらい真っ赤に染まった顔が思い浮かび、

俺は自然に小走り気味に歩を進めていた。

6 - 2 意外と素直になれませんか

相変わらず森の空気は重く、冷たい。

俺はその空気を押しよけのように駆け、ゼルの「走ると危ねえぞ」という声にも「やる気満々じゃないか」というロイの激励も置き去りにし、ただただ突き進んだ。

初めは迂闊に走れば転倒し兼ねないと思っていた森も、慣れてくれば意外と走れるモノだ、

そう長くない時間で先行する団体に追いついた。

俺の到達に気付き、黒い細長い影がこちらを向いた。

「ほう、もう傷はいいのか？」

「何故か、バツチリ癒えた…えーっと、リルドナは？」

「ふむ？」

ル・ヴィックは相変わらずの無表情の鉄仮面でこちらを見据えている、

それは値踏みするような仕種にも見てとれた……

そしてヤツの戦塔の迎撃窓のような口が開いた、

「なるほど…お前もか、」

「な、なんだよ…『も』って」

そして例の笑顔を見せる、

「さて、なんのことやら」

「で、どこなんだよ？」

俺は嫌な空気を振り払うように、少しトゲのある口調で促した。

しかし、ヤツにそんな攻撃は通用しない…まるで意に介すことも無く、

「少し暴走気味に走り回っているだけだ」

そこで言葉を一端切り、懐から時計を取り出し一瞥し、

「あと三秒だ」

「おい、短いぞ?!」

何にツツコミを入れるべきか定まらぬまま、間の抜けた言葉を発してしまった、

今一度、声掛けなおそうとを言葉を模索している間に

「あーっ!」

「う」

いつの間に姿を見せたのか、彼女を鉢合わせしてしまった「バツタリ出会う」という感じだろうか。先程の決心は何処へやら、すっかり言葉に詰まってしまふ。

視線をヤツにスライドすると、やはり笑いを堪えているようだ、素直に「すぐに戻ってくる」と言ってくれればいいのに……やはり性格悪い!

そして視線を彼女に戻す、ん……?何か手に持って

「あ」

俺の視線に気付いたのか、サツと後ろに隠す。

そして相変わらずの目をクリクリと泳がせる彼女……

しかし、それが何なのかすぐに見当が付いた 例の救急箱だ。つ。

その瞬間に何かの感情が爆ぜた、自然と口が開く、

「さっきはすまん!」

「えっ?!」

「謝りもせず逃げて、拳句に悪魔呼ばわりだ、そりゃ怒るよな……」

「っ!」

周囲に他の人間がいるのもお構い無しに俺は頭を下げた、

その言葉に彼女は戸惑った素振りを見せ「別にいいわよ」とそっぽを向き離れようとしたところを、ルーヴィックにガシツと頭を掴まれワシヤワシヤと頭を撫でられ、拾われた仔ネコのように大人しくなるのだった。

状況がわからず、啞然と立ち尽くす俺に対し、

「今のでいいんじゃないかな？」

「うむ、問題ない」

ロイとルーヴィックのそんな言葉が降り注いだ。

そして俺の思考が追いつかない内に、リルドナはヤツの手から開放され、お魚啜えたノラネコのように逃げ去った。

なんだなんだ？

俺の肩に手が掛かる　ロイの手だった。

「リルちゃんもキミに謝りたいと思ってたんじゃないかな」

「はあ…そうなんでしょうか」

突然の出来事に、間の抜けた声しか出せなかった。

ちゃんと謝ることが出来たのだろうか…

6 - 3 魔法も使い方次第なんですよ

相変わらず森の空気は重く冷たい、

それ以上に周囲から白い目で見られる空気が重かった…

周囲の警戒しつつ慎重に行動すべき状況にも関わらず、あれほど私事で騒げば当然だ、あの二人組み…ゼルとロイはまだよかったが、他の人間は知人というわけもなく、

ごくごく、自然な結果だ…というか彼ら二人も知人というわけでもない、

なんだかんだ言っても、仲良く出来ているのはリルドナのお陰なのかもしれない。

「あ…」

歩を進めながらメンバーを見渡していると、不意に眼鏡の男スルーフと目が合った、彼は一瞬、汚い物を見るような目を顕し、すぐにパイッと視線を逸らした。

やはり俺たちは相当印象を悪くしたらしい……

普段の俺なら誰とも特別親しくなることなく仕事を終えるのだ、別に苦にはならない。

もう今更友好関係を築こうとも思わないので、

彼らと少し距離をとり大人しく併行しているルーヴィックの方へ

俺は歩み寄った。

「なあ」

「どうした？」

森へ入った時の緊迫させた集中力はとくに切れている、

俺は小声で話しかけ、ヤツもそれに合わせてくれた。

「さつき、ヒールで治療してたんだが…」

「ふむ、なにか問題が？」

「効果がいつもより大きかったんだ」

そう、俺の能力じゃクソ長い詠唱を費やしても、ほんのチョッピリの効果しか得られず、

軽傷といえど、何度も小さな効果でチビチビと治療するしかなかった筈だが…それが一発でほぼ治った、

良い誤算だが、それが気にならないとは別問題だ。

「何か新しい術式でも取り入れたか？」

「いや、俺は術式も何も活用してないし、そもそも知らない」

「ふむ、妖精の森の霊力の影響を受けたか？」

「そ、そうなのか？」

よくわからないが、今はそういうことにしておこう、

何故なら別の質問が思い浮かび、そちらの方が気になりだしたからだ。

「おそらく…術式による制御だろうな」

「術式なのか？」

俺を想像を確実にするために聞きなます。

別に知って役立てられるかどうかわからないが、好奇心からの質問だった。

先程のリンクスを焼き払った　アビスの魔法を思い返し、
ダメ元でルーヴィックに振ってみたら…アタリだった。

「そうだな…術式は、魔法という荷物を運ぶ…荷車と思えばいい」

「すごい大雑把な介錯だな」

「そもそも術式とは、魔法の扱いの手段を示す言葉だった」

「　だった？」

思わず聞き返してしまいが、ヤツは気にせず先を進めてくれる、
「うむ、いつの間にか意味が曲解され、

魔法そのものや、魔法と手段を合わせた一連の動作そのものを指すようになった」

実にわかり難い説明だ、ヤツにそれを告げると「習わなかったのか？」と聞き返された、

正直言つと魔法は専門外だったし、それが理解できるならもつと高位の魔法を習得している。

俺の理解を得ない顔を読み取ったのか、違う切り口で話を始めた、
「では、例えばの話だが…ここに怒りで熱暴走するリルが居たとする、」

「いきなりなんつー例えだ……」

俺の頭の中に、怒りの炎で赤い瞳をギラつかせるリルドナが配置される。

うわっ、これだけで既に怖いぞ？

「そして、お前はソレを冷却するために、リルにバケツで水をぶっかける、」

「さらになんつー展開だ……」

「するとどうなる？」

えーっと…水を頭から被ったリルドナは一瞬怯む　が一瞬だけだ、周囲が水浸しになっただけで、冷却したい対象はさらにヒートアップ！火に油を注ぐような真似をした俺はそのまま彼女の手に捕まってしまう、そしてそのまま恐怖の無限コンボで、俺は成す術もなく

「そこまで想像しなくていい……」

「なんでわかるんだよ」

つくづく思うが、どうしてコイツはこうも人の思考を読めるのだろうか？

チェス盤思考の延長線に在るのだろうか…

「周囲を水浸しにしてしまうだけで、効果は無いだらう？」

「そうだなあ……」

彼女を冷やしたくとも、対象に水が接触するのはほんの一瞬だ、そこは理解できる。

俺に理解が通ったことを見届けると、ヤツは言葉を続ける、

「では、予めリルを……そうだな水槽に入れた状態で水を注げばどうだ？」

「お前、妹をなんだと思ってるんだ？」
と言いつつも、想像してみる、

激闘の末に捕獲に成功したタスマニアデビルの如く、水槽に幽閉されるリルドナ、そこへドボドボと水が注がれて頭から水を被り怯み抗議してくるが、俺には聞こえない……遂には満水となり苦しうに溺れる彼女は、最後の力を振り絞り絞り水槽を打ち破る！そして身体と怒りを開放された猛獣は俺に襲い掛か

「……想像力が酷すぎる、逆に評価に値する」

「だから思考を読むな……つまりは

たと同じ量の水を使用したとしても、受け皿となる水槽の有る無しで冷却効率が違ってくる、ということをお願いしたいんだな？」

「肯定だ、ノイズだらけの割りに通じていてくれて安心した」

我ながら凄いやりとりをしたものだ……がヤツは続けた、
「同じ魔法でも、干渉領域の指定を設けるだけで、全く別物に化けるといふことだ」

「工夫次第ってトコか」

俺の感想に気を良くしたのか、さらにヤツは言葉を紡ぐ、

「他に例を挙げれば、

対物障壁の発動条件に『指定範囲内に物体が侵入』とすれば自動で障壁が張れる」

「そんなもん、別にずっと張ってればいいんじゃないのか？」

さすがに防御系魔法の詳細は全然わからない、率直な意見で返した。

「いや、障壁を持続し続けるのは燃費が悪すぎる、」

「なるほど、接触の瞬間だけ発動すれば魔法力の消費も少ないわけか、

段々理解出来てきたよ、これは魔法力の消費効率の大きなメリックトだな」

「肯定だ、もちろんデメリットもある、術式を展開し続けるので他の魔法が使えない」

「一長一短だな」

いかに便利な道具があろうとも人間の頭で処理する以上、限界はあるわけだ。

「傾向として、攻撃魔法で、それも高位になるほどだが…」

この手の術式の補助を用いて、起動・発動・干渉指定の制御は難しくなる」

「魔法の構造自体が複雑になるからか」

「うむ、魔力の圧縮、色付けも必要になってくる」

ルーヴィックが口にした、『圧縮』や『色付け』というのは人間が魔法使う上で必要となってくる工程のことだ。

本来、人の魔力は微弱なもので、詠唱により密度を上げてやらなければ使い物にならない、俺なんて相当低い魔力しか持ち合わせていないので、何度も圧縮工程を踏む詠唱となる、教本によっては『増幅』と提唱していることもある、俺が本で学んだのは『圧縮』だったので、こちらで話を進めていく。

そして『色付け』というのは、この世界のあらゆる物に宿るといふ精霊の力を借りて魔法に属性を付与することを指す、勿論それ無しでも発火現象のプロセスで魔法を構築すれば炎は出せるが、同じ炎を扱うなら火の精霊に力を借りるほうが簡単で効果も高い。

攻撃魔法の大抵が精霊の力を借りることになるので、攻撃魔法イコール精霊魔法と認識されるほどだ。

余談になるが、俺はその『色付け』が特に苦手だったので、攻撃魔法は全般的に習得は無理と諦めた。

という知識は俺にもあったので、そこはあえて聞かなかった、「習わなかったのか？」とかまた言われそうだしな。

「あまり凝った術式を展開しようとする、それ自体が大きな作業になる」

…が今となつては、そこまでやる魔道師もめっきり減ったが」

「準備に手間掛けすぎる…ってところか」

「そんなわけで大戦時の魔道兵ともなると、
自分専用の法具に刻印を施し、魔法の入力補助機器デバイスとして活用し
ていたようだ」

「便利な物もあつたもんだな」

本の中に出てくるような大魔道師とかが持つてる杖にはそういう
意味があつたのだろう、

「登録できる術式は…」

通常の法具で二〜三種類、汎用性の高い物で十種類、単一種特化
型で一種だ」

「用途に合わせてイロイロあるんだな…」

感想を述べながら、カチリと思考が合わさる。

散々目にしてきた、法具があるじゃないか

「あのグリモワールって本もか？」

「肯定だ、あれはおそらく最高峰のものだと認識している」

俺は、オイゲンの屋敷でのアビスの反応を思い出した、
なるほど、魔道師として当然の反応だったわけだ。

「ちなみに、何型の法具になるんだ？」

「超高汎用性の多種特化可型だ」

凄いや言葉が出てきたものだ、

俺は言葉を心の中で反芻し、意味を冷静に品定めする、

「随分とチートな性能なんだな…」

それにしても意外だったのが、ヤツがこれほど魔法に詳しいとは、
リウエンの言葉だったら納得したかもしれない。

俺はその疑問を素直に投げかけた、

「お前がそんなに魔法詳しいとは意外だよ」

「なに、妹からの伝言を俺の言葉に代えて伝えているだけだ」

ヤツは表情を変えずにアツサリと言い放つ、

妹…からの伝言だと……？

「リウエンからの伝言か？」

「肯定だ、お前がヒールを使えはするが、効果が悲しいくらい薄いとリルから聞いていたらしい、」

俺が回復魔法を使っているところを見たのはリルドナだけだ、あの女の口からどう伝わったやら、少し不安になるが…

俺の思案の終わりを待たずに、ヤツは口を開く、

「同じ魔法を使うのでも運用法次第ということを伝えたかったらしい」

「気持ちありがたいが、まるで先生みたいだな」

俺は学生時代に、苦手科目を出来ないことに「工夫してみる」と言い放った教官を思い浮かべた、

どう工夫すればいいか、それがわかるならとつくに克服出来るだろう？

「リウエは双鎌十字ツウアイクロイツの魔法校の卒業生だ」

「魔法学校を出てたのか…」
俺は詳しくは知らないが…各地に魔法を教える学校が今もあるらしい、優秀な魔道師を育成し、

魔導兵団を作り上げる国策の一環と思っていた…大戦時はきつとそうだったであろう。

ただ誰でも入学出来るというわけでもなく、才能ある子供だけがその狭き門を潜ることが許される、

入学出来るだけでもエリートなのだ、その卒業生ともあれば一級の魔道師のはずだ、

「さらに付け加えると、その年の主席だったらしい」

「優秀すぎるぞ…」

「お前の思う、口先だけの教官よりも教えるに向いていると思うが？」

コイツ…また思考を読みやがった、

イチイチ驚いて反応して見せるのも癪だったので、何事もなかったように返す、

「それはグリモワールの力なのか？」

「さすがに評価は法具無しで判断される」

俺の的外れな質問に、ヤツの当然な答え、

法具に全て依存するなら学校の意味が無いよな。

俺は納得していたが、さらにヤツは言葉を続ける、

「そんなものに頼らなくとも、リウエの魔法は充分強力だ」

ヤツはさも当然のように、そう言い切った、コイツが言うくらいだ相当なモンなんだろう。

俺はまだ、リウエンの魔法は回復魔法　それもウサギ対象

しか見ていない、

「どんな魔法を使うか知らないが…

もし本気で魔法を、それもグリモワール有りだとどうなるんだ？」

「ふむ？」

俺の言葉にヤツは少し視線を逸らし想像の旅へと発つ、

が、すぐに帰還し、こう俺に告げた、

「お世辞込みで言えば……国一つ滅ぶ」

笑えない冗談だ、あんな小さな少女が国一つ滅ぼすだって？

「あまりリウエンを怒らせるようなことはしてはダメか……」
もう鼻を摘んだりしないからな？

いえいえ、私はそんなことしませんよ？

そんな彼女の声が聞こえた気がした、

そうだよな、出来てもやるとは限らないよな。

そしてヤツの声で現実に戻される、

「というわけで、これを読め、」

「へ？」

渡されたのは折りたたまれた一枚のメモ用紙、

ソレを開くと、可愛らしい丸字が目飛び込んできた、

内容を読み出すよりも早くヤツは言葉を投げかけてくる、

「お前が使っスヘルヒールの呪文を方陣に置き換えたものらしい」

「方陣？」

手にしたメモの可愛らしい文字の、さらに下に視線を滑らせる、見たことの無い文字と円で構成された図形が書いてあった。

「法具があるなら、それに刻印してもいいが」

そこで言葉を切り、ルーヴィックは左手の指で虚空に何かを描く。それは微かな銀色に光る魔方陣、注視しようと目を凝らす、すぐにフツと消えてしまった。

「お前は、法具もないし、このように虚空に描けばいい」

「いや、それどうやるんだよ……」

しかし俺の問いには答えず、ヤツは俺の手元を指差す、

「書いてあるから、読めと？」

「肯定だ、それを書いた妹の労力を尊重する」

変なところで律儀というか、気が利くというか……

…カチリ、

いや、まて

「でも、今は読まないぞ？」

「ふむ？」

「お前は俺を『ずるべたーん』させたいんだろ？」

ヤツは答えなかったが笑顔が応えていた。

6・4 この森は迷うんですよ

日もかなり高く昇り、
すっかり寒気が遠のく。

長時間森の中を歩いていて、方向感覚がおかしくなってきた。
周囲を警戒しながら移動するのだから、それは余計に表れる。

実際に警戒しているのは一部の人間だけだったが…

俺は懐がコンパスを取り出し方位の確認を試みる。

「なんだこりゃ……」

針はその動きを落ち着かせることをせずに回り続ける。

極力揺らさないようにしてみるが、やはり同じだ。

「アンタ何してんの？」

「うおあ?!」

俯いた俺の視界にヒョッコリと赤い瞳が出現した、

リルドナはいつの間にか戻ってきていたらしい、

その表情は元の俺のよく知る彼女だった。

「今ので、チャラでいいわ、」

何を？とは聞かない、それは無粋というヤツだろう？

俺は極力自然に話題を変えるべく質問を投げる、

「なんだよ…ていうか今まで何してたんだよ？」

「そうねえ、斥候みたいなことかな」

この女にも、一応は周囲を警戒しようという気はあったらしい、

そもそも最初のリンクスを察知したのは彼女だったか。

おそらくルーヴィックもあの聴覚だ、絶対気付いていたに違いない、
俺を蹴り飛ばすために、わざと気付かないフリしていたのなら、

やはり性格が悪い。

「あんまり単独行動していると危ないぞ？」

「あゝ大丈夫よ、

あんなクソ猫、目に付いたのは全部斬り捨ててあげたわ」

「それは…斥候スカウトじゃなく、強襲アサルトと言うんじゃないのか？」

通りで最初の襲撃以来、リンクスが一匹も現れないわけだ

…ゴツソリ掃除してしまうとは、さすがはミス・ハイスペックだ。

共食いじゃないのか？とか思ったが、さすがに自重した。

そして目ざとく俺の手の中にあるものを目にし声を漏らす、

「あー、ここじゃソレ使えないわ」

「へ…なんでだよ？」

俺が訊ねると彼女は目を点にし、とりあえず口を開く、

「え〜つとね、この森ってじばとかいうものが強いらしいわ」

結果と原因は知ってるのに、理由を知らない顔だな…

とりあえず、俺は理解できたので、由としよう。

俺たちは最初、森に入るときに森に向かって右手に朝日を認めた、つまり北向きに…森の南端から立ち入ったはずなんだ、

北へ北へと進んでいるはずだが…確認材料は森に差し込む光の角度が頼りだった。

今となつては、日が昇りどちらから、その顔を晒しているか判断が難しい。

こういう場合は、やはりヤツに話題を振るべきだろう、

「おいっ」

「むっ？」

「お前たしか、時計持ってたよな？」

「肯定だ…どうでもいいが俺の名は『おい』じゃないぞ？」

俺は名前を出さずに呼びつけることが多いらしい、悪い癖だとは自覚しているが、

「長くて言い難いんだよ、お前の名前はっ」

この通り直す気も悪びれる気もあまり無かった。

目上と認識している人間に対してはさすがに、こうはしないが…

「ふむ…」

俺の言葉に少し思案し、ヤツはこう返してきた、

「なら、ルークでいい」

「トコトン城兵かよ、まあ…ソレでいく」

成り行きから生まれた愛称でも、いずれ既成事実となり浸透する
本人承諾の上だから確実と言える。

どうせなら

もつと酷い呼び名をこちらから決めてやれば良かったかも知れな
い、

この時ばかりは、リルドナの才能を羨ましく思った。

「というわけでルーク、時計を貸してくれ」

「俺たちは、現在北北東を向いて歩いている」

ヤツは俺の貸してくれという言葉に対し、方位を宣言する、

まさに、俺がしようとしたことの結果だけが、返ってきたわけだ。

そしてヤツはこう続けた、

「これで時計を貸さなくともいいだろう？」

俺はまたしても思考を読まれて、悔しかったがコイツには敵いそ

うも無い、

気にせず話を続ける。

「なあ、無人の屋敷を目指してるのはわかってるけど、なんか目印
とか無いのか？」

「ふむ、それはブルーノ卿に聞くほうが確実だ」

ヤツにそう返されて、俺は全身の血がゆっくり顔に集まるような
感覚を覚えた、

コイツも雇われた側の人間だ、そもそも聞く相手が間違っている…
何でも知ってるような錯覚をし、馬鹿な質問をしたものだ。

俺は確認を取るべく、集団の先頭を歩くブルーノの元へ駆け寄った、

ついでに、兄妹もついてくる……余計なこと言っなよ？

俺は彼の背後から声を掛ける、

「あの、すみません」

「む、どうしたのかね？」

ブルーノは俺の声に反応を示すが、視線は変えずに周囲の警戒を怠らない、

その警戒を孕む空気は、ヘタに触れれば突き刺さる有刺鉄線のようにうだ。

俺に着いてきた二人は、きっと行く先やその目印が無いかと聞くと思っただけに違いない、

しかし、俺がまず質問したのは別のことだった、

「いえ、ガスコという人が直前で仕事のオフアールを取り消したと伺いましたが」

「ああ、出発の前日にキャンセルの連絡があつたな」

俺の唐突の話題に少し戸惑ったような気配を見せた……三人ともだ、あえてそこは気付かないフリをし、そのまま続ける、

「それは本人からでしたか？」

「いや、ギルドを通じての連絡だったな」

カチリ、

「そうですね、ありがとうございました、それと」

一つの疑問の確認が取れた俺は、そのまま本題に入る、

「ずっと北へ北へと向かっているようですが、何か目印になるものでも？」

「うむ……この手記によると、少し開けた場所に出るらしい」

彼は一瞬だけ手帳を一瞥し、また視線を前方へと戻し言葉を続ける、

「そこには大きな泉があるそうだ、それが貴婦人の泉らしい」

「泉……なるほど、お伽話の通りですね」

もし、お伽話通りに『泉の貴婦人』が居るとするなら、

彼女の警告を無視し立ち入った俺たちは無事に済むのだろうか？

その時、俺の思考を遮るようにルーヴィックが口を挟んだ、

「ブルーノ卿、進路が少し東にそれている」

「む…進路が…だと？君はこの森のことがわかるのか？」

唐突なヤツの言葉に、当然の反応を示すブルーノ、

俺にもわかるように説明してくれ、なので黙って続きを見守る。

「進路をやや北北西に

…三十一度五分七秒変えてくれ、そちらの方向の音が違う」

「ふむ…先程もそうだったが、君はかなり耳が良いようだな」

そのやり取りに周囲の人間は怪訝な表情と気配を見せる、

俺も勿論そうだ、音がそこまでわかるものなのか？

その疑問をぶつけるべく口を開こうとしたとき、

「大丈夫よ、お兄ちゃんの耳はバカみたいに良いから」

突如、リルドナが視界に割って入ってきた、

ちなみに俺たちは歩行を止めていない、そして俺は正面を向いて

る…

つまり彼女は後ろ向きに歩きながら、話しかけてきたのだ、

さすがに妹と違い後ろ向きで歩いたくらいで転びはしないだろう

が、

よくもまあ、そんな靴でこの足場の悪いところを歩けるものだ。

「とりあえず前向いて歩け、こんな場所で危ないぞ」

「あゝ大丈夫、大丈夫、あたしにとつちゃこんなこと」

そこまで言いかけた彼女は、顔をゴキユという鈍い音と共に前へ

向けた、

「…おいおい、大丈夫か？」

「リル、この方向の先に何か見えないか？」

「うぎゅ…ぐ…ちよつと…待って…」

彼女は苦しそうにもがきながら、辛うじて言葉を漏らした、
説明不要かもしれないが…ヤツが彼女の頭を鷲づかみにし、

そのまま勢い良く前方に向かせたのだ。

一瞬、首だけ一八〇度向き変わったように見えたが、きつと目の錯覚……と思っただけや。やりたい。

彼女はキリキリときこちなく身体を向きかえる。

「どうだ見えるか？」

「……いたた……何も無いわよ？」

でもなんか、あっちの方はなんか明るいわね、

「明るい？」

思わず俺は口を挟み、彼女はそれに答えてくれる、

「うん、ここみたいに薄暗くなくて、直接お日様に照らされてるわ」

直接、日が差し込む……つまり木の無い広場ということだろうか、当然のことだが、俺にはどう目を凝らしても違いがわからない。

つまり妹の方は「バカみたいに」目が良いらしい、

頭も方も似たような……そう似たようなフレーズが付けられそうだった。

「では、この方角でいいんだな？」

「肯定だ、保障する」

ブルーノはしばらく見つめ考え込みはしたが、すぐにその足を向きかえる、

勿論、ルーヴィックの指示した方向にだ。

周囲の人間も怪訝な顔を見せつつもそれに付き従う、

そして、俺がその方向に歩き出した、その時、

危険です、足元に気をつけて

またあの声が聞こえ、思わず足を止めてしまう。

俺は突然に立ち止まったため、周囲の人間から注目を浴びる、

「どうしたのかね？」

「い、いえ……」

俺自身にもわからない、だが：あの声を無視できなかつた。
視線を前方の地面に向ける、しかし薄暗い茂みに確認を得られな
い、

仕方なく、俺が近づいて調べようとした刹那、リルドナが動いた。
彼女は太刀を抜き、その刃を茂みへと突き刺す、
そして、ソレをこちらに向け、示した。

「アンタ、よくコレに気付いたわね」
ソレはまるでロープのような物体で、表面に光沢があった、

蛇だった、それも毒々しい模様を持ち、三角形ぽい頭をして
いる、

「こりゃ、毒蛇だな」

すかさず蛇の姿を認めたゼルが正体を告げてくれる、
よりにもよって毒蛇とは：誰も噛まれなくて良かった。

あのまま進んでいたら、危なかつたはずだ、
二人の兄妹なら、感知出来ていたかもしれないが、
先頭に行くブルーノは わからない、

「ハハッ、これは救われたか？」

ブルーノは嬉しそうに少しだけ笑っているようだった、
俺も少しは印象がよくなったのかもしれない。
などと感傷に浸る暇を与えてくれなかった、

「ねえ、アンタ」

「なんだよ？」

この女の質問はいつも唐突だ。

何やら俺に先程の蛇を突き出してくる、

「アンタって蛇好き？」

「要らん、食うのも飼うのもお断りだ」

俺は頭痛が新規採用で初々しく出勤してくるのを感じた。
何をツツコんでいいのやら…

謎の声が気になりはしたが、今は先に進むことを選んだ。

6 - 5 大食いニート姉さん（シスター）

ルーヴィックの指示に従い森を突き進む数十分、
ついに雰囲気が一段違う場所：開けた場所に出た。

俺は久しぶりに再会する太陽に目を眩まされ、

その日差しを顔に受け、冷めた身体に血が巡るような感覚を覚え
た。

長時間、薄暗い森の中を延々と歩いてきたのだ、

他の人間も、緊張を弛緩させるような気配を見せている。

その広場に立ち入り、程なく進んだ、その時

ぐつぐつううぎゆるるうふう……

…まるで地の底から響く地獄の重低音だ……。

この女は、どうしてこう緊張感^{シリアス}ブレイカーなんだろうか？

その場にいる人間全員の視線が彼女に殺到する、

「あ、あたしじゃないわよっ」

彼女はそう抗議するが…

その瞳に負けないくらい真っ赤な顔と、クリクリと泳がせる視線
でバレバレだ。

非常に気まずい空気がお越しになられたものだ、

…さて、どうフォローしてやろう？

こんなところでいいか……

「おい、ダイエットするのはいいが、朝はちゃんと食べ」

俺は適当に言い訳しやすきようにと、言葉を紡いだ。

これは六十五点くらいくれてもいいはずだ……。

しかし、彼女は空気の読める女では無かったのが誤算だった、

「何言ってるのよっ、ちゃんと食べたわよ!」

俺の想いもなんのその、彼女は素で返してきた、
…いや、別にいいんだよ?俺は……

森から広場を吹きぬける風の音が妙に大きく聞こえた…

それくらい短い沈黙のあと

「ハハハハハ、随分と肝の据わったお嬢さんだ」

ブルーノが豪快に笑って見せ、視線をゼルとロイに向ける、

「では、見張りを交代で行った上での小休止をとるとしよう、

ゼル、ロイ このお転婆なお姫様の護衛をやってくれ」

「あいよう!」

「了解ですっ」

ブルーノの声に威勢良く応じるゼルとロイ、もう完全に部下っぽい、

俺は気を遣ってくれたブルーノに（何故か俺が）礼を述べ、

この仕事に関しての何気ない会話を交わすのだった。

それにしても…

意外にも、このブルーノという初老の執事はフランクな人柄だった、

一見すると気難しそうな顔をしているが

話しかければキツチリと対応してくれるのだ、

それは他の人間も同じだったらしく、目を白黒とさせていた。

警戒をするゼルとロイに（またもや俺が）礼を述べると「任しと

いてよ」とロイは腰の小剣を抜き「こいつ、剣も割りといけるんだ

ぜ」とゼルがタイミングよく説明をくれた。

俺たちはそのまま少し進み、比較的見渡しの良い泉の畔に陣取った、ゼルとロイはともかく、他の人間にはあまり好感を持たれていないこともあり、やや離れた位置に落ち着いたのだ。

ここは本当に森の中なのだろうか?と思わせるほどの大きな泉だ

った、森という城壁に囲まれた泉の庭園とも言つべきなのだろうか
…それくらい不思議な空間だった。

森の中とは違い周囲の視界が良く、突然な襲撃の危険も少ないだ
ろう。

ブルーノの申し出に彼女はまたもや魚みずを得たネコサカナのように活気付
く、上機嫌で荷物からガサゴソと携帯用の敷きシートを取り出し、
目ざとく日当たりのいいポイントを見つけそこに敷き、そしてチヨ
コンと可愛らしく座り込み やっぱり正座だった 続いてテキ
パキと持参したのであるう、お弁当を取り出した。
…要するに相変わらず手際が良いというわけだ。

「 やかにヤンにやかにヤンにやかにヤンにヤッハイッ
…なんだこの呪文は?!

彼女は上機嫌でなにやら変な歌を唄っている…もうノリノリだ、
俺は勇気を振り絞って声を掛ける、

「おい、悪ノリしすぎだ」

「ちゅちゅちゅちゅーるらっタッタ て、何よ？今良いところな
のこ」

その『良いところ』ってのは、食事の準備か、歌の盛り上がりか？
それを聞けない自分が悲しかった…。

「交代で休憩なんだから、早く食って代わってやれ」

「そんなこと言っても」

あたし喉が細いしい、慌てて食べたら詰まっちゃうわ」

口はデカイけどな それと態度もだ！あとは、む……いやなん
でもない。

俺はそんなリルドナを放置して、先程貰ったメモを開く、
なんとも言えない、可愛らしさ全開の丸字なのだが、内容は至っ
て真面目だ。

そこには、微弱の魔力を出力して指先で魔方陣を描く手段が明記

されている。

「ふむ、俺でも出来る……のか？」

試しにやってみる……指先に薄っすらと白い光が灯る、

そして、適当に指を走らせると、一瞬虚空に白い線が浮かんだ。

「これで魔方阵を描けってことか……」

俺の冒険者ギルドで受けた能力測定での魔法に関する判定は

…軒並み、どの系統の魔法も最低ランクの「F」だった、

だが、幸いなことに「…」ではないので、一応は魔法を使えるのだ。

ランク「…」は才能ゼロを指す

もしそうだったらこの光の線を描くことすら出来なかったわけだ。

「でも可能性がある、と出来るは別問題だよな……」

苦笑いを零しながらメモを一通り目を通すと、気になる単語があった

B l a u e A u g e n

？

メモの一番最後に、さり気無く書かれてある。

わざわざ青いインクで独特な筆跡で書かれてあった、その横には読み方すらわからない奇妙な文字列がズラリ　　どついう意味があるのだろうと、頭を捻りかけたとき、

「あゝソレ、あの子のペンネームみたいなモンよ」

いつの間にか、メモを覗きこんでいるリルドナが言い放った。

「ペンネーム……リウエンの？」

「あの子って作家目指してるからね」

そこまで言って、彼女は表情を少し変えた

昨日、小屋で眠るリウエンを優しく見つめている時の顔

……姉としての顔なのだろう。

「あの子、実は白よりも青が好きなのよね」

…カチリ

やはり自分の瞳の色だからだろうか…

だからあの時見えたアレも……

俺はメモを折りたたみ胸ポケットに納める、

理由？

何故ならリルドナがすっかり動きを止めていたからだ。

早く食事休憩を済ませてくれ……

6 - 6 そこに在る声

俺たちは仕事でこの森に来ていたんだ、決してピクニックに来たわけでも、林間アスレチックに興じるつもりも無かったし、伝説の木の下で告白を待つということも絶対ありえないはずだったんだ、しかし、目の前の光景は…小柄な少女が敷きシートにチヨコンと可愛らしく正座し、その膝の上でお弁当の包みを広げてノラネコ度・一二八パーセントの自由奔放の笑顔を振りまいている。いつの間に俺は引率のトップブリーダーになってしまったのかと、頭痛と人生相談を繰り返したのだった。

「やっぱり携帯食といえば、これよね！」

そう言う彼女の膝の上に広げられた包みの中身は…
白い握り拳くらいの三角形の物体だった。

「なんだそれ？」

「おにぎりよ、今朝早起きして、ご飯炊いたんだから」

「どうやら、今朝の早くから居なかつたのはコレの所為のようだ、
白い三角形に黒い物が巻かれている、これも倭国の料理だろうか
…？」

「何を大層な…要するに白米ライスを三角形に固めただけだろうか？」

「な、なんですつてえ?!」

俺の言葉に彼女は明らかな不満の表情を見せる、

そして、凄まじい勢いで語り始めた、どうやら地雷を踏んでしまったようだ…

「いーい？おにぎりってのは、倭の国の米食の技術の結晶よ？」

「具の無い白にぎりですえ調理スキル三十一を必要とするわ、つまり下級職人ね。中に具を入れたり海苔を巻くとスキル九十四…つまり師範に認可された職人でなければ出来ないのよ？」

「大体ねっ？土台となるお米の扱いは精密作業そのものよ？」

一回の理想の量は百十グラム…そうねえ米二千三百から二千五百粒で回転させながら握るの、そのときの回転角は百二十度、三回で一周するわけよ、この時の圧力は三方向均等に三十七キログラム、強すぎると硬くて食べられないし、弱いと形が崩れてしまうわ、バランスが難しいの電子顕微鏡レベルの精密作業なんだからねっ。

たとえ、アンタでも倭の国の技術の結晶を侮辱することは許さないわよ?! ちょっと聞いてる? それでね? そもそもおにぎり歴史は

「すまん……っ、ストップだ!

頭痛と眩暈と混乱が華麗にアンサンプル決めてやがるから…

もう激しく大人しくして欲しいんだ……」

もう俺の発言も支離滅裂だった、

要するに心のライフはもうゼロなんだ…

それにしても…

あれだけ機関銃のように言葉を発していたにも関わらず、彼女は全く息を乱していない。

凄まじい肺活量だ、あの胸は肺で膨らんでいるんじゃないか? と考えるほどだ。

お、おにぎりを食べてみたい、と言つと良いかも知れませ^ン

また例の声が聞こえてきた、少々投げやりな色合いを感じる、

気力の失った俺は成すがままに従う、天啓でも幻聴でも構わない。

「おい、試しに少し食わせてくれ」

その言葉に彼女の顔から敵意が消える、

「あ、そう? んじゃコレ半分あげるわ」

そう言つて手にした『おにぎり』一個を半分に割る、

俺は持参した干し肉とソレ(ていうか半分かよ)とトレード、

半分になってしまった正三角形は三角定規の形状だ、

その三角形の断面から何やら黒い具材が顔を覗かせている。

「なんだ、これ？」

「あゝ昆布よ、

調理されてる奴だから味は付いてるわよ」

「ふむゝ海草か……」

意を決して、パクリと俺はかぶりつく…

やや甘酸っぱくて、ライスと合う気がした、いけるかも

「これはこれでアリかも知れない、」

「ね、おいひいれひよ？」

彼女は半分に割った分は既に食べ、二個目のおにぎりに移行して
いた

…頼むから、女なら口いっばいに頬張りながら喋るな。

ていうかな、喉細いから詰まるとか言っただけなかつたか…

「っ！」

そして期待を裏切らずに、喉を詰まらせたようだった、

彼女は苦しそうにしながら、水筒に手を伸ばしている。

「貸せ、入れてやるよ」

俺は水筒のキャップ兼コップに水を注ぎ手渡す、

水と思っただらお茶だったのはお約束だな。

「っぶ、はぁーっ」

「自分で喉詰まるとか言っただけソレか？」

「やあゝこれが美味しいのよお」

彼女は目の端に薄っすらと涙を浮かべつつも笑顔だった、

なんとも無邪気に笑うものだ、コイツの歳が正直わからない。

最後の一個に取り掛かるべく、彼女が手を伸ばした時だった、

危険です、すぐにその場所を離れて

「っ

また聞こえる例の声に、俺は咄嗟に飛び退き、前方へと転がる。

そして回る視界に飛び込んできたのは

先程まで俺の居た場所に突如生えた尖った物体、

それに加えて、蹴りを繰り出そうと片足を上げたルーヴィック…
なにやら「チッ」と舌打ちしているように見えるんだが…
「ちよつと、何よ?!」

彼女はおにぎりに夢中で一呼吸反応が遅れてしまったようだ、
さすがに地面からの襲撃に被弾こそはしなかったが、バランスを
崩す、

「あ　っ!」

そして、手にしたおにぎりをコロコロと取りこぼす、
彼女はふら付きながらも、それを必死に追う、

「あたしの…おにぎりがあ　っ!」

いや、リルドナよ…そこはもう諦めろ、
そもそも落ちた時点でもうアウトなんだ…
よもや拾って食おうと思っただけじゃないよな?

「うおーいつ!どうした!?!」

異変に気付き少し離れた位置からゼルが声を上げた、

「ああ、もう!」

必死におにぎりを追跡しようとするが(なんとも締まらない文章
だ)

先程の尖った物体が次々と姿を顕し、彼女の行く手を阻む。

そして、その物体の正体が判明する。

「カ、カニ?」

「デカイな、ブルーニツパーか?」

駆けつけたゼルが、疑問系だが襲撃者の正体を告げる、

確かに、青いカニだ…ただデカイ、デカイぞ?

その大きさは馬車の車輪ほど　より大きめといったところか、
先程の尖った物体は、このカニの缺だったというわけだ。

「周囲を見張りやすいと思っただら、今度は下からかよっ」

ゼルは誰に言うわけでもなく愚痴を零した、

そんな彼に俺は問いかけた、

「襲われたのは、俺とリルドナだけです？」

「そーみてえだな…」

「ったくあのねーちゃんの変な歌を唄うから寄ってきたんじゃねーか？」

「すみません、代理で謝ります…」

俺はまた頭痛が単身赴任してきて張り切っている気がした、

しかし、他の人間が襲われてないのは幸いだ。

そういえば、そもそもの張本人はどうした？

「うおい……」

見れば彼女はまだ必死におにぎりを追っている、武器である太刀は敷きシートに座り込んだときに地面に置いてしまっているので…今は丸腰だった。

それでも彼女は武器よりも、おにぎりを優先しているのだ…反撃もせずに、ただひたすらおにぎりに意識を集中している、わが身よりもおにぎりが大事だと言う荷だろうか？（もうここまでで何回「おにぎり」て出てきた？）

「あれは　　っ最後のお楽しみに取っておいた…」

彼女は必死に迫り来るカニの攻撃を避けながら手を伸ばす、

何に…とかはもう省く！

「梅干し入りなのよお！？」

「知るかー！ー！」

ダ、ダメだ…ツツコミに定評のあるエインさんもそろそろ限界だ…この騒ぎを他の人間にも知られれば、さらに重い空気を満喫出来てしまう。

容赦なくカニは次々と姿を顕す　カニというのは肉食だ、そしてそのサイズからして人間は充分に「捕食対象」となり必然的に襲い掛かってくる、

いくらリルドナといえど、危険すぎるのだ。

「チィ、やりづれえ…」

ゼルは槍を構えながら舌打ちをする、当然だ…カニとリルドナが

不規則に動きあつてヘタをすればカニとノラネコの串刺しが出来てしまう。

仕方なく、俺はショートソードを構え、極力彼女から遠いカニへと斬りかかる。

……。

そして、見てしまった。

もう少しでリルドナの手が「目的のもの」に届こうとする瞬間、ぐしゃりとカニの脚がソレを押しつぶしてしまったのを……。

「あああああー！ー！ー！ー！」

それは悲鳴ともとれる声だった、彼女はこの世の終わりと予防接種の注射が同時に訪れたような悲壮の顔を浮かべ、その場に泣き崩れる。

「あたしの…おにぎりが…紀州の梅入りだったのに……」

悲劇のヒロインよろしく泣き崩れるのは結構だが、この状況を作り出した張本人としてはそろそろ戦闘に参加して頂きたいものだ、さつきも少し触れたが…今ここに居ない他の人間に知られる前に事態を收拾したいのだ、頼むからそろそろ現実を見てくれ。

「おーい、

頼むから動いてくれ、おにぎりの仇でもなんでもいい！」

「っ」

彼女はハッと何かを感じ取ったのか、ピクリとその動きを起動した。

青いカニ　ブルーニッパーに俺は斬りかかるが、やはり予想を裏切らない、

ガキンと鈍い打撃音と硬く跳ね返される感触……つまり与えるダメージはゼロ。

無傷のカニはそのまま俺に肉迫し、その巨大な鋏を振りかざし「うぐお　っ」

強烈な水平方向の一撃に俺は吹き飛ばされる、受身を取ろうとするが無様に転がるばかりだ。

「なに、礼はいらんぞ」

「てめえ…狙つてたな?!」

目に飛び込んでくる光景はやはり

蹴りを放ったヤツと、鉄を刎ねられたブルーニツパーだった、

まあ、リンクスと違って刎ねる首が無いからか。

ルーヴィックは足元の何かを拾い上げ、リルドナに声を掛ける、

「リル、受け取れ」

それは彼女の太刀、それをヤツは全力で投げつける　彼女に

俺は思わず声を上げそうになった…

だってそうだろ? ヤツは彼女の背後から投げつけたんだ、

投げられた太刀はそのまま彼女の後頭部に直撃

しなかった。

彼女は振り返らず、そのまま後ろ手に太刀をキャッチする、

俺からは顔が見えない、だがその目はカツと見開かれていたに違

いない、

息つく間もなく、彼女は抜刀しカニを横一文字になぎ払う、その

一撃を受けた被害者は、まるで紙に描かれたカニがチョコキンとハサ

ミでカットされ真っ二つになるように、綺麗に横一線で分割される。

つまり、あんなに硬かった相手が嘘のように切り裂かれているの

だ…

凄まじい怒気を放ちつつ、彼女は口を開く、

「アンタたちは三つの罪を犯した…」

あたかもミシン針が布地を穿つように青い甲殻に太刀が突き刺さ

り、

「一つ、あたしのおにぎりを潰したこと、」

素早く、その刃を引き抜き、振り向きながら後方の敵をなぎ払う、

「二つ、あたしのおにぎりを潰したこと、」

別のカニが回り込んで、鉄で掴み掛かるうとするが、

「二つ、あたしのおにぎりを潰したこと、」

別のカニが回り込んで、鉄で掴み掛かるうとするが、

その鉄もろとも、斬り捨てる。

「そして、三つ！」

あたしのおにぎりを潰したことおー！」

「全部同じだろお？」

そんな俺のツッコミは当然届かない、あとはもう一方的ワンサイドゲームな暴力だ、瞬く間に残るブルーニツパーは哀れな力二の切り身へと変貌していった。

これは…アレだ　悲しみに打ちひしがれるヒロインの前に、ど
カワイソウ　ひがしいしゃ　ノラネコ　くちくされ
んな立派な主人公もなす術もなく降参してしまうのだ、それはごく
当然の世界の摂理なのだ…。

「何なんだ、ありゃ…」

ゼルは激しく呆れ切つて、すっかり警戒体勢を忘却していた、俺も勿論同じ気持ちだった…

何なんだよ、この光景は？

魔物の棲む恐ろしい森じゃなかったのか？

なんでそんなところでピクニツクまがいなお弁当タイムを過ごし、調子に乗った代償か…魔物(?)に見つかり、戦闘になったかと思えば、ノラネコのような女が勝手に八つ当たりして解決していく…

「おーい、何かあったのかい？」

遠くから声が聞こえた、ロイの声だ、

「なんでもねー、あのねーちゃんが暴れてただけだ」

「…そのまま過ぎますが、何故か模範的フォーローに聞こえます」
ともかく、このまま何事もなかったように合流して、彼らと見張りを交代すれば丸く収まってくれるに違いなかった、

危険です、すぐにその場所を離れて

だったかな？あの声でまた救われたのだろうか、

…ゼルはスタスタとロイの声のした方へと行ってしまふ。

危険です、すぐにその場所を離れて

確か、こういうフレーズだったはずだ、

なんでこんな声が聞こえるようになったのだろうか？

いや、これは聞こえているという認識でいいのだろうか？

危険です、すぐにその場所を離れて

と聞こえている、というより意識に響くと言うべきか？

不思議な声には違いなかった。

お願いです、もうその場所を離れて！

「え？」

少し違ったフレーズに切り替わった、そう切り替わったんだ。

今まで聞こえていた内容から切り替わった、

そう……ずっと知らせる声は訴え続けていたんだ……

カニを片付け（たのはあの女だが）、それで危機が去ったと思っ

ていた。

声は訴え続けていたんだ……

何を？

危険をだ、そして、「その場所は」とも言ってたんだ、

俺は見た、

自分が立つ地面が大きくうねり、まるで海で波と波が合わさり大きく高く、その正体を晒すように……ソレは起きた

7-1 妖精さんの仕業です

Warnung!

Warnung!

Eine Warnung..

Bitte nimm prompt Zuflucht.....

—

* * * * *

信じられない。

こんなことがあり得るだろうか？

つい数秒前まで踏みしめていた大地が裂け、そのまま空へと押し上げられる。

砕けた大地は土砂や、さらにその下の地層の物らしき岩盤と入り混じり、無機質な石の渡り鳥のように、次々と舞い上がっていく、一体どこまで上り詰めるのか？

いや、違う。

土砂が昇っているのではなく……

俺が落ちているんだ　っ！

人間とは不思議なモノだ、『即死級の高所から落下』という経験は無いのに、何かに追われる悪夢のパターンの一つの結末で『即死級の高所から落下』があるのだから。

今、まさに俺は落下を経験している、時間にしてどれくらいなのだろうか、感覚はとっくに麻痺している。この後に待ち構えている

現実を、俺は極力考えまいとするが、這い回る蟲のように次々と沸いては、俺の精神を這い回った。

これは夢なのだろうか？ 落ちるといふ感覚はおそらく違いは無いはずだ、夢との違いがあるとすれば……激突の瞬間に目覚めてくれないことだろうか？

「くっ……」

ゾワゾワと蟲は尚も這い回る、考えてはダメだ、その先を考えるな、

そんな葛藤は無意味なのはわかっている、考えても、考えなくても終着は確実に訪れるのだ。

そう、

……このまま終着すれば 死ぬ。

ネイン
いえいえ、

静かに頭の中にあの聲が流れ込み始めた、

ダス・グラウス・イッヒ・ニヒト
全く以つて

格式高い霊峰より湧き出る水の如く、淀みなく意識へと流れ込んでくる、

カイン・フロブレイム
心配は間に合ってますよ？

「えっ?!」

と思わず声を漏らした、その瞬間、

「っ?!」

ポフッと予想を裏切る落下地点への激突の感触、

中途半端に突き出した脚に衝撃が突き抜ける、不恰好な姿勢で着地したため背骨に痛みが駆け巡る、そしてバランスを崩し転倒。

投げ出された手足をアチコチ打ちつけ痛みが走る……そう痛いんだ。

おかしい話だ、確かに身体中アチコチが痛い、でもおかしい。だってそうだと？

痛……だけなんだ。

確かに脚が痛んだ、でも立てる、

確かに背骨が軋んだ、でも普通に歩ける、

確かにアチコチ打ちつけた、でもどこも動かない箇所は無い、確かに身体中痛かった、でも俺は生きている。

危険は去ったのだろうか？

あれ程聞こえていた『声』が聞こえなくなっていた。

疑問を張り巡らしながら、視線を周囲に走らせる、

薄暗い……洞窟のような空間、そして足場は湿った砂？

激突の緩衝はこの砂地の所為？

俺は恐る恐る天井を見上げる、この空間の天井部分はかなり高いようだ。

よくわからないが……街の教会程度の高さはあるのだろうか、人間と言うのは高さに対する距離感に激しく乏しいのだ。

その天井の一角に、一際明るい光を漏らす穴が空いている、

どうやら、俺はそこから落ちたようだ、やはり距離にしてかなり高低差がありそうだ……いくら下が砂地とはいえ、無事で済む高さではない。

光の穴の真下は当然のように、光で照らされている、その部分より先へ視線を送ると、すぐに岩壁に突き当たる。

おそらく……こちら側に泉があるのだろうか、もしココが崩れたら泉の水が流れ込んでくるのだろうか？

……だんだん目が慣れてきた、
どうやら、人工の洞窟……地下壕のような場所のようだ、
ここよりさらに奥、俺の落ちた穴とは反対側の方位の一角に根拠^{ソレ}
を見つける、ボロボロの椅子や机、粗末な寝台が無造作に置かれ、
かつて人が生活していたという痕跡を示していた。
そちらとは、違う方位……角度にして百二十度ほど……には、打っ
て変わって天然素材剥き出しの未開拓の洞窟部分があり、さらに薄
暗いそこには巨大な石像のような物があるようだ。

石像……？

地下の礼拝施設？ 修道窟なのだろうか？

薄暗いが、まるで月明かりのような光が籠っていて、全体的に青白
い印象を受ける空間だった。

青白い明かりの正体がわからない、一体何だろうか？
と思索し始めたとき

「だいじょおおぶうー？むのおおおお！」

リルドナの声が降りかかった、

逆光で見えないが、穴からこちらを覗きこんでいるのだろう、

「すまーん、心配かけたーやはり生きてるぞお」

俺は信号弾を飛ばすように、我が身の安全を投げかける、

「べ、べつにアンタのこと心配してるわけじゃないんだ にゆ？」

彼女が予想を裏切らないリアクションを見せようとしたとき、何
故か妙な声を上げた……どこかで聞いたことある発声だ……。

なんだ？ と思う間もなく、

彼女は俺目掛けて降って来た、
転倒、転落、墜落、どれが相応しいだろう？

「ぐぬお　?!」

「むぐう　っ」

彼女は重力加速度をその身に纏い、抜群の命中精度を持って俺に炸裂する。それは攻城破壊兵を迎撃するノラネコ爆弾のようだ……。

というか、前もこんなシチュエーションなかったか？

その時と上下が逆な気がする……。

今度は俺がカエルのように潰されているわけだ。

そして、「逆向きだったら、かなり不味かった」とか思わなかったか？

っ、

そんなコトよりも、息苦しい!

いくら小柄な彼女といえど、こつ顔面を圧迫されては息が出来ない、

俺は耐え切れずに、もがいて脱出を試みた、

ふよん…と、顔になんとも柔らかい感触。

はて？

「　ひ、ひあ?!」

直後、彼女が上ずった声を上げた、初めて聞く声色だ、
一体、何事だと思考する間もなく

「ぶぼっ?!」

バシッと左頬に衝撃が走った。

数秒後、衝撃の正体が判明した、

彼女が右前足みぎてを振りかぶり、強烈な平手打ちサーモンハンティングを放ったのだ。

…右で引つ叩いてる辺り、一応は手加減をしてくれているようだ……。

とりあえず、二人とも身を起こす、

「…て、てて、なんだよ」

「うっさい！」

聞いてみるが、まあこの有様で、答えは貰えない。

彼女はこちらに背を向けてしまった……そのお陰で「ソレ」が見えた、

「おい、ソレって」

「え？　っ、ああ…もうっ」

ソレとは彼女の、大体お尻部分だろうか、そこに付いた一つの靴型があった。彼女は首を捻ってソレを目視しながら手で叩いている。靴型が他の部位にあったなら手伝ってやったんだが……。

見覚えがある靴型だ……何せ、俺のコートにも付いてるからな、

間違いない、

ヤツの靴型だ……酷いモンだ、妹を蹴り落すなんて。

それにしても、

今度もなんで生きているんだ？

彼女がいくらか小柄と言えど四　　五　　キロはある筈だ、それがあの高さから落下して来るんだぞ？

無事で居られる訳が無い　俺も彼女も、だ。

しかし、生きているという現実自体に文句は無い、とりあえず遙か頭上に居るであろうルーヴィックに文句を言ってやらねば、

と、そこに一本のロープが垂れ落ちてきた。

「エイン　、　、

それで登ってこられそうか？」

「いけるとは思う……」

「が、お前に言いたいことが莫大にあるっ！」

「後にしてくれ、あと一八秒で登ってきてくれ、」

……。

こんなロープ一本だけで、この高さを登りきれと、それも一八秒という嬉しい制限時間付き……硬いポールをよじ登るのは違い、不安定でなかなか骨が折れそうだ、

これだけのヒントがあれば自ずと答えは導き出される、

「無理に決まってるんだろお?!」

「では仕方ない」

「いつ?!」

仕方ないと言い終わる否や、ヤツは降って来た、ただし、俺に激突するわけでもなく、軽やかに地面へと着地をした。

一見すると砂埃一つ巻き上げていないようにすら見える

いや、それよりも、

「なんで降りてくるんだよ？」

「お前を安全に上へ帰す為だ、」

「はあ？」

「ザリガニ釣りのエサみたいになりたくは無いだろっ?」
?

ロープをよじ登っている最中に襲われると言ってるのか?

では何に……??

そういえば、なんでここに落ちたんだっけ?

「百聞は一見に如かず」

「ふくお?!」

またしても強烈な水平方向への衝撃

というか、ヤツの容赦ない蹴りだ、

なあ、いい加減わかってきたんだ、今朝からの俺の被ダメの原因ソースを集計すると、この兄妹からの攻撃が見事に上位をワン・ツーフイニツシュを決めてしまっ……味方からの裏切りが主なダメージ要因ソースなわけだ。

……などと思案することコンマ五秒ほど、俺は無様に転がりながら、先程の未開拓な洞窟部分へと運ばれてしまった。

顔を上げると、やはり先程の石像が目に飛び込んでくる、

巨大な、それでいて奇妙な石像だった、

とにかくデカイ、小さな小屋くらいはありそうだ、

よく見れば、それは人の形とは異なる形状だった、

複数の脚に巨大な鋏のような手、なんていうかカニみたいだ、

……。

石像じゃないよな……？

……だって、

動いている！

石像は動かないよな？

石像なら鋏を振り上げて襲い掛かって来ないよな？

やられる？！

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

そのフリーズと共に、俺の身体にシュルシュルツと何かが巻きつき、

「っ？！」

ガクンと、勢い良く俺の身体は何か引き寄せられ、気付けばルーヴィックの足元に転がっているのだった。「敵を目の前にして硬直するな」というヤツの手にはワイヤーロープ、どうやらソレで俺を無理やり引き寄せたらしい。

いい加減、扱いが酷すぎないか？

「ふむ、釣れたな」

「無能で大物が釣れちゃったわねえ」

「おい、コラ……人を囿ルアーリングの捨て駒みたいに言うな」

あれ？

自分の発言に自分で引つ掛りを感じた。

「来るぞ、リルは俺と反対から頼む」

「はいはい、かしこまりっ」

二人の兄妹は左右に分かれて迎撃体勢を取る、

俺も一応はショートソードを構えるが、自発的に斬りかかったりはしない。

応戦する二人を眺め、ある嫌な仮説を思い描いていた

俺には特殊な戦闘技能があるわけでも、高位の魔法が扱えるわけでもない。

ちよつと鍵開けが人より得意な程度としか自覚していない。

もし、ヤツが何かを企んでいて、他人を利用しようというなら、

他にもつといい人材がいそうなものだ…。

そう思っていた、

利用価値が無いと思っていた、だが違う。

あるじゃないか……利用価値が、そう囿ルアーリングの捨て駒だ。

囿の捨て駒とは自分の駒を犠牲にして、より良い駒を手に入れること、

当然、犠牲となる駒は価値の安いモノ程良い。

価値が一ポイントの歩兵ポーンでもお役に立てるわけだ。

俺は捨て駒にされるのか？

そうすると、今度は「何を釣る為に？」という疑問が浮かび上がる。

全く……堂々巡りの思考だ、バカバカしい。

視線を二人に走らせる、

二人とも敵の攻撃を掻い潜り、斬撃を次々と繰り出している。

やはり敵の正体はカニだった、

ただし、上で襲ってきたソレよりも遥かにデカイ、

これだけデカイと殻も相当分厚いらしく、簡単には斬り抜けないようだ、

「もう、硬いわねっ」

そうぼやきながらも、繰り出される鉄を避け、お返しとばかりにその鉄を斬り付ける。耳障りな金属音じみた引っ掻くような音が響く、相当硬いようだが不思議と彼女の太刀は弾かれていない。

「……なんで弾かれないんだよ」

「剣聖は伊達じゃないのよっ」

律儀に答えながら、またも攻撃を避け、今度は鉄ではなく脚を斬り付け始めた、どうやら転倒を狙うつもりのようなようだ。

「もうっ、こっちも硬いなあ……」

やはり弾かれはしていないが、耳障りな金属音が響くだけで一向に斬れていない。

そして、それはルーヴィックの方も同じのようだった、

「……ふむ、」

突進するルーヴィックに巨大な鉄が襲い掛かる、それを彼は少しの軌道修正でかわしつつ、すれ違い様に激しい斬撃を繰り出す。

ギィィィンと、まるで回転砥石グラインダーが鋼材を引っ掻くような音が響き渡る。

先程のブルーニッパーの鉄を一刀の下に刎ね飛ばした彼でさえ、今度のカニの甲殻は堅牢なようだ。

彼は少し思案する素振りを見せると、刃を逆手から順手に持ち替えた、

「少し指し手を変えてみる」

「変える……？」

そういうと、足を止め、敵の攻撃を誘うように待ち受ける、そして、それに掛かった相手は、その鋏を振り下ろした。ズウウンと小さな振動……鋏が洞窟の地盤に突き刺さっていた、彼は僅かな足運びだけで攻撃を避け、その直後にやや腰を落とし、激しい突きの連打を放った。

っ！

言葉で表現できないような破裂音が響き渡る、

巨大カニの鋏に少し亀裂が入ったように見える。

「なんて突きだ……」

「エグイサレーション 抉りて殺せ、」

「エグイ……なんだって？」

「短剣術の一つだ、今度教えてやる」

そんな常人離れた技よりも、知りたいことがあった、

「それよりも教えてくれ、」

「なんだ？」

巨大カニは突き刺さった鋏を抜き、その長く大きな鋏を横殴りに振り回した、

が、それを難無く避けるルーヴィック。

会話が普通に出来るくらいの余裕はあるようだ、

「なんでさつきリルドナを蹴り落としたんだ？」

「お前一人にするには危険だったから」

巨大カニの横薙ぎの一撃を身を屈めて避ける、

「あと、巨大な生体反応も感じたから、」

「にしても、もうちょい優しくしてやれよ……」

巨大カニは両方の鋏を次々とルーヴィックへと躍らせる、

ヤツはそれを最低限の動きで避け続ける、

「そうも言ってもらえん、人払いの術式が展開されていた」

「人払い……？」

「無意識にその場から遠ざかるように、」

俺は、ふむと先を促す、

「無意識にその場へ近づかなくなるように、」
俺は、ふむと先を促す、

「そういう意思が働くように仕向けられていた、」

「あの力ニが……か？」

「否定だ、そんな知能は無いはずだ」

「ヤツは攻撃を紙一重でかわし、また決りて殺せを放つ、
エヴィサレーション

確実に鉄の甲殻へ傷を入れているが、決定打に欠ける。

「じゃあ、妖精さんがコツソリ仕事をこなしてくれてるのか？」

「肯定だ……」

「適当に言った冗談が正解だったらしい……、」

妖精だつて？

「そうだな、そう言えばこの森は何て呼ばれてた？」

「妖精ルフェの森か……、」

「おそらくは、この力ニも山猫リンクスも操られている」

妖精の森って言う割りには、

沸く沸く動物ランドっぽいのか出ないと思つたら、こついうオ

チか……。

「でも、なんで妖精そのものが出てこないんだ？」

その問いに応えるように、一際大きな斬撃音、

リルドナが横薙ぎの斬り払いしつつか間合いを取つた様だ。

「あー、夜しか顕現ウチユク出来ないからじゃないかしら？」

「夜しか？ 顕現？」

「いにしへの盟約ルールとかで昼間は出歩けないみたい」

……確か、童話だか何かの本で見た気がする、

それこそ、お伽話に出てくるくらい太古では、妖精はそれこそ年

中無休で飛び回っていたらしい、そして人間にとって不思議な力を

持ち合わせた彼女たちは脅威そのものだった。

そこで、聖人だか賢者だか神官だかは忘れたが……妖精の女王と、

とある盟約を結んだ「悪さするなら夜の屋外だけに」条件付きの盟

約がいなわけだ。

逆に言ってしまうば「夜、外を出歩いている奴は好きにしてい
よ」となる交換条件だ、まさに「^{トリック}馳走をくれなきゃ悪戯するよ
」とも言える。

ちなみに、この盟約おねがいに除外される者もいるようだ、
力が弱く害にあまりならないコボルト、人と友好的なシルキーな
どがそうらしい。

「コツソリ悪戯するから、人払いか？」

「人払いが完全に構築されていたらお前一人ここに取り残しだ」

「少しは感謝しなさいよね？」

笑えない、どう考えてもこの「悪戯」では命が取られる、

昼間でもこうして間接的に襲って来ているじゃないか、

「もっとマシな盟約おねがいは出来なかったのか……」

「さあな、どんなやり取りがあつたかは

メイヴ卿でもティタニア卿にでも訊くしかあるまい？」

尚も硬い甲殻へと攻撃は続く、確実に傷は入れている……があま
りにも微弱な削りだ、一方こちらは一撃でもまともに貰えばひとた
まりも無いだろう……実に不公平なやり取りだ。

何か、いい手は無いか？

俺が戦闘に参加したところで、たかが知れている、むしろ邪魔に
なりかねない。

なら、頭を使うしかないだろう？

リルドナは 攻撃を避けながら、執拗に脚を斬りつけている、

ルーヴィックは ひたすら鉄に突きの連打を放っている、

どっちだ？

どちらを優先させるべきだ……？

7-2 ご馳走をくれなきゃ悪戯するよ

薄暗く、青白い光が弱々しく灯る洞窟に金属の悲鳴が響く、
一見すると、戦闘は膠着状態のように思える、しかし確実に終焉
をもたらすソレは忍び寄って来ている……良くも悪くもだ。
リルドナを襲った巨大な鋏は空を切り、地盤へ深々と刺さる。

「っ！ 覚悟なさい！」

時間にしてほんの僅かではあるが、確実に巨大カニの動きが鈍つた、彼女は目の前のチャンスを逃さず脚への斬撃を再開するべく、太刀を構えなおす。

やはりこちらを優先しなくては……、

俺は剣を鞘に収めた。

これまでも、彼女は幾度無くカニの脚を斬り付けていた。攻撃を避け、その隙を突いて二〜三発斬撃を浴びせていた。数発斬つては回避行動を取り、あたかも彼女が避難したのを確認してから鋏を振り下ろすような錯覚を憶えるほどの一連の動作の繰り返しだった。だが、ここで少し変化があった、鋏が地盤へ突き刺さり、カニが動きを止めた。

その変化に彼女の行動にも変化があった、明らかに斬撃の手数が増えている。一気に畳み掛けるかのように攻撃の勢いが加速する。

だが、それは……決着を急ぎ 焦りから出た行動では無いだろうか？

そう……明らかに深追いなんだ！

不意に巨大カニはバランスを崩したかのように、身体半分を地に着ける。

あまりの巨体なので、それだけで地響きのような振動が起きた、蓄積された斬撃のダメージが、遂にカニを転倒させたっ

のでは無い……！

地に着いた半身は、リルドナが斬り付けていた脚と反対側だ、その巨大な体重を、地に着けた半身で支えるように……

カニの行動とはかけ離れた動きだった。

「くっ、リル下がれ！」

「っ、え?!」

一斉にカニの脚が巨大な獣の爪のように彼女に牙を向いた、さらに斬撃を見舞おうと、体重を膝よりも遙か前方へと移していた彼女は止まられない、吸い込まれるように巨大なカニの脚の凶刃に飲み込まれていく。

ズドン、と何本もの脚が地盤へと突き刺さる、その軌道上にあった彼女の身体は、巨大な杭のような脚に刺し潰され、悲惨なノラネコの死骸になっているに違いないだろう

……そのまま下がらなかつたら、

嫌な予感がしていた俺は予めリルドナの方へと駆け出していた、そして巨大カニの脚という凶爪が彼女を貫く直前に、彼女の両肩を掴んで引き寄せた……本当にこちらを優先して良かった。

「ア、アンタ……?」

「馬鹿正直に突っ込みすぎだっ」

俺の言葉になにようと顔を向ける彼女だが、その表情には影が差

していた。

その理由を模索するよりも先にルーヴィックの言葉が刺さった、彼らしくない、焦りの色が伺える声だった、

「リル、手は無事か?!」

「あ、あははは……、一応は動くけど……」

「うっ……、」

ダラリと垂れ下がった彼女の右手に視線を移すと 手の甲がバツクリ裂けてドクドクと真っ赤な鮮血が溢れていた、どうやら俺が急に身を引き寄せた所為で手を突き出すような姿勢になってしまったようだ。

そこにカニの脚が掠めて行った、というところだろう。

いくら、身体を刺し潰されるよりはマシとはいえ、その傷は痛々しい 動くけど……のあとに続く言葉は、やはり「痛い」なのだろうか？

強情な彼女はそれを口にするこすらしなかった。

しかし、いつも元気溢れる彼女の顔はすっかり影を潜めてしまっている、もともと肌の白い顔なので、血の気が引くと赤から、青へとガラリと変貌してしまう。

「だ、大丈夫よ?」

彼女はそうは言うが……片手じゃ応急処置も出来ないだろうし、出血も放置するのはマズイ、そして何よりも痛々しい彼女の姿をこれ以上見ていたくなかった。

「おい、我慢すんじゃねえっ」

俺は彼女の手首を掴み、動脈を圧迫しつつ、心臓より高い位置に來ないように注意して少し持ち上げる、薄暗くてわかり辛い傷はかなりの深さに達している、鋭利な刃物で切られた訳ではないので、その傷口は酷い有様だ、骨や腱が無事かすら怪しい。

今日の俺ならいけるか？

カニから間合いを外し治療を試みる、しばらくはルーヴィック一人に頑張ってもらおう。

「少し大人しくしてるよ、リルドナ」

「え、あ、う、うん……」

と言つても、わざわざ釘を刺すまでもなく、

何故か、手首を掴まれてからは彼女は拾われてきた仔ネコのよ
うに大人しかつた、彼女の顔が視界を掠める……チョッピリ赤味が
戻って来ているようだった。

なんでだろうな、

この姉妹が困ったり、落ち込んだり、顔を曇らせると…何とかし
てやろうという感情に駆られる、 いや、なんとかしてやろうと
か上から目線の生易しいモノじゃない、何とかしてやらなきゃダメ
という強迫観念とも言える危機感だ。

俺はリルドナの右手にヒールを掛けるべく意識を集中する、

ただし、呪文スベルを詠唱しない、指先に魔力ちからを込める、

でも可能性がある、と出来るは別問題だよな…俺は確かにそ
う言った、でも今は、すぐになんとかしてやりたい、出来る出来な
いじゃなくてやるんだ。

指先を虚空に走らせ、光の線を次々と描く、不恰好ながら光の魔
方陣が完成する。

「う、嘘……?!」

「ほう、」

ポウ…と光が灯りリルドナの右手を優しく包み込み、みるみる傷
が癒えて行く。

「バツチり塞がったな」

そう呟き、俺は彼女の手をパッと放してやる。

「う、嘘でしょ……?」

信じられないと言わんばかりの表情を浮かべ、自分の手を見つめ
てしきりに指を動かし始めた、

「っ!」

不意にビクッと苦痛で顔を歪ませ、身体を強張らせている。

「あんまり無理に動かすなよ、多分表面上しか治せてないと思う」

「……なんで？」

俺はむ？と、応える、

「なんで、アンタが結印方陣キャスト・サークルを使えんのよ？」

ふむ、これは結印方陣キャスト・サークルという呼称の術式なのか、

「いや、さつきリウエンのメモを読んでたの、お前も見ただろ？」

「そうじゃなくて、なんで一回見ただけで使えるのよっ」

「あんまり俺を甘く見んな！」

とは言ったものの、正直俺も驚いている、なんせ何回か失敗する見込みで連続して試みる腹積もりだった……一発で成功するとは嬉しい誤算だ。

「随分と今日は調子がいいな？」

「お前も俺を甘く見てるな、」

「いや、魔法よりも。何故カニの動きが読めた？」

「読めたって訳じゃない、」

そう読めた訳じゃないんだ、でも予感はした、

「逆にお前たちは今までなんで避けられてたんだ？」

「なんでって、」

そりゃ野生生物の動きだもん、速いけど馬鹿正直じゃない？」

「だから読めてたんだろ？」

俺は確信する、カニにしても山猫リンクスにしても、野生の生き物だ、それらは本能からの攻撃であって、騙しがない。そもそも嘘をつくのは人間の特権みたいなもんだ。

「悪戯好きな妖精さんが操ってるんなら、

カニの動きから掛け離れた動きをしてくるんじゃないか？」

「ふむ、そういうことか」

「え？どーいうこと？」

さすがルーヴィックは察しが良い、一方リルドナは話に着いて来れず、目が点になりチョッピリINT3モードおハカさんの顔をしている。

カニは本来、左右の鋏で獲物を襲い捕らえる、それが彼らの武器

だからだ、

その武器である鉄が地盤に突き刺さり、動きが止まれば当然無力となり、敵対する者にとつては絶好のチャンスとなる。が、それこそが騙し、カニ本来の動きでは考えられない……身体ごと脚を持ち上げ振り下ろすという迎撃方法を用意していた。

まさにリルドナはそれに掛かり、反撃されることなど、一切考えずに突っ込もうとしたわけだ。

別に俺はこういう結果が予想できたわけじゃない、わかっていたのは野生の世界ではありえない騙しを何かしら仕掛けてくるということだ。

そして仕掛けてくるタイミングは、こちらにチャンスが来るときしかないと思っていた。

「ま、まんまとカニを操る妖精さんに騙されたってトコだよ」

「きー！バカにしてえー！」
なんとなくで意味を察した彼女は怒り心頭に太刀を両手で握ろうとするが、

「あっ?! ついたた……」

「だから無茶に動かすなっつて、」

やはり傷を塞ぎ、止血できただけで中身は傷だらけのようだ、何回かヒールをかけてやるべきか。

「だけどな、傷だらけなのはあっちもだよな?」

「肯定だ、些か動きが鈍いし、なにより脚がおかしい」

何度も述べるが、カニ本来の動きから掛けた動きなんだ、あの巨体を一旦半分の本数の脚で支え、一気に振り下ろしたんだ……体重は身長之三乗倍に比例する、本来セカセカと水辺や水中を移動するための器官でしかない脚で耐えられる訳が無い。

命の設計図の仕様から外れた動きをすれば、当然どこかが壊れる。文字通り相手の足は死んだ、あとは逃げるか、詰めるか好きなように選べる。

ふと、ルーヴィクが散々突き決っていた鉄を見る、側面からの刺突でかなりの亀裂が走っていた。

だが、それでも依然として堅牢さを保っている。傷は側面からのみ……となると

「おい。ルーク、」

彼は、む？と一瞬だけ視線を向け応戦を続ける。

「あの鉄の正面から強い衝撃を与えられないか？」

「ふむ、正面……からか」

「それも鈍器で殴打するような重い一撃で」

「ふむ、注文が多い」

そう呟くと、思案するような素振りを見せつつも、刃を左手から右手に持ち替えた。

「出来なくは無い、やってみよう」

彼はそう言い放ち大きく間合いを空ける、そして鈍重な動きで巨大カニは追って来た。

それを悠然と待ち受けるルーヴィク、迎撃するのだろうか。

「どうするつも」

……りだ、と発しようとした口が止まる、

空気が重い、いやヤツが何かを発している　凄まじい重圧？
プレッシャー

気のせいか、彼の足が地盤へとめり込んでいるように見える、急速に掛かる荷重が増えたから？

荷重の増加、ありえない　それにコイツはスピードを活かして切り裂くタイプじゃなかったか？

そうこうしている内に巨大カニは迫る、それに対し、彼は右半身を突き出すように構える。

遂に巨大カニがルーヴィクを攻撃圏内に納め、その鉄　ルーヴィクが散々突き決っていた鉄　を振り上げ、全力を持って彼に

振りかざした。

そして俺は見た、その迎撃の瞬間を

迫り来る巨大な鋏の先端を、あるうことか順手に持つ刃の柄で受け止めた、まるで破城槌^{ラム}が城門を打ち破るかのような重い衝撃が周囲へ響き、

あの堅牢だった鋏が軒先に垂れ下がる氷柱^{ツライ}のように儼く砕け散った。

そのあまりにも激しい衝撃に、彼の右手から刃が弾かれ後方へと飛ぶ、

が、すぐに後ろに回していた左手で回収し　しっかりといても逆手持ちだった　そのまま甲殻の砕けた鋏へと一閃する。

あの巨大な鋏が刎ねられ、その場に落ちる。ズシンと鈍い振動が響き、遅れてその切り口から青血色素^{ヘモシアニン}を含んだ青い液体がドロリと滲み出る。

「　驚いた、」

残心を置き、構えを解かないまま彼は呟く、

「こつも綺麗に砕けるとは……」

自慢の鋏を片方失い、巨大力ニはその場で暴れる、

「お怒りのようだ、」

「余計、手が付けられ無くなったりしないよな……」

「あ、逃げるわよ」

巨大力ニはもう片方の残った鋏で地盤を掘り返し、瞬く間に地中へと姿を消した、

何度も述べるが、あの力ニは操られている、戦意喪失で逃げ出すこともない……先程の脚の攻撃で足が死んだように、操る側の者は最後まで使い潰すに違いない。

それなら

「逃げたんじゃないよな、」

「肯定だ、地中からの奇襲だ」

その時、キンツと静かな金属音がした、それはリルドナが太刀を鞘に納める音、

納刀した彼女は犬歯を剥き出しにし、こう告げた、
「お兄ちゃん出現ポイント頂戴、『居合い』を使っわ」
おい、無茶するなど言いたかったが、素直に聞き分ける空気じゃない。

「ふむ、座標は要るか？」

「要らないわ、どうせ言われてもあたしの頭じゃ処理できないし」
忌々しげにカニの消えた地盤を見つめ、

「ザツクリでいいわよ、大体の方向と距離さえ判れば」

「…俺の立ち居地の七時の方位にお前の足で八歩分下がって構えている」

その言葉に彼女はかしこまりと答え、足早に移動する

「……七秒後だ、エインはもう少し離れたほうがいい、」

「お、おう……」

俺は言われるがまま後方へと避難する、あと五秒、

「これより詰めるぞ」

何をするつもりなんだ？

散々、斬撃を弾かれてたんだぞ、あと三秒、

不意に地響きが起きる……あと一秒！

「……来る」

その眩きと共に、彼は姿を消した、

と錯覚してしまう速度でその場を離れ、代わりにその場所に巨大な青い杭が生える。

その杭はグングンと天へと昇るかのように上へと伸びる……いや、伸びているんじゃない、飛んでいるんだ。その鉄は胴体と泣き別れとなり下から突き上げる慣性を保ったまま天へと昇っているのだ。

勿論、誰の仕業かは判っている……彼女だ。

リルドナは、自分の目の前で突き上がる青い杭　巨大カニの鉄

に向かつて太刀を抜刀し、そのまま真横に一閃……まるで光の線が走ったかのような鋭い太刀筋だった。

放たれた斬撃は的確に甲殻と甲殻の繋ぎ目とも言える関節を的確に捉え、あれほど堅牢であった巨大な鋏を両断した。

「げっ?!」

上へと投げ出された物体は、いつかその上昇を止め、今度は重力加速度を伴って投げ出された速度で地面へと降りかかる、

あるうことが、切り離された巨大な鋏は俺の方へと倒れこむように降って来た。

ズヴウウ……ンと重い振動と砂埃が巻き起きた……。

「あ、危ねえ……」

「……惜しい」

「おい、何が惜しいんだ?」

「冗談だ、気にするな」

もちろん冗談だろうさ、さもなくば「もう少し下がれ」とは言わないだろう、

そんなことよりも……問題は

「この力ニどうする?」

左右の鋏を失い、脚を痛め移動手段も衰え、最早、戦うことも逃げることも適わない哀れな巨大力ニ……操られていなければ、とっくに逃げ出しているだろう。

「うーん。トドメを刺すにしてもね?この殻は厄介だわ」

右手をさすりながら、リルドナが答える、

「てゆーか、メンドイわ」

「お前らしい意見をありがとう……」

脅威はすでに無いが、仕留めるとなると骨が折れる、

俺もその意見に賛成だったが　では、どうしたものか?

「 あっ? 」

気のせいか、カニの身体から青白い光の球が飛び出したように見えたと……、

直後、ガクンと脱力したかと思うと、鈍重な動きで洞窟の奥へと移動し始めた。

「 逃げる……のか? 」

「 そうみたいね 」

俺たちは暢気にその姿を見送る、

「 しかし、両手^{ハサミ}を失ってこれからどう生きていくんだろうな 」

「 そこまで知ったことではない、 」

その言葉に、俺は冷たい奴め、と非難の目を向けた、

「 大丈夫か? ナンセンスだぞ 」

が 逆に非難の目を向けられ返された、

「 そもそも、あれだけの巨体に育つのに、どれ程多くの血肉を啜ったものか 」

「 それもそうか、やらなきゃやられてた、

だよなあ…… あのカニも命があっただけでもマシか 」

「 うむ、キャッチ&リリースは疑似餌釣りの基本だな^{ルアーリリィング} 」

「 おい、その場合は誰が罠の疑似餌なんだ? 」

「 言っつていいのか? 」

「 遠慮しとく…… 」

7-3 そこに在ったのは

俺たちは洞窟部分を後にし、先程の地下壕のような場所へ戻った。やはり人が生活していたらしく、端々にその痕跡を無受ける。

「むー、この森に人が住んでいたってことか？」

「大昔は居たのだろうな」

「……」

そう、椅子や寝台など、家具らしきものがありはするが、その風化具合は相当な年月の経過を物語っている、

そして、もうひとつ気になったのが……

「なんか、どれもサイズが小さいよな」

「ふむ……、」

「……」

ん？

俺は周囲を調べつつも、ルーヴィックに声を掛ける、

「ところで、地上へはどう帰る？」

「あのロープを気合で登るしかあるまい」

「やっぱ、それしかないかあ……」

「……」

ふむ？

遙か天井から垂れ下がるロープはあたかも天上から差し伸べられた蜘蛛の糸のようだ、

私利私欲に感情が走った途端、プツリ切れたりしないだろうか？

「アレって大丈夫だろうな？」

途中で外れたりしたらシャレに無んねえぞ……」

「問題ない、しっかり固定した」

「そうか……」

「誰かが意図的に切ったりしない限り大丈夫だ」

「どうしてお前は、俺を不安にさせたがるんだ？」

「……」

おいおい、

さつきからおかしいぞ？

「おい、リルドナ」

「あひ?!」

俺が呼ぶと、彼女は過剰に反応を示した、

やはりおかしい、先程から右手を見つめて黙ったままだった。

あの巨大力二を追い払ったあと、俺はもう一度彼女の右手にヒールを掛けてやった。

あの『居合い』とかいう剣技は鞘の中で刀身を走らせ、充分に加速し、その爆発的な一太刀はかなりの速度があり伸びもあるとかどうとかで、『近間の飛び道具のように恐ろしいものである』とまで言われているらしい。

とにかく達人の扱う極意なのだろう、そしてそんな代物を扱ったモノだから、

なんとも彼女の右手は「マジカル グローブ」とでも言いたくなるような一回り体積の増量された腫れ具合となってしまうていたのだ、

いや……どういう理屈でそうなったかは、わかんないぞ？

そして、最初と同じく手首を掴んでヒールを掛けてやったんだ。

何故か手首を掴まれた彼女は大人しくなってしまうのだ……わからない……。

「よくわからねえが、また腹でも減ったのか？」

「ち、違うわよ……もう、バカッ！」

俺的外れな言葉に、辛うじて心境の切り替えが出来たようだ。

俺は再び周囲の家具に目を運ぶ、その数から十数人程度が生活していたように見受けられる、やはりその大きさ…サイズが引っ掛る、どう見ても子供用に詭あつちえたサイズだ。

そして、その家具の配置から生まれる間隔や空間は、明らかに小さな身体の持ち主が生活するのに適したものだと推測できる。

こんな場所に子供が……？

いや、ノームやホビットといった小人族ならば、このサイズでも問題ない。先程だって「こんな場所に人間の子供がいるわけではない」 thought と思ったら、やはりその正体はコボルトだったり、フタを開けてしまえば真相はそういうモノなんだろう。

それでも何か引っ掛る、

俺は何に対して意地になっているのだろうか、

薄っすらと浮かび上がりつつある一つの仮説を決定付ける為だろうか？

だが、それに反して仮説が外れることを願いつつも……。

ならば、よせばいいのに、調査の手を止められない、

その空間の奥の方、部屋に見立てるなら隅に当たる部分、そこ近辺は家具が激しく痛んでいる、むしろ壊れていると言った方がいいかも知れない、そこで何者かが争ったかのように……、

俺は心の奥で警鐘を鳴り響くのを、無理やり抑えつける、

壊れた家具を乗り越え、その奥を覗き込んだ……

……果たして、それを見つけてしまった

「うっ……」

「どづした？エイン」

地下壕、

子供、

「……い、いや」

泉の畔、

集落、

次々とキーワードが頭に蘇ってくる、

白の民

魔王に襲われ、

「どうしたのよ？無能、」

「く、来るな、」

地下壕、

巨大カニ、

俺の制止を気にも留めず、彼女は「それ」を覗き込んでくる、

「もー、なんなのよ？」

「見るんじゃないっ！」

カニは肉食、

子供、

「つ、ひつぁあ？」

「このバカッ、見んな！」

人間は捕食対象……

小さな人骨……。

7-4 地下と子供部屋とチョコレート

人骨がある、おそらく人のモノだろう、判別の材料は

……頭蓋骨があるからだった。

それは、長い年月そこで眠っていたのだろうか、すっかり白骨化している。

ただし綺麗に白骨化している、ではない、

無残にもあちこち食い荒らされたかのように欠損してしまっている。

「……あ、わ、ああ、」

俺のすぐ傍でリルドナが言葉にならない声を漏らしている、その顔は重病人のように真っ青だ。さすがに俺に抱きついたりはしなかったが、その震える小さな手が俺のコートの袖をぎゅっと握り締められているがわかる。

当然だろう、人の骨　それも頭蓋骨なんて見慣れたモノじゃないはずだ、

……この兄妹、こと戦闘に関して高い性能スペックを誇っていた、

だが、兄と妹で決定的に違うところがあつたと思う、

それは　命のやり取りに関する価値観だろう、思い返してみれば、あのミノタウルスの時でも散々屈強な肉体に攻撃を阻まれていたが……先程の剣術を使っていたのなら……確実に殺害していただろう。

片腕を痛めつけたのも、太刀の峰での打撃だった。片刃の剣で峰打ちするというのは、刀身の折れる危険を孕む、リスクだけを背負ってなんのメリットも無いのだ。

もし、刃を返さず斬り付けていたなら……腕を斬り落せていたの

かもしれない。

だが、彼女はしなかったし、その直後に降参を促すかのように問いかけて投げかけていた、言葉が通じる相手かさえわからないのに、断言してもいい、彼女は人型の生き物に対して、命を奪うことに消極的だ、

人の死に対して免疫が無いと言い切ってもいい。

無残な白骨は死のイメージに直結する、彼女の反応はごく当たり前なのだ。

一方、ルーヴィックはどうだろうか？

いくらリンクスとはいえ、彼は迷わず首を刎ねるといふ確実な無力化の手段を執った、

そして今この瞬間も、俺やリルドナと同じように、同じものを見つめている筈なのに、全く表情を変えない、声が震えたりもしていない。

おそらく、死に関して全く無関心なのだ……。

「なあ、」

「なんだ？」

「……せめて、何か吊ってやれないかな？」

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

やはり価値観の違いからか、俺の意思はまるで尊重されない、ではリルドナなら？

俺は彼女に目を向ける　が、相変わらず青い顔をしている、とてもじゃないが、死者への手向けとかそういう場合では無さそうだ。

「ご、ごめん…あたしこついのダメなのよ……」

彼女は青い顔のまま、心底済まなさそうな表情を見せた。

尚も顔へ青みが増していく……周囲を染める青い光が、そのまま顔を染めていくようだった……、

っ?!

青みが増すだと?

周囲を染める青い光だと?

この展開は確か

視線をリルドナの顔から外し、周囲に走らせる。

「な、」

部屋の隅にいる俺たち三人を取り囲むように浮かぶ幾つもの青白い光球、ユラユラと揺れ動きながらこの空間処狭しと言わんばかりに宙に浮かんでいる。

それらはまるで真冬の深夜に目にする事が出来る青い月のようだ。

そう、これらは…… 昨晩リウエンの周りを浮かんでいたウィル・オ・ウイスプ、

いや、確か彼女は別の名前で呼んでいたはずだ……

「……ブラオ…… アウゲン……?」

「う、嘘……」

リルドナは青い顔のまま、信じられないという様子で目を丸く見開いている、

それもそうだろう、先程の話によれば妖精は昼間に顕現出来ないということになっている、しかし目の前の現実には白昼堂々と姿を見せ、それも少くない数を以って部屋の隅にいる俺たちを追い詰めるように浮かんでいる。

「くっ、」

俺は咄嗟に腰のショートソードに手を伸ばし構えようとする、

「エイン止せ、」

が、それよりも早くルーヴィックに制止される。

「アイツらには普通の物理攻撃は通らない、ヘタな攻撃は逆に標的にされるだけだ」

そう言いながら彼は例の短刀を構える、その刃は青白い光に照らされ不気味に輝いて見えた。

……？

物理攻撃は効かないんじゃないやなかったのかと口にしようとしたとき、
「俺のは少し特別なんでな」

彼はそう答え、不気味に輝くその刀身を俺に示す。

ここに至って、初めて気付いた、輝きすぎて、鉄を鍛えた鋼 には光の反射率が高すぎる、まるで磨き上げられた鏡のような輝き。

これ程の輝きを誇る金属といえば……

「それ、もしかして銀か？」

彼は満足そうに鼻を鳴らし、

「正解だ、だが半分だ」

銀は古来より魔の者を滅ぼす力があるとされている、そして科学的にも抗菌性に優れていたり、ライシン ユテスト 毒の検出等にも用いられているらしい、

非物理的な相手をするのに適しているというのだろうか？

だが、確かにこれだけでは「半分」だ、完全に銀製ではないだろう。

銀は延性および展性に富み、その性質は金に次ぐ……つまり軟材だ、噛み付けば歯形が付いてしまうほどだ。そんな素材で武器なんて作ったら、すぐに形を失うモロイお飾り武器になってしまうはずだ……刃物にするなら、精々食事用ナイフが良いところだろう。

今までの戦闘を見る限り、あの短刀の硬度は計り知れないモノを感じる。

硬度で言えば、サーメットやタングステン等があるが、それだと硬いが衝撃に負けて割れてしまう、硬い≠強いとは一概に言えないのだ。

東方の刀剣鍛冶で　リルドナの太刀がそうだろうか？　表面を高い硬度の金属で覆い、芯は柔らかい金属で構成する技術があるらしい、

だが、その理屈だと表面に銀を使えず、やはりあの輝きは得られない。

「一体、何なんだよそれ…」

不意に一体の光球がこちらに飛び掛ってくる、

が彼は立ちふさがるように俺の前に出て、刃を払う、

ガキイツと甲高い金属音が響く、

あのユラユラと浮かぶ姿からは到底想像の及ばない音だ、

「厄介だ、」

彼は舌打を漏らしながら、そう呟いた。

相当硬い感触なのだろう短刀を握る左手を軽く振っている。

「硬い…のか？」

「靈的に、な。普通の武器ならすり抜ける」

彼は光球の群に視線を走らせ意識を集中している、

決して自ら斬りかからず、あくまで迎撃にのみ体勢を保っているようだった。

「流石は、最強ランクの装甲アイマークラス等級誇るウィル・オ・ウィスプ類だ」

「

再び甲高い金属音と共に光球の突進を退ける、ただし追撃はしない。

この場合はヘタに相手を刺激しない方がいいのだ、相手も警戒して本格的に仕掛けて来ない、こちらの戦力が視えないからだ。

ブラオ・アウゲンにしてみれば、自分達に通じる武器を持っていることが脅威だ、それが牽制となつて総攻撃を思い留まらせている。こちらもヘタに追撃をして堰を切れば形振り構わず襲い掛かってくるだろうし、無様に背中を見せて逃げ出せば、脅威無しと判断し襲

い掛かってくるだろう。

正に、押さず引かずの中間で微妙なバランスを保っているのだ、今は膠着状態という見えない壁で何とか守られている。

「ステイルメイトが適用されたらいいのにな……」

「いや、むしろこれはスマザード・メイトの一手前だ」

「それって絶望的じゃないか……！」

そこにまたもや光球は飛び掛る、

ルーヴィックは同じように刃を走らせ追い返すが、続けざまに別の光球が飛来する、

「チツ……」

彼は迎撃の間に合わないかと判断し右腕を楯にした、

バチリツと空気が弾ける様な音と共に青い閃光が走る。

「お、おい大丈夫か!？」

「問題ない、」

彼の被弾する姿は初めて見る、普段なら余裕で避けていたかも知れないが、避ければ俺達に流れ弾が行く だから避けられない、弾き返すか受け止めるしか出来ないのだ。

俺は奥歯を噛み締め口惜しく思う、俺は完全にお荷物だ。

「そんな顔をするな、俺は俺の仕事をしているだけだ」

俺は彼に、護って貰った上に気まで遣わせてしまった、

「 なら俺も……俺の仕事をこなす、」

戦闘能力の無さは頭でカバーしてやる、

「なんとかこの絶対手フォースド・ムーブから脱出させてやる、こんな状況を強要され続けたらいつかは詰まれちまう、絶対正着手コレクトムーブはある筈なんだ」

「大きく出たものだ、」

そう呟きながら甲高い金属音響かせる、確実にその間隔は短くなり攻撃の手が激しくなること知らしめる、

時折、金属音の合間に激しい青い閃光が走る……俺は焦る気持ち

を必死に抑え考えた。

どうやって倒すか、

どうやって逃げるか、

そのどちらでもない、どうして襲われているかだ、そもそも理由は『泉の貴婦人』の警告を無視して森の深部へと立ち入ったからだろうが、

今この状況だけを切り取って考えるなら、泉の畔で^{ブルーニッパ}に襲われたところから考えるべきだ、

そう、あの時襲われたのは俺とリルドナだけだ、あの一連の行動の何かが、いにしえの盟約^{ルール}に抵触したのだろうか？

ご馳走^{トリック}をくれなきや悪戯^{オア・トリート}するよ……悪戯を止める何か、それはなんだ？

くそ、なんで大の大人が（俺も未成年だが）子供の顔色伺ってへコヘコしないとダメなんだ

ん、子供？

妖精……子供……盟約^{ルール}と言えば

「……子供部屋のボーギーか」

「ふむ？」

「何……ソレ？」

兄は刃を身構えたまま、妹は顔を青くしたまま、

それぞれの配分で疑問を声にした、

「リウエンなら食いついた話題なのかもなあ……」

子供部屋のボーギー、親のいうことを聞かない子供たちをしつめるために、大人たちが創り出した妖精たちの総称だ。

例えば、暗くなっても家に帰ろうとしない子供はバグ・ベアさらわれてしまうとか、

例えば、夜になっても寝ようとしないう子供をボグルブーが煙突から家に入ってきて食べてしまおうとか、

例えば、子供達だけで水辺で遊んでいたり、船に乗っていたりすると、緑の牙のジェニーに足首を掴まれ水中に引きずり込まれるとか、

例えば、朝寝坊して、慌てて家を出て、ロクに安全確認もせずに曲がり角に飛び出すと、朝食を啜トーストえた女子学生しかもンテレに激突して嫌な条件ラケが成立ガ立ウするとか、

ともかく、子供達の悪戯と大人たちの気苦労の数だけ、子供部屋のボギーのような妖精は存在する。

所詮は、大人達が考えた「文字通りの「子供だまし」なのかも知れない、だがその逸話の大元となる事象は少なからず存在したのでは無いだろうか。

骨組みとなるのは原因と結果の関係、そして今俺が欲しいのは原因だった。

目の前では、突撃を追い返す金属音よりも、止む得ず受け止める青い閃光の方が多くなっている、次第に視界が閃光によって奪われていく、

「くっ」
思わぬ角度から光球が飛来し、その射線軸にはリルドナの頭があった。

彼女はブラオ・アウゲンを見てから、さらに脅えた様に動きが鈍い、

ルーヴィックからは死角で、いくら彼が高すぎる聴覚で感知し反

応出来たとしても、咄嗟に割って入れる立ち居地じゃない。

バチンツと激しい衝撃と閃光が近距離で巻き起こる、

「あ、ああああ

?!」

彼女は両手を頬にやり、悲鳴に近い声を上げた、

ブラオ・アウゲンの突進が直撃したから？

いやいや、リルドナは無事だぜ？

「おい、エイン?!」

「・・・畜生、お前よくこんな何度も受け止められるな・・・」

咄嗟に俺が左手を差し出したからリルドナは無事だ、

俺は　あんまり大丈夫じゃない、代わりに攻撃を受けた左手に

は激しい衝撃が電撃のように走り、一瞬意識が暗転しそうになった

……その時妙な声みたいなのが聞こえた気がした。

激しい痺れと痛みで左腕が動かせなくなった。

「く……」

忌々しげに声を漏らす彼の表情は、相変わらず無表情の鉄仮面だった。だが、その声から動揺と焦りが伺える。

「リル、止む得ん『赤』を使え！」

「え？」

ルーヴィックの指示に、思わず聞き返すような反応を見せるリルドナ、

「で、でも……」

「『赤』でアイツらを切り裂け」

俺には『赤』が何なのかわからない、ただそれがブラオ・アウゲンに有効なモノで、リルドナが使えるモノということだ。

だが、彼女の反応を見る限り、本人が望まないモノであることくらい想像が付く。

「止むを得ないだろう、こんなところで」

「わ、わかったわ」

説得を続けるルーヴィックの言葉を遮るようにリルドナは答えた、
こんなところで　の後に続く言葉が何か気になったが、それ以上
に震え上がるリルドナが心配だった、彼女は震えながらも左手を
持ち上げ小刻みに震わせながら構える。

そして何かの想いを断ち切るかのように、ぐっと目を閉じた、

……あの目が開けばきつと何かが起きる…俺は自然とそう思った。
彼女は静かに深呼吸をし、意を決したかのように瞳を

「そんなことしなくても良いぜ」

「……な、ん…ですって？」

彼女は泣き出しそうな顔を俺に向けた、

ああ、そうだよ、そんなに嫌なことならしないでいい、エインさ
んは空気の読める男なんだぜ？

「　っ、どうするつもりだ？」

光球の突進を受け止めながらもルーヴィックは問いかける、

「その前に、リルドナに二つ確認だ」

「え？」

「あのおにぎりに入ってた『梅干』てどんな味だ？」

「酸っぱいわね、えーっと何ていうか、深みのある酸味よねえ……」

何故か彼女はうつとりした表情を浮かべ、そう語る口元には

「おい、ヨダレ零れそうだぞ……」

「ち、違うわよっ、見間違いでしょー！」

パフロフの犬
条件反射でここまでの反応を示すと相当な酸味なのだろう、

確かに、これじゃお気に召さないわけだ。

「時に、リルドナ、お前はおやつを何か持ってきているだろう？」

「ど、どうしてそれを……?!」

「やっぱりあるのか……一番甘いのを一つくれ」

俺の言葉に彼女の顔は疑問全開だ、さっきまでの真っ青顔よりマ
シだろう？

今も尚攻撃を凌ぎ続けてくれているルーヴィックも疑問だらけに

「違う。」

「んじゃ、この『極甘吐血チヨコ』あげるわ」

彼女はポーチから毒々しい柄の包みを取り出し、俺に差し出す。

包みの中身は黒光りするチヨコレート、すごいセンスのネーミングだが甘いことは間違いないだろう……普通のは無いのか。

「ま、別に俺が食うわけじゃないけどな」

「はあ、じゃあ誰なのよ……？」

先程、ブラオ・アウゲンの攻撃を手に受けたとき、聞こえたんだ……、

オナカ、スイタナ

「どうせなら、お前がその子に食わしてやれよ」

「だから、誰によ？」

俺は『その子』を指差す

「ほ、本気で言ってるの？」

「頑張れよ、妹に『お姉ちゃん』と呼ばれたいリルドナお姉ちゃん？」

「な、」

やはり凶星だったのか、顔が真っ赤に染まる、青くなったり赤くなったり忙しい奴だ。

彼女はふるふると震えながら『その子』を見つめる、

意を決し、リルドナの手が『その子』　小さな人骨　へと伸びる、

リルドナは顔を真っ赤にしつつも、目に涙を浮かべ、歯をガチガチと鳴らし震えていた。

やっぱりキツイか？

「あ……？」

俺は震える彼女の手に分自分の手を添え、手伝ってやることにした、

ブラオ・アウゲンの狙いは最初からリルドナだったんだ、最初の大カニも、地下の巨大カニも彼女を狙っていた、だが彼女はこ

とごとくそれらを避け、地下から地上への一撃は見事に近くに居た俺にとばつちりをプレゼントしてくれたわけだ。

正確には彼女が携帯していた甘いお菓子、こんな冷たい地下壕でどれ程ひもじい思いをしていたか想像も付かない、味気ない保存食でどれほど食い繋いだかもわからない、どのタイミングでカニに食い殺されたのかも、

そんな想いを持ったまま死して妖精となり、何十年？何百年？漂ったのかも考え付かない、そんな彼女達の頭上でノラネコのようなお姉さんが楽しげに歌を唄いながら、美味しそうにお弁当を食べる……手を出すなというのが無理というものだ、なんせ子供なんだ。

「悪いな、眠ってるの起こした上に暴れちまっつて」
俺とリルドナの手でお菓子をかつて口だった場所へと運んでやった、

顎を動かす筋肉も無ければ、唾液を分泌することも出来ない、そもそも舌が無い……味わえることも無い、けども『その子』は満足したに違いなかった、

だっつてそうだろ？

俺の頭には届いているんだ、

アリガトウ てな。

いつの間にかあれだけ居た光球が消え去っていた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

その後、俺達はロープをよじ登り地上へと帰還を果たした。

ブルーノにはルーヴィックが上手く報告してくれたらしく、特にお咎めも追求も無かった、さりげなくロイが複雑な顔で「お疲れ様」と声を掛けてくれた辺り、俺達の不在の間にいるいろ口論になって

いたのかも知れない。

彼は彼なりに俺達の立場がこれ以上悪くならないように、いろいろ進言してしてくれたのだろう。

一行は再び進み始める、先程の一件で思い知った、

何故、早朝から出発したのか、

何故、進行を急ぐのか、

日が落ちる前に目的の屋敷にたどり着かなければいけないからだ。夜になってしまえば、妖精達は容赦無くその力を振るうだろう、

それらは先程のブラオ・アウゲンのように元・無邪気な子供と違い、明らかな敵意を持った邪悪な妖精もいる筈だ。

俺は気を引き締め先を急いだ。

再び無言の行軍になってしまってから数分、

「……お礼、言ってたわね」

ポツリと彼女が呟いた、

「お前にも聞こえたのか？」

ええ、と彼女は頷いた。

「あれで良かったんだよね？」

そうね、と彼女は頷いた。

「で、なんて言ってたんだ？」

「あははは……」

彼女は照れ臭そうに答えた、

「うん、『オネエチャン、アリガトウ』て言ってたわ」

8 - 1 バファ ンですか？ノー ンですか？

Schwester

Schwester

Ältere Schwester

Trennt die Kleinigkeit dich ri

chtig, und sollte ich essen?

Ibt du möglicherweise nicht al
lein?

* * * * *

昼下がり、しばしの休息(?)に別れを告げ、俺達は再び進みだ
していた。

向ける足は再び森の中へと向かう、木々という壁の中へと俺達の
姿は消えていく……。

結局、『泉の貴婦人』という存在と出会うことは無かった。お伽
話にもある通りに滅多に人前に姿を現さない存在なのだろうか？

まあ、もし目の前に現れていたとしても決して『好意的な対応』
して貰えるかわかったモノじゃない、あえて深く考えることは止め、
俺は草木の匂いが立ち込める森の空気を深く吸い込み気合を入れ直
すのだった。

無言の進軍を続ける俺達だったが……そろそろ来る筈だ、アレが

「ねえ、なんて言うか」
「黙ってる」

紡がれる言葉を先読みし、俺はピシヤリとソレを切り捨てる。

発言を遮られた人物は、俺よりも頭一個分丸まる背が低く、髪も服も黒一色で、法衣だか、修道服だか、二重回しだか、よくわからない服装をしていて、その赤い瞳を爛々とギラつかせてギヤアギヤアと抗議してくる、勝手気ままな彼女は黒いノラネコのような女だ。

一見すると、幼く見える顔と小柄な体格と黒髪の所為で「東洋人？」とか思ったりもするが、その疑問を真つ赤な瞳がバツサリ否定する。

「頼むから激しく大人しくしてくれ」

「なによつ、まるであたしが落ち着き無いみたいじゃない」

落ち着きなんてレプトケファルスの人工育成の成功率並みに無いだろお!?

と言いたくなる気持ちを海洋調査に送り出し、代わりに赴任してきた頭痛さんに心悩まされるのだった。

もうすっかり、他のメンバーとの距離が物理的にも心理的にも遠い……。

ブルーノを先頭に、黙々と追従する男達。その最後尾には槍を手にした男と、マスケット銃を背負った金髪の男。ゼルとロイの傭兵コンビがピタリと付き従い、そのさらに後方でトボトボと着いていく俺と細長い鉄仮面と小柄なノラネコ女……なんだか落ちこぼれの生徒の気分だ。

「どーしたの？無能。頭でも痛いのか？」

「現在進行形で絶賛頭痛に悩まされてるぞ……」

「ふーん、大丈夫？」

「大丈夫じゃない、問題だらけだ」

そこで大きく息を吸って、

「だから黙ってる」

再びピシヤリと切り捨てる俺、なによつと噛み付く彼女。まるで『痒い』『掻く』の悪循環だ。それらを振り払うようにリュックのサイドポケットから冒険記帳を取り出し、先程の地下壕の出来事を書き綴り始めた。

「……アンタ、器用ねえ……」

率直な感嘆を漏らす彼女だが、実は大したことは無い。なにせ、まともに字なんて書いてないし、内容も酷く適当だ。

そもそも文字を書くのが目的じゃない、要は気を紛らわせられれば良かったんだ。

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

危険です、前をお向きなつて下さい

……。

拳句、ルーヴィックにも謎の声にも心配されてしまった。

「あー、畜生……、」

俺は誰に向けるわけでもなく悪態を付く、

こんなことなら頭痛薬でも持って来れば良かったか？

でも、あれは食後に服用しないとダメだっけ？

さっきの騒動ですつかり食事から時間経過してしまっている、薬を飲むにしても、とりあえず何か胃に入れなければ。

優しさで構成されたその薬は決して胃に優しくないので珠に傷だ。などと、俺が思考を泳がせていると、リルドナが余所者に縄張りを侵犯されたノラネコのように緊迫し真剣味を帯びた表情を浮かべていた。

「……そろそろね、」

何かあるのだろうか？

この女は異常に目が良い、俺達が感知できなかったモノを何か捉えたのかもしれない。

「……来るわ……五、四、三、二、一っ、」

「うむ、ジャストだ。
リル、体内時計の精度が上がったな」
と、ルーヴィックが時計を一瞥しながら、リルドナのカウントダウンの正確さを評価した。

何か嫌な予感しかしない、

が、俺はそれでも訊いてみた。

「どうした、何かあったのか？」

俺の問いに、えへへ〜と可愛らしく笑みを浮かべ、

「うん、三時よ、三時 おやつなじか」

ん、と発音させる前に、バシン！と手にした記帳で叩く、カドで殴打しなかったのは、せめてもの情けだ。

「いったー…、何すんのよ！」

彼女は犬歯を剥き出しにして抗議してくるが、『おやつ』という新たな単語の所為でさらに頭痛さんが張り切って仕事を再開した気がした。

「あ、」

そこで、俺は三つ気付いた、

「なによ？」

「……すまん、」

「はあ？」

突然の俺の謝罪に毒気を抜かれたかのようにキョトンとした顔を見せる、

「勢いとノリのあまりに叩いちまった……すまん」

これが二つ目の案件、女には手を上げるまいと三年前に誓っている、こつ見えてもエインさんは紳士なんだぜ？

「それと」

と言いかけて、言い淀んでしまった、

二つ目の案件、薬を飲むのに胃に何かを入れる部分、彼女はいろ

いろお菓子を持つているのは先程の地下壕でも判明している。ならばそれを分けて貰って、とりあえず胃を誤魔化すことはできる。

ただし、こんな状況で自分からお菓子の話題に飛び込むと、彼女のノラネコイズムは決してソレを見逃さないだろう。

三つ目の案件は頭痛薬。彼女も 歴れっきとした女だ、頭痛薬：もしくはそれに代わる薬の一つくらいは持つている筈だ（根拠は聞くな）
そもそも救急箱を常備しているくらいだし、薬を持っていても不自然じゃない。

頭痛を和らげる為に、お菓子と薬を分けて貰い、その工程でさらなる頭痛の原因タネを振り撒いてしまうのか……。

なんとという二律背反アンチノミー、なんとという堂々巡り、疑念は他には向けられない、降りかかるのは自分にだけ！いやいや、頭痛を和らげる為ならさらなる頭痛を厭わない、別にそんな苦勞が嫌じゃない！むしろ好き！？ってなんだ暴走したこの思考回路は！？俺はいつから、そんな愛憎併存アンビバレンツを抱えた面倒ツンドラな人になったんだ！？いやいや、冷静な対応を欠落して、大人になりきれない遅延猶予モラトリアムを抱えた子供なのかもしれない！

「ぬううう……」

「……ど、どうしたのよ……そんなに頭痛いの？」

ふふふふ……リルドナよ、自由奔放なお前にはこの気持ちはわかるまい……。

「リル、気にするな」

「え？」

「それはJ・H・S症候群ジュニア・ハイスクール・セカンドという心の病だ、命には関わらない」

意味はよくわからないが、サラッと酷いことを言われている気がして仕方ない！

……クソッ、さらに頭が痛くなってきそうだ……。

「おい、あんちゃん」

不意に、思わぬ角度から声が飛んできた、

薄汚れた白いターバンとマントに身を包んだ男　　アーカスだつた。

「は、はあ？俺のことですか？」

「おう、オマエのコトだぜ、頭痛エんだ口？」

彼とは初めて会話するが、言葉の節々に妙な訛りがある、言語圏の違う地域出身なのだろうか？

「あ、はい…そのノラネコの所為でいろいろと」直後、誰がノラネコなのよう！と聞こえた気がするが些細なことだ。

「コレ、ヤルよ、どうしようもなく辛くなったら煎じて飲めヨ」

と俺の方に何かを投げてよこした、「おっと」と俺は慌ててソレをキヤツチする。

ソレは緑色の…小さなコイン大のボタン状のなにやら怪しげな物体。

「ま、少々苦エが、効くぜ？」

「何ですか？コレ」

「ん、ペヨーテの塊茎だナ」

ふむ、ペヨーテ…聞き慣れない名前だ、植物の何かだろうか？

「…幻覚性のサボテンの一種だ、服用は止めた方が良さと思うがね」さらに前方から声が掛かる、今度は眼鏡を掛けた男　スルーフだった。

「サボテン科ロフトオフロ属の植物で、トゲのない小さなサボテンだ。全体に産毛のようなものが生えていて、あたかも青虫ヘヨトルに見えることから『ペヨーテ』という名前が付いている」

「さぼてん…？」

スルーフの言葉を聞きながら、さぼてんの「てん」の部分で目が見点になるおハカさんINT3モードの彼女を誰も気にも留めず説明は続く、

「ペヨーテはメスカリンをはじめ様々なフェネチルアミン系アルカロイドを含んでおり、西の大陸の先住民達ネイティブを中心に治療薬として使用されている」

俺は思わず驚かずにいらなかった、その知識の深さによるものじゃない。ここまで彼が雄弁に言葉を語っていることにだ。

「先住民達は万能薬として扱ってはいるが、その強い幻覚成分は服用する時と場合を選ばなければいけないモノだがね」

強い幻覚性……それはちよつと不味くないか？とか思い始めた時、アーカスが割って入った。

「おつト、幻覚トカ、ソレはオマエらの偏見ダろつが」

「言い過ぎかどうかは別として、その精神高揚感をもたらす効能はムノー君の『仕事』上差し支えあるモノだと思つがね？」

「ケツ、何かとケチつけヤがつて」

すつかり機嫌を損ねたアーカスはそつぽを向く、（そしてさり気無く俺の名前が『ムノー』で確定している）

だがそれに気にした様子もなく、スルーフは付け加えた。

「もう一つ、服用しない方が良い理由があるんだがね」

俺は、ふむ、と先を促した。

「ペヨーテは極めて成長が遅く、花を付けるまで三〇年、栽培株はかなり成長が早い……それでも発芽し花を付けるには五年から十年はかかる。つまり稀少な植物なんだがね」

俺は、ふむ、と先を促した。

「先住民達は治療や儀式といったモノにペヨーテが必要なので、とにかく需要は高い　つまり高価なモノなんだ、服用せずに売り飛ばすことを推奨するがね？」

「そ、そうなんですか……いいんですか？こんな高価なモノ、」

「アア？いいつて、仕事終わつたら取るモン取らせて貰うカラよ」

金取る気が……、あとでコレは丁重に返却するでしょう。

「大体、頭痛薬程度なら、そっちのお嬢さんに頂いた方が良いと思つがね？」

「ンだナあ、女なら鎮痛剤くらい持つてるよナア？」

お八カさん

だからそこを強調するな……見る、いくらINT3の彼女でも意味を悟つて、顔を赤くしだして居るじゃないか……。

「な、なによ、この不審者、アンタにはでりばりの欠片も無いの？」

そこは『デリバリー』^{delivery} じゃなく『デリカシー』^{delicacy} だろ……、ヤバイ、頭痛さんがさらに勢力を拡大してきた。

そしてさり気無く『不審者』とかこれまた酷い命名が判明した。

「アア？誰が不審者だツてエ？」

「アンタのことに決まってるでしょ」

ビシィッとアーカスを指差すリルドナ、やめてくれ、エインさんの辛抱はもうゼロだぜい……。

「ンだとオ、……おい、ムノーのアンチャン！」

そして、その怒りの矛先が何故か俺に向いた……勘弁してくれ。

「自分の嫁の教育くらい、キツチリヤツとけよ」

「はい？」

「こんナ美人、手を出さない方がおかしイぞ？」

「……あ、あああああああ、あたしが美人……？」

リルドナの赤面モードのスイッチが入り、可愛さ二割アップを果たした。そして言葉だけでリルドナの敵性ノラネコオーラを無力化したのだ。

さすがは、曲者のアーカス、今度その対応術を是非ご教授願おう。

「そそそそんな、お世辞……」

「髪も綺麗な黒髪だシ、肌も透き通ルように白いシな」

彼の言うとおり、リルドナの髪は真っ黒だが艶があり、漆黒という言葉が似合う、光の反射が髪へ作り出す光輪は『天使の輪』とも言える。肌も白くきめ細かく、血色の良いその顔は赤面する前であってもほんのり桜色で可愛い。

ただ、『美人』というには、まだ顔に幼さが残り、化粧つ気もななく、『美人』というより『可愛い』が似合うのだ。それはまだ与えるには早い称号かも知れない。

明らかにお世辞だろうが、確実にリルドナはその罠に嵌っている。

「そそそそんなこと、ないの…ありませんので…よ」
すっかり動揺した彼女は言葉遣いまでおかしい、
「ふーごお！？」

変な言葉の「ありませんですよ」の「よ」の部分で大きくその
左前足ひだりてを振りかぶり、炸薬入りの肉球を俺の頬に炸裂させた。

ヤバイ……本気の左だ……。

俺は一気に意識を刈り取られ、そのまま崩れ落ちるのだった。

……頼むから俺のライフを削るな。

8 - 2 姉さんは純情なんですよ

まず目に飛び込んできたのは、森の地面。その映像がフラフラと揺らいで見えるのは、自分の意思で揺れ動いていないからだろう。混濁する意識をヨタヨタと泳ぎきり、俺が何かに身を預け運搬されているということに気付く。

なにやら腹部が妙に圧迫されている気がする。

「気が付いたか、」

すぐ近くでルーヴィックの声がした、俺基準でやや右よりの後方……地面の景色は俺とは逆向きに流れている、

段々、意識が……頭が回ってきた。

どうやら俺はルーヴィックに担がれているらしい、それも身体を『へ』の字にして、腹部を支点にして前後にダラリと頭と足をそれぞれの方向へと投げ出す形だ。

「もう、立てそうか？」

「……うん、大丈夫そうだ、降ろしてくれていいぞ。わざわざ悪いなうぐお!？」

俺が言い終わる前に、ヤツはポイとその場で俺を投げ捨てた。

「なに、礼はいらんぞ」

「絶対、言わねえ……」

無様に森の地面で大の字になった俺は、そう言い返すのがやっとだった。

再びトボトボと一団と連なって歩き出す、辺りは森というより山岳地帯という感じの景色に変わっていた。

意識が戻り動き出せば気付く、変な体勢で意識を失っていた所為か、身体のうちこちが痛いというかダルい。俺は確認するように自分の身体に手を回してみた。

「ん？これは……？」

身体を調べる手が、首へと達したときに何かが触れた。

「ふむ、あの男が施したモノだな」

そう言いながらルーヴィックは目線で相手を示す　スルーフだった。

「治癒力促進の術式封符らしい、首に痛みは無いだろうか？」

この首に包帯のように巻かれた紙の帯が、か。

それにしても妙だった、今までまるで存在すら認めて貰えないくらいに仲だったのに、この処遇。

さつきもアーカスの薬を飲むのを止めてくれたし、急に親切になった気がする。

俺はむくくと首を捻った。

(…キミに少なからず同情しているんじゃないかな)

不意に小声でロイに話しかけられた、

俺は視線を変えずにそのまま対応する…ただし同じく小声で、

(同情って何がです?)

(うーん、キミの境遇をちょっと説明しておいたんだよ)

おそらくそれは俺達が地下にいた時だろう、彼は彼なりに手を回してくれたわけだ。

(振り回されているだけって、それとなく…キミ自身は真面目に仕事に取り組もうとしてるしね、)

(そうすると、今度はあの兄妹だけが印象悪くなりましたか?)

俺の言葉に彼は「しまった」という表情を顕にした、

(そこまでは気が回らなかつたなあ……ごめんね)

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

飛び込むようにルーヴィックの声がきた、そういえばヤツは異常に耳が良いんだった、しっかりとロイとの会話を聞いていたらしい。

俺達と同じように視線は変えずにそのまま口を開いている。

「自業自得なことだ、そこまで気に病まなくて良い」

「……そうかな？」

「が、心遣いは感謝する」

ヤツは軽く目を閉じ、頭を小さく動かした、会釈か敬礼かどちらかはわからない。

「そもそも、俺もリルもそんな高度な神経を持ち合わせていない」
悪く言えば、鈍感。良く言っても凶太い……そういう神経のことだろう。

そこで先程からリルドナの声が聞こえないことに気付いた、いくらなんでも彼女にしては大人し過ぎる……思わず俺は視線を周囲に走らせる。

「……おい、」

「キミにもそう見えるよね……」

俺達よりやや離れて並行する彼女は、顔を俯け、ガツクリと肩を落とし、ごーんという鐘の音が聞こえてきそうなくらい沈んでいた。

「メチャクチャ落ち込んでいるように見えるぞ？」

「……正直、驚いた、そんな高等な機能があったとは」

「多分……キミを引つ叩いちちゃったのが原因かな」

「「ふむ？」」

思わず俺とルーヴィックは揃えて疑問の声を漏らしてしまった、照れ隠しで、悪くも無いキミを気を失うほどの力で叩いてしまったしね

「ふむー、やはり俺には女の気持ちはわからん」

ルーヴィックはアツサリと思考を止めてしまった、「やはり」の部分はやけに強調されていた気がする。

「叩いたことに負い目があるだろうし、何よりリルちゃんはキミのことが」

「俺の？」

「いや、なんでもないよ。」

とにかくあの娘は悪いと思ったことは悪いと反省する娘なんだよ、きつと」

「はあ…確かに何かと直情ですしね。

というか、今までは悪いと認識してなかったってことじゃないですか！」

とは言ったものの、あまり釈然としなかった。

そもそも、なんでこの人はいやらしい笑みを浮かべて話してくるんだ、余計に理解出来なくなり、俺もルーヴィックと同じように考えることをやめた。

「ま、今はそつとしておく方がいいんじゃないかな」

「……そうですか」

そこまででリルドナのことを一旦保留にし、思考を力チリと切り替え

しくん、

られなかった。

また、あの危機感にも似た感覚だ……なんとなく頭が「しくしく」と痛む。

結局、思考を切り替えられず、俺はリルドナの方へと忍び寄った。声を掛けずに、そつと肩をポンポンと叩き、そのまま手を置く、

「な、なによ」

ぶに。

と指先に柔らかい感触、

「ふひゃ？」

俺は彼女の肩に手を置き、人差し指を立てておいたのだ、それに気付かず顔を向けた彼女は、見事その可愛い頬に俺の指が刺さったわけだ。

「へへ、引っ掛つたな？」

「じゃ……」

そして彼女はネコらしい声を発し

「にゃにしゅんのよおお!!」

たのではなく、「なにすんのよ」と言いたかったらしい、直後に鋭い平手打ちが飛んできたのは言うまでもない。

「ぐぬお!？」

平手打ちで吹き飛ばされながら、点滅する視界の中、呆れ顔でため息をつくスルーフが見えた、

ただし、その向ける目には以前のような冷たいものは含まれていなかった。

「……つて、ゴ、ゴメン」

反射的に殴った彼女だが、すぐ様うつろたえて俺に駆け寄る、が……大丈夫なんだよな。

「心配すんな、やはり無事だぞ?」

「あ、あれ?」

「少しは元気でたかよ?」

来るとわかっていれば致命傷(?)はそうそう貰わない、それを告げようと思った瞬間、

「やるナ、あんちゃん。」

咄嗟に衝撃と同じ方向に自分から跳んで威力を殺したナ

「……よく見てましたね、」

というわけで、アーカスに種明かしをされてしまったが、ダメーシを上手く減らし、リルドナの心境の切り替えモトドを行ったわけだ。

「もう、アンタねえ……」

彼女は何か言いかけたが複雑な笑みを浮かべたため息をついた。「この件についてはここまで」という意思表示なのだろう。

再び、並行して歩き始める、ただしリルドナが離れているわけではなく、ちゃんと近くで一緒に歩いている。

そして何故か、アーカスまでもが近くを並行している……、

いいのだろうか、こっちは落ちこぼれ組ボンクラーズだぞ？

8 - 3 錬金術は学問なんですよ

首に巻かれた紙帯に再び手をやる。

「ふむう、治癒力促進かあ……」

「うむ、どうやら彼は錬金術師らしい」

それを聞いたゼルが思わず声を上げた、ちゃんと近くに居たんだぞ？

「錬金術う？なんか胡散癖えな。

……あれだろ？ただの鉛を金に換えるとか」

「その偏見は彼らに対して失礼だ」

錬金術に対するイメージを述べるゼルに、それを否定するルーヴィック、正直言えば俺もゼルと同じ意見だった。

「錬金術は、魔術的にも科学的にも学問の一つだ」

「学問……？」

錬金術といえば、怪しげな薬品やら術やらを扱う魔術の一種だと思っていた。学問とはまた違った表現をするものだ。

「占星術、錬金術、召喚術といった感じで様々ある魔術の一分野と思えばいい」

ルーヴィックの講義が始まり、全員黙って話に耳を傾ける、

「そんな中でも錬金術は『知る為』の学問といえる、確かに世間の持つイメージは怪しげな薬品で実験したり術を行使したりと、そんなものしかないだろうが……それらは全て『知る為』の過程に過ぎない」

「本来は『万物融解液』により物質から『性質』を具現化させている『精』^{エリクシール}を解放し『精』の性質を得ることがその根元的な目的であり、生命の根元たる『生命のエリクシール』を得ること、つまりは

不老不死の達成こそが錬金術の究極の目的だそうだ」

「エリ…クシール…だと」

それは伝説の靈薬の名前でもあるんじゃないか……つい反応してしまっただ。

「む、エインどうした？」

「なんでもない……続けてくれ」

「その『性質』というのが…そうだな、金が金であるという『性質』を具現化している『精』を上手く得て理解できれば、金という『性質』を他の物質に与え、金を生み出すことも出来るということだ」「そりゃ、すげエナ……」

「　　という謳い文句で貴族から力ネを筆り取ってた連中もいたよ
うだ、彼らは研究するための費用の出資者パトロンを釣るために、都合の良い解釈だっただろうな」

「なんでえ、嘘っぱちかよ？」

ゼルがガツカリしたように呟いた。

「完全にそうではない、彼らの目的は金ではないしな、あくまで『過程』に過ぎなかっただけだ」

「副産物である『金』をチラ付かせて強欲な貴族を釣ったわけだね
なるほど、この部分が世間一般にある錬金術のイメージの元のよ
うだ、

「その『過程』で生み出された『副産物』も錬金術の持つ遺産だろ
うな、『理解・分解・再構築』の物質変化の理論は錬金術独自の術
式を引き立てているし、『万物融解液』の開発過程で生み出された
弗化水素は、ほとんど全ての無機酸化物を腐食する溶媒として科学
の分野でも貢献している」

俺達はその副産物の恩恵を知らずの内に受けているのかもしれない、

い、
「未だに本来の目的　不老不死に達した者はいないだろうから、
未完成の学問だろう、最終目標に近づいたために、さらに新たな副産
物を生み、日々成長進化を続けいく可能性を秘めた分野といえる」

……こう一気に説明されても頭が着いて行けそうにない、それは他の人間もそうだろう、

だからといって、ヘタに口を挟んで話の腰を折る者も居なかった。「……が、そもそもが探求・研究のため、魔術師からは『研究するこ」としか能がない』と揶揄されることも少なくはなかったようだ……便利な法具や術式は彼らの功績によるものが多いのに……な」

「そうねえ、ツヴァイクロイツ双鎌十字でも、二科生を『アルケミー』って呼んでたけど……あれってやっぱり蔑称わろくちだったのね」

ツヴァイクロイツ双鎌十字……リウエンが通ってたという魔法校のことか、
「話の腰折って悪いが、二科生ってなんだ？」

「双鎌十字は学科が二学科制なんだ、前線で戦う魔導兵を育成する一科、後方支援の回復術者ヒトラーや法具を製作する魔法工師を育成する二科だ」

「一科生は二科生を『アルケミー』と呼んでたし、二科生は一科生を『ソーサラー』と呼んでいたわ」

なんだか、どっちもどっちな言い合いだなと思った、それぞれの得意分野で活躍するべく勉強している筈なのにお互いの価値観で見下しあう……そんな感じだった。

「ともかく、実際に魔術を行使し力を振るう魔術師は、錬金術師を頭デツカチの能無しと蔑んでいたのさ」

「なんでえ、魔術師ってのは随分と傲慢なんだな」
「こういう喩えはどうかと思うけど、

力を振るう魔術師が武官系で、知識と技術を蓄える錬金術師は文官系なんだね」

「そうだな、基本的にはそうだが……中には強い力を持った術を扱う者もいるな、練成陣と言われる術の構築式を組み込んだ魔方阵を描き、そこに魔力を流すことによって様々な術を使っていた、中には手と手を合わせるだけで自分自身を構築式とし、力を循環させて術を発動させる者もいる、実に興味深い分野だ」

「ず、随分詳しいんだね……」

ロイがたじろいてしまうのも無理はない……これほどの知識を一気に披露されては仕方のないことだ。

話に夢中で気付かなかったが、いつのまにか木々の間隔が広くなり、道も平坦だったものから登り坂が目立つようになっていた。

「あのメガネ……自動人形オートマトンとか造れるのかしら？」

「なんだリルドナ、お前はそういうのが欲しいのか？」

「欲しがってるのは、あたしじゃなくお兄ちゃんよ」

「ヤツが欲しがる自動人形……ここでカチリと思考が合わさった、

「さては対局用チエスか！？」

「肯定だ、他に用途があるとは思えないが？」

彼は何をわかりきったことを言うのだ？と言わんばかりの態度を見せた。

「錬金術に詳しいのは、結局そこかよお！？」

俺の叫び声が森から鉦山と繋がる岩壁に鳴り響いた。

8 - 4 フラグの立てすぎにご用心です

断崖地帯、そう呼ぶに相応しい景色へと代わっていた、

木々はすっかりその姿を潜め、見通しがよく無骨な岩壁と悪すぎる足場をさらけ出していた。

頭上に広がる空には分厚い雲がたち込め、遠くない時間で天気が崩れ出しそうな気配を滲ませている。

「降り出しそうだな……」

「この地域はハッキリとした四季がないけど、雨がよく振るんだよ。俺の眩きにロイが応えてくれた、

涼しげに感じたのは秋だからではなく、年中秋みたいな気候だから、らしい。

「今降られるとイロイロ困るんだよねえ……」

そうぼやくロイは銃兵だ、雨が降ってはせつかくの火薬も台無しになってしまうのだろう。

それでなくても、この肌寒い気候で雨に濡れて登坂行軍……考えただけでも勘弁してほしい気持ちになる。

早朝から出発し、延々と歩き続けているのだ。皆、声には出さないがそれ相応に疲労を滲ませている。

「リルちゃんがかつき、建物が見えるとか言ってたし、そろそろボク達にも見えてもいいくらいだと思っただけど」

「ったく、あのねーちゃん目が良すぎだから、俺達には距離も時間も測れねえよ」

ゼルの言うことは最もだ。普通、建物が見え出したら「よし、もう少して辿り着けるぞ」という気持ちになれるが、なにせ彼女の可視距離の射程は異常なのだ、彼女が「見えた」と言ってもそれは相

当遙か彼方のことなのだ。

「まあ、ともかく進むしかないしね」

ロイはそう言いながら、銃を担ぎ直した。鈍く黒光りする銃身はズシリと重そうだった。その銃口に並行するように飛び出た突起物が真新しいまま光っていた。

その姿を見送りつつ、ある疑問が浮かび上がった、別に深い意味あるわけでも、何かしらの思惑があるわけじゃない、ただ単にほんの好奇心から来る言葉だった。

「…銃剣は使わないんですね」

「ん？あーアレ好きじゃないんだよね」

そう、彼の銃には銃剣が着いていない。着剣装置である突起が付いてあるにも関わらず……彼の銃は銃剣装着を前提で設計されたデザインなのだ。

「どうしてです？」

「アレ着けてると、ついつい頼っちゃうでしょ、それがダメなんだな」

「簡易的な槍になるとかで、槍兵要らずになるんじゃないんですか？」

彼は「わかってないな」と言わんばかり大袈裟な身振り手振りホテイランゲージをして見せた。使えるなら使っていていいモノではないのだろうか？

「銃の銃身バレルはさ、槍の柄軸シャフトとは違うんだよ？」

同じように乱暴に扱ったら、ひん曲がって二度と撃てなくなるんだよ」

「曲がって…そんな弱いモノなんですか……」

「釘を打つのに、金槌ハンマーが無いからってレンチで叩くようなモノだね」
銃身は火薬という爆発物の力に晒されながら力強く弾丸を打ち出す、そのイメージから頑丈なモノと思っていたが、どうやら違うらしい。

「極端に曲がらなかったとしても、微妙な歪みが出るだけでも命中精度はガクンと落ちちゃうよ」

その言葉と共に両手上げての「お手上げ」のポーズを取る。

「ま、使うときは本当の本当に止むを得ない時だけだよ」

「でも、いざという時にすぐ装着できますか？」

「うーん、咄嗟の時は」

ゴツ！と鈍く何かが砕ける音が鳴り響いた

「こうするね」

流れるような動きで担いだ銃を両手保持したかと思うと、銃床ストックで
すぐ横の岩壁を殴打したのだが……そこには見事に握りこぶし大（
よりやや大きい）クレーターが出来ていた。

銃床をよく見ると、底の部分が金属だった。丁度、馬の蹄に蹄鉄
を着けたような感じに木製のパーツの先に補強金具が取り付けられ
ているのだ。

この男、人懐っこい顔とは裏腹に相当腕力が強そうだ……。

「……す、凄い力ですね……」

「全覆鋼兜の上からでも頭蓋を割れるよ、

銃兵つてさ、これでなかなか結構な力仕事なんだよ」

「いや、オメーは『少し』規格外だと思っぜ？」

二人してニヤリと人の悪い笑みを浮かべていた。

「おい、あれじゃなイノか？」

何かの発見を告げるアーカスの声で、一同指し示す方向を見張る、
この断崖地帯をの丘を超えたさらにその先、木々が点在しわかり
づらいが、確かに大きな建物のようなモノが見える。

今進んでいるこの道を行けば、おそらく丘を超えたあちら側にい
ける筈だ。

見える尺度から直線距離にすれば、さほど遠くないように思える。

「ね？あつたでしょ？」

リルドナが、ほらほらという感じで建物を指差している、

「そう遠くない……のか、どれくらいの距離だろう？」

「うーん……五〇メートルくらい？」

「……なわけねえだろ……」

いくら目が良くて、それを距離に換算する測量術は持っていないようだ。

人間とは不思議なモノで、不器用な人程ほど、手の込んだことをしようとする。出来ないことを必死にやろうとしてしまうのだ……

今まさに彼女がソレで、眉を『ハ』の字にし、うんうん唸っている。

が、遂に諦めたのか、いつもの目を点にしたおバカさんINT3顔になっていた。

「すまん……無理な注文をした……」

「距離八……三六……八三六メートルといったところかな」

その声に振り向けば、ロイが手をかざし、親指と人差し指で『L』字を作って測量しているようだった。

「わかるんですか？」

「ふふふ、銃兵の測量眼を甘く見ちゃダメだよ？」

ニカッと笑ってみせるその口元で白い歯がキラリと光った気がした。

目的地が見えた、と言っても実際は直線ルートで進めるわけもなく、この足場の悪い登坂経路で大きく迂回させられて進むことだろう。

到着にはまだまだ掛かるだろうが、それでも目に見えて目的地が存在してくれるだけで心持ち気分は軽くなる。

そこへ、前列の方からゼルが下がってきた、

「ちょっと確認してきたが、やっぱりアレが目的地らしいぜ」

どうやら彼はブルーノに確認を取るために最前列の方まで上っていらしい。

道が狭くなっている為、森の中にいたときのように横に広がって移動できない、それに加えて各々武器を所持している為、前後の間

隔も広く取らなくては危険なのだ。

その結果、隊列は細長く前後に伸びた形になっている。

これは危険だと思った……こういう状態で襲撃を受けると危険だ。狭い足場のため動き回ることも適わず、辛うじて移動の利く前後も人間同士がぶつかり合うため、そちらも塞がっている。もし相手が翼を持った魔物なら、格好の獲物と言えるだろう。

それは皆わかっていることなのか、緊張と警戒を払いながら、誰も口には出さない。

「なーんか、今襲われたらアウトって感じよね〜」

誰も口に出さ　ないでくれ……頼むからさ……。

「不吉なこと言うな、せめて無事にここを抜けられるお祈りをしてくれ」

「うーん、じゃあ」

そう呟きながら思索するような仕草を見せる、嬉しそうに無邪気に振舞う、その無防備な笑顔はこちらまで嬉しくなってくる。

「無事に目的の屋敷に辿り着いたら、ティータイムにしましょう」

「お、悪くないな、身体も冷えてるし、熱いのを頼むっ」

「はいはい、かしこまり」

……ん？

このやりとりって……、

「ん、どうしたの？」

「い、いや……」

「大丈夫よ、ちゃんと淹れてあげるわ、無事に屋敷に着いたらね」

「ちよつと、止める」

「なによ？今すぐじゃないわよ、無事にここを抜けたら話じゃない」

嫌な予感がする……

「はあ？何が気に入らないのよ？着いたらお茶つてのが嫌なの？」

俺ことエインさんは知っている、サブカル雑学知識で知っている。

このように楽観的な未来観測の会話をしていると、とある条件成フツケ立してしまう、

勿論、それは悪い方向で、

その時、雲が掛かり気持ち薄暗くなった、天気もいよいよ怪しくなってきたようだ。雨が降り出す前に、なんとかここを抜きたいという焦りがジリジリ押し寄せてくる。

俺はそのことから目を背けるように空を見上げた

「ほらほら、着いたらおやつも分けてあげ」

！？

黒い雲が大きく翼を広げて舞い降り……いや急降下して来

「ふくお！？」

思考が追いつく前に激しい水平方向の衝撃に、俺は断崖地帯を無様に転がった、地味に転落しかけたのだが……。

慌てて身を起こし、先程まで自分が居た位置に目を向けると、お約束のように蹴りを放ったルーヴィックが『首の無い何か』と共に立っていた。

「なに、礼は」

「言わん！」

首の無いソレは前足が翼に変形した巨大なトカゲ……いやこれはトカゲじゃなく……

「ちつ……ドラゴン……いや、コイツは」

ゼルの識別結果を聞かずとも、誰もがその正体に気付いたであろうソレは、一見すると鳥のようだが、全身を覆う見事な鱗が大型の爬虫類を主張する……竜族亜種で、ドラゴンに比べて格段その身体は小さい、空翔る亜竜の飛竜フイバーンだった。

貴族や軍隊に紋章の図柄エムブレムとしてしばしば採用されるその姿は、ガールモチーフと並んであまりにも有名だった。

見上げる空には、まだまだ十数匹の飛竜フイバーンが控えている。

「ほら見る、お前が不吉なこと言いまくるからだ！」

「あ、あたしの所為なのっ!？」

「大丈夫か？ナンセンスだぞ。迎撃体勢をとれ」

「だあー、うるせえ！とりあえず離れるっ、槍が使えねえ!!！」

場は一瞬にして騒然となり、各々の判断の上での声上がる、パニックに陥らなかったのは、さすがプロの冒険者や傭兵といったところだろうか？

しかし、それは連携のとれたものではなく、酷く身勝手な声の出し合いとなった。

「来るわ」

直後、上空で羽ばたき留まっていた飛竜達の一匹が巨大な翼の角度を変え、こちら目掛けて急降下を始めた。全員思わず身構え、構えた武器を握る手にも自然と力が入る。

だが、その飛竜がこちらに到達することはなかった。

一瞬にして頭部を何かに撃ち抜かれ、地の底から響くようなおぞましい断末魔とともに飛行姿勢を崩して失速し、そのまま俺達がいる足場よりさらに下の岩壁に激突して眼下に広がる木々の海へと姿を消した。

その出来事に、息を呑む者、賞賛の気配を見せる者、多少の違いとそれぞれの配分で、一部の例外を除いて思わず動きを止めていた。

「うむ、やはり読みやすい」

犯人は……やはりコイツだろう、軽く握られた両手の指の間には何本もの針 いや、細身で長い…刺突特化の短剣だろうか が不気味に鈍く輝いていた。

そんな中、いち早く我に返ったのが、ブルーノだった。

「少しの間、奴等の動きを制して貰うことはできるかね？」

「問題ない」

ブルーノに答えながら、さらに短剣を投擲する。

クロスボウのボルトよりも遙かに鋭い風を切る音共に、上空で姿勢を変えようとした飛竜の頭部に突き刺さる。

「ゼルとロイも彼と同じく引き付けていてくれ」

「あいよう！」

「了解！」

ブルーノはルーヴィック、ゼル、ロイの三人に殿しんがりの指示を出す、他の人間に急いで前進するように促した。

先程の三人を囷に使用して逃げるといっわけでは無い、これはあくまで時間稼ぎ。そう、この移動は

「迎撃戦の位置取りですか？」

俺はそう結論付け、ブルーノに訊ねる。

「そうだ、少し進めば若干道幅も広くなる」

「……そちらの道は」

このまま進めば緩やかに下る道と急勾配の登りの道に分岐に差し掛かる、ブルーノの視線を追えば『下り』のルートへと伸びているのがわかった。しかし、それは確かに少し道幅の広がっている、今走っているここよりも遥かに迎撃もし易いだろう。

……だが、『下り』なのだ。目的地の方向とは逆に進むことになる、進行上の大きなロスになるかもしれない、それに、もしかしたらあれは……。

「ブルーノさん、あえてこちらに進みませんか？」

そう言いながら、荷物からクロスボウを取り出した。

「っ！しかしそれは……」

周囲からも否定的なざわめきが始まる、

俺はそれらの反応に気付かないように装い、山羊脚レバーゴーツラットをガコンと倒す。

「いえ、こちらこそが『正解』なんです」

ブルーノは俺の意見に難色を示しはしたが、俺の強い断言に渋々進路を『登り』へと決定する。

明らかに半信半疑といった空気が滲み出すが

後方では、空気を切り裂く投擲音や銃声が絶え間なく響いている。敵を殲滅するための攻撃ではなく、彼らが自らに攻撃を向かせるた

めの言わば『挑発』の攻撃だ。

それを視界の隅に収めながらクロスボウにボルトをセットする。しかし、彼らに加勢するわけじゃない、そんなことしたら彼らの努力を台無しにする。

「……何をするの？」

リルドナの問いかけに、仕草で「まあ、みてる」と指し示し、誤射しないように気を配りつつ先へと進んだ。

しばらく進んだところで、巨大な岩石が折り重なるように積み上がり、あたかも行く手を阻む意思を持ち合わせているかのように完全に道を塞いでしまっていた。

「行き止まり!？」

「違います」

ピタリと突き当たりの岩石に照準を合わせる。

「おそらく、これが『泉の貴婦人』の仕掛けた最後の『門』……」
レバーを握り込み、岩石目掛けてボルトを射出する、ボルトは吸い込まれるように岩石へと飛来し、無骨で無機質な岩はソレを無慈悲に弾きかえ

「 なっ!？」

「 どういうことだ? 」

「 ……なんだと…… 」

さない、ボルトは岩石へ激突する瞬間、フツとそのシルエットを消失させてしまった。

その不思議な現象に周囲から疑問の声があがる、俺もそれは不思議とは思いが仕組みがわからないだけで、意図はわかっている。

「これが『貴婦人の閉ざした門』の効果です。

……おそらく森の入り口へと転送される接触起動ワープの転移魔法ではないかと思えます」

「今朝、私が切り裂いた結界と同じものか……」

ブルーノに場所を譲り、結界の突破を促す。

彼が例の剣の鞘を薙ぎ払うと、岩壁の絵が描かれたガラス壁面がヒビわれて砕け散るように、目の前で偽りの空間が割れて、真の空間が姿が顕す。以前と同じ光景だった。

そこは比較的幅の広い道が続いていた、そして岩石の全てが幻だったのでは無く、周囲には遮蔽物に使えそうな岩がいくつもある。

「これは……使えるな」

中でも一番目に付いたのは、まるで岩壁から伸びるアーチのように横の岩壁から崖下へと掛かる岩盤だった。明らかに人工物だ、大きな岩盤をくり貫いて『そういう形状』に仕立てたに違いなかった。勿論なんのためにそうしたのかまではわからない。

「しかし、何故こんなところで結界が……」

いや、それよりもどうしてこちらが正解だと思ったのかね？」

「タイミングが良すぎると思ったんです」

「ふむ……よく意味がわからないのだが……」

ブルーノは当然の反応を示す、当然だ。確証は無いのだ。

俺はあくまで仮定ですが、と前置きした上で説明する。

「もしも、俺達を遠ざけようとしているのが、危険な魔物ではなく

—

次々と後続のメンバーが岩盤のアーチの下へ避難して行く、

「目的地である屋敷だったとしたら？」

「泉の貴婦人が……か」

飛竜に襲われた地点が、彼らから見て発見しやすいポイントだったのか、偶然だったのか、もしかすると何者かが見張っていて、俺達の通過に合わせて飛竜のねぐらに伝達する手段があったのかもわからない。

そして襲撃を受けた集団は、それらを迎撃できるような場所を探さだろう、それが先程の『下り』のルート。万一『登り』のルートを選んでいても行き止まりに見せ掛けられている、襲撃を受けながらの移動だ、冷静に調べることもせずには引き返すだろう。もっと切羽

詰っていて引き返すことも出来なければ、なんとか乗り越えられないかと、岩石に手を触れて転移が発動し、やはり追い返される。

「結局、追い返されるように仕組まれてるんだと思います」

「ふむう……」

さすがに半信半疑の空気は崩れない、確証も何も無い、俺の勝手な推論にしか過ぎない。それでも俺は強く語る、そのこと自体が全体を鼓舞し士気を上げるのだ。

こういう場合、言い切った者勝ちなのだ。

「ここにいれば、あの巨大な身体では入って来れないと思いますが」

「そうだな、いつまでもここで待機というわけもいくまい」

「思い切って屋敷まで突っ切るか、それとも迎撃」

「ここでキツチリ追撃は叩く」

ブルーノは力強く決定を下した、

それに応えるかのように、ロイの銃が轟音を上げ、飛竜をさらに一匹撃ち落とした。

東の空は相変わらず怪しい雲行きで徐々にその勢力を広げているのがわかる、一方で雲にまだ侵略されていない西の空では太陽が一日の最後の勤めを全うすべく、その姿を赤く染めゆつくりと舞台から降りようとしていた。

雷鳴にも似た轟音が断崖地帯へ響き渡る、その音は広がる岩壁に不規則に反射し必要以上に銃の威力を主張しているかのようだった。ロイのマスケットが飛竜を捉え、その銃弾が飛竜の胴体へ直撃する。それは銃弾というより砲弾に近く、完全武装の重装騎士を馬上から転落させてしまう程の速度と質量を持つ、直撃を受けた飛竜はたまらず飛行姿勢を崩し、そのまま急降下しようとして試みるが

「今だよ」

すかさず鋭い風を切る音共に細長い刃が飛竜の頭を撃ち抜き、そのまま飛竜は絶命する。

もう何度も見慣れた光景となっていた、迫り来る飛竜をアルバレストのような高推進力をもった必殺の投擲で迎撃する。ルーヴィックが飛竜を仕留めるといふ光景がもう何度も繰り返されていたのだ。

ただし、全く同じということではなかった、十数匹いた飛竜が、数十匹へと増えていたこと、ルーヴィックがあればほど大量に手に持っていた短剣も 投げ切っては懐から取り出し補充し、もう投げた本数は十本や二十本に留まらない 手にはもう一本も無かった。

「……すまん、今ので最後だ」

「いや、充分だよ。」

「おかげでこつちもかなり弾を節約できたしね」

「俺も護衛に回ろう」

「つたく、次から次へと沸いて来やがる。」

この森の生態系はどうなってるんだ、こんなデカブツがウロウロしてんのかよ」

「いえ、こいつらはおそらく森ではなく、山の方から来ているんだと思います」

今俺達がいる場所は、妖精の森の中というよりも、そこに隣接する鉾山の端という方が正解しれない。目の前に広がる断崖地帯こそが彼らの縄張りなのだろう。

今や上空にいる相手に攻撃できるのは、銃を持つロイと魔法を使えるアビスのみであった。俺のクロスボウでは残念ながら、ほぼ頭上とも言うべき角度の上空には射撃できないし、何よりも空中飛び回る相手を捉える技術も無いので狙撃に参加は出来なかった。

「んじゃゼル、しつかりと護衛頼むよ！」

「おう、任せとけ、オメーは存分に撃てっ」

不適な笑いを浮かべ、武器を構え直すゼルとロイ。

「ふむ……遠方、それも上空ならば座標指定で行くしかないな」

「そんなことも出来るんですか？」

「少々、骨が折れることだが、いけなくは無さそうだ」

そう語り、詠唱を開始するアビス。それを囲むようにアーカスとガデイが護衛に着く。

「極力、アンタには近づけさせねえヨ」

「自分も引き受けよう」

確実に彼ら護衛は必要だろう、銃も魔法も再攻撃までの時間が致命的に長い、先程まではルーヴィックが速射性の高い投擲で迎撃（しかもクロスボウよりも高威力という反則具合）していたから良かったが、ここからはそうは行かない。迫り来る敵から射手と術者を守らなければいけないのだ。

飛竜がロイ目掛けて急降下、しかしそれをゼルは必殺の突きで頭部を穿つ、

生物は基本的に頭から突っ込む、そうでない二足歩行の人間というモノが逆に例外なのだ。それ故に突撃するとどうしても頭部をさらけ出してしまふのが野生生物の特徴だった。

敵が攻撃を仕掛けようと突撃するときこそ、近接武器による絶好の攻撃のチャンスだ。

「て、わけで俺達にも役割は充分あるってわけよ」
「……誰に向かって話しているんですか？」

槍を構えながら語るゼルにいついついツッコミを入れてしまったが、つまりはそういうこと。小型の竜の亜種……と言っても、その体長は地上の哺乳動物より遥かに巨大だ、普通なら頭部への攻撃など容易では無い。

頭部を貫かれて絶命し転がる飛竜の死骸を見つめ、そう結論付けた。

「ねえ、アンタ」

「ん？」

「アンタってトカゲ好」

「黙ってる……」

などと不謹慎な言い合いをしていると、突然空がバギンと爆ぜた。あまりの衝撃に空気が破裂するかのように震えている。

「な、なんだあ！？」

咄嗟に見上げると、粉塵が立ち込めている。空中で何かが爆発したようだった。

直撃を受けた飛竜は既に落下してしまっただのか、見当たらず、翼や鱗が煤焦げた飛竜が数匹弱々しく羽ばたいているのが見えた。

「ば、爆弾？」

適当な言葉が見つからず、なんとも粗末な疑問系で口を開いてしまった。

「火属性元素魔法、エクスプロード爆炎だ。」

少々、詠唱が長すぎるのが珠に傷だが、これならば多少座標がズレてもいける」

「な、なんて大味な……」

「ほらほら、他人の仕事にケチをつけない……の！」

俺に説教を飛ばしながら、銃弾を弱った飛竜に浴びせ、トドメを刺す。

再び致命的な間 リロード 再装填と再詠唱 リキャスト が訪れる。

そこへ、次々と飛竜が襲来する……！

「やはり、読みやすい」

「オルア！」

すかさずルーヴィックが迫り来る飛竜の首を刎ねる、それとは別の飛竜をゼルが串刺しに仕留める。

さらに別の角度から飛竜がアビスに襲い掛かるうと急降下で接近する、

ズシン！と重量物を受け止める衝撃が響く。

それはガデイが巨大な大剣を盾にし、無理やり飛竜を押し止めた衝突音だった。

「こつという使い方をすると切れ味が落ちてしまっただがな……」

そのままギリギリと飛竜を押さえ込み、その動きを完全に封じている。

凄い腕力だ。いくら彼が巨漢といえど、飛竜はさらにその規格からして別格だ、子供が巨象に特攻を掛けるようなものだ。

「まあいい、仕方あるまい……おい、頼む！」

「オウ、任せナ！」

間髪入れずにアーカスが切り込む、流れるような太刀筋でカットラスを縦横無尽に走らせ、的確に動脈という動脈を切り刻む。

「あー、もう邪魔邪魔っ！」

そしてリルドナがポイポイとその亡骸を崖下へ捨てていく（こつちの方が怪力かもしれない）……人型じゃない相手にはまるっき

関心も感慨も無いようだった……。

……見事な仕事の分担と連携（？）だった。

俺を含む、『その他』のメンバーは岩盤のアーチまで下がり待機している。彼らはここより距離にして二〇メートルほど離れている。別にサボっているわけではない、いくら比較的拾い場所といつても大勢が暴れまわれる広さというワケでもない。下手に戦闘に参加すればお互い邪魔をしてしまうのだ。

それに護衛は重労働だ、負傷する危険もあるし、スタミナ切れで動けなくなるかもしれない、そんな時の交代の為にも待機いしていいなくてはいけない。

俺は必死に見守る……『交代』という事態が何を指すのこと重々わかっているからだ。

再びバギンと空が爆ぜる、続けてマスキットが轟音を響かせる。辺りを爆発による粉塵とマスキットの硝煙が覆い始めた。

「……悪いね。」

無煙火薬なんて気の利いたモノ持ってないんだ」

「いつまでもそんな骨董品使ってるオメーが悪いんだ！」

ケホケホと咳き込みながらゼルが文句を言う。粉塵と硝煙のほぼ中心に居るのだ、かなり辛そうだった。

新型の火薬、無煙火薬

ニトログリセリンという有機化合物と

ラッカー塗料などに使われる綿火薬ニトロセルロースからなり、安定剤としてアセトンを添加したものだ。

綿火薬単体でも従来の黒色火薬に比べ、高い爆発力を有してはいないが安定性に欠ける為、混ぜ合わされたものが採用されている。

無煙火薬はその名の通り発煙も圧倒的に少ない、黒色火薬で霧のような白煙でおおわれた戦場で視界や命令伝達に関する問題を見事解決するのだ。

「まあ、まだまだ正規軍以外には普及していませんよね」

「おやおや、キミ詳しいね？」

などと雑学披露している場合じゃない、視界が悪くなり迎撃も難しくなってきた。

「んもつつ！煙たいわよっ」

リルドナが苛立った声を上げると共に、目を大きく見開く　気の所為か妖しく光っているように見えた……。

「来るわ！　艦長と不審者っ、気をつけて！」

「艦長？　意味がわからんが。まあいい」

「また不審者と力言うナ！」

次々と判明するリルドナの命名センス、なんで艦長なんだ？

「ぬうつう！」

またもやアビスに襲い掛かる飛竜をガデイが食い止める。

すかさずアーカスが先程と同じように切りかかるが

「まだ来るわ！」

「く、こっちは手一杯だ！」

続け様に別の飛竜がアビスに飛来する、ガデイはすでに先の飛竜を押さえ込むのに手一杯で対応できない！

「悪人ヅラ、ちょくつと動いちゃダメよ？」

「なっ！？」

言うや否や、アビスすれすれで太刀を抜刀一閃、すぐ彼の目の前まで肉薄していた飛竜が両断される。そしてさり気無くやつぱり酷い命名だった。彼が驚いたのは、きわどい太刀筋か、その命名か……。

「ビュー、よく見えるな？ねーちゃん」

全く以ってその通りだ、粉塵と硝煙で覆われた視界にも関わらず、彼女には的確に『視えている』のだ。目が良すぎるにも程がある、それともあの赤い瞳には何か特別な能力ちからでもあるのだろうか？

「はいはい、次は金髪の方よ。ヤンキー顔しつかりね」

「……て、オイ。言われても見えねーよ」

「八時の方向、二秒後だ」

その言葉にゼルはチツと舌打ちをし、振り返りながら槍を突き出す、

グチュリと白い煙の向こうで何か刺し貫かれる気配を感じた。

「よっしゃー！」

「いや、浅い」

振り向き様、それも視界が悪い中での攻撃だった為、微妙に急所である頭部から槍が逸れていた様だ。

無力化に失敗した飛竜が痛みを怒りを灯らせながらゼルと襲い掛かる

しかし、ズン！という鈍い音と共に飛竜は脳天を砕かれ絶命する。

「ほらほら、詰めが甘いんじゃないの？」

「うるせえ、オメーは大人しく護衛されてる！」

ストック

飛竜がゼルに襲い掛かる直前、ロイが先程見せた銃床での殴打で飛竜の頭部を叩き割ったのだった。この人、弾薬が切れても充分戦えるんじゃないのか？

「まだまだ来るわよ！」

「問題ない 捕捉済みだ」

白い煙の中に次々と首なしの死骸が築かれる。いづれも一刀の下に鋭利に頭部を切断されている。それは生物である以上、確実な死を意味しているのだ。

「視界が悪いのはあちらも同じの様だ、飛行軌道が雑になっている」

「今朝から思うけど、お前容赦無いな……」

「何を言う、無用な痛みを与えない慈悲深い手段だ」

それもわからないでも無いが、やはり絵的にかなりエグイ……。

飛竜の迎撃は辛うじて成り立っていた、ほとんど綱渡りに近い危

うさは否定できないが、あの兄妹が『異常な聴力』と『異常な視力』を持ってして抜群の察知能力を発揮しそれを逐一伝達してくれているお陰だった。

そして綱渡りに興じる道化師は呆気なく転落させられてしま

う。

「う、嘘……」
元々、大きく目を見開いていた彼女だが、さらに大きく見開き驚愕の感情を露にしている。

「ダ、ダメ……多すぎよ！」

今までとは比較にならない数の飛竜が一斉に殺到する、その羽ばたきで白く覆われた視界を晴らしていく程だった。

「正直、厄介だ」

そう言いながらもルーヴィックは果敢に飛竜を斬り捨てていくが、如何せん数が多すぎる。討ち漏らした飛竜が、彼を通過する。

「チツ、しゃーなー！」

「だね！」

迎撃は無理と判断したのか、ゼルとロイは際どいところで、咄嗟に地に伏せ、強襲を辛うじてやり過ごした。

それは、とても間が悪かったんだと思う。

攻撃を直前に避けられた飛竜は、一瞬標的を見失い、飛行の判断動作が遅れてしまったのだらう、『障害物』の発見が遅れ、そこに突っ込んでしまう。

他の飛竜を押し止めるガディだった、別にガディに特攻する意図があつたわけじゃない、ゼルとロイが避けた向こう側にガディが居ただけ。そこに突っ込んだ。

「っ！？ぬお！」

膠着状態にあつたガディを押し止めていた飛竜ごと薙ぎ倒し、斬りかかろうとしていたアーカスもそれに巻き込まれた。

そして、本当に間が悪いことに、アビスは詠唱完了直前で意識を完全に魔法に集中しきっていた為、それらを咄嗟に気付けなかった。

ほんの一瞬だが、アビスの護りが完全にフリー状態になってしまったのだ。

「ぐがああああああああ！！」

飛竜の牙が、爪が、アビスの身体に突き刺さる。アビスは鎧ワイバーンなんて身に着けていない、装甲も何もないローブ着ているだけだ。そんなもので猛獣の牙や爪を防げというのが気の毒というものだ。

「。ア、アビスさん！！」

弾かれたように俺は駆け出していたが

事も有るうちに、飛竜はそのままアビスを掴まえたまま飛び去ってしまった。

「クソ……ま、待て！」

ロイが慌てて銃を構えるが……撃てない、撃てるわけが無い。下手をすればアビスに当たってしまうかもしれないし、何よりも撃ち落してしまうとアビスもろとも飛竜は墜落してしまう。

どうすることも出来なかった、ただただ呆然と飛び去る飛竜を見上げるのみだった。

しかし、こんな時でも放心しないのがヤツのウリだった。

「貸してくれ」

そう言うや否や、俺からボルトケースを引っ手繰り、その中から数本ボルトを取り出した。

「そんなのどうするんだ！？」

「すぐわかる」

短く答え、ボルトケースを俺に押し付けるように返却し、手に持ったボルトを投げつけた。

ただし、飛び去る飛竜ではなく、岩壁に向かって……。

「うお！？」

思わず声を出さずにいられなかった、驚いたことに手で投げただ

けのボルトが、次々と岩壁に弾かれること無く突き刺さった。

だが、本当に驚かされたのはその直後だった。

「お、おい!?!」

ルーヴィックはボルトを投げきると、そのまま岩壁に猛ダツシユ。そして壁に突き刺さったボルトを足掛かりにし岩壁を駆け上がった。そこに別の飛竜が彼の行く手に躍り出たが

「つ!?!」

「……マジかよ……」

それすらも足場にし、さらに上空へと昇っていく(さり気無くついでに首を刎ねることを忘れていない)

信じられるか?こんなことが……

次々と他の飛竜が襲い掛かるが、次々と踏みつけ、階段でも駆け上がるかのように上へ上へと昇る。

そして遂にアビスを掴んだ飛竜へと追いついた。

「悪いが、余計な傷を負わせる」

ルーヴィックは刃を超高速で走らせ、飛竜を一瞬にして解体し、その残骸からアビスを救い出し手繰り寄せた。

「すまん、頼む」

そう言い、手繰り寄せたアビスの身体をこちらへ投げてよこすというか投げんな!

「おつと!」

「危ねえ」

「ナイスよ、一号、二号!」

それをゴダールとボルコフが受け止める(そういえば居たな……こんな奴らも)、そしてさり気無く命名が酷いことがまたまた判明した。

どうやらアビスは気を失っているようだった、見るからに酷い傷だ。

そのまま彼の身体を岩陰まで運び、傷の状態を診る……かなり傷

は深く、出血も酷い。ローブの上からでも容易に判断がつくことだった。

同じく容態を診ていたスルーフもそれを察したらしく、どう処置を施すか思案しているようだった。

「……俺が傷を…止血をやってみます」

「出来るのか？かなり深い傷だがね……」

「わかりません、重ね掛けして極力傷を小さくします」

今日の俺は何故か回復魔法の効果が上がっている、それでもこれ程までの負傷を癒せるか、正直わからなかった。そんな俺の心境を汲み取ったわけでも無いだろうが、スルーフは手当てするための準備を始めていく。勿論、手や器具の消毒も忘れていない。

俺は深呼吸し、意識を集中。続いて魔力を指先に込めて魔方陣を描く。地下でリルドナの手を治してやった時と同じく無詠唱での術式だ。

「バ、バカな…結印^{キャスト・サークル}方陣だと!？」

それを目にしたスルーフが驚きの声を上げた。

淡く光が灯り、アビスの傷口を癒していく……が、まだまだ傷は塞がりはしない。

「き、君はプロイツェンの魔術師なのかね？」

「違います、教わっただけです。」

このまま続けて重ね掛けていきます」

「そんな簡単なモノではないのだがね……」

どうやらこの術式は驚くに値するモノのようだ、リウエンもとんだ代物を伝授してくれたわけだな。

だが、使えるモノは使えるし、驚かれても困る。そんな論議するよりも目の前の重体患者の方が何よりも重要だ。俺は構わず回復魔法を掛け続けた。

もう何度目の施術かわからなかったが、かなり傷が小さくなって
いるのはわかる。

もう一息といったところで声が掛かった。

「もう充分だ、あとは任せてくれ」

「いえ、あともう少しなので」

「ダメだ、いくらなんでも無茶すぎだ。」

これ程の回復力をもつ魔法を何度行使したと想像しているのかね？
「え？」

そうだ、俺の魔法力は本当に微弱なモノでしかない、何かしらの
力で増強されていると仮定しても、その素となる俺の魔法力は確実
に消費しているはずなんだ。

今まで使っても二〜三回、それも自分にしか掛けたことが無かつ
たから、その辺りの力の配分がわかっていなかった。

「ここで、君に力を使い果たして倒れられるのも困るんだがね？」

「……わかりました、あとは……お願いします」

「任せておいてくれたまえ、」

これくらいの傷なら軽く何針か縫うだけでいけそうだ」

俺は身体に軽い疲労を感じながらも、岩陰を後にした。

8 - 6 魔法力切れにご用心です

「無能、どうだったの？」

「なんとか傷は塞げそうだ」

リルドナとのやりとりに周囲に安堵の色が染み渡る。

そこで気付いた、ロイが銃撃を止め、ルーヴィックの姿が見当たらないことに……。

俺がそのことを訊ねると、リルドナは上を指差した。

果たして、その指差す先には驚くべき光景が広がっていた。

「なんだよ、あれ……」

「いやー、ボクも驚いて何て言っているかわかんないよ」

そう……上には確かにルーヴィックが居た、別に高台によじ登ったわけでも、飛行魔法を使っているわけでもなく、上空に留まっていた。

飛竜を踏み台にし、次々と飛び移って滞空しながら戦っているのだ。

別に飛竜達が足場になるためにその場に留まっているわけではない、ルーヴィックに襲い掛かるべく次々と飛び掛っているのだが、それをルーヴィックが先読みし足場として活用して、次へと飛び移る際にキツチリと首を刎ねその数を減らしている。

一見すると、ルーヴィックが足を出したところに飛竜が飛んで来ているようにさえ、錯覚してしまう。

「このまま全部仕留めちゃうんじゃないか？」

「いくらなんでも、それは無いでしょう……」

そう、いくらなんでもそれは無い。そもそも彼は足場である飛竜を減らしながら飛び移っているのだ。数が減れば飛び移る選択肢は狭まり、いつかは滞空できなくなる。そうでなくても、飛び移る前

に次の足場が遠ざかってしまえばそれで終わりだ。そう、例えば飛竜が『警戒』という思考を持ち、一旦距離をとろうとしたら？

「あ……」

「アンタ、今何か条件立てたでしょ？」

お、俺の所為なのだろうか、飛竜達がルーヴィックへ襲い掛かるのを止め、次々と離れ始めた。

しかし、それでも彼は果敢に切り込み続けた、まるで一匹でも多く道連れにするかのように……。

「お、おい無茶するな！」

離れようと飛行姿勢を変える飛竜を足で捉え、さらに一太刀振るう、がそれが足の届く最後の一匹だった。

彼はその一匹を道連れにし、落下を始める、空中であれだけ飛び回ったのだ、最初に上空へ達した時よりも座標が大きくズレている。つまり落ちる先はここではなく、ここより離れた崖下だ。

「おい！そのまま落ちるとマズイ！」

「問題ない」

彼お得意のフリーズが聞こえたかと思うと、シウルシウルと身体に何かが巻きつく感触、そのまま彼は俺の目の前で崖下へと消えて

「ぐお！？」

直後、ガクンと急激に崖下へと引っ張られる牽引力、それはルーヴィックの投げたワイヤーロープ。俺はそのまま崖へと転落しそうに！

「おつとオ」

「大丈夫か！？」

それをすかさず、アーカスとガディが支えてくれた。危なくヤツと二人揃って転落死するトコだ……。

しかし、俺の不幸はそれで終わらない。

「ぐぐ、ぐぐぐるじ……」

身体に巻きついたワイヤーロープは容赦無く俺を締め上げ、直後ガクンと一際大きな衝撃が伝わる。

運動エネルギーというのは、銃弾でもなんでも、その運動を停止したときに全エネルギーを開放する。

今まさに、落下という運動エネルギーは全解放された、俺という支点へ……。

「……こ、殺す気が……」

「おいおい、大丈夫かヨ？」

アーカスが半分呆れ声で心配をしているようだった。

「問題ない、すぐにそちらに戻る」

だから問題は俺の方にこそあるんだ！

そして身体に再び激しい衝撃、

多分、ヤツが遠慮なしに岩壁でも蹴って反動を着けているに違いない。やめてくれ、ワイヤーロープを支えているのは、俺という大変モロイ素材を採用しているんだ。安全率も限りなくゼロに近いし、建築法も機材の安全基準も何一つ満たしていないんだぞお！？

「ぐおおおおおおおおお！」

俺の絶叫をBGMにし、ヤツは華麗に元居た断崖の道へと舞い戻った。コイツいつか殺す。

「すまん、心配かけた」

「謝るところはソコじゃねえ……」

華麗に俺の苦情をスルーし、ヤツは呟いた。

「しかし、いけそうだな」

「何がだよ……？」

「この手を使えば、さらに数を減らせるな」

「先に俺の命が減るわ！」

「……ふむ、残念だ」

俺は残念がるヤツに噛み付きそうになりながら、もう二度とゴメンだと思った。……とはいえ、こんな芸当が出来る身軽な奴なんてそうそう居ないだろう

いや、待て。

「お前も真似すんじゃねえぞ！」

「し、しないわよ！」

じゃあ、そのクリクリと目を泳がせる素振りと後ろ手に隠したワイヤーロープは何なんだ！

ちなみに俺達がこんなやりとりをしている間にもロイは懸命に飛竜に銃撃を見舞っている。ちよつと申し訳ない気持ちになってきた……。

「クソ、これじゃあキリが無いよ」

撃ち終えた銃の銃身清掃しながらロイがぼやいた。

もう遠隔攻撃の手段を持っているのは彼一人だ、明らかに殲滅のペースも落ちている。

「オルアー！させねえよ！」

再装填中に襲い掛かる飛竜をゼルが仕留める、その頻度もかなり増えてきている。当然だ、最初の内はこちらに到達する前にルーヴィックが投擲で仕留めていたのだから……。

状況は思わしくない。

銃弾にもそれを発射する火薬にも限りがある。それに加え雨が降ってしまえば、銃は撃てなくなってしまふ。

「マズイな……こりゃジリ貧になつちまいそうだ」

「こんなことなら弓持ってくれば良かったわ」

リルドナが上空の飛竜をムムムと睨みつけてはやく、

「全く誰よ、その日の気分で太刀が良いとか言い出したのはっ」

いや、それはお前自身だろう……という言葉に作者取材という名目のお休みを与えて遠ざける。今はそんなこと言っている場合では無いのだ。

とにかく、この状況をなんとか打破しなければ、雨が降ってしま

えば攻撃手段が無くなってしまふ。弾切れも論外、夜になるという時間切れも絶対にダメだ。

雨と夜という時間切れ付きの状況……非常にマズイな。

そこへ、アビスの手当ては終わったのかスルーフが姿を見せた。

「無事に止血出来た。」

一応、あの飛竜は毒の類も持つていない様だね。

あと用心が必要なのは雑菌による破傷風くらいだがね。」

「そうですか、お疲れ様です。」

「君の回復魔法の初期治療のお陰だと思うがね？」

こんな状況だが、正直認めてもらえて嬉しかった、武器や魔法の扱いに関して言えば至って平凡すぎる俺だ、大抵の冒険者は何かしらの得意分野に特化した能力を身に付けている。

何をやらせても並み程度、むしろは並み以下の俺はよく鼻で笑われたものだった。今のような言葉を掛けて貰えるのは始めてかもしれない……。

だが、それに対して素直に喜んだり舞い上がったりする程、俺には可愛い気は無かった。

なので口から出たのは素っ気無い返事だった。

「たまたま上手くいっただけです、それよりも今は」

「……ふむ」

彼は状況を理解し、少し思索したかと思うと、何やら荷物から奇妙なものを取り出した。

一見すると小銃、しかし銃口が空いていなく、代わりに宝石のようなものが先端に付いている。引金は付いているが、撃鉄が無く、S字金具が連動しているわけでも無かった。

そんな俺の好奇の視線に応えるように、

「まだ、試作品なんだがね」

「銃……じゃないですよね？」

「ちよっとした法具みたいなモノだ」

そう言うと、彼は上空の飛竜に向けてソレを『撃った』。

銃口　のようなモノから淡い緑色の光弾が発射され上空の飛竜へと飛来する。

「ほう」

「なんだありや？」

その光の弾丸を受けた飛竜は突然小刻みに震えたかと思うと、まるで切り裂かれたように傷だらけの姿を晒していた。

「持つ者の魔力を吸い、魔法弾として撃ち出すだけのモノだ」

「魔法弾…？」

火薬の代わりに魔力を使用するモノなんですか？」

その問いにはルーヴィックが代わる形で答えた、

「擬似的に元素魔法・魔法弾丸を構築しているわけか」

「その通りだ、『色付け』さえキツチりすれば、そこそこの威力が出る」

色付け…：属性付けのことだ。つまり各種属性弾を撃ち分けられる銃というわけだ。

スルーフは説明を続けながらも、魔法弾をさらに射出する。

「だが、魔力の圧縮率も低く、色付け無しでは殆ど殺傷能力も無い、」

「ザシュ！と切り裂く音と共に被弾した飛竜はズタズタに切り裂かれていく。光弾の色は緑　おそらく風の力が宿っているモノだろう、光弾が接触すると同時に真空の刃が対象を切り裂く仕組みとなっているようだ。」

「現段階ではまだまだ使い勝手の悪い玩具だがね」

「否定だ、なかなか面白いモノだと思う、」

「なににせよ、援護射撃が居てくれるのはありがたいよ」

玩具と自虐的になるスルーフに対し、ルーヴィックとロイがさすがフオローを入れる、がスルーフの気持ちもなんとなくわかった。この手のマジックアイテムは魔法を扱えない者に擬似的な効果手段を与えるのが、メインの概念だ。

元々、魔力が弱い者が使うのだから、威力は極小でしかない、それを補う為に『色付け』がという魔法技術が必要になってくるのだから、本末転倒もいいところなのだろう。『色付け』せずとも威力を出せるほどの魔力の持ち主なら普通に魔法を使っているだろうし……。

だからといって、それを嘲笑ったり出来るわけがなかった。

まだまだ改良の必要が残るモノと承知の上で、少しでも助勢になろうと持ち出してくれているのだ、その気持ちを察せられない程、空気の読めない者は居ない。

「うん、面白そうなおモチャよねー、」

魔法校の学生が自由研究で提出したら良さそうだわあ」

筈なんだけど……。

彼は特に気にした様子も無く、必死にロイの銃撃を援護するように魔法弾を放ち続ける。

実銃よりも威力は大きく落ちるが、その分速射性は高い。上手くロイの再装填リロードの間を埋めてくれている。

玩具おもちゃなんてとんでもない！要は運用法次第なのだ。

「ふむ……私も少しはお役に立てているようだね……」

そう呟く彼の表情には疲労の気配が色濃く表れていた。

無理も無い、圧縮率も低い中で断続的に魔力を消耗しているのだ、彼は錬金術師であって、魔術師ではない。生命力マナから魔力を生成する能力があまり高く無いのだろう（俺よりは遥かに高そうだが）明らかに消耗している。

そこへまた飛竜ワイバーンが襲撃してきた。それにガディが対応する、先程までの大剣を盾にするモノではなく、両手保持のまま前方へと鋭く突き出す凶悪な平突きだった。

グシャリと首から翼にかけて歪こじに引き裂かれ、飛竜は無残に転がる。

さらにそこから横薙ぎに振り回し、遠心力を伴った暴風の如く荒々しい薙ぎ払いを繰り返し、接近していた飛竜を容赦なく肉塊へと

変える。

「…ちよつ、アンタ！」

間一髪、それに巻き込まれそうになったリルドナが苦情を漏らす。しかし、立て続けに襲い掛かってくる飛竜の迎撃に追われ、それは有耶無耶にされてしまう。

ガラン！とガデイの大剣の切先が地面に投げ出される、やはり超重量武器らしく、連続で振り回すことは出来ないようで、彼はため息が混じりに「やれやれ」と呟くと、再び大剣を握りなおそうと力を入れる

しかし、そこへ新たな飛竜が彼へと強襲する。

ガデイはすぐさま、迎撃が間に合わない判断し、大剣を手繰り寄せ　　というか自分自身が大剣へと駆け寄って、刀身を盾にして受け止める。

「むう、」

「おいおい、旦那無茶しすぎだぜ？」

動きを押し止められた飛竜にアークスが斬りかかる。もう何度も見た一連の行動だが、その太刀筋は流れるようなモノでは無くなっていた。

乱暴に繰り出される斬撃は、勢い余って何発かガデイの腕や足を掠めていく。

見かねたりルドナが血相を変えて叫ぶ、

「ちよつと！アンタも何やってんのよ！」

「まあいい、気にするな」

しかし、当事者であるガデイは気にも留めない。

力の入れすぎ、暴走、空回り。

ガデイもアークスも焦っているのだ、先程アビスを護り切れなかったことに負い目を感じ、もう失敗すまいという気持ちだけが空回りしてリズムが崩れている。

このままでは近いうちに綱渡りをする道化師はまた転落してしま
う

「あー！もうっ！」

その空気に耐えかねたのか、彼女は苛立った声を上げる、焦りの空気はいつの間にか、彼女まで伝播してしまったようだ。

「落ち着け、リル。冷静に周囲へ注意を払え」

ルーヴィックが注意を促すが、最早、彼女の耳には届いていないようだった。

非常にマズイ気がした。

護衛対象に迫る飛竜を食い止めるのが主目的だったはずのガディが、自発的に攻撃をしまっている。

リルドナもまた、『飛竜の死骸の片付け』という仕事から外れ、完全に迎撃に参加していた。俊敏に動き回り、周囲を巻き込むことの無い柔軟な攻撃で確実に仕留める。何よりもその『目』でいち早く察知し、敵を捕捉出来るのが大きかった。

だが、目が良すぎた。

それに頼り切る為、目が届かない死角に対してはノーマークになっていたのだろう。

リルドナの背後から接近する飛竜が俺の目に飛び込んできた。

「おい、バカ、後ろだ！」

咄嗟に俺は叫んでいた、そして彼女なら咄嗟に対応出来ると思っていた。

「え？」

俺の言葉に反応し、首が動き、身体も振り返るように動き出す筈だった。

彼女はほんの少しだけ首を動かしたところでビクンと固まってしまった。その顔は鬼気迫る表情に染まり、あたかも聖職者が十字架を踏めと命じられた如く、本能的な拒絶を発していた。『振り返る』という行動が罪深いモノであるかのように……。

だが、このままでは、むざむざと背後からの攻撃を許してしまう。

「……………」

「おい！聞こえてるのか！」

「るさいわねっ！！」

彼女は置かれた状況を全て振り払うように大声を上げる。と同時に大きく跳躍し飛竜の突撃を飛び越えるように避ける。

そして、自分の下を飛竜が通過するタイミングで太刀で一閃し、飛竜の左翼が切り落とされた。

片翼をもちがれた飛竜はそのまま飛行姿勢を保てなくなり、慣性のまま地面を削りながら爆走していく。

攻撃を回避しつつ敵の戦闘力を奪うという悪くない返し手だろう。それが単独行動ならば。

制御を失った飛竜ワイバーンが突き進む先には スルーフが居た。

「マズイ、スルーフさん避けて！！」

俺は咄嗟に声を張り上げて訴えた。そんなの既に手遅れだと知りながらも……………」

直後、ブワツ！と激しい風が巻き起こり、周囲の砂埃や小石を吹き散らした。

激突の瞬間。

彼は例の魔法弾を自分の足元に撃ち、目の前に風を発生させて『突っ込んでくる物体』の進路を逸らしたのだ。

直撃を免れた彼は致命傷は負っていないかった。

が、近距離で風の刃を巻き起こしてしまった為、少なからず切り傷を負っていた。

「自分の攻撃で傷を負うとは、世話が無いんだがね……………」

彼は力なく自虐と皮肉めいた笑いを浮かべていた。

それを目にしたりルドナは愕然と言葉を失い、立ち尽くしていた。

厳密に言えば、別に彼女の所為^{せい}じゃない。変則的な迎撃をして、その進路上にたまたまスルーフが居た。

ただそれだけなのだが。

結果に後悔し、『もし』を考えてしまうのが人間だ。

もし、彼女がその場で振り向き、キツチリ迎撃していれば？

もし、迎撃の太刀が、不安定な跳躍中でなく、キツチリ踏み留ま
って放っていたら？

もし、仕留めた飛竜を後方へと流さなければ？

もし、飛竜の巨体がスルーフへ至ってなければ？

もし、スルーフが緊急回避手段を取らずに済んでいれば？

彼女の性格からしてここまで細かく考えはしないと思うが、もたらした結果のきっかけが自分の行動にあると感じ取ってしまっているのだから。

普段から傍若無人に振舞っている分、精神的に打たれ弱いのかも
しれない。目の前の『結果』に対し、相当なショックを受けている
ようだった。

そこへ容赦なく、また別の飛竜が襲い掛かる。

しかし、彼女は立ち尽くしたまま動かない。動けない。

「おい、バカ！動けよ！」

俺は必死に声を張り上げながらリルドナの下へ走りこむ。距離に
して一五メートル、遠すぎる。

彼女の頭に食らいつこうと、飛竜が獰猛な顎を大きく広げ肉薄す
る。

間に合わない、走り込んだがあと一〇メートル。

ガンツ！と激しく金属板を横倒しにしたような音が鳴り響くと同
時に、不自然な方向にギュルンと旋回し激しく地面を削りながら墜
落した。

「ひ、ヒゲ……様？」

「それは私のことかね？」

呆れた様に聞き返す。その男は、全身を威厳あるフルプレート鎧を身に纏い、腰に帯びた由緒正しそうなロングソードを腰に帯びた姿で、格式のありそうなカイトシールドを大きく横に振りかぶった初老の男　執事のブルーノだった。

彼は手にした大きな盾で殴打することで、飛竜を羽虫でも追い払うかのように、アッサリと叩き落とした。

「いい加減にせんか！浮ついているぞ、しっかり両の足で立てい！」

「す、すまねえ！」

「はいっ！面目ありませんっ！！！」

その怒声に背を正し、畏まるゼルとロイ。他の人間も同じような感覚を受けているに違いなかった。

「護衛はロイを中心に五メートルで均等配置だ！」

ブルーノの指示に「おう！」やら「心得た」やら各々の了解の声を出し、動き始める。先程までの焦りによる、ぎこちない空気が霧散し統制の取れた動きへと研ぎ澄まされていった。

「ムノー君、申し訳ないがスルーフ殿の治療をお願いしたい」

「わかりました」と答えながら、もう『無能』は公式オフィシャルなのかと、ため息をついた。

俺はスルーフの治療のために一旦岩陰まで下がる、ついでにリルドナも引つ張って行った。精神的に不安定すぎる彼女をそのまま前線に立たせることもできないからだ。

スルーフの傷はそれほど酷いものでもなかった、岩陰に行くのにも自分の足で移動もしていた。しかし、その出血を放置はできない。俺は今日何度目になるかわからないヒールを使おうと、スルーフを小さな岩に腰掛けさせ、自分自身も屈みこみ意識を集中した。

「待て、よすんだ…魔法力が尽きたらどうする!？」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう」
構わず俺は魔方阵を虚空に描き始める。

「ダメです、それ以上使ってはいけませんっ！」

「……くっ」

また危険を報せる声が届いた、だがそんなことは構っていられない。

ポウ、と淡い光が灯り、スルーフの傷を癒していく、どうも今日は失敗無しだ。

「……よし、これで多分表面上の傷は塞がっているので、無理に動かなければ大丈夫と思います。本当はもう一回掛けておくべきでしょうけど、ご忠告をありがたく受け取って、これ以上の使用を控えておきま」

そう言いながら立ち上がろうとしたが、ガクンと力が抜ける。

「あ、あれ……」

「お、おい！？だから言ったんだ」

息が苦しい。まるで長距離を配分無視で全力疾走してしまったように、息が上がり、身体に力が入らない。続いて、連日資料調査で徹夜したように、身体中に妙な痛みが走った。

「それが魔法力切れだ。

一時的だが極度の呼吸困難に酷似した症状に苛まされる……」

「ア、アンタ……」

視界がグラグラと安定しない、それでもこの二人が心配そうな顔で俺を見ているのはわかる。

気を抜くと、このまま倒れそうだったが、意識はしっかりしている。

こんなところで大人しく気絶おぼてられるか。

身体は充分に動かないが、頭はまだ生きているのが幸いだ。

「とにかく、君はここで大人しくしているんだ。私は再び援護に回

る」

スルーフは例の銃を手にし、行こうとするが、

「ストツプよ、メガネも魔法力切れそうじゃないの？」

「な、何を言うんだ！？」

リルドナの見立ては正解だろう、元々魔力の少ない彼が、極力出力を小さくし、小出しにするように魔法弾を放っていたのだ。ただでさえ連発したのに、先程の激突回避の為に、高出力の突風を巻き起こしたのだ。もうそれ程魔法力は残っていないのだろう。

「あたしには……『見える』のよ」

そう言うリルドナの目はスルーフの顔を見据えている。

やはり見間違いないやなく、その瞳は明らかに光が灯っている。

「そ、その瞳の光は……まさか血系特性の」

「今はやめて頂戴、あたしには見抜ける。それだけよ」

やはり何かしらの特殊な能力を持っているのだろうか、だがその推測は彼女の拒絶の言葉で遮られた。好奇心もあつたが、今はそれよりも

「ソレ貸してよ、あたしが撃つわ。魔力があれば使えるのよね？」

「使えるが……色付けやら魔法技術が必要なんだぞ？」

「……魔法技術なんて全然よ、

あたしは妹と違って器用に術式を構築したり一切できないしね」

リルドナが魔法を使っている姿なんて見たこと無いし、想像すらしてなかった。それでも彼女は「でもね」と口にする。

「あたしは魔力を持っている、それだけで充分じゃない？」

「……わかった、だが配分には気をつけるんだ、自己制限なんて掛セルフ・レギュレートかかっていない、無理に撃てば魔法力を吸い尽くされる……つまり魔力が足りなかった分は無理やりにも吸い出そうとするんだ、意味はわかるな？」

魔力は生命力マナから生成される、いわば魔法の燃料だ。それが足りない時、制御が掛かっている術式なら『発動』しないで片付く。しかし、足りなくても無理やり動かそうとする術式では、足りない

部分を直接、生成元である生命力を侵食し吸い出そうとする。これが魔法力切れのメカニズム（らしい）だ。それを踏まえて念を押しただのだろうが……

「わっかんない」

乙女チックに小首を傾げてらっしゃる彼女は、やはり信頼と安定のINT3だった。おハカさん

「要は、根を詰めすぎるとバテちまうってことだ」

なので親切なエインさんはこうやって補足してやることを忘れないのだ。

「ふうん、勉強と同じなのね、納得納得」

「お前は一回八ゲるくらい頭使った方が良いぞ……」

俺の言葉に、お約束通り「なによ」と噛み付こうとしたが、スルーが置いてけぼりをくらいそうだったので、彼に話の主導権を明け渡す。

「使い方は単純だ、グリップ部分から勝手に魔力を吸ってくれる」
そう言われ、リルドナと一緒にグリップを見る、よく見るとなにやら妙な紋様が刻印されている、『吸収』行っ機構がここにあるよ
うだ。

「引金を引けば、魔法弾が構築され射出される。狙いは射線をイメージし易い様に実銃と同じく備え付けの照準をアテにすれば良い」

「この照門リアサイトに照星フロントサイトが重なるトコで撃てばいいのね」

「くれぐれも力はセーブして最小で、何しろ試作品なんでね
っ
て君は左利きなのかね？ コラコラ、いきなり引金トリガーに指を掛けるんじゃない！」

説明途中で銃を弄ろうとする、せっかちなノラネコに泡を吹くスルーフ、なんだか最初の『軽薄そうな』と思ったいメージはすっかり失われていた。

「そっぴや、お前って銃使ったことあるのか？」

「ないわ。でも」

ハッキリと「ない」と断言する彼女だが、自信を込めて語る。

「あたしの能力、『武芸百般』を持ってすればカンタンよ」
先程までの落ち込み振りはどこへいったやら……そう告げる彼女の顔はすっかりいつもの調子に戻っていた。
だがそれで良い、そちらの方が断然彼女らしくて安心できた。

8 - 7 弾幕はパワーだぜ！……です

夕焼けに染まる空。

それを多い尽くすように翼を持つ者達は羽ばたく。

竜族亜種、飛竜ワイバロンは、数という最大の暴力で空を支配していた。

「で、今度はねーちゃんが、か」

「いやいや、リルちゃんは弓使ってるし、いけると思うよ」

例の銃を手にして、不適な笑みとともに現れたリルドナを見るなり上がった言葉がそれだった。

俺とスルーフはその姿を見守るようにやや離れた場所で待機している。

「とういうわけで、援護射撃するから護衛よろしくね」

そう言い放つと、上空の飛竜に対し照準をつける。

「そこよ、迂闊なヤツ！」

妙にノリノリの口調で飛竜目掛けて魔法弾を放つ

……果たして、ソレは魔法弾とっていいのだろうか。銃口から放たれたソレは、白っぽい赤 というかピンク色に近い一条の光の帯。

その射線軸上の飛竜は、容赦無く貫かれ、身体に大きな風穴を空けて、次々にボトボトと墜落していく。

「……う、嘘お？」

撃った本人も予想外だったらしく、目を白黒とさせている（赤いけど）

「お、おいっ！？力の入れすぎだ！無茶な……」

「や……って、手加減したわよ？」

「試作品だと言っている、下手すると壊れるぞ？」

その言葉にリルドナは咄嗟に銃口の宝石を見つめ、

「あ、ホントだ。ヒビ入ってるわ……」

「な、なんて無茶な……」

どうやら、リルドナの魔力は相当強いらしく、魔法の銃が耐えられないようだった。そう何回も撃てそうに無いかもされない。

「おいおい、登場いきなりで、あと数発で退場かヨ？」

「まあいい、壊れるまで撃てばいいだけだ」

作った本人の了承も無しに壊れてしまうこと前提で話が進んでいく。いくら錬金術は研究が本懐で、過程である『作品』がオマケだとしても、それはあんまりじゃないかと思っただが、

「壊れてしまうのは仕方ないが……彼女の身体が心配だ」

「うーん、全然。これくらいなら、ヘツチャラだけど？」

リルドナの魔法弾は当たれば即死級の威力だ、しかし、あと何発撃てるかわからない。

日没までの時間も心配だ、天候も怪しい。

どうする？

一気にケリをつけたいところだが

「どうせ壊れるなら全力でフルパワー一気に仕留めてあげるわ」

なんと『力こそ正義』の絶対攻撃主義……それもアリかもしれないが、

「よせリル、それだと発射時のバックファイアーで全員焼けてしま
う」

あまりの高出力の所為で周囲にも被害がでるようだ。
そうなるか

「ガデイさん、アーカスさん、

派手に暴れて見せて、飛竜を一旦空中に追い払うことは出来ますか？」

「出来なくは無いですぜ」

「一時的なら可能だ」

環境土台は作れる。

「ルーク、リルドナをどうにかして空中に飛ばせることは？」

「可能だ、打ち上げればいいだけだ、手段は問わない、の話なら」

発射環境も作れる。

「リルドナはその状態で射撃出来そうか？」

「変な体勢で吹き飛ばされてる、じゃ無ければいけるわ」

条件は揃った。我ながら無茶苦茶な作戦だと思いがこれで行くしかない。

「それならボク達も牽制に参加した方が良さそうだね」

「ま、やってみるぜい」

さすがに意味を汲み取ったのだらう、深く問い質すことも無く、動き出す。

「よおーっし、おっぱじめるぜ！」

ゼルの槍が乱暴に横薙ぎに振り回され、それに飛竜が怯んで急停止する。

そこへロングソードを抜き去ったブルーノが斬り掛かり、一撃を加えるが、それ以上の追撃をしない。

傷を負った飛竜はたまらず空中へ逃げた。

ガデイもまた、乱暴に大剣を振り回す。別に仕留めても逃げられなくても構わないので、その剣の軌跡は滅茶苦茶だ。

当たれば致命傷。飛竜は「これは適わん」と言わんばかり散り散りに逃げいていく。

それでも間に割って突撃した飛竜をアーカスが激しい斬撃で迎え、やはり追い返す。

少しづつだが、地上へと強襲する飛竜が減ってきた。

「捉えた。リル飛ばしてやるから、俺を踏み台にしろ」

「ふえ？踏んでいいの？」

彼はそれに答えず、時計を一瞥し、

「しつかり飛べよ？六秒後に来い」

俺は簡単に飛ばせ、と言ったが実際どうやるかなんて考えていなかった。

果たして彼はどうするのだろうか、きつとまともな手段じゃないとは思うが……。

そうこうしてる間に、リルドナは助走をつけ大きく跳躍し、ルーヴィックを踏みつけるように落下していく

その瞬間、彼は身体を大きく捻り、真上を蹴り上げるような動作でリルドナの踏み足目掛けて足を繰り出す。

彼女もそれに反応し、ルーヴィックの蹴りに合わせるようにさらに大きく跳躍する。

「ひ、ひいいいいいいいい」

が、やはり相当な勢いで上空へと打ち上げられたのが、情けない声を上げながら昇っていく。

急激な加速度と空気抵抗に曝されながら、彼女は呟いた。

「こ、こつという飛んでるの仕留めるときに、使う諺ことわざってあったわよね……」

銃を構えながら、ああ、そうだったわね。と頷きながら、それを口にした、

「曰く……『墜ちる蚊トンボ！』キリッ、よー！」

その言葉と共に夕焼けの空が、一面白っぽい赤色の光　つまり朱色からピンクに　に包まれ、その光に飛竜達が残らず溶けていくようだった。

かつて大戦時の魔道師同士が衝突した時、激しい光と共に要塞が消滅したという話がある。今ある光景はまさにそれに通ずるモノだろう。

「す、すげええ……」

「笑っしかねえよなあ……」

そのあまりの光景に皆言葉を失う。

次第に光が消えて、元の夕焼けに染まった朱色の空へと戻っていく。

その中で黒い小さな影が舞い降りてくる　　というには、あまりにも重力加速度を身に纏っているが……。

「　　はいはい、どいてどいて」

「うおう!？」

ズン!という凄まじい音と振動と共に、目の前に屈み込んだ彼女が現れた。

相当な高さから落下したのだが、どうやら彼女は全身を使って落下のエネルギーを緩衝したようだった。やっぱり野生のノラネコだな……。

「ごめんね、メガネ。やっぱり壊れちゃったわ」

彼女の左手には例の銃のグリップ部分しか残っていなかった。

「いや、いい。」

寧ろ、そこまでの威力が出たという結果の方が重要だがね？」

「……。研究者の鑑かがみですね」

「とりあえず、コレだけでも返す」

スルーフに壊れた銃の残骸を返そうとした、その時だった。

ずる、べたーん。

それは起きた。

「あ、あれ……?」

「お、おい?」

彼女は、まるで自分の作った母艦の通路で華麗にすっ転ぶ、ドジ

っ娘大佐のように転んだ。

あまりにも見事なコケっぷりのその姿には見覚えがあった……。

「そんなトコまで姉妹で似なくていいと思うぞ？」

「お、おかしいわね……力が……入らない……わ」

その言葉の通り、力が入らないのだらう、立ち上がることも出来ずに、前のめりに転んだままの突っ伏している。

ハッキリ言つて、その姿はうつ伏せに突っ伏して、お尻を突き出すような体勢の為、あまり年頃の娘が維持して良い格好とは思えない……。

「ふむ、燃料切れだ」

その声と共に、ひよい、とリルドナを担ぎ上げるルーヴィック。

彼が言うのはつまり魔法力切れということだ。……あくまで、『担ぐ』で『抱きかかえる』ではなく……。

「しばらく大人しくしている、俺が運んでやる」

まるで丸めた絨毯でも運ぶかのような扱いに見えた。きっと俺もああいう風に担がれたんだ。

「ね、ねえ、お兄ちゃん？」

「なんだ？」

「一ついいかしら？」

「ふむ？」

「やっぱりね、あたしも女の子だし。こういう荷物みたいな抱え方はどうかなく？つて、個人的にはお姫様抱つことが良いんだけど、まあ憧れるというか。べ、別に兄妹の超えてはいけない禁断の愛へのフラグを立たせる切り口にしようとか、そういうのじゃないんだけど、そもそも常に無表情なお兄ちゃん相手だと、どういふイベントに発展するかとか考えるだけでも楽し」

ゴソツ！という効果音と共にルーヴィックは勢い良く振り向いて、口を開いた。

「おお、そつだエイン、

悪いがこいつの荷物を運んでやってくれないか？」

「お、おう。いいけど……今、モノ凄い音で頭ぶっつけなかったか？
ルーヴィックの背後の岩壁には、大きな人の頭大のクレータが出
来ていた。どうみても今作られてホヤホヤのモノに違いない。」

「む、いかなな、気付かなかった。リル大丈夫か？」

…絶対。確実に過失じゃなく、故意だろお！？」

だってそうだろう？

ヤツが振り向く直前にやや苛立った声で「長い、」と、ポツ
リと呟いたのが聞こえたんだ……。

『丁重に』沈黙化された彼女はピクリともしなくなった……。

夕焼けに夕立が迫り来る中、見事に強襲する飛竜ワイバーンを殲滅することに成功した。

目的の建物まで残すところ僅かになり気持ち足取りが軽くなった
俺達は先へと進む。

どうでもいいけど、俺も魔法力切れで辛いんだ、荷物持ちさ
せんな……。

9 - 1 姉さんは脳まで筋肉なので大丈夫です

みんなーっ！赤ルアがはじまるよー！
赤ルアを読むときは部屋は明るくして、
ディスプレイからよーく離れて見てね
大きなお友達もわかった力ナ？

……あ、あれ？

……。
あ、暗号化し忘れてましたっ！

Verzeihung .
Ich zeigte sehr unansehnlich
eine Stelle

* * * * *

おかしい、何かがおかしい、理不尽だ。

俺こと、エイン＝エクレールはとにかく不満だった。

度重なる回復魔法の使用で魔法力を使いきり、その反動で不足した魔力を補うように生命^{マナ}力を侵食され、

全身に一時的な呼吸困難だが、酸素欠乏症だが、よくわからない
症状で苛まされ、

拳句に、同じく魔法力切れを起こしたりルドナの代わりに、彼女の荷物を運ばされているのだ。

確かに、俺がこの中では比較的軽装で荷物も少ない、それは認める。

「でも、俺の容体を考慮してもいいだろお!？」

「問題ない、軽度の症状だ。すぐ元に戻る」

まだ戻ってねえ!と言いたいが、余計に消耗するだけなのでやめた。

この淡々と、「問題ない」と言つてのける男は、全身黒で統一された礼服だか、燕尾服だか、よくわからない格好の上、やや細身で俺よりも背が高く、執事が牧師のように見えなくもない……こんな主人にも神様にも敬う気配が無い男だが……。

髪も瞳も黒く、本当に真っ黒なのだ。それだけでも無機質だが、この男は表情が硬い、まるで錆びついた水車のようにビクともしない。悪さするときには『作り笑顔』を見せることもあるが、基本的に無表情だ。

「それにこいつが、俺達以外に荷を預けるのを嫌がるだろう」

彼が言う『こいつ』とは、彼の肩で意識を失っている人物……俺よりも頭一個分丸まる背が低く、髪も服も黒一色で、法衣だか、修道服だか、二重回しだか、よくわからない服装をしている女　リルドナだった。

この兄妹が並ぶと、黒い長い影と、黒い短い影となり、あたかも時計の長針と短針のようでもある。

「　　ったく、何入れてるんだか……」

本当に、『よくわからない』コトだらけで困り果てているのだ。

「それにしても、リルドナは大丈夫なのか？」

「問題ない、魔法力切れで一時的に機能が低下しているだけだ」

そう彼女は先程の騒動で全魔法力を込めた砲撃……魔砲と言うべきかも知れない一撃を放った為、スツカラカンな状態なワケだ。だ

がそれよりも

「その頭のほうが心配だ……」

俺が示す視線の先には彼女の頭があり、冗談としか思えないような巨大なタンコブが生えていた。岩壁にクレータを作るほどの激突だ、相当な力が掛かっていたに違いない……。

「そうだな……元々かなり悪いしな、計算もよく間違える」

「そっちの心配じゃねええええ!!」

今更だが、彼女はあまり頭が良くない。いや、むしろ悪い?というか単細胞か、良く言ってもINT3おバカさんだろう。

そのくせ、彼女はイロイロなんでも器用にこなす。この辺もやはり『よくわからない』部分だと言える。

「心配するな、これ以上は悪くならんさ」

「どこことなく、ひでえ……」

そもそも頭に出来た巨大なタンコブも、この男の所為せいだ。いくらこれ以上悪くならないと言っても、ハゲたらどうするんだ。一応これでも、こいつは女なんだ。

切り立った崖と、無骨な岩壁に左右を狭められた断崖地帯。

すっかり長くなつた影を引きずるように、緩やかな坂を登る。

意識の無いリルドナをルーヴィックが背負い、同じく意識が無く重体のアビスをゼルとガデイが担架のようなモノで運んでいる。

それは野営の道具を流用したのか、適当なパイプ状の棒に肌触りが決して良くないような布地を張った簡素なモノだったが、深い傷を負つたアビスを運ぶには充分に適した機材だった。

飛竜フライバーンを迎撃した場所から、体感で八〇メートルほど歩いた所で、急な下り坂に変わり、みるみる内に森の中へと俺達の姿を飲み込んで行つた。

木々が邪魔をして視界が悪くなり、目的の屋敷が目視し難くなつ

てきた。辛うじて見えるその姿を見失わないように気を配りながら、俺達はひたすら歩き続ける。

それにしても、だ。

「こいつがあんな凄い魔力を持つてたとはなあ」

俺は先程の光景を思い返す、

スルーフの作った魔力を撃ち出す魔法弾の銃、それを使って超凶悪な威力で、空一面ピンク色に染め上げる光の帯を迸らせた。

魔力を持つている事に関しては、別段驚かなかつた。彼女の妹であるリウエンは魔法校の主席卒業という程の優秀な魔術師らしい……姉妹なら大小の差はあれども同じ才能は持ち合わせていてもおかしく無いからだ。

予想外だったのは、その絶対量。俺は本物の大魔道士とか実際に会ったことは無い、正直なところ、どのくらい凄いか判断も付かない……ただ言えることは

宝の持ち腐れ。

その才能を開花させるかは、その後の成長過程で決まる筈なので、おそらく勉強嫌い（に違いない）リルドナは魔法についてさほど学ばなかつたのだろう。

……あの女に、やたら長い呪文スペルやら、複雑な魔法陣サークルを扱えるとは到底思えない。『色付け』も出来るとは思えなかつたのだが、

「一体、何の属性を付与して撃つたんだろう？」

精霊の力の宿る『色付け』つまり属性付けには元素を象徴する対応した『色』がある程度決まっている。

火なら赤、水なら青、といった具合に割りと「お約束」な組み合わせがあるのだが……。

「……何だよ、アレ。」

ピンクにしか見えなかつたんだが……」

「…ふむ？」

そう、彼女は発した光は、『白っぽい赤色』というか、どう見てもピンクだった。

ちよっと俺の知識では判断の付かないパターンだ。

俺の独白に近い言葉に反応を示してくれたのはやはりルーヴィックだった。

「リルは何も付与していなかったな。

……そもそも、あいつにそんな高等な技術は無い、」

「つまり……無色……？」

無色というには、しっかり『色』が着いていたと思う。

「別に無色だからといっても、透明や白とは限らない

というか、見事に白色のお前のほうが珍しいと思うが？」

「……そういうモンか？」

思い返せば、この目の前の男は銀色の光だった、文字通り十人十色なのだろうか。

俺の思考の手助けでもするかのように、ルーヴィックは言葉を重ねる、

「リウエが言うには、本人が得意とする属性や能力に依存することが多いようだ」

「得意な能力かあ……」

それは先程スルーフが口にした『ブラッド・アヒリテイ血系特性』とかいうモノに関するのだろうか、ソレがどんなモノか、わかっているのは『目が良すぎる』に関係している、ということぐらいだ。

あと、地下壕で耳にした『赤』というモノも気に掛かった。

「なあ、『赤』とか『ブラッド・アヒリテイ血系特性』ってなんだ？」

「……。聞いてどうする？」

訊いた瞬間、空気が張り詰めたのがわかった。彼の言葉の抑揚に尖ったモノが含まれ始めている。

「……。どうもしない、ただの興味本位だ」

理由としては最低かもしれない。だが、他意は無いということ

示すには、下手に小細工を飾り付けない方がいいのだ。

「ブラッド・アビリティ、血系特性とは持つて生まれた異能の力のことだ、遺伝的に備わることが多い為、『血系』と称される。そして、『赤』とはその能力の中の一つだ」

「魔法とは違うのか？」

「違う、フェアリーが飛び回るのも、ドラゴンがブレスを吐くのも、魔法では無いだろう？」

「……リウエンにもソレがあるのか？」

「ある。また違った能力だがある。……二人はそういう血統の生まれなんだ」

「二人はか、なるほどな」

カチリと思考の片隅で要因ピース合わさった気がした。

だが、それよりも

「何にしても、反則級だよな、

あれだけの身のこなしが出来て、異能の力があって、さらにはあの魔力だ」

「ふむ？」

「大体、あれだけの魔力があるんだ。複雑な構成じゃない、単純に魔力を撃ち出す魔法だけでも習得すればいいんじゃないのか？」

「それは無理だろう、」

俺はふむ？と先を促す、

「『リルだから』で片が付く」

……つまり、それが意味することは

「『単細胞バカだから』」

見事なタイミングでルーヴィックとハモってしまった。

本人が聞いてたら噛み付かれるかもしれない……。

「……だがあれが、バカですってえ……？」

その瞬間、再び地獄のカルドロロンが、その口を大きく開けた気がした。

9 - 2 その銘は罪詠院 母不知です

なあ、皆に聞きたい。

俺は幸福なのか？不幸なのか？

決死のヘッドスライディングをかました直後、俺は「ぽよん」とした柔らかい何かに顔を埋める姿勢で硬直していた。

何でそうなったか、時間にして僅かだが、話せば長くなりそうだ……。

「ちよっ！ どこに顔押し付けてんのよっ！」

「ぐぬお！？」

……理不尽だ。

そして時間は少し遡る。

「だあれが、バカですってえ……？」

彼女の赤い瞳がユラリと閃き、飢えた猛獣が動き出そうとしている。

が、丸めた絨毯扱い状態だった為、身動きが取れずにジタバタするのみだった。

「気付いたか、リル立ってそうか？」

「あー大丈夫よ！立てるわよっ！もう降ろして にゅ？！」

なんていうか、とても憶えのあるやりとりだった、

ので、予め走り込むことができた。

ルーヴィックがリルドナをポイッと投げ捨てて、彼女の背中が地

面に叩きつけられる瞬間、なんとか俺のヘッドスライディングが間に合った。

いくら小柄で軽量の彼女でも、この不自然な体勢での捕獲は少しくいつかつた。

俺はそのまま勢い余って、彼女を抱きかかえたまま前のめりに沈み込む、

だから不可抗力なんだと思うんだ……俺の顔が彼女の身体に埋めてしまっても……。

ぼよん、と顔になんとも顔に柔かな感触、この感触は確か前にもあつた気がする。

……もしかして、これはリルドナのむ

「ちよっ！ どこに顔押し付けてんのよっ！」

「ぐぬお！？」

結論に辿りつく前に、彼女の逆平手打ちで叩き飛ばリバースハンティングされる。だから、皆に聞きたい。

これってラッキーなのか？アンラッキーなのか……。

明滅する視界の中、ロイがポンと俺の肩に手を置き、

「ムノー君、夜にはまだ早いよ？」

「……。どういう意味ですか……？」

俺は精一杯の平静を装いつつ、ジトリした視線を投げつけた。

どうして、この人はこうもいやらしい笑みを浮かべることが出来るんだろう……。

それにしても、だ。

目の前ではリルドナが手を差し出している、

「はいはい、自分で持つわよ」

不機嫌さを含みつつ、自分で荷物を持つと言つ意思表示だろう。

だが、しかし。なのだ。

「お前、全然っ力入ってないだろ？」

「う……」

そう、いくら手加減しているとはいえ、先程の逆平手打ちは弱々しいモノだった。

今までの彼女からすると、見る影も無く弱りきっていた。

それは外見相応の少女の細腕の力でしかない。

「ってことで、無理するな。大人しくしてろ」

「…わかったわ。でも」

リルドナは頭を掻きつつ答える、

「ハハシラズだけは自分で持つわ」

手を差し伸べたまま、そう言い放った。

リルドナが返却を求める『ハハシラズ』とはなんだろう？

言葉に出さずとも答えをくれるのがヤツのウリだった。

「太刀の銘だ、それだけ渡してやってくれ」

「と、このことが、変わった剣銘だな」

と言ったところで、俺には東方武器の命銘法則なんて知る由もなく、単純にそう告げただけだった。

「ありがとう、」

俺から太刀を受け取ると、ぎこちない動きで 本当に力が入っ

てないようだ その小さな背中に背負う。

その時俺には、何故かそれが…まるで出来の悪い子を背負う母親の姿に見えた。

だとすると、随分と大きな子供だ。なにせ本人の身長とほぼ同じ長さの大太刀なのだから。

「 にゆ?! 」

あ、コケた。

9 - 3 鍵と女性は優しく扱いました

鬱蒼と生い茂る森の中、木々達を押し退けるように聳え立つ、その建造物は風格と荘厳さを兼ね揃え、無人となり何百もの年月を経たにも関わらず、その姿を綻ばせること無く毅然として佇んでいた。そこへ至っているのもあろう、不自然なまでに綺麗に切り整えられた石段が続いている。

最後の最後まで拒絶するかのようになり、果てしなく蛇行し延々と入り口まで続いている。

「もう目と鼻の先まで来ているのだが…最後の試練といったところか」

「へたな畏仕掛けるより効果ありそうだぜ……」

ブルーノの呟きや、ゼルのぼやきもわかる。目的の建物を見せておきながら、『手間と時間』という最大の見えない防壁に阻まれ、気力を大きく削がれているからだ。

その石段の入り口近くに、小屋　　というには規模が大きすぎる、二階建ての建物が目に入った。

「なーんか、ここで一休みして行けと言わんばかりの配置だな」

「誘われてるみたいで、嫌な気がしないでも無いけどね」

ゼルとロイの言い分はなんとなくわかる、タイミングが良すぎるのだ。

夕日はすっかり雨雲に隠されてしまい、日没まであとどれ程か計りかねない。

決してそう長くないことだけは確かだ。

「一刻も早く、屋敷へとたどり着きたいところだが」

ポツポツと、冷たい滴が降り注ぎ始めた。

「いかなな、とうとう降ってきたか」

「うわ、マズイなっ」

むしろ、今までよくぞ保ってくれたというべきか。だが、遂に雨は降り出し始めた。

ロイの焦る理由は、彼の持つマスケットの火薬の所為だ。湿ってしまつては台無しになつてしまふからだ。それとは別に困る理由もあつた。

重症で運ばれているアビスも問題だ。いくら応急処置をしているとはいえ、雨に濡らしてしまうのは大変マズイ。

もう、長い石段を登る猶予などあるはずも無かつた。

「止むを得ん。その建物に避難しよう」

「あいよう！」

ブルーノの決定に誰も異論は無いようだった。誰だつてこの肌寒
い中、雨に打たれたいななんて思う者は居ないだろう。

簡素な柵に囲まれた敷地へと踏み入り、入り口を見つけ駆け寄る。
その入り口は、勝手口のようなモノだった。備え付けられた片開
きのドアは、建物の規模に反し、安っぽい造りをしていた。

「回り込めば、正規の入り口がありそうだけど、いいよね」

「贅沢言つてラねエ……って開かネえゾ」

アーカスがガチャガチャと乱暴にドアノブを捻るが、鍵が掛かっ
ているらしく開かないようだ。

「ちよっ！そんなに乱暴しても開かないでしょ！」

この女が珍しくまともなことを言った。

「クソっ、ちよつと離れて。鍵ごと吹き飛ばすよ！」

ロイが苛立つた様子で銃を構える。この中で一番雨に困る人間だ、
焦るのも無理は無いだろう。

でも思考が短絡過ぎないか？

「もつっ！金髪も何を野蛮なコトを！」

「ここがダメなら別の入り口でもいいじゃない！」

「だって、一刻を争うだよ？」

ボクの銃弾もそうだけど、アビスさんだって雨に打たせるわけにはいかないんだよ」

「そ、そうだけど……」

まあ、今のやりとりにイロイロ引っ掛る点はある。

なんでリルドナがこんなに必死にドアを破ることを拒むのかわからない。

だが、それよりも、なんだ。

「はいはい、ちよつとどいて下さいよ」

「ムノー君……？」

「…む、無能…アンタどうするの？」

いい加減、その名前は止めて欲しかったが、気にせず言い争う二人を押しつけてドアの前に立つ。

見るからに簡素なドアだ。そのドアノブの鍵穴を見ると、やはり安っぽい鍵だった。

これなら楽勝か。

俺は懐から愛用のピックを取り出した。

この程度の鍵ならツールは無くてもコレだけで充分だ。

「すぐ済みますので」

…カチャ、パチンッ！

「…ま、まさか」

雨の音の中に澄んだように響く金属音、それが意味するのは勿論

「開きましたので、」

呆然とする一同を置き去りにし、俺は中へと押し入った。

アンタら……俺の本業を何か忘れてないか？

一旦、全員にドアをくぐらせドアを閉め、「ここで少しお待ちを」と待機を促す。

俺はルーヴィックと共に奥へと足を踏み入れた。

「なあ、ルーク。何か潜んでそうか？」

「否定だ、まるで気配は無い」

「んじゃ、それをアテにして……行くか」

細い廊下が続くが奥は広い空間のようだった。

建物の中は薄暗いが、全く見えないわけじゃない。警戒して歩く分には全く支障が出ない。

採光を考慮された構造なのか、明かりを灯していないにも関わらず最低限の明度を保っていた。

「とは言っても、何か照明器具が無いとなあ……」

「そうだな、直に日も完全に落ちる」

何か無いものかと、周囲を見渡すが、歩くのに不自由しないと、物を探すのに不自由しないでは、格段レベルが違いすぎる。

つまり暗くて何かがあるかハッキリと判断が付かないのだ。

「畜生、暗いな……」

仕方なく、荷物から携帯型のカンテラを取り出そうとしたが、

「ふむ、ナイトビジョン暗視鏡器を使うか」

「なんだそりゃ？」

俺の問いには答えず、後方……つまり入ってきた入り口へ向かってワイヤーロープを投げる。

果たして、彼が手繰り寄せた『ソレ』は……。

「…あのさー、
あたしもやつぱり女の子だからさ、こーいう扱いはどうかと思っ
のよねえー」

「すまん、だが俺に言うな……」

彼女はワイヤーロープでグルグル巻きにされた生け捕りの猛獣の
姿のまま悪態をつく。いい加減、俺もリルドナも扱いが絶対酷すぎ
ないか？

「リル、何か灯りになる物は見当たらないか？」

「うーん……」

彼女は目を見開き周囲を見渡す。その瞳は、やはり薄っすらと妖
しく光っている。

「壁のやや高い位置に……等間隔に燭台……かな？いくつもあるわ
その言葉に壁を注視する。なるほど、確かに何か器具があるのが
わかった。

「あとは……天井のシャンデリア。そこも蠟燭で灯りを点けれ
そう」

「高さに、結構辛いかもなあ……」

「そうよねえ、もつと早い時間なら明るくて作業も出来」

ゴキユ！という何か嫌な音が響いた気がした。

「リル、こつちには何か無いか？」

「物凄く…痛いんだけど……えーっと…光晶球があるわね」

そこで聞き慣れない単語が出てきた、

「なんだそりゃ？」

「擬似的に光魔法照明ルミネーションを発動させる水晶球だな」

と、言われてもイマイチわからないが、要するに魔法の照明器具
なのだろう。

錬金術師であるスルーフに聞けば、詳しくわかるかも知れない。

「とりあえず、サツと点けちまおう」

そう言い、俺達は手分けして灯りを点けて回った。

「ほう、これは見事なものだな……」

ブルーノが感嘆の声を漏らす。

照明が灯され、その姿を明らかにしたフロアは、ランクの高い宿泊施設のロビーを連想させる応接間。

かなりの広さを持つ空間だった。

これだけの人数で押し入っても手狭さを微塵にも感じさせない。

中央にテーブルが複数置かれ、それに合わせてゆったりとしたソファが並んでいる。

突き当たり奥には暖炉があり、この地域特有の底冷えする夜も乗り越えられそうだった。

「火の番はボクに任せてよ」

ロイはそう言うと、手早く暖炉に火を灯す。

パチパチと音を立てる火に、思わず安堵の息が漏れてしまう。

まだ森に立ち入って一日目だというのに、すっかり長期間森に滞在したかのような錯覚すらあった。

森という人間にとって危険な場所から、屋内という安全地帯へと辿り着いた所為だろうか。

そして一息つくくと、今度は疑問が沸いてくる。

「ここは、なんの施設なんでしょうね」

俺の問いに、ブルーノは例の手帳を取り出して確認する仕種を見せた、

「どうやら、例の屋敷に勤めていた使用人の宿舎らしい。

勿論、無人の屋敷となる前の遙か大昔の話らしいが……」

「使用人の……にしては、随分と豪勢な造りですよね？」

「おそらくは、屋敷への急な来客の取次ぎや、

深夜の来訪者などが宿泊する機能も有していたのでは無いかな」

ブルーノの意見は執事としての視点だろうか。なんとなくそうと

思えなくもなかった。

「ま、なにせよ、俺達はそのお陰で、豪勢な気分を味わえるんだぜ？」

いつの間にか、ドッカーとソファアに腰掛けたゼルが無理やり結論づけた。

「それでは。俺はもう少し、他も調べてきますので」

俺はそう告げ、この一画よりもさらに奥へと続く廊下に向かった。それに従うかのように、ルーヴィックとリルドナも追従する。

「……お前達も着いてくるのかよ」

「護衛だ。なに、礼はいらん」

「お前に礼を述べることは一生来ないと思うぞ」

口先だけの毒を吐きつつ、頭の中で位置関係を確認するように記憶を走らせる。

照明を灯して回ったので、ある程度は把握出来ている。

この使用人宿舎に立ち入ったのは、南向き　つまり北側からだ。北側の勝手口らしき入り口から長い廊下を突っ切って、躍り出たのが先程のフロア。

向かって右手　つまり西側の一画が応接間、それと反対の東側は広い幅のままズドンと抜けた通路、というか多分そちらが正面玄関なのだろう。突き当りには両開きの大きな扉が見えた。

この建物は東側を向いた形になっていて、正面玄関から入った来訪者は、そのまま直ぐに応接間へと通される仕組みなわけだ。

今、調べようとしているのは、まだ未踏部分である南側の廊下。少し歩いて、右手に大きな給湯室があり、そこからさらに扉で隔てられた隣室は大きな厨房のようであった。

構造的に大きな『L』の字の空間で、角を曲がってその先のドアの向こうは、先程の廊下に繋がっていた。

どうやら、給湯室と合わせて大きな『コ』の字のスペースなようだ。

厨房から出て、左手が北側　自分たちがやってきた方向だに目をやると、先程給湯室へと入る為に関放ったドアが目に入った。

今、自分が出てきたドアと開け放ったドアの中間部分で壁が途切れている。

一見するとそちらへ通路が伸びているかのように錯覚したが、構造的にそれはありえない。

「……階段か」

廊下から一段奥へと沈み込むように階段が途中踊り場を経て直角に折れて二階へと伸びていた。

これらは、階段から廊下への出会い頭の衝突を防止する為の構造のようだ。

二階部分は、いくつもの個室が立ち並ぶ、完全に寝室を詰め込んだだけの空間になっていた。

部屋によって、鍵が掛かっていたり、いなかったり差はあったが、やはり人の気配も無ければ生活感を感じさせたりもなかった。

一階に降りて、再び南側に進路を取り廊下を進むが、すぐに廊下は終わる

そして突き当たりに、簡素な造りの片開きのドア。

近づくと微かに風の抜ける音が聴こえてくる、どうやら外に通じているようだ。

これも北側にあつた勝手口のような物だろうか。

施錠を解き、外を覗き見る、

「……なるほど井戸か」

試しにポンプを動かしてみると、ジャコンと確かな手応えと、汲み出される水流。

キッチリとその機能は健在のようだ。

「なあ、リルドナ」

「んっ？なに？」

俺は水を汲みながら、彼女に告げる。

「お茶淹れてくれよ、熱いのを頼むぜ」

その言葉に目を丸くするリルドナだったが、すぐにその表情を上機嫌なモノへと発展させていく。

鼻歌でも唄いだしそうな口調で彼女は答えた、

「任せなさいっ」

9 - 5 メイドな姉の涙はベスト・ドロップ

無人になつているとは言え、勝手に他所様の住居に踏み入った拳
句に、炊事場をこれまた勝手に利用するという図々しい行動だ。少
なからず抵抗はあつたが……リルドナが元気になるならそれでいい
かな？とか思い始めていた。

「これでいいのか？」

「うん、ありがと」

リルドナが水仕事をし易いように、炊事場を軽く片付け、満遍な
く拭き終えたところだった。

といつても、その必要も無いように思えるほど、元々片付いてい
て、清潔な状態だった。

ちなみにルーヴィックはここに居ない。先程の二階部分の個室を
詳しく調べに行っている。別に重要なことでは無かったが「俺には
手伝えそうに無い」と早々に別の作業へと避難してしまつたわけだ。
「これは……さすがに邪魔よねえ」

そう言いながら、羽織つていたケープを解き、綺麗に折りたたん
で椅子の上に置く。

ケープが取り去られ、リルドナの上着の全容が露わになる。

何気にいつもの黒服でケープを取つた姿を見るのは初めてだった。

「意外に……上着は東方のモノじゃないんだな」

「あははは、コレはコレで気に入ってるからねー」

彼女の着ている上着は、やはり黒を基調した配色だったが、造り
は至つて洋風の物だ。

大きな襟が目立つブレザー（？）で、あたかも水兵セーラーの制服のよう
にも思える。

他にも目立つ箇所はあつた、長袖なのだが、肩口が膨らんだ

いわゆるビシヨップスリーブというヤツだがアクセントが極端すぎる。で一旦、肘付近で細く絞り込まれて、再び大きく開いた袖口で展開されている。

その袖は、纏められておらず、「ヒラヒラ」という形容が似合う構造になっていた。…なので、ブレザーというより黒いドレスみたいにも思えた。

そんな中でも最も目を引いたのが、その膨らんだ肩口に縫い付けられた紋章。逆五角形型の盾の中に背中合わせの黒い鎌、その黒いシルエットの中を白い細長い線が十字に走っている。見覚えの無い紋章だった。

そして、肩口の膨らみ以上に、布地を強く押し上げている部分があった。ケープが取り去られたお陰で、小柄な身体に不相应な立派な胸を視認できた。その胸の所為で頭に栄養行っていないんじゃないかとか思えるほど……。

「なによ？」

見つめる視線を感じたのか、リルドナは怪訝な表情を向けてくる。

…が、俺は心中を吐露するような真似はしない、

「その服装自体が水仕事に向いてないんじゃないのか？」

「まー、そうなんだけどねー」

リルドナは口を動かしながら、荷物から白い布の様なものを取り出した。エプロンだった。それもフリル満載のフリフリなヤツ！

エプロンを見に着け、袖口を綺麗に折り込んでから、髪につけていたヘアピンでパチンと留める。

「これでいけるでしょ」

そう言い放ち、その場でクルリと回って自分の姿を俺に見せ付けてくる。

黒い長袖と長い裾のスカート（正確には袴だが）。それらプラス白いエプロンのこのスタイルは……

「グイ、グイクトリアンメイド……」

「はあ？」

正確には違うだろうが、どことなく、そう見えてしまったのは仕方ない。ホワイトブリムでも頭に乗っければさらにポイントはアツプしそうだ。

ロングドレスタイプのエプロンドレスとか、そういうことを語りだしてしまうと軽く四時間は掛かってしまいそうなので、ここでは触れないことにする。

「…まあ、一応あたしは一四の頃までハウスメイドだったけどね」「サラツと驚きの新事実を語るのかよっ!？」

「というか、この女いくつなんだよ……」

「どつちかというと、トウイーニー扱いだっただけだね」

「いや、普通に話を進めないでくれ、というかトウイーニーってなんだよ?」

俺の必死な抗議に、リルドナは「んっ?」と一旦停止をする。

「え?知ってるでしょ?」

ハウスメイドの仕事をこなしながら、キッチンメイドの仕事も手伝うヤツ」

「ちよつと待て、『そんなの普通知ってるでしょ』みたいなノリは待て」

「仕方ないわね、ちよつとメイドについて詳しく教えてあげるわ」

「だから待てと言っている!そんな固有結界全開な話題は待て!!」

こんな時、ヤツがいてくれたら「大丈夫か?ナンセンスだぞ」で決着するのだが、残念なことに今は居ない!

結局、話題を断ち切るのに短くない時間を要した。

「…ま、まあいいわ……」

まだ言い足りない納得のいかない顔だったが、諦めたようだった。リルドナはまだ何か文句を呟きながら、ポーチから脱脂綿を取り出し指を拭っている。

白い脱脂綿が薄いピンク色に染まっていくのが見てとれた。

「?それって……」

「あゝ、あたしは水溶性の使ってるからねー」

答えながら、こちらに自分の爪を示して見せた。

爪全体が均一の薄ピンクだったものが、自然な血色の伴った色へと戻っている。

「て、マニキュア塗ってたのかよ？」

「あれ？気付いてなかったの？」

気付くわけも無い、薄いピンクの自然に近い配色だし、何よりも他人の指爪をまじまじと見つめることも無い。

マニキュアを塗る目的は大きく分けて二種類、純粋にお洒落^{しゃれ}する為と、爪の保護の為らしい。

リルドナはおそらく後者、お洒落ならもつと派手な色を使ってるのだ。

「お前って、爪の手入れに気を遣う方なのか？」

「まあね、チョッピリオ洒落したい気持ちも混じってるけどね」

全ての指のマニキュアを拭き取ったのか、脱脂綿を処分し、汲んできた水をヤカンに移して火にかけ、

「炊事・洗濯、その他、水を使う仕事るときはちゃんと取ってからにしてるわよ？」

それなら塗らなきゃいいのに、と思うが、そこは男女の価値観の違いか。

そもそも水溶性って子供用じゃないのか？

普通は除去薬品とかで取り去るものだから、水仕事で剥がれないんじゃない？

そんな俺の心境を読み取ったのか、

「^{エナメルリムーバー}除光液^{エナメルリムーバー}つてさ、爪を変質させちゃうからキライなのよねえ」

そう言葉を漏らし、自分の荷物（俺が運んできたモノだ）をガサガサと漁り始めた。

中からは、次々と食器類が姿を現す。

「…おいおい…まさかとは思ってたが…」

作業テーブルに並んだのは、見事のまでに手入れされた茶器一式。

こんなモノを荷物に入れてたのかと、思わず呆れずにはいられない。

それらを手早く、次々と水で軽く濯いでいく、相変わらずの手際の良さだった。

「ねえ、アイツ等飲むと思う？」

リルドナが唐突に問いかけてくる、が手は動かしたままなのは流石だ。

何をだ？と聞き返したくなかったが、おそらく紅茶を飲むかという質問だと思ったので、そのまま答える。

「ティータイムの習慣があるか、わかんねえけど。」

とりあえずは、全員分用意する方がいいんじゃないか？

「うんうん、そうよねえ」

俺の答えで確証を得たかのように、次々と水洗いをしたカップとソーサーを配膳台車（いつの間にか引つ張り出してきていた）の上に並べていく。

その動きは流れるような動作で、俺と会話しながらにも関わらず、全く無駄が無い。

「なんていうか、見事なモンだな」

「んっ？そ、そう…かしら？」

ボンツ！と顔が茹で上がり、一瞬だが作業する手が鈍った気がした。

相変わらず褒められることに対して耐性が無いようだった。

それを振り払うかのように、再び問いかけてきた、

「ねえ、アンタ。カボチャ好き？」

「……それはなんの暗号だ？」

この女の質問はいつも唐突で咄嗟に返せないことが多いのだ。

「だから、好き？嫌い？」

どうやら問答無用で答えなければいけないらしい。

「好きって程じゃないけど、嫌いじゃないな、一応食べる」

「甘ったるいのが苦手ってわけでもないのね？」

「それは大丈夫だ」

彼女は荷物からいくつかの瓶を取り出し、見比べるように吟味している。

「うん、一度試して見たかったから、コレにするわ」

取り出した瓶の中身はおそらく茶葉だろうか、茶器を持ち歩いているのも驚いたが、複数の茶葉を用意していることも、やはり驚きだ。

それだけ紅茶に対して、思い入れと知識があることが裏付けられる。

「お前、紅茶にはかなりうるさそうだな」

「まあねえ〜」

答えるリルドナは上機嫌そのもので、次々と準備を進めていく。

「お茶なんて誰に習ったんだ？」

「え……」

その瞬間、ビクツと動きが止まった。

聞いてはマズイことだったんだろうか？

「……あの子よ……リウエンよ」

その答えに直感的に引つ掛った。

「ちよつと想像しにくいなあ……なんかりウエンがやると熱湯を引つ掛けられそうだ」

なので、ちよつと悪戯っぽく冗談を言ってみた、

が、そんな俺の思惑に反し、リルドナの顔はどんどん曇っていく。

「……そう、思っちゃうわよね……やっぱり」

彼女は自らの罪を懺悔するかのように呟く、

「でも、あの子ってね、すぐく頭が良くてなんでも理解し習得した。それをあたしの頭でも理解できるように噛み砕いてから教えてくれたのよ」

彼女はとても寂しげに言葉を切り、「それにね」と次句をつなぐ。「昔は……とっても手先が器用だったのよ……運動神経は鈍かった

けどね」

力なく、あはははと自虐めいた笑いを漏らす。

「て、ことは元々リウエンは自分で紅茶を淹れていたのか？」

「そうよ。ホント上手に淹れてたんだから、あたしはそれを真似してるだけよ」

「あたしは、あの子の趣味を…特技を…盗ったのよ」

リルドナはもう推理小説の暴かれた真犯人のように、完全に観念した告白をする。

それは破滅の末路を辿る姿に思えて、俺は居ても立ってもいられなくなり、口を挟む。

「おいおい、お前の所為じゃないだろう!？」

「あ、あたしの……所為せいなんだあ……」

「あたしがドジ踏んで…『あの事故』が起きて……あの子はあんな身体になって……」

ある程度、推測は出来ていた内容だったが、本人から直接もたらされた告白は少なからず俺にもショックを与えた。

俺ですら、こんな感情を抱くのだから、当人にとっては……。

話の運び方をしくじったことを激しく悔いた。

「あんまり自分を責めるモンじゃないぞ？」

「だって、だって……」

「そんなの、きつとりウエンも望んでないと思う」

これだけは絶対に言える、姉に自責の念で押し潰されて欲しいと願うわけが無い。

わたしの姉の淹れるお茶も美味しいですから、是非！

あれはどんな気持ちで言った言葉なんだろう。

少なくとも、あの言葉には嘘が無い。

「少なくともリウエンは……。」

お前のことを……姉の淹れるお茶は美味いと、心から自慢していたぞ」

たとえ、身体の不自由が姉の過失によるものでも、自分の代わりにお茶を淹れてくれる姉を、必死に自分の味を再現しようと努力した姉を……きつと心から感謝しているに違いなかった。

そんな俺の意見に何かを感じ取ったのか、リルドナは放心したかのように目を丸くしている。

「あ、あれ？」

リルドナが急に素っ頓狂な声を上げる、そんな彼女の頬を伝うのは……。

「……あちゃー……。悪いんだけど、ちょっとあっち向いててくれないかしら？」

リルドナは背を向け、天を仰ぐような姿で硬直している、作業する手は完全に止まっていた。

俺からは彼女がどんな顔しているかはもう見えない……が、

「ここから先は、ベスト・ドロップを狙う秘伝の作法だからね、門外不出なのよう？」

……嘘が下手だな、と正直思った。

「それよりも先にカップ運んでおいてやるよ」

俺は人数分のカップが乗った配膳台車を押して、そのまま廊下へと向かう。

「えっ！？ちょ、ちょっと！」

リルドナが慌てた声を上げたが、振り切るように廊下へ出た。

9 - 6 妹は天才棋士です

ボタン、とドアを閉め、俺は大きいため息をついた。
いつから俺はこんなに女を泣かせるヤツになったんだ？

思わず逃げて来てしまったが、このカップどうしたものか。

後先考えずに動いてしまった自分に、思わずため息が漏れた、

「大丈夫か？ナンセンスだぞ」

その声に振り向くと、階段室の壁にもたれ掛かったヤツの姿があった。

「先にカップだけで持ち出してどうする？

リルに熱湯の入ったポットを素手で運ばせる気か？」

「……だよなあ、また意地になってやせ我慢しそうだ」

リルドナの用意していたポットは銀製品だった、相当熱いに決まってる。

「冒険者として言わせて貰えば、その判断は冷静さを欠いている」

「ちっ、悪かったな」

「だが、」

無表情の鉄仮面が、嬉しそうに自然な笑いを浮かべたように思えた。

「兄としては、礼を言いたい。 ありがとう」

彼は軽く目を閉じ、頭を小さく動かした、会釈か敬礼かどちらかはわからない。

「俺よりあやし方が上手い、そういう訓練でも受けたか？」

「よせよ、俺にも妹がいただけだ」

自分で発したこの言葉で、ようやく気付いた。あの姉妹に対する感情の正体が……。

「……そうか、妹がいたんだな」

ルーヴィックはそう呟きながら歯切れの悪い言葉をつなぐ、

「それはそうと、二階の各部屋なんだが……」

「無理に話題を変えようとしてくれなくても大丈夫だ。さすがに三年前の話だし、ある程度心の傷は癒えてる」

なんだかんだで、この男は気の利くヤツなのだ。

「……事故か？」

「いや、病気さ。」

元々身体が丈夫な方でも無かったし、デイケイ病っていう不治の病にかかっちまった。

俺にしてやれることって言えば、本を読んでやったり、カードゲームやボードゲームで遊んでやったり……そんなことくらいしかしてやれなかつたな」

「……もしかしてチェスもやってたのか？」

「正解。女の子の遊びにしては意外だったけど、一番熱を入れてたのがチェスだったな。最初は俺が教えてやって、一応なゲームの形を取るだけだったんだが……子供って凄いよな、どんどん上達していつていつの間にか全く勝てなくなつたよ」

「ふむ、面目を保つのも一苦労だな」

「全くだ……で、俺相手だけじゃ満足できないのか、読んでやった推理小説の影響か……瓶に手紙を封入したメッセージボトルを海に流したんだ。『わたしとチェスしてください』てな具合の内容でな……流したのは俺だけだ」

「……なに……？」

ルーヴィックがピクリと反応する。

「しばらくして、文通相手が出来たみたいなんだ、それも郵便チェスをしてくれる親切な相手だ。なんか相当強いヤツらしくて、毎回ウンウン唸りながら次の手を手紙に添えていたな、棋譜に添って駒を並べているのを見たが、あれは」

「待ってくれ、少し確認するが……お前はリルガミン出身じゃなか

ったのか？」

「はあ？意味がわかんねえよ、一言もリルガミン出身とか言っていぞ？確かに登録したギルドはソコだけど」

「なんでいきなり出身のことを話題に出すんだ？」

「まさかとは思うが……ゼピック村ではないか？」

「そうだ……けど、なんでわかったんだ？」

ゼピック村は城塞都市リルガミンの北方に位置する小さな農村だ。

「メッセージボトルはラム酒の空き瓶だったのではないか？」

「そ、そうだったと思う」

「なんでルーヴィックにここまでわかるんだ？」

「お前の妹の名前は……『フェリア』であっているな？」

「……お前、なんでそこまで知ってるんだ？」

俺の問いには答えず、一冊の古びたノートを突き出してくる。

これは……例の棋譜帳？

ルーヴィックによつて開かれたページには、やはり対局の記録棋譜が記されていた。

例によつて整いすぎた無機質なタイプライターで印字されたような文字が並ぶ。

かなり昔の対局のようだ……一手ごとに記された日付は四年前……から三年前にまで及んでいる。つまり長期の対局……郵便チェスなわけだ。

相変わらずヤツは相手に先手を譲り黒色なのだろう、『Rook』と記されている。

だが、それよりも目を引いたのが先手……白色の名前、

Lord Herijar

一瞬、我が目を疑った……『フェリア…卿』……！？

「お、おい……お前の対局相手って……」

「……フェリア…エクレールという御婦人と認識していた」

間違いない、ルーヴィックと対局していたのは……。

「正直、驚いた。」

まさか、お前の妹だったとはな……世間も狭い物だ」

「ていうかなんだよ、フェリア『卿』って、勝手に人の妹に爵位をつけるな」

こいつの敬意の示す基準は……まさか棋力成績レートインゲじゃないだろうな

……。

「連絡が着かなくなって、もしやとは思ったが……。

まさかお亡くなりなられたとは……実に惜しい棋士を亡くしたものだ」

「いや、故人を惜しむ気持ちは兄としてありがたいが……持ち上げすぎじゃないか？」

「……それで最期は看取ってやれたのか？」

「いや、病状が末期まで来ると、俺は隔離されて全く逢えなくなっ
た」

妹の患ったデイケイ病は、その名の通り身体が生きたまデイケイま腐敗する病だ。

進行の度合いが大きくなると、腐敗する肉体が、体内に蟲が這い
回る幻覚を引き起こし、身体中を掻き巻く自損行動へと発展する。

主に血管やリンパ管が集中する首などが顕著だ。

果たして、そんな姿を見せるべきでないと判断した母親は、俺は
当然、父親ですら面会を謝絶した。

それは正しい判断だったのだろう、本人にとってもそんな姿を家
族とは言え他人に見られたい筈も無い。

「……酷かったのか……？」

「直接は見てないから、ハッキリと言えないが……日に日に疲弊し
ていく母親を見る限りでは……相当酷かったと思う」

「当時の俺は、そんな母親の配慮なんて理解出来てなかったから、
面会謝絶に散々文句を言ったもんさ」

「何かしてやりたかった俺は、街まで出て、図書館で色々調べたんだが……収穫は『絶望』『諦念』って感情くらい。」

所詮、たかが一六の子供が調べて解決するほど甘くないよな、辛うじて手にした情報は……伝説の霊薬『エリクシール』があれば、もしかすると……。

不確かなものに不確かな希望を乗せるといふ甘すぎる選択肢だよな」

「いや、霊薬の名前が出てくるだけでも大した調査内容だ」

「まあ、名前がわかっただけじゃ、どうすることも出来なかった。」

どこにあるかもわからない、わかったとしても探しに行くことさえ出来ない、まだ高等部に進学したばかりの学生だったしな……だから

「……冒険者になったのか」

「そうだ。と言いたいところだが……実際に冒険者になったのは、フェリアが死んでからだ……完全に本末転倒だろ？」

全てが終わってからだ、遅すぎるだろう。

「それでも、俺は妹の墓前に……フェリアに霊薬を渡してやりたいんだ。」

他人が聞いたなら、自己満足以外の何物でもないだろうけどな、笑ってもいいぜ？」

「俺にそんな高等な機能は無い。」

が、代わりにそれを笑う者を斬り伏せる機能くらいはある」

「物騒なこと言うなよ」

二人してニヤリと人の悪い笑みを向け合うのだった。

「あのー、台車欲しいんだけど……」

そこに、申し訳なさそうな顔を浮かべたりルドナが、給湯室から顔出していることに気付くのに、少しばかり時間を要した……。

無骨な男達が無言で居座る応接間に、ガラガラと音を響かせながら小さな人影が台車を押してくる。

その姿を認めた一同は、思わず感嘆の声を漏らしたようだった。

「皆様、お待たせしました」

そこには、丁寧なお辞儀をし、優雅な立ち振る舞いで紅茶を注いでいくメイドの姿があった。

本来の正式な衣装とは細部が違ってはいるが、その第一印象は間違いなく『メイド』そのものだ。

「えらく化けたモンだな……」

「何が……でしょうか……？」

上品な笑みを崩さずに、一瞬だけ射る様な視線が突き刺さった。完全にお仕事モードらしく、その口調はいつものソレじゃない。なんていうか……リウエンに似ている。

「おいおい、ねーちゃんだよなあ？」

「はい、私でございますよ？」

つつい確認してしまつたゼルに対し、にっこりと微笑んで返す。

今、『私』って言ったぞ！？」

化けすぎだ！詐欺だ！

「……無能様、今……とても失礼なお考えをしておられませんでしたか？」

「ぐあ！？」

ダメだ、これはキツすぎる……こんな攻め手は反則だ……。そしてさり気無く、『無能』という呼び名は変わっていない。

「リ、リルちゃん!？」

そこにロイまでもが慌てた声を上げる、

「はい、なんでしょう?」

それを尚も優雅な対応で返すリルドナだった……が、

「袖口とかの細部は仕方ないとして……カチューシャが足りないよ!？」

「はあ?何言ってるんですか?」

ちよっぴり素の返しをしちゃっている……案外、薄っぺらな化けの皮なのかもしれない。

などと一悶着あったが、次々と紅茶が振舞われていく。

俺のカップにも紅茶が注がれ、湯気とともに甘い香りが鼻についた。

「この香りって……カボチャか?」

「ご名答です。カボチャの甘味を活かしたパンプキンティーですので、一度味見をなさってから砂糖を入れることをお勧めしますよ?」

……なるほど、先程のカボチャの問い掛けはコレのためだったのか。

周囲から、「珍しいな」とか「自然な甘味だ」など口々に感嘆と賞賛の言葉が上がる。

「結構な手前だ。お嬢さんどこかで勤めていたのかね?」

「……………グロリア家にございます。以前、そちらで」

……ブルーノの問い掛けへの返事に妙な間があった。元勤めていた家の名前を出すのに、何か躊躇いがあるように思える。

ブルーノは、それに気付いてか、気付かずか、何事もなかったように話を進める。

「ふむ、あの錬金術師の名門グロリア家か。何故、冒険者に転進したかはわからぬが……仕事に困ったら当家へ来ると良い」

「私如きに勿体無いお言葉です」

リルドナは深々と頭を下げ、一步下がる。これは暗に『遠慮します』を語っている。

その後も、リルドナは次々と別の人間に捕まり、紅茶の説明から彼女の経歴まで色々と質問攻めに遭っていた。大した人気っぷりである。

と言つても、リルドナを捕まえていない人間も会話は弾んでいる。その内容は専ら昼間の戦闘の武勇伝だ。

「オメエの剣捌き、ありや先住民の荣誉戦士のモノか？」

「ホウ、良く知つてイルな、」

「いや、実戦レベルの技を見るのは初めてだ、ありやー大したモンだ」

「いやいや、俺もすげエモン見せて貰つたぜ、ナあ旦那ア？」

アーカスが問いかける視線の先には……

「ふむ、お褒め預かるのは嬉しいが……このザマではね？」

ソファアーに深くもたれ掛かり若干弱々しく答えるローブの男アビスだった。

どうやら意識が戻つたようだ。まだ顔色は優れないが意識はハッキリしているらしく、アーカスやゼル達と談笑を交わしている。

「話に聞けば、スルーフ殿の法具も実に面白いと思うのだが」

アビスは気を失っていた為、例の魔法銃を見ていない。それでも話だけでも判断が付くのだろう。熱心に法具について語っている。

ここに居る人間は、云わばその道のプロだ。戦闘に関して言えばド素人の俺は、どうしても話から孤立してしまう。それは仕方のないことだ、いざ戦闘になれば、俺は役に立てないのだから。

「いやいや、そんな魔法銃も、あのお嬢さんにアツサリ破壊されてしまったがね？」

「あ、あははは……その説は失礼しました」

リルドナはバツが悪そうに、乾いた笑いを浮かべる、例によって表情は目をクリクリと泳がせている。

「言い方が悪かったね？率直に君の魔力が凄いと賞賛しているのだがね？」

「お褒めに預かり感謝します。」

ですが、あの場面では『彼』の回復魔法と機転を評価すべきではないでしょうか？」

「え？」

リルドナが掌で指し示す人物……それは俺だ。

「だな、ムノーのアンチャンの回復魔法が無きゃ死人が出てたかな」

「うむ、要所随所でムノー君が気付いてくれたことも大きいな」

「あと、ムノー君の開錠技術も大したモンだよな」

「うむ、見事だ。……ムノー？……まあいい」

「ナイスだぜ、ムノーのあんちゃん」

……褒めてもらえるのは正直嬉しい。のだが

何故、全員揃いも揃って俺の名前が『無能』^{ムノー}で確定しているんだ！？

違和感よ、ここへ来いっ、そして今すぐ仕事をしろ！！

俺はこみかみに血管が浮き上がるのを抑えるのに必死にならざるを得なかった。

この場で無差別殺人事件が起きたら、きっと犯人は俺だ。

しばらくは話題の中心に振られた所為か、次々と言葉でもみくちやにされていたが、ようやく離脱することに成功した。

ふと視線をリルドナに向けると、まだまだ彼女は解放されてそうになかった。

「あの娘ってパーラーメイドだったのかな」

不意にロイが呟いた。

「いえ、ハウスメイドだと言っていました。……パーラーって何ですか？」

「んっ？接客担当のメイドさんだね。まあ、アレは彼女の才能のかな？」

「何の才能……ですか？」

「気付いてるかな？あの娘っていとも容易く人の輪に入れちゃってるんだよ」

言われて見ればそうだった。

ほんの数時間前までは、全く近寄れそうにも無い人間ばかりだ。

俺自身も、普通に会話できるようになっている、それはひとえに彼女の功績ではないだろうか。

「あの娘って、ホント色々な意味で凄いやね」

「ですよ、イチイチ驚いてたらキリが無いんですが……」

「まあ、頑張りなよ？彼女盗られない様にね」

「

はい？」

「ムノー君、メイドが彼女だなんて経験値高いよ？」

こ、この人はああ……！！

ニヤリと笑うその顔に、何か黒いモノを感じずにはいられなかった。

「と、いうわけで、鍵の掛かってない部屋はそれだけあった」
紅茶を振舞われ、小柄なメイドへの質問攻めにも一段落(?)着いた頃、

ルーヴィックが先程、調べてきた二階部分について説明を始めた。鍵の掛かっていない部屋は軽く二〇はあり、無理に鍵を開けて回らなくとも、一人一部屋以上のお釣りは来そうだった。

「ご丁寧にもルーヴィックは見取り図まで書いて、示してくれている。」

やはり機械で描かれたような整いすぎた図面になっていた。

「空いているのは、ほとんど下級使用人の部屋だな、三丁四人の相部屋なので意外と広い筈だ」

「て、ことは鍵が掛かっている部屋の中には上級使用人の部屋もあるのか？」

別に鍵を開けてどうこうするわけでは無いが、つつい訊いてしまった。

その問いにはルーヴィックではなくブルーノが答えてくれた。

「ここには無いかも知れん。」

一人部屋を許された特権階級なら、屋敷本館に部屋を貰っている筈だ」

「そういうモンなんですか」

こついつた使用人事情に関しては俺はサツパリだった。

皆、自分の荷物を持ち、空いた部屋へと散っていく。

別に暖の取れる応接間でも、夜を明かすことは出来る。だが、やはり個室で心身ともに休息したくなるのが人間というモノなのだ。

俺も明日からの本格的な探索に備え、色々な準備がしたかった所
為もあり、一人で休もうと思っていたが……。

ヤツに捕まった。

「なあ、一人で休ませて欲しいんだが……」

「なに、問題ない」

「いや、いつも言ってるが、問題があるのは俺の方で……ちょっと
待て、なんだその四角い物体は、いや、確かにある程度予想はして
たが 普通にチェス盤を持ってくるな。おい、待て！だからなん
で俺と同じ部屋に入ろうとする？」

というわけで、ルーヴィックの有無を言わさぬ突撃(?)で、俺
は結局捕まった。

その部屋は四人部屋らしく、簡素なベッドが四つ並んでいた。

ベッドはあるが、毛布の類は無く、すっかり人が引き払ったこと
を物語っていた。

もう、そうすることが当たり前のようにお互い駒を並べ始める。

無視することも出来たが、それに応じている辺り、俺もやはり好
きなのだろう。

「あのフェアア卿の兄ならば、まだまだ伸びるに違いない」

「三年前の時点で、とっくに大差を着けられてたんだぜ？」

瞬く間に駒を並べ終え、ゲームの準備は整った、やはり俺が白で、
ヤツが黒。

初手はあまり考えない。

というか定番になっているので序盤はお手本の通りに指し合うこ
とになる。

俺もそれに違わず、中央に歩兵センターを展開しようとして手を伸ばした時、

コン、コン、ガチャ。

「失礼します。」

無能様、お口直しにカルチェラタン等は如何でしょうか？」

「……とりあえず、ツツコむぞ？」

いくら猫を被っていても、リルドナはやはり、リルドナだった。

「有無言わず、ドアを開けるんじゃないかね……あと、そのキャラはもう止める。コンデンスミルクを一缶一缶飲みするような気分になれるっ……！」

「くすくすくすくす……お気に召しませんか？」

まあ、コンデンスミルク一缶飲みとか、あたしなら普通にイケるけど？」

「お前は胸焼けせんのか……」

自分で言っておいて、すでに気分が悪くなった俺がいる……。

そこに先程のパンプキンティーとは別種のすっきりとした甘い香りが鼻についた。

「ん……？この香りはなんだろう？」

勿論、香りの発生源はティーポットからだ。

「ラベンダーじゃないかな？」

声の方に目を向ければ、廊下からこちらを覗き込むロイとゼルの姿があった。

二人とも既に防具を外して身軽になっている。

「正解よ。金髪もなかなか詳しいわね」

「ふふふふ、この街 いや、この土地というか

この国の人間は皆、大小の差はあっても紅茶にはうるさいよ？」

「それも、そうねえ。まあ、あたしも生まれは獅子の王国だけどね」

驚きはしなかった、随分と綺麗な英国語クイーンズで喋っているのだ、不思議じゃない。

……外見上はどう見ても東洋人寄りだけど。（除：赤瞳）

「で、お二人は何をしに？」

そもそも、なんでこの二人がこの部屋に……？

「あたしが呼んだの」

「俺が呼んだ」

ほぼ同時だった。

「お前ら、どっちもかよお!？」

「折角だから、別のお茶も飲んで欲しくってさ」

「折角なので、一局付き合っつて貰おうと思っつてな」

軽く眩暈がした……。

「旅行に来てんじゃねえんだぞお!？」

ここに来て、俺のツツコミジエネレータは最大出力だった。

「まあまあ、折角の紅茶が冷めちゃうよ?」

ロイに諭されて、渋々と矛を収められた。

いくらここが四人部屋だったとは言え、五人入るには少々手狭だった。ゼルとロイが大柄というのもやはり大きい。

なので、ドアを閉じずに開け放たれたままになっている。不幸中の幸いか、この部屋は階段から最も離れた通路の突き当たりに位置する為、部屋の前を人が通ることが無いのが救いだった。

「まあまあ、お客様どうぞどうぞ」

「ええいやめい!」

カップに注がれた紅茶は濃いオレンジ色のすっきりとした甘い香りが発ち込める物だった。

ストレートとフレバリーの違いもよくわかっていない俺には未知の飲み物だ。

ただ、ラベンダーの香りが心地よいアクセントになって、それだけでも満足だった。

「これは、アイスティーにしてもいいのよねえ」

「うーん、オレはどっちかてーと、モーニングブレンドがいいな」

「はあ?なによ、ミルクティー派なの?」

わ、わからない……!」

ゼルですら、普通に会話が出来ているが……俺にはそんな知識は無い。

ただ香りとお茶の渋みが味わえればそれでいいとさえ思っている。などと、言っつてしまえば、間違いなくブーイングの集中砲火

を浴びてしまいそうだ。

「こ、紅茶も奥が深いんだな……」

「まあね、その深みに沈みこんでいくのが醍醐味なんだけど」

そこでリルドナは言葉を切り、何かを思い出したように言葉を続ける、

「そういえば、アンタにお願いがあつたんだつたわ」

「ふむ？」

リルドナは開け放たれたドアの、さらに向こう側を指差し、

「あっちのドアの鍵開けて貰えないかしら？」

今俺達がいる部屋側はほぼ鍵が掛かつていなかったが、廊下を挟んで向かい側はことごとく施錠されていたのだ。

ドアの配置された間隔や、装飾などを見比べても、明らかに向こう側の方がランクが上に思える造りだ。

「……？どうしても、そこがいいのか？」

「うん、ワガママ承知でごめんね」

「ま、腕鳴らしついでに一丁開けてやるよ」

俺は紅茶を一気に飲み干すと席を立った。

「……ふむ……おや？」

ドアを見るなり、すぐに違和感に気付いた。

そのドアと、その隣のドアだけ妙に真新しいのだ。鍵も随分と嚴重なモノに変わっている。

「む、難しそう？」

俺の表情を読み違えたのか、ベクトルの違う心配を飛ばしてくる。

「いや、大丈夫だ。玄関よりかは複雑だけど……いけるぞ」

「そ、そう？凄いわね……」

俺は愛用のピックを取り出すと、カチャカチャと鍵穴の中を探る。多少複雑そうだが、やはりツール無しでも充分に開錠出来そうだった。

リルドナが固唾を飲んで見守る中、パチン！という澄んだ音が静

かに響いた。

「……………いけたの？」

「おう、バツチリ」

だぞ。と俺が言う終わるや否や、

ガチャ！ボタン！とリルドナが猛スピードで部屋の中に飛び込み、速攻でドアを閉めてしまった。

ちやつかりと俺が運んでやっていた彼女の荷物を忘れることなく持ち込んでいる。

「おいおい、何慌ててんだよ」

「ご、ごめんね、つ、ついね」

ドア越しに聞こえる声は明らかに動揺している、顔こそは見えないが、きつと見えるなら例の『クリクリと目を泳がせた顔』に違いないと思った。

余程、中に執着があったのか、中を見られたくないのか、それはわからないが、俺には少し見えてしまった。

その部屋の中には、しっかりと家具や調度品が並び、淡いピンクの壁紙が張られていた。明らかな生活感がそこにはあった。

おいおい、まさか……………なあ？

「んじゃ、俺は戻ってるからな」

「う、うんー。またあとでそっちにいくわー」

どうも、この女は嘘や隠し事が下手なようだ。叩けば「ぶわっ！」と埃の塊がでてきそうだ。

だからといって、下手に追い詰めて泣かれたら適わないので、気付かないフリをすることにした。

「チエックメイトだ」

「ぐああああ！」

部屋へ戻ると、丁度ゼルがルーヴィックに詰まれたところだった。

……………初心者狩りしてんじゃねえよ……………。

「戻ったか、

この男は槍の扱いは上手いくせに騎士^{ナイト}の扱いがなっていないな
「お前、サラリと酷いこと言ってるじゃないか？」

ゼルが嘔み付きそうな顔でルーヴィックを睨みつけ、さすがの口
も苦笑いを浮かべている。

俺もよくこんなヤツと付き合ってるモノだ、感心してしまう。

「んじゃ、次はボクがお相手しようかな？」

「ふむ、ではお願いする」

今度はロイと対局を始めてしまった。

することが無く、手持ち無沙汰な俺は仕方なく荷物整理をするこ
とにした。

明日からの探索を考慮すれば、やはりツールのチェックは怠れな
い。

リュックの口を開くと、中に予備のボルトケースや携帯型のカン
テラ、それに開錠ツール一式、あとは白い布に包まれた四角い物体

……。

おや？なんだこれは……。

リュックの一番奥深くにそれはある。

見覚えはないし、入れた覚えも無い。

「ただいまー、うわっ金髪までチエスやってる！」

その賑やかさでリルドナが戻ってきたことが見なくてもわかる。

つまり、俺はそちらを見ていないということだ。

俺の注意は、リュックから取り出された白い布の包みに集中して
いる。

「あれ？何ソレ、お弁当箱？」

「お前は食うことしか先に連想できんのか」

そこで気付いた、リルドナがエプロンを外し黒服だけに戻ってい
ることに。

屋内にいる為か、ケープを改めて身に着けていない。

「おや、リルちゃん。メイドさんは終わりなのかな？」

「はあ？何言ってるの？」

ロイの表情は心底残念そうに見えた、わかり易い人だ。

しかし、銃兵の眼は死んでいなかった（？）

「君もツヴァイ・クロイツ出身なんだね？」

「え？」

「それ、そうれんじゅうじ双鎌十字エンブレムの紋章でしょ？」

ロイが指し示す『それ』とは、リルドナの膨らんだ袖に張り付いた例の紋章だ。

その指摘にリルドナは頭を掻きつつ、

「コレってそんなに有名だったかしら……？」

そんなことよりも、今かなり違和感を覚えた気がした。

「ちよつと待て、誰がツヴァイ・クロイツ出身だって……？」

「あたしと、リウエンだけど？」

「ぐあ！？乙女チックに小首傾げて『何言ってるの？』ていう顔するなっ！おかしいだろ？お前魔法使えないんじゃないのか？」

「失礼ね、少しくらい使えるわよ」

いや、それよりも、この女の頭で魔法学校が卒業出来るとは思えない！

何故か認めたくなかった、だってこの女は

「リル、エインは『何故、単細胞バカのお前に卒業できたんだ？』と言いたいらしい」

「おい！？少しはオブラートに包め！いや包んでください！お願いだからっ！」

つくづくコイツは容赦が無い……。

「ま、まあ……成績は『良くはなかった』わ……」

リルドナは眼を泳がせながら、そう答える。

率直に『悪かった』と言えない辺りが最後のプライドだろうか。

「よく、卒業できたな……」

「まあ、リウエンの確信犯ゴット・ハンドの改竄があつたからねえ」

そのネーミングは……絶対、穏やかな事情じゃなさそうだ。

「その上着は一科生の制服なのかな？」

「ほんつと、よく見てるわね。そうよ、上だけなんだけどね」

「んじゃ、よく見てるついでに……八八……いや、違うな……九〇のFかな」

「っ！」

ロイの言葉にリルドナはビクウ！と激しく後退り、胸を庇うようなポーズで、顔を真っ赤にしながらジトリとロイを睨みつけている。

「き、金髪……アンタあ……」

「ふふふふ、銃兵の測量眼を甘く見ちゃダメだよ？」

「やらしく綻んだ口元で白い歯がキラリと光った気がした。」

「オメエは昔からそんなんばつかだな。オイ、いい加減訴えられるぜ？」

よくわからないが、どうやらロイの一本勝ちのようだ。

今の騒動で忘れそうだったが、謎の白い布の包みが再び気に掛かった。

かなり大きなモノだ。形容するなら『巨大な長方形の分厚い板のよう』だ。

布の手触りも独特だった。麻とも木綿とも違つ。

「それ……もしかして絹シルクじゃない？」

「絹なんて触ったこと無いからわからんが……」

どっちにしても絹なんてお高いモノ俺が持っているはずも無い。

つまり、これは俺の持ち物ではないということだ。

「アンタのじゃ……ないの？」

俺は無言で頷き、意を決して白い布の包みを解いていく、果たして、その中から姿を現したのは

「う、嘘……」

リルドナが信じられないのも無理も無い。俺だって信じられないんだ。

白い表紙の独特の装飾を施された、巨大な一冊の本

グリモワール
魔導書だ

つ
た。

9 - 9 リウエンが一晚でやってくれました

今、俺の手の中に魔導書がある。

記憶が確かならば、これはリウエンの所有物の筈だ。

それを裏付けるようなリルドナの反応もあり、記憶違いでないことに自信を持てる。

「なんで……アンタがコレを持つてるのよっ！」

「お、俺のほうが見たい、大体、俺の鞆に誰が、いつ入れるんだよ」

まるで憶えが無い、俺が昨晩に中身をチェックした時には、こんな物が入っていなかった。

それから大つぶらにリュックの口を開けることもしていない、誰かの手に渡すようなこともして……

いや、あった。

确实にある。そして、そこしかあり得ない。

「リウエンか……あれは嘘泣きだったのか」

早朝にリウエンを言葉で泣かせてしまった俺は逃げるように、小屋から出た。

その時、俺は慌てていた所為で、丸々荷物を置き忘れたんだ。

そう、そこからルーヴィックに荷物を取りに行って貰うまでの間、俺の荷物はリウエンの目の前に 彼女しかその場にはいない状態で、確実に彼女の手の内にあっただ。

「ていうか、お前もグルだろ？」

「さて？なんのことやら」

そして、この手のことにこの男が気付かないわけがない……絶対グルだ。

何を企んでいるか、まるで見当もつかないが……。

「ちよつと、アンタ。ソレってドライヴ状態じゃないの?」

「んあ?なんだそりゃ?」

よくはわからないが、微かに本が光っているように見える。

不思議な青白い淡い光だ。

「ちよつと貸してっ!」

リルドナは俺から本を引っ手繰ると、勢い良く本を開く。

そう、開いたんだが……なんていうかな、違うんだ。

普通、本は横に開くが、リルドナは縦に開いている。

まだ、わかり難いな。喻えるなら……フタの空いた宝箱だ、

パカッと開いたあの感じに似ている。

とにかく、そんな奇妙な開け方をして、さらに本のページに当たる部分をなにやら指で素早くパンチしているようだった。

「……。こりゃ凄いわよ?」

「悪い、全然着いていけそうに無い。何がどうなってるんだ?」

彼女は自分を落ち着けるように軽く深呼吸をし、回答を告げる口を開いた。

「……いい? グリモワール 魔導書は所有者に合わせて無限にカスタマイズできるのが最大のウリなの、その余りある リソムメモリー 魔法領域に必要な術式や方陣を書き足していけば、反則この上ないチートアイテムになり得るのよ」

「……で、その内容が凄いつてことか?」

「うん、あの子はそんなのほぼ必要ないから、白紙同然だったんだけど」

そう言いながら、リルドナの視線は本のページを足早に駆けて行く。

「これは、アンタのために構築した魔法補助システムだわ。あの子には全く必要の無いモノが満載なのよ」

「ど、どんなのがあるんだ?」

本のページから視線を外さないまま、眉を寄せて「むむむ」と唸る。

「ヒールの魔法ランク：プラス一五レベル、ヒール回復量：プラス八〇〇パーセント……」

「うお！？モロに心当たりのある内容だ……！」

「消費魔法力緩和：七五パーセント、詠唱成功率：百パーセント固定、耐非物理ダメージ減少：九〇パーセントカット……あとは危機マリス感知サイチに自動警告かな」

もう笑うしかなかった、ぶっ飛びすぎた超絶チート具合だ。

今日生きてこられたのは、モロにリウエンのお陰じゃないか……。

「なんか夢から醒めた気分だぜ……」

「まあ、アンタには贅沢すぎる補助効果よね……あ、強制徴収ゴウセイテイシュまで付いてるわ」

「なんだそりゃ？急にヘンなネーミングだったけど……」

「魔法力が足りなくても、わざと自己制御セルフレギュレートを働かせずに、無理やり生命力マナから徴収して魔法を発動させちゃうの」

それも心当たりのある仕様だ……。

「おいおい、それってアンチャンがぶっ倒れそうになった原因じゃねーのか？」

「うん、そうね。これが無ければ。回復魔法が発動しなかったわけだから」

魔法力が足りなくても無理やり発動してくれる、これをありがたいと取るか、迷惑と取るか。

俺は前者だった。

「随分と危ない仕様にしてるんだな？あの嬢ちゃんはやお」

「うーん、あたしはあの子気持ちわかるかなあ」

「リルちゃん、どうということかな？」

「仮にさ、目の前で瀕死の重傷の人がいて、一刻を争う時だったらどうするの？」

リルドナの言わんとしていることは、すぐ予想が付いた。

救えるかもしれない命は救いたい、つまりそうということだ。

「傭兵ならあるんじゃないの？」

目の前で弱り切って死に行く者が居て、でもどうすることも出来なくて。

「……ただただ自分の無力さを悔いて涙して……。」

「……痛いトコロ突くね、」

「あたしは……あるよ？」

そう告げる彼女の言葉は重い、決して上辺だけ言葉で言ってるんじゃない。

これは確かにその辛さを噛み締めた者に宿る重さだ。

「それに比べたら、ちよつと意識を失いそうになるくらい、安いモノじゃない？」

辛そうに皮肉めいた笑いを漏らす彼女の顔は痛々しかった。

誰を死なせたかわからない、けどこの話を早く打ち切りたかった。

「……それにしても、随分と過保護な補助をつけてくれたわけだ」

「そ、そう。そうなのよ！」

俺の気持ちを汲んでくれたのか、少々無理やり気味に会話にあわせてくる。

でも、それでいいんだ。

「だけど、こんなシステムっていつ構築したんだろう？」

「ふむ、本来はそこまで個人限定の術式を組み上げるには、相当な対象の調査と計算を必要とされるな、軽く見積もって一週間強だ」

「ほんと、いつの間に……て感じだな」

そこに眉を『ハ』の字にしたリルドナが口を挟む、

「えーっと、こういうのをなんて言うんだっけ……『内助の功』じゃないわよね。け、結婚してないもんねっ」

「勝手に想像して、勝手に顔を赤くするな。別に格言も諺も思い出さなくていいぞ」

それにしても、俺には出来すぎた代物だ。

この仕事が終わったら速攻で返却しないと、なんだか怖すぎる。「それにしても、スゲー本なんだなあ」

ゼルが不意に魔導書に手を伸ばそうとする

「ヤンキー顔、ストップ」

「おっと、なんでえ？」

それをリルドナが制止する。

本から目を離さないまま、彼女は告げる。

「どうもあの子、登録した人物以外が触れると強制的にシステムが落ちてロック掛かるようにしてるみたい。触れていいのは、あたしと、無能と、お兄ちゃんだけね。まあ、勿論リウエン本人はオーケーよ」

「やつぱりセキュリティかな、確かに出来過ぎた代物だしね」

尚も本に目を走らせ続けていたリルドナだが、それが不意に止まる。

何かを発見したのだろうか。

「ブックマーク霊子栞が付いてるわね、無能に読んで欲しいページがあるみたい

ね」

「俺に、読ませたい……例のお伽話の続きか？」

「まあ、思いつくのはソレくらいよね あ、そうだ」

リルドナが何かを思い出したかのように、急に言葉を切る。

「やつと思いついたわ」

「何をだよ？」

「さっきの場合の諺よ」

「別に言わんでもいい……」

「曰く、『リウエンが一晩でやつてくれました』キリッよ」

「キリッてなんだよ！どうでもいいから、リウエンが読ませようとしているページ開けてくれよ」

俺の催促に「はいはい」と答えながら、パラパラパラと高速でページを捲っていく。

そんなので見えてるのか？と聞きたくなるが、そこは流石のリルドナ。全て見えているのだろう

ピタリと目的のページを開け、そこから巻き戻しも送りもせずに

俺に指し示す。

「ここなんだけど、読んであげようか？」

「いいよ、それくらい自分で読む」

「そう？読めるかしらね」

不適な笑みを含みながら、開かれたページを俺に差し出す。

俺だつて文字の読み書きくらい普通に出来るんだ。

お伽話くらい、自分で読んで

「……なんだよ、コレ」

開かれたページに書き連ねられたソレは、見覚えの無い記号や図形だらけにしか見えなかった。

な、何語で書いてあるんだ！？

「よ、読めねえ……」

「ほらね」

二日ぶりの顔芸の魔女の再来だろうか。

そこには心底嬉しそうに、にやあくっと笑うリルドナが居た。

10-1 ユグドラシルの語り部

三匹の魔王

むかしむかし、

どれくらい昔かってゆーと、トンデモなくチヨー昔。

かつての古代の神々に敗北した、三柱の魔王が居ただけどさー力の大半を制限されて、この土地に封じられちゃったから大変、え？

何が大変かって？

そりゃあ、そんな物騒な連中を放り込まれた、地域の人間はたまったモンじゃないわよね？

太古の神々も四六時中見張ってるワケでもないしね。

だからなのかしら？

魔王達は、北の山とか東の深い森とかの人の立ち入らない場所に追いやられたの、

まあ、それで人間の方は渋々承諾できたワケなんだけど。

今度はプライドの高い魔王が不満を漏らす番なのよね。

黒き魔王は言う、こんな寢床で我慢できるか、と。

赤き魔王は言う、こんな野郎と一緒に我慢できるか、と。

白き魔王は言う、とりあえずウザイから黙っててくんない？と。

常にケンカばかりで、『仲良く』とは程遠い魔王達、

ある日、魔王達は決断するの、

黒き魔王は言う、俺はもう我慢できない、あの人間どもを食い散らす、

赤き魔王は言う、やるなら一人で勝手にやれ、私にまで責任を及ばすな、

白き魔王は言う、あたしは眠いんだ、騒ぐならアンタらが出て行

けば？

三匹の魔王はいつも意見が合わないの、
結局、意思是バラバラのまま、次々と『退治』されちゃってね
いつしか残った魔王は一人ぼっちになっちゃったてわけよ。
まあ、仲良くしなさいってコトよねー

* * * * *

「おいつ！ちよつと待て」

紡がれたお伽話を聞き終わるや否や、俺は迷わず真っ先にツッコ
ミを入れた。

今まで、散々読んで聞かせてもらってきたのだが、今回はいろいろ酷すぎる。

お伽話の読み手は、俺よりも頭一個分丸まる背が低く、背中まである綺麗なサラサラの銀髪に、それに合わせるかのように服装は白を基調にしたものを身に着けており、法衣だか修道服だか判断しかねる服装のようだが、冷静に観察してみると白い上着に黒いスカートトの学生服っぽい服装の上からローブを羽織ったという、なんともいえない服装の女の子なのだ。

そんな彼女の特筆するポイントは、やはりその綺麗な碧眼。サフア
イアを連想させる澄んだ青い瞳は、真冬の深夜に拝める青い月の
ように、上品な輝きを携えていた。

が、残念ながら今回の読み手は彼女ではない。

今、巨大な本を手に物語を紡いでいるのは、彼女の姉。

髪も服も黒色で全身黒一色に瞳だけ赤い、ハイスペックなノラネコ女だ。

ちなみに、俺の中では二人とも小動物系のイメージだ。ただし、捕食側と被捕食側に分類されてしまいが……どちらがどっちかは訊くのも野暮というモノだ。

「お前、ちゃんと読めてるのか？」

「はあ？なによ？」

俺の抗議に、逆に噛み付いてくる、相変わらずのノラネコだった。だからといって俺も引かない、明らかに認められない。

何よりも……俺は……

この女に読めて、自分には読めないという状況を認めたくなくて苛立っていたのかもしれない。

「明らかに表現やら、言葉遣いやらが、おかしすぎる！」

今までリウエンが読み聞かせてくれたものと駆け離れすぎてないか！？

「だって『朗読』だもんつ。しょうがないじゃない。」

リルドナが吐き捨てる『どうしようも無いから諦める』的な物言いだが……。

そもそも『朗読』という単語に何か深い意味合いがあったか？

「ていうか、『朗読』てなんだよ、何か特別なモノか？」

「もつ。だから、コレは」

「ふむ、『ユグドラシルの語り部』かね？」

突如、割って入ってきた発言に、一斉にそちらの方へと視線が集まる。

そこには黒い服に

「……ブルーノさん？」

ドアが開けっ放しだった為、ドアノックも何もあつたものではない。

「へえー、ヒゲ様知ってるの？」

「うむ、昔に少しだけだが、文献で目にしたことがある」

そのセリフをこのくらいの歳の人間が言つと、妙に説得力がある。

「そのユドラシルの……って何ですか？」

「なんでも、太古の森林信仰の一族のモノらしいのだが。」

彼らには『文字』という文化が無かつた為、全て口伝のみの伝承をされてきたんだ」

「……口伝のみで、ですか……？」

にわかに信じがたい。

簡単に「口伝のみ」と言うが、これは壮大な伝言ゲームだ。

やり始めの最初の方の世代はまだいい。

だが、一族の世代が重なれば重なるほど、その情報量は膨大となつてくる。

聞き取る方は勿論のこと、言い伝える側も相当な記憶力が要求される。

「人間の頭でそんなことが可能なんです？」

「普通なら無理だろうな。」

だからこそ、彼らは独自の朗読方法を生み出した。

それが『ユグドラシルの語り部』と言われる独自の手法らしい、

物事の概要を極限にまで削ぎ落として簡略化し、それこそ『骨だけ』にしてしまつてから、それらだけで構成した詩にして詠い伝えるんだ」

「……。『骨だけ』て……。」

つまりは『単語のみ』『キーワードのみ』とか、そういうレベルじゃないんですか？」

ここまでくると、それらはすでに『暗号文』でしかない。

解読法を間違えれば、それは完全に『違う物語』になってしまわないだろうか？

「だろうな、だからこそ、彼らには一族を束ねる『ドルイド』とは別に、口伝を執り行う『バード』と呼ばれる専門の語り部が居たらしい」

「……？詩人ですか……？」

「誤解されがちだが、吟遊詩人とはまた意味合いが違う」

一口に『詩人』といっても、その役割や活動内容は千差万別なようだ。

俺の想像したのはまさに『トルバドール』、ブルーノ言のう『バード』とは違うモノだ。

「でも結局のところ、どう伝わっていくかは、その『バード』の解釈次第のところですよ？いくら『真実の骨格』を見せられても、それを復元する過程の『再現の肉付け』でいくらでも細工可能ですし……何よりも、その時の当事者達の思惑や心情 『真相』が隠されたまま伝わって行く気がします」

「まあ、それが狙いなのかもね」

突然、リルドナが呆気らかに、口を挟んでくる、

そして、それにブルーノも頷く、

「うむ、歴史なんぞ綺麗事だけでは語れないしな、子孫にはあえて伝えたくも無い事情もあるだろう」

「ま、納得できないだろうから、アンタに一句詠ってあげるわ」

「何を詠むんだよ？」

「朗読の最初に付け加える注意書きみたいな句よ、

そうねえ……例えば、これが推理小説だったら

『これは本格派ミステリーだから安心して推理に挑んで下さい』
みたいなモノかしら？」

「そんな断りを入れる推理小説作家はいないと思うが……」

「そう？まあ、あたしはそういう読まないしね」

リルドナは俺にそう告げると、軽く息を吸い、珍しく真剣味を帯

びた顔を浮かべる。

それは『莊嚴』と表現しても良かったかもしれない。

「幾戦もの事実、散り詰めらし真実。

伝えんと欲して掬すくいて诗情に催す。

腹探られるを拒み君笑なう莫なれ。

古来往々かんそせいひん簡素清貧に幾人と成り足たるや也」

「？ちよつと待て、少し書き出してみるから、もう一回頼む」

俺はリルドナにもう一度詠って貰い、それを素早く書き留める。

この句……いや詩の意味するところは……。

「……これは、『多くの物事を伝え残すが、その裏の腹の内までは探らないでくれ』という意思と『そんな私の我侷をどうか笑わないでくれ、歴史上にそこまでの清廉潔白な人間がどれほど居たと思うのだ？』という『ぼやき』の二つで構成されている……のか？」

「えっ？そ、そうじゃないかしら……」

俺の推論に対して、リルドナの反応はなんだか歯切れが悪いものだ。

最早、お馴染みとなった『目をクリクリと泳がせる』モードになっている。

「……お前、実は意味わかってないだろお!？」

「あ、あたしにそんなコト理解できるわけじゃないじゃない!」

「いやっ、ソコは開き直って逆切れするトコじゃないからっ!」

特殊な朗読技法や俺の知らない文字の読み取りなどで、一瞬はリルドナを見直しはしたが、そこは流石のリルドナだった。

薄おっぺらな化けの皮が剥がれた彼女は、やはり信頼と安心のINおバカさんT3だった。

なんとなくそれで安心を得た俺は、ようやく他のことへ注意を配ることが出来た、

「ところで、ブルーノさんはここには何の御用が……?」

すっかり『朗読』の話題で注意が別に行ってしまったが、ブルーノは用があつてここに来た筈なのだ。

俺の問い掛けに、ブルーノは表情を改め、ロイの方へ向き直る、

「ロイ、火の番はどうした？」

「あー、そのことでしたら、

アーカスさんが代わってくれたので、彼にお任せしてきました」

「ふむ、そういえば、彼はずっと暖炉の前から離れないな」

「なんでも、火の主に祈りを捧げるとかで……」

そう答えるロイの言葉も歯切れが悪かった、自身の理解できない習慣である為、

ついつい発言に自信を持ってなくなっている所為だろう。

「ふむ、本人の希望ならば、それで構わないだろう」

「はい、彼の申し出に甘える形になっていますが……」。

後ほど、アーカスさんには、また声を掛けてみようと思いま
す

「うむ、わかった」

その言葉を最後にブルーノは退室していった。

10・2 ドジっ娘とかあんまりじゃないですか？

「ほう、ゼルとは違い、なかなか筋が良い」

「ふふふふ、銃兵の戦況観察眼を甘く見ないほうがいいよ？」

「どうやら、ロイはゼルと違い、そこそこチェスに覚えがあるのか、そう簡単には詰められたりはしないようだった。」

「俺はそんな二人の対局を眺めながら、少し情報を整理してみることにした。」

「まず、リウエンが俺に伝えようとしている物語はどうも今回の仕事の目的である『赤き剣』の持つ歴史背景に大きく関係していること。」

「そして、その物語はわざわざ特殊な用いて、あたかも謎掛けをするかのように俺に提示している。」

「話の骨格を伝えつつも、あえて真相の腸を晒さない。」

「考えれば考えるほど不可解だ。」

「果たして俺に何をさせたいのだろうか、または何を企んでいるのだろうか。」

「まだ、判断をつけるには材料が出揃っていないだけなのだろうか。もう一度、本のページに記された文章に目を落すが、やはり読めない、理解できない。」

「なあ、リルドナ。これ何処の国の言葉なんだ？」

「んっ？うん……そうねえ」

「俺に問われて、言い淀むが、それは隠し事をしているソレではなく、言いたくとも上手く表現できないという感じだった。」

「なんていうか、『何処の国』て言われるとプロイツェンとしか言えないけど」

「でも、これ独国語プロイツェンじゃないよな？」

「うん、語源はそうだけど、文字は暗号化してる、って言うのかな？」

あたし達は共犯者の暗号アカンブリス・コードって呼んでるけど、正式名称は知らないの」

「これまた、穏やかじゃないネーミングが出てきたな」

共犯者だの、暗号だの、まるで特殊工作員のような臭いが漂ってくる。

嘘や隠し事から程遠そうな彼女からは、連想し難い言葉だ。

「ソレって、あれじゃないの？」

確か、半世紀前くらいにプロイツェンで体制側と学生側が反発した際に学生側が使ってた暗号形式とかなんかじゃなかったかな、世界史の授業でチヨロトと名前だけ出てきた気がするよ」

「オメエってよくそんな雑学知識憶えてるな」

ロイの記憶が確かならば、これは本当に暗号文となる、

ますます以って穏やかじゃない背景が見え隠れしそうだ。大体、
『共犯者』アカンブリスじゃなく『賛同者』コラボレーターと謳えばいいのに。

「まあ、あの子が言葉遊びが好きで採用した『おふざけ』だとは思
うけどね」

「そっか、書いたのはリウエんだし、元ネタの知識の引用もリウエ
ンだもんな」

多分だが、リルドナのこういつた朗読法や暗号分は全てリウエ
ンから伝播した知識なんだろう、ただでさえ容量メモリーの低そうなノラネコ
ブレインにこんな余計な知識を植えつけて大丈夫なのだろうか？

それだけでなくとも、倭国に対する異常なまでの知識も無駄に詰ま
ってそうだし……。

「そりゃ、そうと。あの嬢ちゃんはどうしてんだらうな」

「うーん、完全に一人ってわけじゃないだらうけど……」

ロイの言う、『完全に一人ではない』というのは、森の入り口の
小屋には馬車の御者や、ブルーノ以外の使用人も数名も詰めている
からだ。

食事の準備もリウエン一人では苦勞するだらうが、彼らがいれば
数日間なんとかやっていけるだらう。

「あたしは本音言つと、やっぱり心配なのよねえ……」
妹を溺愛するノラネコな姉はやはり心配で堪らないらしい。

「そんなに心配しなくてもいいんじゃない、結構しつかり者だと思うけど？」

「やっぱり心配よ？」

ティータイムに紅茶淹れようとして転んだり、馬車の御者さんとかにお茶を振舞おうとして転んだり、自慢の山菜料理を作ろうとして外に出て転んだり、山菜を見つけて駆け出して転んだり、調理の準備に水を汲み行って転んだり、出来た料理を御者さんにお裾分けしようと呼びに行ったら転んだり……」

「おいっ！なんで逐一コケることを想定しているんだ？」

確かにポテポテ転げる娘だけど、それは極端すぎないか？

「そんなコト言うけど、アンタも見てるでしょあの子……」

「うーん……そうだなあ、あれは何ていうか」

あえて表現するなら、そう

「「DEX2「1」かなあ……」」

見事にリルドナとハモった。

リウエンには悪いが、やっぱりどう思い返してもドジっ娘なのだ。

「そうだなー、あの嬢ちゃんはちょっとドン臭いというかなあ」

「まあ、そこが可愛らしいと言えば、そうなんだけど。やっぱりドジに見えちゃうね」

ゼルもロイも同意権らしい。

っ(怒)

「っ！」

「無能、どうしたの？」

「いや……今、物凄い悪寒が……」

なんとというか、怒ったリルドナが煮えたぎるカルドロンのなら、

今の感触は……凍てつく「霧の国」だか「暗い国」とか呼ばれる
ニヴルヘイム。

その場の空気さえも完全に凍りつかせて砕け散らせてしまう感触
だ。

「案外、今の話聞かれてたりしてね？」

ロイは「いつひひひ」という表現がピッタリな笑いを浮かべる、
どうしてこの人は、こうもいやらしく笑えるのだろう。

「よして下さいよ、流れるに平謝りするの俺の役目になりそうな
んです……」

「おや、ムノー君はそういう境遇シチュエーションがお好みかい？」

ふふふふ、姉妹同時攻略なんて、なかなか熟練度高い選択肢だね
え？」

「……どうしてそう発展して行くんですか……？」

イロイロな意味でこの人は楽しんでそうだが、
俺の第六感がビシバシとそう伝えて来てるっ！

「まあ、何にしても気になるわ……今頃どうしてるやら……」

口では散々ドジとか言っているが、根っこの部分ではやはり妹を
心配するお姉さんのようだ。

表面上は元気に取り繕ってはいるが、妹への心配が絶えないとい
ったところか。

「どうだろうねえ……これだけ噂しちゃったんだ。案外、今頃くし
やみしてるかも？」

ロイがそう呟いた瞬間、

っふえ……

「ん？」

っくちゅんっ！

「　　おいおいおいおいおい……」

「ど、どうしたの？」

俺の声にリルドナだけでなく、ロイもゼルも怪訝な表情を浮かべる。

もう答えは出てしまったが、

「……案外、冗談でなく本当に聞かれているのかもしれないね」とだけ呟くだけに留めた。

それから軽く思案すること、体感で九秒間。

俺は『ソレ』を決行することにした。

「なあ、リルドナ、悪いけど今度はダージン淹れてくれねえか？」

「あれ？ダージンでいいの？アンタってストレート派だっけ？」

ダージン「ストレートティー」という認識は俺には無い、

そもそもストレートで頼む気は毛頭無かった。

「いや、砂糖は二個……いや一個つけてくれ、

それを飲むヤツの気持ちになってみたいんだ」

「よくわからないけど、かしこまったわ。金髪とヤンキー顔はどうしよう？」

律儀に他の二人の分も確認を取る辺りはさすが元メイドなのか、

「ボクはストレートでいいよ」

「オレは砂糖二個な」

リルドナは俺達三人の要求を承り、三度、給湯室へと姿を消す、

俺はリルドナの足音が階段へと消えて行くのを待ってから動き出した。

「ちよつと、調べ物が出来ましたので」

とだけ告げ、俺は魔導書を片手に、廊下を挟んで向かい側のドアへと歩み寄る、

先程、リルドナに頼まれて開けたドアではなく、その隣のドア。

これまた同様に、ドアは真新しく、カギも嚴重だった。

「ま、開けれなくてもいいんだけどな」

誰かに言い聞かせるように呟いて、愛用のピックで鍵穴を探る。

カチャカチャとしばらく探ってから、パチンという開錠の感触。
俺はそのまま素早く中へと滑り込み、内側からドアの施錠をする。
深く息を吸ってから、誰かに問いかけるように口を開く、

「さて、そろそろいいよな？リウエン」

っ（汗）

例の声は答えない、しかし、息を呑むような気配だけは伝わってきた。

10-3 なんでそこまで観察できてるんですか？

その部屋は、リルドナの為に開錠した部屋とは対照的に淡い水色の壁紙が張られた部屋だった。

本棚や衣装箆笥の他、戸棚にはまるで何かに実験に使うようなフラスコやビーカーまであった。

それらとは、ギャップの激しい可愛らしいベッドがあり、これまた可愛らしいぬいぐるみも置かれている。

そして、ほのかに甘い香りが立ち込めている、これは先程のラベンダーというヤツだろうか？

「おーい、聞こえてるんだらう？リウエン」

……

俺は問いかけるが、返事は無い。

まあ、素直に返事して貰えるとは思ってない、

「しらばっくれてるじゃねえぞ？」

コソコソと盗み聞きしやがって、この覗き趣味の嘘つきネクラ女
っ！

！（怒）

っ

声こそしないが、どことなく怒った気配がした、

まだまだ足りないか……。

「なあ、聞いてくれよ、リルドナがポカポカ俺のこと殴るモンだから参ってるんだ」

やはり『声』に反応は無い、

「酷いモンだろ？例の宿屋での夜なんて、言いがかりもイトコだ。不可抗力とは言え、リウエンの下着を覗いてしまったことは認める、でも結局暗がりだったしハッキリ見えてなかったんだよなあ……」
「白っぽいの」としかわからなかったぜ」

？

キョトンしている顔でもしているのだろうか、感じ取れる気配の質が変わる、

それとも、『見られてなかった』ということに対して安堵してるのか。

「まあ、それよりも……リウエンはやっぱり『青』が好きなんだなあ？

ペンネームの フリオ・アウゲン Blue Augen といい、この部屋の壁紙とい

い、やっぱりアレか？自分の瞳の色だからか？

かつての絶世の美女も緑の瞳で、やはり同じ色のエメラルドを好んだって言うけどさ」

？
？

急な話題旋回でついてこれてないようだった、だが、それが狙いなのだ。

「だからだろ？ 白地に青の縞模様のを穿いて」

バッチリモロロックオンに直視してやがるじゃないですかー！

俺は 白地に青の縞模様の『何を』穿いてとは言っていないのに、
的確に判断し、ツッコミを入れてきた、やっぱり頭良いんだな。
つまり、アレだ。リウエンの下着は白と青の『しましまおぱんつ』
なのだ。

「でも……チエックメイトだぞ？」

あ……しまった

……お、思わず反応しちゃったじゃないですかー！

「で……なんでこんなまどろっこしい真似してるんだ？」

そ、それは……

「答えないと、そのこのベッドにフジコちゃんダイヴをかまして、顔を埋めるぞ？」

へ、変態っ！

あくまで脅しで冗談なのだが、率直に『変態』と揶揄されるとちよっと凹む……。

<仕方ないですね、ちよっとだけお話ししましょうか>

観念したのか、また違う質の声俺に届く、どうも通信手段を切り替えたらしい。

<その前に、今から通信コードを送りますので、そちらで通話なさって下さい。そのままですと、個室に閉じこもって独り言を呟いてる『危ない人』になっちゃいますから>

だから率直に言われると凹むんだが……。程なくして、俺の意識に直接呪文スベルが浮かび上がってきた。

＜くりかえしてください＞
＜復唱要求です＞

俺は言われるがままに、呪文スベルを復唱する。

途端に、何かの術式が起動し、

より鮮明にリウエンの声だけでなく息遣いまで聞こえる気がした。
＜これで、念じれば、わたしに『声』は届くようになりました。お試しください＞

お試しください、と言われても、何を喋ろうか……。どうせなら、即ツッコミくるような内容がいいか？

（えーっと、穿いていたのは、

白地に青の縞々で、サイドはリボン結びになっている気合の入った）

＜ちょ、ちょっと！何を具体的に説明しやがるんですかーっ！？＞
どうやら、ちゃんと届いているらしい。

俺の言葉がクリティカルだったのか、どことなく言葉遣いが乱れている気がする。

でも、これって心中までダイレクトに届いたりしないのだろうか？

（なあ、この通信って、俺の心の中丸見えになっちゃったりしない？）

＜わたしもそこまで野暮じゃありません、ちゃんと『念じなければ』通信は機能しませんのでっ！＞

……ちょっぴり語尾に怒気が籠っているのは気のせいかな？
あんまりにも弄りすぎたのがいけなかったのかも知れない。

（……で、なんでこんな監視するみたいなことしてるんだ？）

＜監視といえますか。そもそも、わたしには魔導書グリモワールに届く範囲の音オトアラートか、危機感知から自動警告へと変換された信号を受け取るくらいしか、そちらの状況を知り得る手段がありません……。純粹に心配だ

った。と言ったら信じて貰えます？>

(信じなくも無いが……それだけじゃ理由として弱くないか?)

俺の反論に、そうでしょうね、とため息交じりの声を漏らす。

イロイロ裏がありそうな仕事だったし、今更シロと思ってるやれな
い。

(俺も不振に思っ点はいくつも見つけたんだ、例えばザスコさんの
こととか)

<……やはり、そこにお気づきでしたか。

そうですね、わたしもあの一件が無ければ、そのまま一緒にした
んですけど、

エインさん、

この手の財宝探索系の仕事クエストで起こり易いトラブルって何だか知っ
てます？>

(仲間割れ……か?)

<そうゲナウです。より正確には財宝の横領からの暴拳というべきでしょ
うか>

考えたくも無いシナリオだが、決して少なくも無い事例だ。

財宝を目の前にして、依頼主を殺害してまで横取りをする連中が
世の中には居る。

最もそれがギルド側に知られば、当然、重い刑罰が掛かるのは
当然のこと、資格を失うことになる。

冒険者人生をそこで終わらせることになるのだ。

そんな暴拳にできるには、それ相応の覚悟が必要になるわけだが……
(死人に口無し、とはよく言ったモンだよな……)

<おっしゃる通りです。複数犯で口裏を合わせてしまえば、どうと
でもなるんです>

現実の世界は推理小説じゃない、アリバイなんて単なる口裏あわ
せで成立してしまうのだ。

つまり、『事故』と主張してしまえば、それで全て片付く、とい
うわけだ。

<ですので、わたしは調査事項が出来てしまったので、居残りを選
びました>

(表面上はまだ発生していない事件の容疑者の絞込みか?)

<そうゲナウです。私の役割は諜報……というか兵站全般ですので
>
そこでリウエンは言葉を一旦切る、

< ですが、わたしが抜けると回復手段が無くなってしまいます。
もうお気付きと思いますが、姉は割りと耐久力が無いんですよ。い
や、というかモロイ……いやいや、むしろ紙でしょうか? >

(サラリと酷いこと言っていないか? まあ、確かに軽装だし、傷を
受けたら血を流すのは当たり前だよな)

< 普段なら、わたしが障壁を張ったりするんですが……それでぶし
つけですが、回復役としてエインさんの手を借りることにしたんで
す。どんなに力の小さな魔法であっても、使えるのであれば増幅お
よび補強によって実用レベルまで引き上げることが可能なんです >

その言葉にグリモワール魔導書の内容が頭によぎる。
恐ろしいまでの能力特化の内容だった。

(何にせよ、お陰で助かったよ)

< わ、私は自分の身内を護りたいが為だけに、貴方を利用したんで
すよ? >

(それ、嘘だろ? 『護りたい』対象に俺も入ってるし)

グリモワール魔導書の補助術式の内容から、俺自身への配慮がされていること
は一目瞭然だ。

そして、何よりも……彼女の癖でわかってしまうのだ。

< わ、わたしは、姉が心配で……傷だらけになっても無理をする人
ですから >

(うん。それは本当だろうな)

< は、はいー? な、なんですかつ! それって! ? >

(あれ? 自分で気付いてないんだ)

どうやら、無意識の内から出る癖のようで、本人に自覚は無いら
しい。

意外に『嘘をつく』という行為には心的ストレスが付きまとう。それが顔に出たり、脈拍に変化が出たり、症状は十人十色だが……リウエンの場合は口に出るようだ。

しばらくは彼女との会話で主導権を握れそうだ。インシタティブ

皆はもう気付いてるかもしれないよな？

俺よりも、皆のほうが気付き易い癖だと思っぜ？

（まあ、これ以上は訊かないことにしておくよ）

<えっ？>

（どんな舞台演出を用意してるか知らないけど、それを引き摺り出す無粋はしない……というか、俺には何も知らない無色な一般人の方が都合が良いんだろ？）

<……。そうす>ゲナウ

（これは、推理小説じゃないけど、ノックス第九条みたいなモンだよな）

<……もしかして、『無能』て呼び方を根に持ってませんか？>

（まあ、俺はホームズ役じゃなくワトスン役なわけだ）

なんとなくピッタリかもしれない、無能で結構。

存分に主観で物語を観劇させて貰おうじゃないか。

（まあ、話はここまで。また何か訊きたいことができたら通信するよ）

<あ、それなんですけど。

わたしの力だとその宿舍がギリギリの射程圏内なんです。

なので、屋敷本館まで進むと通話出来なくなるんですよ>

（それも、本当みたいだな……。

じゃあ、今までみたいに危険を報せて貰ったり出来なくなるのか？）

<いえ、マリスサーチ危機感知は生きていますので、オートアラート自動警告の報告対象をエインさん自身に設定しなおせば大丈夫です。あんまり気持ちの良い感覚じゃありませんけど……>

その言葉で俺はリウエンの配慮を読み取ることが出来た。

危険報告の術式は精神干渉を及ぼし、かなり精神的に悪いモノらしい、リウエンはそれを自分対象とすることで中継ポイントとなり、俺の精神を蝕むことなく危機を報せてくれていたのだろう。

(リウエンはそれを肩代わりしてくれてたんだろ?)

<まあ、わたしの精神回路は頑丈ですから。多少の精神干渉を受けても私自身はなんともありません>

なんとも姉に似て強情というか強がりというか……。

<とりあえず、設定を書き換えておきますが……どうしても辛いときの為に解除コードも送っておきます>

(何から何まで悪いな)

<……>

俺の言葉が皮肉になってしまったのか、それ以上、彼女は何も語らなくなった。

何も答える気も無いし、何も訊ねるつもりも無いのだろう。

俺はその部屋を出て、再び外から施錠をし直した。

つくづく、これが推理小説だったら反則だよな、と思わざる得なかった。

10・4 どうして姉さんばっかりなんでしょ？

部屋に戻ると、ゼルとロイの視線が突き刺さった。

リルドナはまだ戻っていないらしい、一からお湯を沸かすのだ、そんなに早く戻ってこられるわけもない。

「何か見つかったかい？」

「うーん、特には……ただあっちの部屋が上級使用人用の個室かな？ってわかつたくらいですね」

「何か収穫あったてえーのか？」

「いえ、さすがに見るからに女性の部屋だったので……物色するよくな真似はしませんでしたよ」

ほぼ確信を持って言えるが、あの二つ部屋の主は……。

例え、そうでなくとも。やはり女性の部屋を無闇に漁るほど、俺は無神経じゃない。

「ふむ、エインが漁らなくとも、鍵を開けてしまったのならば他の人間がそうするかも知れん」

今の今まで、飾り物の鎧甲冑みたい沈黙していたヤツが口を開いた。

会話に参加こそしてはいるが、視線は依然として盤面に刺さったままだ。

「あ、そこは大丈夫だ。ちゃんと外から施錠したからな」

「ほう、器用だな？」

「うん、ボクもそれって凄いと思うよ？」

「つーか、アンチャン。オメエ進む道を間違えてねーか？」

ゼルの言うとおり、鍵職人が何かに進めば良かったのかも知れない。

しかし、これは俺が決めた道だ。他人にとやかく言われて変えることは無いだろう。

「子供の頃から錠前をオモチャ代わりに育ちましたからね、俺にとつては当たり前に出るることなんですよ」

「てえコトはだ、独学でかよ？」

「そうですね、誰かに教わったわけじゃないですね」

自分の荷物を漁り、中からゴツゴツした金属の塊を取り出す。それらは十数個、部屋の隅のテーブルに無造作に並べていく。

「……おや、それは錠…かな？」

「そうですね、ここ数日は出来てませんでした。俺の日課みたいなモンです」

それらは全て大きさも形状もバラバラだ。

旅先の立ち寄った街の鍵屋で、これまで適当に買い集めたモノだった。

「古びてはいるけど、錆び付いてねーな、ちゃんと手入れもしてんだな」

「整備も含めて、訓練の一環ですよ」

手始めに一つ南京錠を手に取り、愛用のピックで鍵穴を探る、瞬く間に、パチンと錠が外れてしまう。

「はええな、オイ」

「そりゃ、何回も同じもの触ってますしね」

次々とパチン、パチンと開錠されていく、

机上には外れた錠前が次々と山積みになってしまった。

「ファルクスに着いてからはドタバタしてたんで、新しいのはまだ買っていないですよ」

「そうだとっても、これは結構なモノだと思うよ……おっと、ここアンパッサンね」

こちらに注意を向けつつも、しっかりルーヴィックとの対局もこなしている、

この人、大概器用な人種に分類されるのではないだろうか？

そこへ、トタタタ、と軽快な足音が近づいてくる。

「帰ってきたみたいだね」

果たして、皆が部屋の入り口に視線を集める中、エプロンを装着した『なんちゃってメイド』が姿を見せるのであった。

「ほいー、おまたせっ！」

「悪いな、手間取らせて て、どうした？」

口では元気な声で『おまたせっ』と言ってるものの、なんだかソワソワしているように見える。

女がこういうリアクションを取るとき、それは何を意味するのだろうか？

間違っても「トイレか？」などと言うつもりは無い、繰り返すが、エインさんは紳士なのだ。

(というワケで、これはどういうコトだと思う？)

<何、アツサリとわたしを頼ってきてるんですかー！？>

(ここは同じ女性としての、

それも姉妹なら近い感性持つてるはずだから、その意見が聞きた
い！

……いくつ離れてるか知らんが)

<わたし達は双子なんで歳は離れてませんよ？……って脱線しちゃ
うじゃないですか>

(おっと！サラリと新事実がまた発覚したけど！？……これはどう
いう意思表示なんだ？)

<あのですね、

何かを気付いて欲しいのですよ、自分の口から言えないのが女の
子なんですっ！>

(そー言うモンか？ んじゃ、何に気付いて欲しいんだ？)

実にまどろっこしい、反則かもしれないが、ここはサクッと答え
が欲しい。

<そこはご自分でよーっく、観察してあげてくださいっ！>

(お、おいリウエン?)

<.....>

また、先程と同じように彼女は何も語らなくなった。

なんだか怒ってるような気もしたが、まるで俺にはわからない。

「ど、どうしたのよ?急に黙り込んで……」

「い、いや……なんだか違和感がな、お前ちょっと待てよ?」

などと適当な言葉で場を繋ぎ時間稼ぎをする、

そんな俺の言葉に、リルドナは息を呑む気配を見せた、それは何かを期待する素振りか?

ここは冷静に観察してみよう、

第一に、リルドナの視線は特にティーポットへは向いていない、つまり何かしらを施したのは紅茶ではない、ということになる。

第二に、俺がリルドナを見ると、ずっと視線を外してしまう、これは彼女がこちらを見つめているのを、俺に悟られたくないからではないだろうか、そして何故俺を見つめているか、それは『俺が何かの変化に気付いてくれるか』を観察する為だろう。

ここまでくれば導き出す答えは……『何かの変化』はリルドナ自身にある、つまり服装に変化があるはずだ。

「ちょっと、動くなよ?」

「あ、あひい!?!なによ」

俺はわざとらしく、まじまじとリルドナを観察する、足元から、黒のパンプス、長い裾の袴ときて、白いエプロンとその下に黒いブレザーにヘアピンで留めた袖口、ここまでは応接間で見た給仕姿だ……残るは……首から上、

顔は……ハズレだった、とか言うത്ブサイクみたいに聞こえちゃうな……。

その顔には新たに別段化粧をしたと言う感じは見受けられない。さらに視線を上へと移動させると、

「なるほど、それか」

そこにあつた、頭の上にチョココンとあつた。

それはホワイトブリム。

つまりヘッドドレスのことだ、ちなみにブリムとは帽子の鏝の口ト。

室内帽が衰退していく昨今では、それに替わるヘッドドレスを意味するようになったのだ。

「へ、ヘンかな？」

「いや、殺人的に似合っているぞ？」

「うん、これはポイント高いよ？」

ちゃんとボクが足りないって言つてた部分を覚えてるなんて、

リルちゃんグッドだよ！メイドをなんたるか弁えているよ！

そんな、リルちゃんに……このボクはあああああ……！！！」

「オイ、落ち着けよ……ロイイ？」

「このボクはあああああああああああ……うがッ、げほげほごほごほガハアッ！！！」

えーっと、ロイさんってこんなヒトだったっけ？

なんだか遠くのお星様まで飛んで行つてしまったようだ。

流石のリルドナもかなりヒいている。

「ま、まあ。本当に似合つてると思うぞ」

「……はア、はア、ボクもそう思うよ」

「そ、そう？あ、あは、あははははは」

ボン！と顔を真つ赤にしてその場でクルクル回り始めた、左手にティーポットを持ち、右手でスカート（ていうか袴）の裾を摘んで優雅に舞っている。

とは言い難い難い回転速度で、ギョルギョル回っている、よくもそれでティーポットの中身をぶちまけないものだと関心する。

誰がこの回転を止めるのだろうか。

そこへ、ポンと俺の肩に手を置かれる感触、

「(ムノー君、今の対応はバッチリ合格点だよ、彼女すごく喜んでる)」

「(はあ、そういうモンなんでしょうか?)」

まあ、リウエンというカンニングペーパーを使った結果なんだが、
というわけで、リウエンに報告してみる。

(てわけで、バッチリ正解だったらしい)

<そーですか、よかったですねっ!>

何故カリウエンはご機嫌ナナメだった、何か悪いこと言ったか?
そんなことよりも

いい加減、回転を止めて欲しいと思ったところに、

やはり頼れるのはヤツだった。

「大丈夫か? ナンセンスだぞ。折角の紅茶が冷めるぞ?」

「あ、そうねえ」

ルーヴィックの言葉に、リルドナは大きな時定数を伴って緩やかに回転速度を落す。

そのまま優雅な動きで給仕へと移行する。

「んじゃ、ご要望のダーズリンね」

「本当にお前はイロイロ茶葉を持参しているんだな」

次々とカップに湯気のたつオレンジ色の液体が注がれていく、そこから広がる独特の香りは紅茶に詳しくない俺でもわかるほどだ。

(後に知ったがマスカットフレーバーという香りらしい)

本来はストレート、つまり香料も砂糖もミルクも入れないのがポピュラーらしいが、一個だけ角砂糖を入れさせてもらった。

その王道に則ってストレートで飲んでいるのは、ロイとリルドナだけだが……。

「うん、やっぱり淹れ方が上手だね、流石だよ」

「あははは、ありがと」

わざとらしい笑いとともには頭を掻いている、

どうもこれはリルドナの照れ隠しの時の癖のようだ。

「さっきのお仕事モードの変身ぶりは凄かったよね」

「変身っていうか、あれが普通だったしねえ」

「リルちゃんは接客担当してたの？」

ピクン、と一瞬硬直し、寂しそうな笑いを浮かべる、

「よしてよ、あたしってこの外見よ？」

と言いながら、自分の瞳を指差す。

「させて貰えるワケ……ないでしょ」

「ん？どういことだよ？」

確かにリルドナの赤い瞳は珍しいが、それがどうだというのか。

その疑問にはロイが答えてくれた、

「……この国の古い悪習だよ。今時ソレを忌わしいと捉える方がどうかしてるっ」

ロイの語尾に力が籠っているのが視て取れた、

あの赤い瞳を単に珍しいとしか思ってた。しかし当事者達はそうではないらしい、二人のやりとりを見る限り、その確執はかなり根の深いものに思える。

リルドナはその『目』の所為でどんな人生を歩まされて来たのだろう。

父親と母親、どっちがどっちの特徴を持っていたかもわからないが、

姉と妹でああも違う違う色の髪と瞳を持って生まれて……どう扱われてきたんだろう？

「でも、ソレさえなえれば問題無いつてことなんだよね？」

「……えっ？」

「そうだね、リルちゃんはかなり可愛い部類に入るし、容姿端麗を要求されるパーラーメイドでも問題ないと思うよ」

今日何度目かわからない、ボン！という音とともに顔を真っ赤にうつらえる。

そんなリルドナを見て、やっぱりこいつは笑顔じゃないとな、と

何度も思わされるのだった。

その笑顔が見れば、俺の気持ちも晴れるというモノ。

でも、何故か。

俺の心はすっきりと晴れてくれなくなっていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102ba/>

赤ルア（テスト用）

2012年1月1日01時02分発行